

小泉八雲全集

第四巻

東京
第一書房



小泉八雲舊居南庭ヨリ居間　（松江市鹽見繩手根岸邸）

知られぬ日本の面影

譯者

落合貞三郎
大谷正信
田部隆次

小泉八雲全集第四卷目次

知られぬ日本の面影　下

知られぬ日本の面影　下巻

第十六章　日本の庭

一

大橋川のほとりの自分の小さな二階家は、鳥籠のやうにちんまりとした家ではあるが、暑氣が近づくと——部屋の高さが蒸汽船の船室と殆んど同じで、普通の蚊帳が吊られぬ程狹いのだから——樂に暮すには餘り小さ過ぎることが知れた。自分は湖水の美しい眺望を失ふ事は遺憾であつたが、市の北部へ、崩れかかつて居る城の背後の頗る閑靜な町へ、轉居するの必要を感じた。自分の今度の家は或る高位のサムラヒの昔の住宅で、カチウヤシキである。城のお濠の縁にある街路、いなむしろ道路とは、上を瓦が蔽うて居る長い高い壁で仕切られて居る。お寺の入口にあるのと殆んど同じ大きさの門口へ、低い幅廣い石段て昇つて行く。その門の右手に、壁から突き出て、太い棧のある、大きな木造の籠のやうな、見張窓がある。封建時代には、其處から、武裝した家來が前を通る總ての人に——棧

は密に設けてあつて、その後ろに居る人の顔は、道路からは見えぬのだから、目に見えぬ見張を――嚴しい見張を、いつもして居たものである。門の內側の、住所へ行くまでの處にもまた兩側に壁があるから、客は、許可を得なければ、何時も白いシャウジが締まつて居る家の入口を己が前に見得るだけである。あらゆるサムラヒの家同樣、住宅そのものはただ一階建であるが、內には部屋が十四あつて、その部屋々々は高く、廣く、また美しい。悲しいかな、湖水の見晴らしも無ければ、惚々するやうな眺望も何一つ無い。松樹の遊苑に半ば隱された城がその頂上にある、オシロヤマの一部が、前側の壁の屋根の上に見える。が、それはたゞ一部分だけである。そして家の後ろのつい百ヤアド許りの處には、樹木の繁つた岡が在つて、地平線を遮斷して居るばかりでは無い、同樣にまた客の大部分をも仕切つて居る。が、然しこの幽閑には、この住宅の三方を取卷く非常に美しい庭といふ、否、むしろ一と續きの庭地といふ、佳い代償が存在して居る。幅廣い緣側からそれが見渡されるし、緣側の或る一角からは二つの庭を同時に眺め樂しむことが出來る。門の無い廣い出入口が眞ン中にある、竹と編んだ蘭草との障壁が、この遊園の三區の境界を示して居る。が、この構作物(つくりもの)は眞の壁の役をさせる積では無い。それは裝飾的なもので、或る式の風景の庭造りが何處に終り、他の式の風景の庭造りが、何處から始まるかを表すだけのもので

ある。

二

此處で一般に日本の庭に就いて二言三言述べたい。

日本人の花の活け方を少々――この技術を實地に知得するには、生來の本能的な美感の外に、數年の研究と經驗が要るから、唯それを見たばかりで――學び得た後で、其後で始めて人は西洋人の生花裝飾の思想は、全く野鄙だと考へることが出來る。この觀察は何等輕率な隨喜渇仰の結果では無くて、內地に長く居住して樹立し得た確信である。自分はただ日本の熟練家だけがその活け方を知つて居るやうな風に――花瓶の中へ單に小枝を突き込むのでは無く、恐らくは剪伐つたり姿を正したり、雅び極まる手細工をしたりに至る一時間の骨折をして――活けた、唯一本の花の小枝の言ふに言へぬ美はしさが解るやうになつて來たから、だから西歐人が『花束』と呼ぶものをば、花の野鄙な虐殺であり、色彩觀念に對する凌辱であり、蠻行であり、言語道斷である、としか今は考へられないのである。それと稍ゝ同じ樣に、またそれに似た理由で、古い日本の庭はどんなものであるかを知つてから後は、我が本國の費用を盡した庭を想ひ出すと、自然を犯す不釣合な物を創造する

のに富なるものが、何を爲し遂げ得るかの無智な誇示としか考へられないのである。

さて日本の庭は花の庭では無い。また植物を栽培する目的で造られるのでも無い。十中九まではそれに花床に似たもの何一つありはせぬ。殆んど綠色の小枝一つ有つて居ない庭もあらう。綠色のものは全く何一つ無くて、さういふのは例外[註]ではあるけれども、全然岩

註。コンダア氏が記載して居る、トクワモン寺の院主の御殿の庭の如きがそれで、佛の教に同(どう)じて石が頭を屈めたといふ傳說を記念せん爲め造られたものである。鳥取縣の東鄕の池で自分は殆んど全く石と砂とから成つて居る、頗る大きな庭を見た。設計者が傳へんと欲した感銘は、幾つかの砂丘を越して海へ近寄つて行くといふ感銘であるが、そのイリウジヨンは美しいものであつた。

と小石と砂とから成つて居る庭もある。槪して日本の庭は山水の庭であるが、その存在は或る定まつた大いさの地積に賴りはしない。一段歩でもよく數段歩でもよい。またほんの十尺四方でも宜い。極端な場合にはもつとずつと少くても宜い。或る種の日本の庭はトコノマに置くことが出來る程に小さく工夫し得るからである。大いさ果物皿ほども無い器物(うつは)にしつらへた斯んな庭は、コニハ若しくはトコニハと呼ばれて居て、他の建物と建物との間にきつちり壓し詰められて、戶外の庭を作る地面を少しも有たない、小さな粗末な住宅

に時折見ることが出來る。（自分は『戸外の庭』と言ふ。日本の大きな家には、階上にも階下にも、戸内の庭のあるのがあるからである）このトコニハは普通には珍らしい鉢か、彫つた淺い箱か、又はどんな英語でも記述の出來ない奇妙な形の器の中に作られる。その中に、上に小文字的な小さな家が在る、小文字的な小さな小山が造られ、脊の曲つた極く小さな橋が架（かゝ）つて居る、顯微鏡的な池と小川が造られる。そして珍奇なちいちやな植物が樹木の役を勤め、妙な恰好した小石が岩の代りになり、頗る小さなトウロウがあり、多分頗る小さなトリヰも亦一つありして――要するところ、或る日本風景の可愛らしい生きて居る雛形である。

記憶すべき今一つの一番重要な事實は、日本庭の美を理解せん爲には、石の美を了解する――或は少くとも了解することを學ぶ――必要があるといふ事である。人間の手が切り出した石の美では無い。たゞ自然が形づくつた石の美である。諸君は石に性格がある事、石に調子（トオン）がありまた明暗（ヷルウ）がある事を感ずることが、しかも切（せつ）に感ずることが出來なければ、日本の庭の藝術的意味の全部は、諸君に示顯され得ないのである。外國人には、その人がどんなに審美的であらうとも、この感情は研究に依つて修養する要がある。これは日本人には生來のものである。その人種の魂は自然をば、少くとも自然の映眼的形態に於て、我

我よりも無限に、より能く理解して居る。だが、西歐人のことであるから、石の美の眞の感じは、日本人の石の使用法と選擇法とに長く慣れ親しんで、初めて得られるのであるけれども、獲らるべき教訓の文字は、諸君の生活が內地に於てであれば、身邊到る處に存在して居る。どんな街路を散歩しても、諸君が修むべき石の美學に於ける課業と問題とを眼にせずには居れぬ。寺院への道路に、道路の傍に、神聖な杜の前に、またあらゆる墓地に於てでもあるが、あらゆる公園と遊園とに於て、自然石の大きな不規則な平たい――多くは河床から採つたもので水に磨滅された――表意文字が彫りこんではあるが、決して斫り刻みのして無い――石があるのに氣が付かう。是等は奉納の牌として、記念の碑として、墓石として、建てられて居るもので、神佛の形像が浮彫に刻まれて居る、尋常の伐石の柱やハカよりか遙か高價である。それからまた、大抵な神社の前に、否、殆んど總ての大きな屋敷の地面にすら、激流の作用で磨滅した花崗岩か、或は他の堅い岩の大きな不規則な石塊をば、その上部に圓形の窪みを刳つて水鉢（テウヅバチ）に變へてあるのを見るであらう。こんなものはどんなに貧しい村に於てても見うける石の利用のほん普通の實例で、若し諸君にして少しでも生來の藝術的感念を有つて居らるゝなら、かういふ天然な形の方が石伐師の手に成つた、どんな恰好よりかどんなにか勝れて美しいか、早晩、必ず發見せ

すには居れぬ。多分また諸君は、殊に國内を多く旅行すると、しまひには岩の表面に刻まれた文字を見るに慣れて來て、表意文字は自然の法則によつて、岩石構造の附物(つきもの)てでもあるやう、そんなものが全く無い處に、またそんなものがある筈が無い處に、文字か或は畫(ほ)つた物は無いかと我知らず探して居ることを屢〻知るであらう。そして石が、恐らくは、――日本人に對してさうのやうに、氣分と感じとを暗示する――個性的な或は人相的な貌を諸君に呈し始めることであらう。實際、日本は、火山的高地がさうあり勝ちのやうに、特に石に暗示的形狀がある國である。だからそんな形狀が、『岩と木の根と木の葉と綠の水の泡とに物を言はせた』出雲の鬼のことを云うて居る、あの古代の文よりかずつと前の或る時代に、この人種の想像力に訴へたことは疑ふべくも無い。

自然の形體が與へる暗示が、斯く認められる國に豫期さるゝやうに、日本には石に關する妙な信仰と迷信とが澤山ある。殆んどいづれの州にも、神聖だとか、物が憑(つ)いて居るとか、或はまた不思議な力を持つて居るとか、想像されて居る有名な石がある。鎌倉八幡宮の女の石、それから那須の殺生石、それから巡拜者がそれを恭敬する江ノ島の縁石の如きそれである。出家ダイタがそれに對つて佛の言葉を說いたら、頭を屈めたうなづき石の傳說の如く、また應仁天皇が、御酒(みき)に醉ひたまうて、『御杖以(も)ちて大坂道の中なる大石を打

ちたまひしかば、[註]その石走り避りぬ！』といふ古事記にある古い話の如くに、石が感受性を表した傳說さへあるのである。

註。チエムバレン教授譯古事記二五四頁。

さて石はその美しさで評價される。だからその形が美しい爲めに選ばれた大きな石は、幾百弗の美的價値を有つことがある。そして大きな石が古風な日本庭の設計の骨骼卽ち骨組である。啻に一々の石がその特別な表現的形體の爲めに選擇される計りで無く、庭內の或は家屋近くの一々の石は、その目的或はその裝飾的義務を示す箇々別々な名を有つて居る。が然し自分は日本庭の民間傳說については、たゞ少し、極く少ししか諸君に語ることが出來ぬ。若し諸君にして石とその名に就いて、また庭園の哲理に就いて、もつと多く知らんと欲せらるゝなら、[註一]日本の山水庭園の造り方に關するコンダア氏の無比な論文と、日本の花の裝飾の技術に關する同氏の美しい本と、それからまたモオルスの[註二]日本の家庭に載つて居る簡單ではあるが面白い一章を讀まれたい。

註一。この一篇を書いた後に、コンダア君は『日本の山水庭園術』といふ繪入の美しい書物を出版した。（一八九三年ジヨシユア・コンダア著。東京にて出版）この書の寫眞附錄は東京及び其他の最も有名な庭

園の景色を見せて居る。

註二。レイン博士の日本庭園に關する觀察は、正確といふ點に於ても、またこの問題の理解といふ點に於ても、推薦が出來ない。レインはたゞ二ケ年を日本で費しただけで、それもその大部分は漆工、絹と紙との製造並びに他の實際的な事柄の研究に費したのである。それ等の問題に關しては、その著作は正當の尊重を受けて居る。が然し日本の風俗習慣藝術宗教及び文學に關しての章は、それ等の題目を知ること極めて少きを示して居る。

譯者註。出雲國造神賀詞（イヅモノクニツコガカムホギノコトバ）の中に『豐葦原の瑞穗國に、晝は五月蠅なす皆沸き、夜は火瓮なす光く神あり、石根木根立ち、青水沫も事問ひて荒ぶる國なり』とあり。

三

在るべくも無い山水を、或は純理想的な山水を造らうといふ努力は、日本の庭てはされない。その藝術的な目的は本當の山水の人目を惹く處を忠實に模倣し、且つ眞の山水が與へる眞の印象を傳へるに在る。だからして同時に一つの繪てあり、また一つの詩てある。恐らくは繪の方よりも詩の方が餘計な位てあらう。それは、自然の風景が、その移り變る相好て、喜悅の念或は森嚴の念を、物凄い感じ或は美しい感じを、力の感念を或は平和の

感念を與ふるが如くに、山水庭園師の勞苦に成る自然の眞實な反映は、啻に美の印象を與へるばかりでは無い。精神に或る氣分を起こすに相違無いからである。古昔の偉大な山水庭園師は、即ち始めてこの技術を日本に輸入し、後ち之を發達せしめて、殆んど玄妙とも云ふべき一つの學問となした佛教の僧侶共は、その說をこれよりも尙ほ遠くへ進めた。彼等は道德的教訓を庭園の設計に表現する、――貞節とか、信心とか、敬虔とか、滿足とか、平靜とか、夫婦の至福とかいふ抽象感念を、それで表現する事は可能だと思つて居た。だからして、詩人か、武士か、哲學者か、又は僧侶か、その持主の性質に應じてそれ〳〵庭園を工夫した。さういふ古い庭では（悲しいかな、その技術は平凡極はまつた、西洋趣味の影響に萎んで失せ去りつゝあるが）自然の或る氣分と、人間の或る氣分の東洋的な珍稀な意想とが一緒に表現されて居たのである。

自分は自分ところの庭の主たる區分が、人間のどんな感念を反映させる者であつたものか解らぬ。語つて吳れる者は一人も居ない。それを造つた者共は、魂の永遠の輪廻に、長の幾代の古昔に世を去つてしまつた。然し一つの自然詩として、どんな說明者も要りはせぬ。その主な區分は、南に面して、地面の前方を占めて居る。そして西に伸びて庭の北の

區分の境に至り、その境とは妙な隔ての壁で半ば分たれて居る。それには苔の厚く蒸した大きな岩があり。水を容れて置く妙な恰好の種々な石鉢があり。年月の爲め綠になつた石燈籠があり、また、城の屋根の尖つた角に見るやうな――その鼻を地に着け、その尾を空に立てた、理想化した海豚の、大きな石の魚の――シヤチホコ[註]が一つある。古木がそれに

註。シヤチホコのこの姿勢は、さう無くてはならぬことになつて居ると言つて宜い。それからして「頭を下に突いて立つ」といふ意味の『鯱鉾立ち』といふ語が出來て居る。

植わつて居る微細畫式の小山があり、花の灌木が蔭を與へて居る、川土手のやうな、綠の長い傾斜地があり、小島のやうな綠の饅頭山がある。青々した斯ういふ高みは總て皆、その表面が絹の如く滑かな、そして川の道筋の紆餘曲折を眞似て居る、淡黃色な砂の地面から高まつて居る。この砂地の處は踏んではならぬ。踏むには餘りに美し過ぎる。微小の一點の埃と雖も、その眞銘を傷けることとであらう。だからその體裁を缺點なしにして置くには、その地生れの經驗に富んだ庭師――愉快な老人である――の訓練の餘に成る手際を要する。が、その砂地は、正しく小川を橫に渡る踏石のやうに、次から次と常に不規則な距離に置いてある、斫り削りして無い平たい幾列かの石を傳つて、種々な方向に横ぎること

が出來る。全體の感銘は、或る眠くなるやうな物淋しい氣持の好い處にある、或る靜かな流れ川の岸の感銘である。

このイリウジョンを破るものは何一つ無い。それ程にこの庭は引込んで居て閑靜である。高い壁と塀とが街路や近處の物を遮つて居り、そして境界に近い方が高く茂つて居る、灌木と樹木が隣のカチウヤシキをその屋根すら見えぬやう隱して居る。日が射して居る、その砂地へ映る木の葉の震へる影は、やんわりと美しく、花の香は生ぬるい風の漂ひごとに、うつすらと匂うて來、それから蜂の微かな唸り聲がする。

四

佛敎では萬有を、木石の如き、情を有たぬ物ヒジヤウと、それから人間禽獸の如き、情を有つて居る物ウジヤウとに分つ。この區別は、自分の知つて居る限りでは、物に書かれた庭園哲理には表明されて居らぬ。が、これは便利な區別である。自分の小領土の民間傳說は、生きて居ないものと生きて居るものの兩方に關係がある。で、自然の順序として、自分のヤシキの入口に近い、そして第一の庭の門に接して居る、珍らしい或る灌木から始め

ることにして、非情を初に考察してもよからう。

殆んど總ての古いサムラヒ屋敷の表門の內側に、それも普通は住宅そのものの入口に近く、大きな獨特な葉を有つた小さな木が屹度在る。出雲でのこの木の名はテガシハで、自分の門の横にも一本ある。その學名は何であるか自分は知らぬ。またこの日本名の語原も十分確かには知つて居ない。が然し、手の枷といふ意味の、テガシといふ語がある。そしてこのテガシハの葉の恰好は手の恰好に稍〻似て居る。

さて、昔時、サムラヒがそのダイミヤウに隨いて、江戸へ行く爲め自分の家を去らなければならぬ時、丁度出立の前に、燒いたタヒ(註)をテガシハの葉に載せて、その前へ置くのが

註。タヒ（學名セラヌス・マアギナリス）と呼ぶ見事なパアチは、それは出雲海岸に沿うて極普通な魚で、日本の魚類中最も美味なものとして、正當に珍重されて居るばかりでは無い、その上また幸運の徵表と考へられて居る。これは婚禮の時また祝賀の折の儀式的の贈物である。日本人はこれをまた「魚類の王」と呼んで居る。

習慣であつた。この暇乞の食事後、その上へ鯛を載せて供へたその葉は、出て行つた士を無事に歸らせる呪符として、門の上へ吊るされるのであつた。手柏の葉についてのこの面

白い迷信は、その由來はその恰好に在るばかりては無い、その動き樣に在つた。風が搖すぶると、その葉は——尤も我が西洋風にては無く、掌を地に向けて手を穩やかに上下に振つて、友人に來いと日本人が合圖する樣に——手招きするやうに思へたのである。

大抵の日本の庭に見出さるゝ今一つの灌木は、ナンテン[註一]て、それには餘程珍らしい信仰

註一。學名ナンディナ・ドメスチカ。

がある。惡るい夢を、不運の前兆の夢を見た時は、翌朝早くそれを南天に囁かねばならぬ。するとその夢は決して本物にはならぬといふ[註二]。この優美な植物には變種が二つある。一つ

註二。出雲で云ふには、一切の夢の中で一番目出度いのは、かの聖山フジの夢である。吉兆の順序でそれに次ぐのは鷹を夢見ることである。三番目に一番好い夢の主題は茄子である。日又は月の夢を見るのは甚だ緣起が好い。が、星の夢を見るのはもつともつと緣起が好い。若い妻には星を呑むと夢見るは最も好運である。美しい兒の母さなることを意味するからである。牛の夢を見るのは吉兆である。馬の夢を見るのは緣起は好いが旅行を意味する。雨か火の夢を見るのは善い。西洋でもさうのやうに、日本でも『逆さになる』と思はれて居る夢が少しある。だから、自分の家が燒けたことを、或は葬式を、或は死んだことを、或は死人の幽靈と話したことを夢見るのは善い。女には善い夢で男が見ると、反對になる夢が少しある。例へば、鼻血が出ると夢見るのは女には善いが、男にはこれは甚だ惡るい。多くの金錢を夢見るは損失の

來る前兆である。鯉或は何か淡水の魚を夢見るのは一番縁起が惡るい。これは妙である。日本の他の地方では鯉は幸運 徴號であるから。

は赤い實を結び、一つは白い實を結ぶ。後者は稀である。兩種類とも自分の庭に生えて居る、この普通な方の變種が（恐らく夢見る人の便宜の爲めに）緣に近く植ゑられて居り、他のは、小さな枸櫞樹(シトロンツリイ)と共に、庭の眞ん中の小さな花床を占めて居る。此非常に雅美な枸櫞樹は、その芳(か)ばしい實の不思議な恰好からして『佛手柑』[註一]と呼ばれて居る。その近くに、青銅のやうな光澤(つや)のある槍と尖つた葉の一種の月桂樹がある。日本人はユヅリハ[註二]と呼んで

註一。ブシユカン。學名シトルス・サアコダクチリス。

註二。『ユヅル』は他人に讓與するの意で、『ハ』は葉である。（ヘボンの字書に據ると、その植物學上の名はダフニフイルム・マクロポオダムである。

居るもので、古い士屋敷の庭には、殆んど手柏と同じく普通のものである。後から生えるその新葉が充分に發育しないうちは、古葉は一枚も決して落ちぬから、緣起の好い木だとされて居る。といふのは、斯くしてユヅリハは、その息子が一家の長として、後を嗣ぐこ

とが充分出來る程に强壯な成人にならないうちに、父が亡くならないやうにとの希望を象徵して居るからである。だから每正月、讓葉の葉をば、羊齒の葉と交へて、その時出雲の何處の家の前にも吊るすシメナハに着ける。

五

樹木は、灌木同樣、その珍らしい詩と傳說とを有つて居る。石の如くに、樹木には一々、庭の構成上のその位置と目的とに從つて、特殊の風景的な名がある　恰も岩と石が庭の地面計畫の骨骼を成すが如くに、松の木がその樹木意匠の骨組を成す。松の木が全體に肉體を與へるのである。此處の庭には松は五本ある――苦しめられて奇妙な恰好になつて居る松ではなくして、長年の倦まず撓まずの世話と、思慮分別ある刈込みとの爲め驚く許り繪のやうに、美しくなつて居る松である。庭師の目的は、ごつ〳〵な線を畫かう、葉を――日本の藝術が金屬の象眼に、或は金色の漆器に之を模することに決して飽かぬ、あの針のやうな黑味がかつた綠の葉を――かためて付けよう、とするその本來の傾向を出來うる限り、發展せしむるにあつたのである。松はこの表象の國では表象の木である。永久に綠で

居るから、同時に不撓不屈の目的と、强壯な老齡との徽號である。そしてその針の恰好した葉は、惡鬼を追ひ拂ふ力があると信ぜられて居る。

サクラノキ、日本のチエリイツリイが――チエムバレン敎授がいかにも正當に述べて居らるゝ如く、其花は『歐羅巴が示し得る如何なる物よりも、比較を絕して遙かに美しい』あの木が――二本ある。これには多くの變種が栽培され鍾愛されて居る。自分の庭のは最も微かな淡紅の、紅味を帶びた白の、花を着ける。春、その木が花を咲かすと、ほのかに夕日に色どられた羊毛のやうな、雲の塊が最も高い空から漂ひ降りて、枝を抱いて居るが如くである。この比喩は決して詩的誇張では無い、また斬新でも無い。自然が爲し得る最も驚嘆すべき花の表示の日本古來の叙述である。日本での花盛りの櫻の木を一度も見たことのない讀者は、その眺めの美しさは到底も想像が出來ぬ。綠の葉は少しも無い。葉は後で出る。華麗極はまりない、花の全くの一と爆發で、そのまた花の美妙な霞て大枝も、小枝も殘らず蔽はれて居る。そして、その木一本々々の下の地面は、淡紅ゐの積雪を見るが如くて、落ちた花瓣に地が見えぬ程に厚く蔽はれる。

然しそれは栽培した櫻の木てある。他に、ヤマザクラ[註]卽ち山櫻のやうな、花より前に葉

註。この山櫻に就いては、日本人が地口を好む例證になる滑稽な話がある。それを充分に鑑賞するには、讀者は日本語の名詞には、單數複數の差別が無いことを知らなければならぬ。「ハ」といふ語は、發音しただけでは「葉」「齒」いづれをも意味し、「ハナ」といふ語は「花」「鼻」いづれをも意味する。山櫻はそのハ（葉）をハナ（花）より前に出す。そこでハ（齒）がハナ（鼻）より前に突き出て居る人を、ヤマザクラだと言ふ。突顎は日本では、殊に下流階級では、珍らしく無い。

を出すのがある。が然し、これ亦美と象徴とのその詩を有つて居る。神道の大家で詩人であつた本居はかう歌つた。

シキシマノ
ヤマトゴコロヲ
ヒトトハバ
アサヒニニホフ
ヤマザクラバナ

栽培されるものでも、栽培されないものでも、日本の櫻は徽號である。昔のサムラヒの庭に植ゑてあるものは、たゞその麗はしさばかりの爲めに、大事にされるのでは無かつた。その清淨無垢の花は、非常な慇懃と眞實な勇武とに屬する、彼(か)の感情の優美と生活の非難

無さとを象徴するものと考へられて居た。『花は櫻木、人は武士』と古い諺は云つて居る。

此庭の西の端を陰らせて、そして緑の廂の上にその滑らかな黒い四肢を突き出して、餘程年數を經た、そして元々、他の庭でと同樣、その花の咲くのを見るために植ゑられたに相違無い、立派なウメノキ即ち日本のプラムツリイが一本ある。春の極く始めの梅[註]の花

註。顯著な變種が三つある。一つは紅い花をつけるもの、一つは濃紅と白の花をつけるもの、今一つは純白の花をつけるもの。

は、それから全一月後で無いと咲かぬ、櫻の木に劣らず驚くべきもので、兩方とも花が咲くとみんな業を休んで、それを賞め稱へる。が、この二つが一番有名であるが、斯く世人の愛好を蒙る花は、この二つだけでは無い。藤、朝顔、牡丹、各〻その季節には、それを見る全市の住民を田舍に赴かしむるに足る程の美はしい花を見せる。出雲では、牡丹の花は殊に驚く可きである。之を観るのに一番有名な處は、中海といふ大きな鹹湖の中にある、松江から船で一時間ばかりの、大根島といふ小さな島である。五月には全島が牡丹で紅ゐに燃える。小學校の男女兒童すら、それを眺めて樂しむ爲め、一日の休暇を貰ふ。

梅の花は美に於て、確かに櫻の花の敵手であるのに、日本人は婦人の美をば——肉體美

をば——櫻の花に較(たと)へて、決して梅の花には較へぬ。然しまた、之に反して、婦人の貞節と深切とは梅の花に例へて、決して櫻の花には例(たと)へぬ。或る著者が斷言したやうに、日本人は女を木や花に例へることを考へぬと斷言するのは大なる誤である。優しさには、少女はほつそりした柳[註一]に、若盛りの色香には、花の盛りの櫻に、心の麗はしさには、花の咲いて居る梅の木に例へられて居る。それどころか、日本の昔の詩人は女をあらゆる美しい物に例へて居る。次記の歌に見るが如くに、その種々な姿勢に對し、その動作に對して、彼等は花から比喩を求めさへしてゐるのである。

註一。『ヤナギゴシ』といふ言葉は、ほつそりした美しさを柳の木に例へる、普通使用されて居る多くの言葉の一つである。

タテバ　シヤクヤク[註二]
スワレバ　ボタン
アルク　スガタハ
ヒメユリ[註三]　ノ　ハナ

註二。學名ビオニア・アルビフロラ。此名は優美なといふ意味を含んで居る。ボタン(英語のツリイ・ビ

オニイへの比喩は、この日本の花木を能く知つて居る人だけが、充分に鑑賞が出來る。

註三。ヒメユリと言はずにキシユリ（美麗のポピイ）と言ふ人もある。前者は優美な一種の百合で、學名リリウム・カロスムである。

實際、身分の非常に賤しい、田舍娘の名でさへ、往々敬語の『お』を前に附けた美しい木又は花の名のことがある。舞子やヂョラウの職業的な華名は、言ふまでも無いとして、オマツ（松）、オタケ（竹）、オムメ（梅）、オハナ（花）、オイネ（稻）の如きそれである。ところが、娘が有つて居る木の名のうち、その或る者の起原は、木そのものの美しさについての、どんな民衆觀念にも求むべきでは無くして、寧ろ長命とか幸福とか幸運とかの徵號としての、その木の民間思想に求めなければならぬ、と可なり有力に主張され來つて居る。が、それはどうあらうとも、日本人が女を木や花にたとへる、その比喩が美的感念に於て少しも、我々西洋人の比喩に劣つて居ないことを、今日の諺、詩、歌、並びに日常の言葉が充分に證明して居るのである。

註　今は日本の社會のより高等な階級では、敬語の『お』を、概して言つて、娘の名の前に用ひず、また派手な稱呼は息女の名には附けぬ。貧しい可なりな階級のうちに在つてすら、藝者なんかの名に似た名は嫌はれて居る。が、上に記載した名は立派な正しい、日常の名である。

六

木には、少くとも日本の木には、魂があるといふ事は、ウメノキとサクラノキの花を見たことのある者には、不自然な空想とは得思はれぬ。この事は出雲や他の地方での普通の信仰である。これは佛教の哲理には一致しないが、或る意味に於て、木は『人間の用の爲めに創造された物』といふ西洋の古の正統思想よりも、遙かに宇宙眞理に近いものと誰しも感ずる。その上亦、貴重な森林の絕滅を防ぐ上に於て、大いに效のあつた或る種の西印度信仰に似ねでも無い、數々の妙な迷信が特殊の樹木に就いて存在して居る。日本には、熱帶世界と同樣に、化物の木がある。そのうちで、エノキ（學名セルチス・キルデノキアナ）とヤナギ（枝の垂れるキロウ）とが、殊に靈的なものと考へられて居る。て、古風の日本庭に見らるゝことは今は稀である。兩方とも化ける力を有つて居ると信ぜられて居る。『エノキ ガ バケル』と出雲で云ふ。諸君は日本字書に『バケル』といふ語が『姿を變へる』とか、『變態する』とか『變はる』とかいふ言葉で、反譯されて居るのを見らるゝであらう。が、此二つの木に就いての信仰は頗る特殊なもので、『バケル』といふ動詞の、

そんな飜譯では説明が出來ぬ。木そのものが形や場所を變へるのでは無くて、木のお化けといふ妖怪が木から放れて、樣々な姿（注）を執つて歩き廻るのである。最も屢〻此幽靈が執る姿は美人のそれである。この木の妖怪は滅多に物を言はぬ、また滅多にその木から餘程の遠方へ行くことを敢てせぬ。人が近寄ると直ぐと幹か簇葉かの中へ退きすざる。古い柳でも若い柳でも、伐ると血がその傷口から流れ出るといふ。こんな木は極く若い時は、超自然的な習慣を有つて居るとは信ぜられて居ないが、年をとればとる程危險となる。

京都の或るサムラヒの庭に生えて居た柳に就いて——ドライアッド〔譯者曰、木に棲むニムフ〕についての昔の希臘人の夢を想はせる——やゝ可憐な傳説がある。その木に氣味の惡るい評判があるが爲めに、其家の借家人は、それを伐り倒さうと思つた。が、別な一

注。サトウ氏は、これが或る程度までその同類かとも思へる、或る信仰を——珍らしい神道の教を——平田に發見して居る。『その教に據れば、神は自己の部分を分裂の方法によりて剝ぎ棄て、斯くして所謂ワキミタマ——各異れる機能を具へたる分き魂——を生ず』るのだといふ。出雲の大神、大國主之神は、平田の說に據ると、こんな『分き魂』を三つ具へて居らるるといふ。罰するその荒い魂（アラミタマ）、赦すその和い魂（ニギミマタ）、及び惠を與へる、その祝福的或は慈善的な魂（サキミタマ）それである。この神の荒魂がさうとは知らずに、一度和魂に遭つたといふ神道物語がある。

人のサムラヒが諫めて『自分の庭に植ゑるから、それを自分に賣つて呉れ』と言つた。斯くて購はれ移し植ゑられて、その柳は、その新しい家で能く繁茂し、そしてその魂が、感謝の念からして、美しい女の姿を執り、自分を助けて呉れたそのサムラヒの妻となつた。可愛らしい男の兒が、その結婚の結果であつた。四五年經つて、その地面の持主であつたダイミヤウが、その木を伐り倒せと命じた。すると妻は甚く泣き悲しんで、始めてその夫に事の仔細を洩らした。そして『私は死なねばならぬ事は分つて居ります。でも私共の子供は生きて居ませうし、またあなたはいつも可愛がつてやつて下さるでせう。さう思ふことが私のたつた一つの慰めであります』と言ひ足した。驚きまた怖れた夫は、女を引留めようとしたが徒勞であつた。永久の訣を夫に告げて女は、その木の中へ消え失せた。その士は己が力の及ぶ一切を盡して、その目的を棄てるやう大名に說き勸めたことは言ふに及ばぬ。その大名は(註)サンジフサンゲンダウといふ大きな佛寺の修繕に、その木が要るのであつた。その木は伐られた。が、倒れてしまふと、三百人の力もそれを動かすことが出來ぬ程の重さに突然成つた。その時その子が、その小さな手に一枝を持つて『おいて』と言つた。するとその子に隨いて、その寺の庭まで大地を辷つて行つた。

註。京都の佛寺總てのうちで、一番印象的なものであらう。千手觀音に奉献されたもので、その像が三萬

榎は化物の木だと言はれて居るけれども、時々最高の宗教的尊敬を受けて居る。古い人形をそれに奉納することになつて居る、荒神（くわうじん）といふ神の靈は、或る非常に古い榎の木に宿つて居ると想像されて居るからで、人々がそれに對してお祈をする、祠がその木の前に置かれて居るのである。

七

北側の第二の庭は自分の好きな庭である。大きな草木は何一つ無い。青い小石が敷いてあつて、小池が一つ――珍奇な植物がその縁にあり、小さな島が一つその中に在つて、その島には小さな山が幾つかあり、高さは殆んど一尺にも足らぬが、恐らくは一世紀以上の年を經たのも、その中にはある一寸法師的な、桃と松と躑躅がある小型の湖水が一つ――その中心を占めて居る。ではあるがこの作品は、さう見せようと計畫されて居たやうにして見ると、眼に少しも小型なものとは見えぬ。それを見渡す客間の或る一角から見ると、石を投げれば屆くほどの遠さに、向うに眞の島のある、眞の湖岸の景である。この庭園丞

部を立案した、月照寺の杉の下に眠つてから一百年を經て居る、その古昔の庭師の技巧は如何にも巧妙なので、そのイリウジョンは、その島の上にイシドウロウ、卽ち石の燈籠が在るので座敷からだけ見破られるのである。その石燈籠の大いさが、その僞りの遠景を裏切るが爲めで、この庭を造つた時には、其處に置いて無かつたものと自分は考へる。

この池の緣の其處此處に、その沼澤住者を窺ふことも、そして殆んど水と水平に、その上に立つことも坐ることも出來る、その水中植物を世話することも出來る、扁たい大きな石が置いてある。池には、その輝かしい綠の葉面が、水の表に油の如く浮いて居る美しい睡蓮（ヌファル・デャポニカ）があり、また二種類の、一つは淡紅い花をつけるもの、一つは純白の花をつけるものと、多くの蓮がある。岸に沿うて、三稜鏡的菫色の花を咲かす菖蒲が生えて居り、それからまた裝飾的な種々な、草や羊齒や苔がある。が、この池は蓮池で、蓮がその最も大なる妙趣となつて居るのである。葉が始めて解れる時から最後の花が落つる時まで、その驚くべき生長の一々の相を見るのは樂しみである。殊に雨降りの日には蓮は觀察に値する。その盃形の大きな葉が、池の上高く搖れつゝ雨を受けて暫くの間それを保つ。が、葉の中の水が或る一定の水平に達すると、屹度莖が曲つてボチャリと高い音を立てて水を零す、そしてまた眞直ぐになる。蓮の葉の上の雨水は日本の金屬細工人の

得意の題目て、その油氣のある綠の表面に動く水の運動と、色とは正しく水銀のそれてあるから、金屬細工のみがその感銘を再現し得るのてある。

八

第三の庭は、これは甚だ大きなもので、この蓮池のある構内を越して、この昔の士族町の北と東北の境を成して居る、森の小山の麓まで延びて居る。前にはこの廣い平坦な地面は全部竹藪が占めて居た。が、今は雜草や野花の荒地に過ぎぬ。東北の隅に素晴らしい井戸があつて、其處から極はめて器用な竹筒の小さな水道でもつて、氷と冷たい水が家へ運ばれて居る。そして西北の角には、丈高い雜草に蔽はれて、稻荷の甚だ小さな石の祠があつて、其前にそれに釣合つて小さな石の狐が二匹立つて居る。祠も狐の像も削がれ毀たれて、綠濃き苔が厚く處々に附いてゐる。が、家の東側の、庭のこの大きな區分の屬する四角な小さな一と地面は、今なほ耕作されて居る。それは全部菊に使用されて居て、その菊は、輕い木でシヤウジのやうに、劃々に白い紙を貼つて造つた斜めな枠物の、竹の細い柱の上で天幕のやうに支へられたものでもつて、非道い雨と強い日光とに遭はぬやう庇はれ

て居る。日本の花卉栽培のこの驚くべき產物その物に就いては、自分は既に他人が筆にして居ることに何物をも加ふるを敢てし得ぬ。が、菊に關係のある短い物語で、自分が語つてもよからうと思ふのが一つある。

日本のうちで、やがて判るであらう理由の爲め、菊を栽培するのは不吉だと考へられて居る處が一と處ある。その處といふのは、播磨の國の姫路といふ綺麗な小さな町である。姫路には櫓の數が三十ある、大きな城の廢址がある。その城には祿高十五萬六千石の、或る大名が住んで居たものである。さて、その大名の重臣の一人の家に、良家の生れの名をおきくと呼ぶ女中が居た。『キク』といふは菊の花といふ意味である。その女中は貴重品を澤山託されてゐて、そのうちに高價な黃金の皿が十枚あつた。そのうちの一枚が突然見えなくなつて、見つからなかつた。そこでその女の子は、それに責任を感じて、自分の身の潔白を他にどうして證明すべきかを知らなかつたから、井戸へ身を投げて死んだ。ところがそれからといふものいつも、その幽靈が夜毎歸り來ては、歔欷と共に、低い聲で皿の數を數へるのが聞かれた。

イチマイ　　ニマイ　　サンマイ
ヨマイ　　ゴマイ　　ロクマイ

シチマイ　ハチマイ　クマイ――

すると絶望的な叫びと、高いわつと泣く聲とがきかれるのであつた。それからまた、その女の子の悲しさうに皿の數を數へる聲がする、『一枚――二枚――三枚――四枚――五枚――六枚――七枚――八枚――九枚――』

この女の靈魂が、その頭はふり亂した長い髮毛の幽靈の、それに僅かに似て居る、妙な小さな蟲の身になつた。それはキクムシ即ち『おきくの蟲』と呼ばれて居る。そして姫路よりほか何處にも居らぬといふことである。有名な脚本がおきくについて書かれて居て、バンシウ。オキク。ノ。サラ。ヤシキ即ち『播州お菊の皿屋敷』と題して、民衆的な劇場何處でも今なほ演ぜられて居る。

バンシウといふは東京（江戸）の或る古い町の名の、轉訛に過ぎぬから、この話は其處へ持つて行かなければならぬと公言する人が居る。然し姫路の人々はその町の一部分で、五軒屋敷と今呼ばれて居る處が、昔のその屋敷の跡だといふ。姫路のうちの五軒屋敷と呼ばれて居る處で菊を栽培するのは、おきくといふ名が『菊』を意味するが故に、不吉だと考へられて居る事は、これは確かに眞實である。その爲めに其處では誰も菊を栽培せぬ、と自分は聞いて居る。

今度は上記の庭に棲んでゐるウジヤウ、卽ち情のあるものに就いて。

蛙が四種居る。蓮池に棲んで居る三種と、木に棲んで居る一種と。木の蛙は非常に見事な綠色の、頗る可愛らしい小さな奴である。鋭い、殆んどセミの聲のやうな叫びを發する。そして、他國のその同類同樣、その啼くのが雨の前兆だといふので、アマガヘル卽ち『雨蛙』と呼ばれて居る。池の蛙はババガヘル、シマガヘル、それからトノサマガヘルと呼ばれて居る。そのうちで、名を第一に擧げた一種は一番大きくて一番醜い。色が甚だ不快で、且つまた省略しないのでその名は（『ババガヘル』といふは體裁の好い省略である）その色同樣に頗るいとはしいものである。シマガヘル卽ち『縞蛙』は前に掲げた物に比ぶればさうでもないが、好くは無い。然し素晴らしい立派な紀念物を死後に殘したさる有名な大名にあやかつて、斯く名づけられたトノサマガヘルといふのは美しい。その色は青銅色を帶びた見事な赤である。

この三種の蛙のほかに、庭に大きな見苦しい出眼な奴が棲んで居る。此處ではそれをヒ

キガヘルと呼んで居るけれども、自分は蝦蟇だと思ふ。『ヒキガヘル』といふ語は、普通蝦蟇(ブル・フロッグ)に與へて居る名である。此奴は殆んど毎日、物を食はせて貰ひに家へはひつて來て、見知らぬ人をも一向恐れぬやうに思はれる。家の者共は之を幸運を齎す御客と考へて居る。そしてただ息(いき)を吸ひ込むだけて、部屋の蚊を總てその口の中へ取込む力を有つて居ると信じて居る。庭師や他の者共は大いに之を可愛がつて居るけれども、古昔の化物蝦蟇の物語がある。息を吸ひ込んで、口の中へ蟲では無い、人間を吸ひ込んだといふ蝦蟇てある。

池にはその上多くの小さな魚が棲んで居る。鮮やかな赤い腹をしたキモリ即ち蠑螈も居る。それからマヒマヒムシと呼ぶ小さな水蟲が澤山居る。それは水面を始終旋回して、時を過ごして居るが、餘り迅いのでその形を明白に見分けることは、殆んど不可能である。興奮のあまり目的(あて)無しにあちこち走り廻る人は、マヒマヒムシに例へられる。それから甲に黃色な條文(しま)のある美しい蝸牛が居る。日本の子供は蝸牛にその角を出させる力があると想つて居る面白い歌をうたふ。

『ダイダイムシ(注)、ダイダイムシ、ツノ　チツト　ダシヤレ！

アメカゼ　フクカラ　ツノ　チツト　ダシヤレ！

註。ダイダイムシは出雲での名、字書での言葉は「デデムシ」。蝸牛は雨天を好むと思はれて居る。それ

で雨の時よく出る人は——デデムシノヤウナと——蝸牛に例へられる。

上流社會の子供の遊び場は、貧民の子供のそれが寺の庭である如く、いつも家の中の庭てあつた。小さな子供が植物の不思議な生活と、昆蟲世界の驚く可き事實に就いて、始めて少しく學ぶのは庭に於てであり、また庭に於て彼等は、日本の民間傳説のあんなに面白い部分を成して居る所の、彼の鳥と花との愛らしい傳説と歌とを始めて教はるのである。子供の家庭の訓練は大部分は、母に委せられて居るから、動物に對して親切であれとの教訓は夙に敎へ込まれ、その結果は後年強く顯れる。尤も日本の子供は、原始的本能の殘存として、あらゆる國の子供どもの特徴たる殘忍への、あの無意識な傾向を全然脱しては居ない。が、この點に關して男女間の大なる道徳的相違は、極く小さな時からして目立つて居る。女の心の優しさは子供の時分にすら見える。蟲や小さな動物をもてあそぶ日本の小さな女の子は、それを害することは稀で、大概は相當に慰んだ後で放して遣る。小さな男の子は、親か保護者が見て居ないと、女の子ほどには善良で無い。が、何かむごいことをして居るのを見られると、子供はその行爲は恥づべきことだと思はしめられ、佛教の戒の「むごい事をするとお前の後世は不幸だよ」と言つて聽かせられる。

池の岩の中の何處かに——此家の前の借家人が、多分、この庭へ殘したのであらう——

小さな龜が一匹棲んで居る。甚だ可愛らしい。が、一度に二週間も置いて姿を見せずに居るやうにする。民間神話では、龜はコムピラ[註一]といふ神の召使で、信心深い漁師は龜を見付けると、その背へ『金比羅様の召使』といふ意味の文字を書いて、それからサケを一ぱい飲ませて放す。龜はサケが大變好きだと想像されて居る。

陸に棲む龜即ち『イシガメ』だけが金比羅の召使で、海に棲む龜即ち海龜は海の底の龍王の召使だと言ふ人がある。海龜は、その息で、雲、霧、或は壯麗な宮殿を造り出す力を有つて居ると言はれて居る。それはあの美しい昔のウラシマ[註二]傳說に出て來て居る。どんな

註一。佛教の神であるが近年神道の信者にコトヒラ神と同一のものとされた。

註二。日本の美術家の手に成つた見事な繪を添へた「日本のお伽噺叢書」中の、そのチエムバレン教授の翻譯を見られよ。

龜でも龜は皆、千年の間生きると想像されて居る。だから日本美術に於て、最も頻繁に見る長命の徵號は龜である。が、日本土着の繪師及び金屬細工人が最も普通に現す、龜は一種特別な尾を、むしろ小さな尾の群集を有つて居て、藁の雨衣即ちミノの緣のやうに、背後にそれを伸ばして居る。といふ譯でミノガメと呼ばれて居る。ところが、佛寺の神聖な

貯水池に飼はれて居る龜は、非常な高齢に達するのがあつて、或る水草がその甲にくつついて、歩くと背後に長く垂れる。ミノガメの神話はその來由は、そんなやうな甲に藻のくつ着いて居る龜の姿を現さうとする古昔の藝術的努力に在つたのだと想はれる。

一〇

夏の始には蛙が驚く許り澤山て、暗くなつてからは言語に絶して騷々しい。が、多くの敵の攻擊を受けてその數が減るに連れて、週一週とその夜の喧噪が弱くなる。蛇の、中には長さたつぷり三尺はある蛇の、大家族がその群落へ時折侵入する。被害者は屢々憫れな叫び聲を發する。と、出來る場合には何時も、家の者誰かが直ぐに返事する。自分の下女の爲め生命の助かつた蛙は澤山居る。下女は竹の杖を輕く叩いて、蛇にその犧牲を放さざるを得ぬやうにするのである。此等の蛇は泳ぎが上手である。庭のあたりで勝手な振舞ひをするが、暑い日にだけ出て來る。自分の家の者は誰一人、その一匹も害しようとか殺さうとか考へもせぬ。もつとも、出雲では、蛇を殺すのは不吉だといふ。或る百姓が『原因無しに蛇を殺すと、後でその蓋を取るとコメビツ（炊ぐ米を容れて置く箱）の中にその首

がありますよ』と自分に確言した。

然し蛇は割合に蛙を食ふことが少い。圖々しい鳶と鴉とが、その最も執念深い驅逐者てある。それにまたクラ（庫）の下に棲んで居る頗る可愛らしい鼬が居て、家の主人が見張りして居る時ても、躊躇なしに池から魚でも蛙でも取る。その上に自分の禁獵場て密獵する猫が一匹居る。瘠せこけた浮浪者て、大盜人て、自分は色々と手段を講じて無賴を直さうとしたが駄目てある。一つにはこの猫が不行狀てあるのと、また一つにはそれが偶々長い尾を有つて居るのとて、ネコマタ卽ち化猫だといふ惡評を受けて居る。

出雲には生まれ落つるから、尾の長い小猫が居るには居る。が、尾を長くした儘て生長せしめられることは滅多に無い。猫は本來化物になる傾向を有つて居るもので、この變態傾向は、其尾を子猫時代に切らなければ阻止することが出來ぬ。猫は、尾があらうが尾が無からうが、魔物て、屍骸を踊らせる力を有つて居る。猫は恩知らずてある。『犬に三日物を食はせると、その親切を三年間覺えて居る。猫に三年間物を食はせても、その親切を三日で忘れる』と日本の諺は言うて居る。猫はいたづら者て、疊を破り、シヤウジに穴を明け、トコノマの柱てその爪を磨ぐ。猫は呪を蒙つて居る。猫と毒蛇だけが佛陀が死なれた時泣かなかつた。だから猫と毒蛇とはゴクラクの至福を受けることは出來ぬ。こんなや

うな理由と、また語るには餘りに多い他の理由とて、猫は出雲では大して可愛がられぬから、その生涯の大部分は餘儀なく戸外で過ごす。

一一

十一種類を下らざる蝶が、過去數年の間、かの蓮池の近所を見舞つた。一番普通な種類は雪白のである。これは殊に亡靈卽ち亡靈に惹きつけられると想はれて居る。だから小さな女の子はそれを見ると、

テフテフ、テフテフ、ナノハニ　トマレ、
ナ　ノ　ハ　ニ　アイタラ、テニトマレ、

と歌ふ。

が、然し最も面白い蟲は確かにセミ（シカデイ）である。木に棲む日本の此蟋蟀は、熱帶地方のあの驚くべき蟬（シカデイ）にすら勝る、實に異常な歌ひ手である。それに暖い季節全體に亘つて、殆んど每月、全然異つた歌をうたふ、異つた種類のセミが出るから、頗はしさも遙かに少い。自分の信ずるところでは七種ある。が、自分が能く知つて居るのはただ四種

である。自分ところの木で鳴く最初のものは、ナツゼミ即ち夏蟬で、日本語の單綴音ジに似た音を出し、始めは息苦しいゼイ〳〵聲である。が、段々高まつて蒸氣を吹く時のやうな漸次强音の叫びになり、次第にうすれて又更に息苦しいゼイ〳〵聲になる。このジーイーイーイイイイイイは、實に耳を聾する許りて、夏蟬が二三匹窓近くに來ると、自分はそれを追拂はざるを得ぬ。幸にも夏蟬の後に直ぐミンミンゼミが來る。遙かにより巧妙な樂人て、その名はその驚く可き音から來て居るのである。『僧侶が御經を讀むやうにうたふ』と言はれて居るもので、實際、始めて聞いた時には、誰しもただの蟬の音を聽いて居るのだとは殆んど信じられぬ。ミンミンゼミの次には、秋早く、美しい綠色の蟬のヒグラシといふのが出る。カナカナカナカナカナと、小さな鈴を早く振るやうな、特に朗らかな音を出す。然し全體のうちで一番驚くべき訪問者はなほ後に來る、ツクツクバウシ[註]てある。自分は此動物は全蟬世界の中に、他に匹敵するものを有たぬと思ふ。その音樂は正に鳥の歌である。その名は、ミンミンゼミのそれの如く、擬聲である。が、出雲ではその歌の音は、

註一。『バウシ』は『帽子』を意味し、『ツケル』は『冠る』を意味する。然しこの語釋は頗る怪しい。

ツクツク　ウイス[註二]
ツクツク　ウイス
ツクツク　ウイス
　ウイオース
　ウイオース
　ウイオース
　ウイオース・ス・ス・ス・ス・ス・ス・ス

だとされて居る。

註二。「チヨコ・チヨコ・ウイス」だといふ人もある。「ウイス」は英語でいふと、最後の e を無音にした weece の發音に能く似て居る。「ウイオース」はやゝ we-ose に近い。

が然し、蟬が庭の唯一の樂人では無い。二つの異常な動物がその合奏を助ける。第一は鮮かな緑の美しい螽蟖で、日本人にはホトケノウマ卽ち『死者の馬』といふ妙な名で知られて居るものである。この蟲の頭は實際馬の頭に恰好が稍ゝ似て居る——だから斯んな空想が生れたのであらう。妙に狎れ〳〵しい動物で、踠きもせずに人手に捕へさせ、屢ゝ家

へ入りもするが、家の中でも氣安げに居る。これは甚だ微かな音を立てる。それを日本人はジユンタといふ綴音の反復だと書く。て、その螽斯そのものを時にジユンタと呼ぶ。他の一つの蟲は、これまた綠色の螽斯で、前者よりもやゝ大きく、そして前者よりも餘程人慣れぬものである。

チ　ヨ　ン
　　　ギ　イ　ス
チ　ヨ　ン
　　　ギ　イ　ス
チ　ヨ　ン
　　　ギ　イ　ス
チ　ヨ　ン………（心まかせに何處までも）

と鳴くその歌の爲めに、[註]ギイスと呼ばれて居る。

註。殆んど gcccc とやうの發音である。

愛らしいドラゴンフライ（トムバウ）が幾種も暑い晴れやかな日には、小池のあたりを

さまよふ。その一種は――これは、言ふに言はれぬ金屬性の色彩に光つてゐて、妖怪的にかぼそいもので、自分がそれまで見た蜻蛉のうちで、一番美しいもので――テンシトムバウ卽ち『天子蜻蛉』と呼ばれて居るものである。今一つ、日本のドラゴンフライ中最も大きなのがある。が、これは稍〻稀で、子供がもてあそび物にしようとして追求する。この種類は雌よりも雄の方が數が多いといふ。眞實だと自分が請合へる事は、雌を捕へると、その捕虜を出して置けば、殆んど直ぐと雄が惹きよせられるといふ事である。だからして、子供は雌を手に入れようとする。そして一匹捕へると、それを絲で或る枝に括つて、妙な短い歌をうたふ。その歌の原(もと)のまゝの言葉は斯うてある。

コナ[註]　オンジヤウ　カウライワウ
アヅマ　ノ　メトウ　ニ　マケテ
ニゲル　ハ　ハヂ　デハ　ナイカイ

註。『コレナル』の約言。

其意味は『汝、男たる、高麗王よ。東の女王に敗けて逃げるのを恥かしくは思はぬか』である。（この嘲罵は神功皇后の朝鮮征伐の話を仄めかしたものである）出雲では、この

原の歌の初七語が訛つて「コナ　ウンジヤウ　カウライ、アブラ　ノ　ミトウ」になつて居る。だから雄蜻蛉の名のウンジヤウと、雌蜻蛉の名のミトウは、訛つた言葉の二語から出て來て居るのである。

一二

暖い夜にはあらゆる種類の招びもせぬ、嫌な御客が群を爲して家へ侵入する。二種類の蚊が生活を不快ならしめんと全力を盡す。そして其奴どもはランプへ餘り近くは、近寄らぬといふ智慧を有つて居る。が、多勢の面白い、そして無害な者共は、その死を炎に求むることを禁じ得ないで居る。そのうち一番數多い犠牲は、これは驟雨の如く密集して來るサネモリと呼ぶものである。少くとも出雲ではさう呼んで居るもので、發育ざかりの稻に多大の損害を與へる。

さてサネモリといふ名は著名なもので、源氏に屬する古昔の有名な武士の名である。この人が或る敵と馬上て闘つて居るうちに、自分の馬が辷つて稻田に倒れ、爲めにその相手にねぢふせられて殺されたといふ傳說がある。その武士が稻を食ふ蟲となつたといふので、

出雲では今猶、敬つてサネモリサンと呼んで居る。夏の或る夜、其蟲を惹寄せる爲めに稲田で火を焚いて、銅鑼を鳴らし竹笛を吹き、その間『サネモリサン、どうかこつちへ來て下さい』と歌ひはやす。カンヌシが宗教上の或る式を行つて、馬と騎者とを現した藁人形を燒くか、又は近處の川若しくは掘割へ投げ込むかする。この儀式の爲めに田地にその蟲が居なくなると信ぜられて居る。

この小さな動物は、殆んど全く籾殼の大いさと色のものである。此蟲についての傳説はその身體が、翅とともに、日本の武士[註]の冑に稍〻似て居るといふ事實から起こつたものかも知れぬ。

註。胡瓜を食ふ小さな黄色い蟲の、シワンといふのにも似寄つた傳説がある。シワンは嘗つて醫者であつたが、密通して居る處を見付られて一所懸命逃げた。が、途中その足が胡瓜の蔓に絡まつた爲め、倒れて引捕へられて殺されたので、それでその魂が胡瓜の蔓を枯らす、一匹の蟲となつたのだと言はれて居る。日本の動物神話及び植物神話には、變形變態（ノタモオフオシス）の古昔の希臘物語に妙に類似して居る傳説が澤山に在る。が、然しそんな民間傳説の最も著名なもので、その起原が比較的近代なのもある。長門に居る、ヘイケガニといふ名の蟹の傳説は、その一例である。一一八五年壇ノ浦（今の瀬戸内海）の大海戰に死滅した平家の武士共の魂がヘイケガニに變つたのだと想はれて居る。ヘイケガニの甲は確かに不思議である。皺が寄

つて物凄い顔に肖たもの、或はむしろ、封建時代の武士が戰の時に着けたもので、眉を顰めた顔附のやうな恰好したあの鐵製の黒い臉甲即ち面(めん)の一つに正(まさ)しく似たものになつて居る

火の犧牲のうちで數に於て之に次ぐものは蛾て、それには甚だ風變りな、そして美しいのが居る。最も著しいのは、どんな家でもそれの入る家へ、間歇熱病を齎らすといふ迷信的信仰があるが爲めに、俗にオコリテフテフ即ち『瘧蝶』と呼ばれて居る巨大な奴である。その身體は一番大きな蜂鳥の身體の重さは充分にあり、またそれと殆んど同じ力を有つて居るから、手に捕へた時、その跳く力に驚かされる。飛んで居る間、一種非常に高いヒユウヒユウいふ音を立てる。自分が檢べた一匹の翅は、擴げて、端から端まで五寸あつた。ても、その重い身體に比べては小さいやうに思はれた。翅は種々濃淡の度を異にした黯んだ褐色と銀鼠との美しい斑點がある。

が然し、飛翔する夜間來客は多くはランプを避ける。あらゆる訪問者のうち一番風變りなのは、タウラウ又の名出雲では、カマカケと呼ぶカマキリで、其奴は嚙む力を具へて居るから、子供は非常に怖ろしがつて居る、冴えた綠色の蟷螂である。餘程大きい。長さ六寸以上の標本を見たことがある。カマカケの眼は夜は光りのある黑であるが、日中は身體の他の部分同樣草色に見える。蟷螂は甚だ怜悧て、そして驚く許り喧嘩好きである。自分

は元氣な一匹の蛙に攻撃された奴が、容易に敵を敗亡さしたのを見た。それは次に池の他の住者の餌となりはしたが、この異常な蟲を征服するには、數匹の蛙の聯合の努力を要した。しかもその時でもそのカマカケを水の中へ引ずり込んで、始めて勝敗が決したのであつた。

他の來訪者は樣々の色をした甲蟲と、『頭に御器をかぶつて居るもの』といふ意味の、ゴキカブリと稱する一種の小さな油蟲(ロオチ)とてある。ゴキカブリは人間の眼を食ふ事を好むと言ひ立てられてゐて、その爲めに眼の病を醫し給ふイチバタサマ——一畑の藥師如來——に憎まれて居る敵てある。ゴキカブリを殺す事は從つて、またこの佛樣の眼には功德な行爲と考へられて居る。いつも喜び迎へられるのは美しい螢(ホタル)て、これは全く音無しに入つて來て、直ぐと家中て一番暗い處を探して、そよ風にゆらぐ一點の火の如くゆるやかに、ちらり〳〵と光る。非常に水が好きだと想はれて居る。だから子供等は螢に向つて次のやうな短い歌をうたふ——

ホタルコイ、ミヅ　ノマセウ、
アッチ　ノ　ミヅ　ハ　ニガイゾ、
コッチ　ノ　ミヅ　ハ　アマイゾ。

普通に庭へ能く出て來るのとは全く異つた、灰色の可愛らしい蜥蜴がまた夜現れ出て、天井に沿うて己が餌を探す。時々非常に大きな百足蟲が同じ事を企てるが、蜥蜴ほど成功はせず、しかも一對の火箸で摑まれて、外(そと)の暗闇の中へ投げられる。極く稀に、馬鹿に大きな蜘蛛が姿を現す。この動物は無害なやうてある。捕へると、自分を見張つては居ないと確かめるまで死んだ風をよそはうて、機會を得ると驚く許り素早く逃げ去る。これは毛の無いので、タランチュラ卽ちフクログモとは餘程異ふ。ミヤマグモ卽ち山蜘蛛と呼ぶのてある。此附近に普通な蜘蛛は他に四種ある。テナガグモ卽ち手長蜘蛛、ヒラタグモ卽ち、『平たい蜘蛛』、デグモ卽ち『地蜘蛛』、それからトタテグモ卽ち『戸たて蜘蛛』である。蜘蛛は大抵惡い物だと考へられて居る。何處でも夜見た蜘蛛は殺さなければならぬと皆んなが言ふ。暗くなつてから姿を見せる蜘蛛は皆んな化け物で、人が眼を覺まして見て居る間は、そんな動物は身を小さくして居るが、誰も彼も寢靜まると眞の化け物の姿を執つて、異常な大いさになるのだといふ。

一三

庭の後の小山の高い杜は鳥類に富んで居る。野ウグヒス、梟、野鳩、餘りに多い鳥、それから夜不思議な音をさせる——深い長いフウフウといふ音を立てる——妙な鳥が一羽棲んで居る。これはアハマキドリ卽ち『栗蒔き鳥』と呼ばれて居る。百姓がその聲を聞いて栗を蒔く時分だと知るからである。餘程小さなそして鳶色な、極めて臆病な、そして、自分の知り得る限りては、全然その習慣に於て夜の鳥である。

が稀に、甚だ稀に、それよりもなほ遙か不思議な叫びが、ホトトギスといふ綴音を苦しんで叫ぶ人間の聲のやうな聲が、夜間此邊の街路で聞かれる。その叫び聲とそれを發する者の名と同一不二である、卽ちホトトギスである。

これは、それに就いて不思議な話のある鳥である。實は生命ある此世の物では無くて、闇の國からの夜のさまよひ者であると人は言ふからである。冥途てはその棲家はあらゆる靈魂が、審判の場に達する爲めに通らねばならぬ、あの日の光りの無い死出の山のうちにあるといふ。毎年一度來る。その來る時節は月の古昔の數へ方て言つて、五月の末である。

て、百姓はその聲を聽いて互に『さあ米を蒔かねばならんぞ、シデノタヲサが來たから』と言ふ。タヲサといふ語は、古昔の支配時代のムラ即ち村の長といふ意味である。が、どうしてホトトギスを死出のタヲサと呼ぶのか自分は知らぬ。靈魂が死の王閻魔の國へのいやな旅路の途中その上で、いつも休息をする死出の山の或る暗い、小村からの靈だと多分思はれて居るのであらう。

その叫び聲はいろ〱に解釋されて居る。或る人はホトトギスは、自分の名を實は繰返すのでは無くて、ホンゾンカケタカ（ホンゾンを懸けたか）と尋ねるのだといふ。他の人は、その解釋を支那人の智慧に置いて、この鳥の言葉は『不如歸』を意味するのだと斷言する。故郷を離れて遠く旅して、他の遠國でホトトギスの聲を聽く者は、誰も懷鄕の病に罹るといふ事、この事は少くとも眞實である。

註。ホンゾンとは此處では佛の誕生日、即ち昔の四月の八日だけに寺院で、一般の人に見せる神聖なカケモノ即ち繪の意である。ホンゾンとはまた佛寺で主たる佛像をも意味する。

その聲はただ夜だけきかれ、それも最も屢〻滿月の夜で、そして眼に見えぬほど空高く翔りながら啼くのだと云ふ。そこで或る詩人は、それに就いてかう歌つて居る——

ヒトコヱハ
ツキガナイタカ
ホトトギス

また今一人の詩人はかう書いて居る——

ホトトギス
ナキツルカタヲ
ナガムレバ
タダアリアケノ
ツキゾノコレル

都會の住人は、ホトトギスの聲を聽かずに一生を送ることがあるかも知れぬ。籠に入れると、この小さな鳥は無言の儘て居て死んでしまふ。あんなに多くの絶妙な詩歌を鼓吹し來たつて居るその奇異な啼聲を聽かうといふので、日暮から夜明まで、露に濡れて詩人は屢〻甲斐無く待つ。が、その聲を聽いたことのある人は、手傷を受けて死ぬる人の叫び聲

に、その聲を譬へて居る程にそれを悲しいものと思つた。

ホトトギス
チニナクコヱハ
アリアケノ
ツキヨリホカニ
キクヒトモナシ

出雲の梟に就いては、自分は自分が敎へて居る、日本人の生徒の一人が物した作文を引用して滿足しよう。――

「梟は暗い處でも物の見える嫌な鳥であります。泣く子供は梟が取りに來るぞと嚇されて怖がります。梟は、ホ!ホ!ソロットコウカ?と啼くからであります。その意味は、「お前!そつと私ははひつて來なければならぬのか」であります。それからまた、ノリツケホセ!ホ!ホ!と啼きます。その意味は「お前は明日洗濯するに使ふ糊をつくるのか」であります。そして女はその啼聲を聽くと、明日は天氣だと知ります。それ

からまた「トトト」と啼きます。それは「その人は死ぬる」といふことであります。それから「コウトコッコ」と啼きます。それは「その男の子は死ぬる」といふことであります。だから皆此鳥を嫌ひます。それから鴉は之を大變嫌ひますから、鴉を取るのに使ひます。百姓は田地に梟を置いて置きます。すると其處の鴉がみんなそれを殺しに來て、しかと罠に捕へられます。この事は私共は他人に對する嫌惡の念に從つてはならぬといふ事を敎へて居ます」

一日中市街の上を舞うて居る鳶は、近處には棲んで居ない。その巢は靑い峰の上にあるのである。が、魚を捕へたり、裏庭から物を盜んだりして、その時間の大部分を費す。これは林や庭に迅速且つ突然の海賊的訪問をする。そしてその――ピイヨロヨロ、ピイヨロヨロといふ――不吉な啼聲が町の上に、夜明から日沒まて、間を置いてきこえる。確かに羽毛の生えた物總ての中て一番不遜な――その盜賊仲間たる鴉よりも、もつと不遜なぐらゐな――奴てある。魚屋の手桶から鯛を、或は子供の手から油揚を盜みに五哩の空からさつと降りて、その竊盜被害者が小石拾ひに屈む間もあらせず、矢の如く雲表に立歸る。だから『鳶に手から油揚を攫はれたやうに吃驚した顏をして居る』といふ譬へがある。その

註。大豆の粉卽ち豆腐から造つたドオナツトのやうなもの。

上、鳶はどんな物を盜むのが當り前だと思つて居るか分つたものではない。例を擧げると、自分の近處の下女が、飯粒て造つて巧妙に染めた、一つなぎの小さな眞紅の珠を髮に着けて、この間川へ行つた。と、一羽の鳶がその頭上に下りて、その珠の紐を引ちぎつて呑んだ。が、前の晩係蹄て捕へて、それから水に浸けて殺した鼠か二十日鼠を鳶に食はせるのは非常に面白い。鼠の死骸を見える處へ出すが早いか、鳶は空から飛び下りてそれを持逃げる。時折鴉が鳶の機先を制することがあるが、その鴉はその獲物を自分のものにして置くには、實際非常に迅く林に達し得なければならぬ。子供達は斯んな歌をうたふ

トビ、トビ、マウテミセ、
アシタ ノ バン ニ
カラス ニ カクシテ
ネズミヤロ。

舞ふと云ふのは、空を飛んで居る時の鳶の翼の、あの美しい運動を云つて居るのである。

兩手を伸ばして、その絹の着物の長い廣い袖を振り動かす、マヒコ卽ち舞妓のあの優美な身振に暗示して、その運動を詩的に喩へて居るのである。

自分の家の背後の森には、鴉の數多き小屯營地があるのであるが、鴉軍の大本營は、自分の前側の部屋から見える古昔の城地の松林である。毎夕同じ時刻にみんな飛び歸るのを見るのは、興味ある眺めで、民衆の想像心はこれに對しての面白い比較を、慌て急いで火事へ走つて行く人達に見出して居る。この比較が、その巢へと歸り行く鴉に向つて、子供等が歌ふ歌の意味を說明する、——

アトノカラス　サキヘイネ、
ワレガイヘガ　ヤケルケン、
ハヨインデ　ミヅカケ、
ミヅガナキヤ　ヤラウゾ、
アマツタラ　コニヤレ、
コガナキヤ　モドセ。

孔子の敎は鴉に德を見出して居るやうに思はれる。『カラスニハムボノカウアリ』とい

ふ日本の諺がある。鶉はハムポの孝を行ふといふ意味て、もつと文字通りに譯すると『鶉にハムポの孝在り』になる。ハムポとは文字通りに言へば『養を返へす』てある。子鶉は自分が丈夫になると、親を養うて親の世話に酬ゆると云ふ。親孝行の今一つの例を鳩が提供して居る。『ハトニサンシノレイアリ』――鳩はその親の三枝下に止まる。もつと文字通りに譯すれば、『行ふ三枝の禮がある』てある。

野鳩（ヤマバト）の啼聲は、これは自分は殆んど毎日森て鳴くのを聴くが、これまて自分の耳に達した音のうちて、一番美はしい物哀れなものてある。出雲の百姓は此鳥はかうかういふ言葉を述べるのだと言ふが、如何さま百姓が主張する處の綴音を覺えた後て、これを聴くとさうのやうに思へる。――

テテ　ポツポオ、
カカ　ポツポオ、
テテ　ポツポオ、

カカ
ポッポオ、
テテ………(突然に止む)

『テテ』は『父』の、『カカ』は『母』の赤ん坊言葉である。そしてポッポオは幼兒の言葉では『胸』[註]を意味する。

註。パパア及びママアといふ語は、日本の赤ん坊言葉にある。が、その意味は我々の或は想像するものとは全く異ふ。ママア即ち通例の敬語を添へてのオママムマは『炊いた米』の意味である。パパアは『煙草』の意味である。

野ウグヒスがまた屢〻その歌を以てして、我が夏を快よくし、そして多分籠に飼つて居る自分の愛鳥の歌に惹付けられてであらう、時々家の甚だ近くまで來る。ウグヒスはこの國では極めて普通である。この町附近の何處の林にも神聖な杜にも棲んで居る。暖い季節に自分が出雲を旅行した折、何處か蔭深い處でその鳴く音をきかぬことは無かつた。此處でもウグヒス、其處でもウグヒスである。一二圓で買へる鶯もあるが、能く馴らした、籠て育てた歌ひ手は時に百圓を下らざる價を呼ぶことがある。

この華車な動物に就いて、妙な或る信仰を始めて聞いたのは、小さな村寺でのことてあつた。日本では、屍體を埋葬に運ぶ棺は西洋の棺とは全然異ふ。驚く許り小さな四角な箱て、その中へ死者は坐つた姿勢に置かれる。大人の屍體がどうしてあんな小さな場所に收められるのか、外國人には充分に一個の謎であらう。所謂死後强直(リゴャモルチス)の場合遺骸を棺に收める仕事は、專門のダウシンバウズにさへ困難である。が、敬虔な日蓮宗信者は死後、その遺骸は全く撓め易いまゝて居ると主張する。そしてウグヒスの死體は、同樣に決して硬くならぬ、それはこの小鳥は自分等と同じ信仰を抱いて居て、妙法蓮華經を讃美する歌をうたつて、その一生を送るからだと彼等は斷言する。

一四

自分は既に自分の住所を少し好き過ぎて來た。毎日、學校の自分の勤務から歸つて來て、自分の教師の制服をそれよりか無限に氣持の宜い、日本着物に改めてから、庭を見渡す日蔭の緣に蹲るといふ單純な快樂に、授業五時間の疲勞を償うて餘りあるものを見る。その崩れた瓦の屋根の下に厚く、苔蒸して居るあの古風な庭壁は、市街生活のつぶやきすら締

出して入れぬげに思はれる。鳥の聲、セミの叫び、或はのろい長い間を置いて、水へ飛込む蛙の物淋しいジヤブンといふ音の他には、音は何一つきこえぬ。否、その聲は町の街路以上のものから自分を隱遁さす。壁の外では、電信と新聞紙と蒸氣船との、變化した日本が唸つて居る。內には、悠々たる自然の平和と十六世紀の夢とが住んで居る。空氣そのものにすら古色の妙趣があり、身のまはり總てに眼には見えぬ優しい、或る物が居るといふ仄かな感じがする。その或る物といふは、古い繪本に見る貴婦人のやうな顏をしてゐて、この庭全部が新しかつた時、この家に住まつて居た、今は世に無い、貴婦人どもの靜かな出入では或はなからうか。石の灰色な妙な姿に觸れたり、長く愛好された樹木の枝葉の中を渡つたりする、夏の日の光りにすら靈の優し味がある。此等は過去の庭である。未來は此等の庭をば、ただ夢として、どんな天才もその妙趣を再現することの出來ぬ、忘れられたる藝術の所産として、知るに過ぎぬであらう。

此處ではどんな動物も、人間の借家人を恐れないやうに思はれる。蓮の葉に止まつて居る小さな蛙は、自分が手を觸つても殆んど尻込みせぬ。蜥蜴は手易く自分の手が届く處で日に當たる。水蛇は恐れ無しに自分の影を辷りよぎる。セミの樂隊はつい自分の頭の上の梅の枝で、その耳を聾する合奏を始める。そして蟷螂は厚かましくも自分の膝の上で姿を

構へる。燕や雀は自分ところの屋根に巣を造るばかりでは無い——或る一羽の燕は實際に浴場の天井に巣を造つたほどで——心配無しに家の中へ入りさへするし、鵄は自分の直ぐの眼の前で何の氣兼ね無しに魚を盜む。野鶯が一羽窓の横の杉の木に止まつて、美はしの囀聲を突發して自分の籠の愛鳥を歌の競爭に挑む。そして常に金色の空氣を通して、小松の綠の薄暗がりから、ヤマバトのあの物哀れな愛撫するやうな、美妙な呼び聲が自分の耳へ流れて來る、——

テテ
ポツポオ、
カカ
ポツポオ、
テテ
ポツポオ、
カカ
ポツポオ、
テテ……………

どんな歐羅巴の鳩もこんな啼聲はせぬ。ヤマバトの聲を始めて聽いて、その情に或る新しい感じを感じ得ない人間は、この幸福な世界に住む價値は殆んど無いのである。

が然し、此等は總て――この古いカチウヤシキもその庭も――必ずや數年を經ずして、永久に消えてしまふであらう。早既に、幾多の、自分のよりももつと廣い、もつと美しい、庭が稻田や竹藪に變つて居る。そしてその古雅な出雲の町も――計畫されて久しい鐵道線路にやがては觸られて――或はこの十年のうちにすら――膨脹し、變化し、平凡となり、此處の地面を工場に製造場に要求するであらう。啻に此處ばかりからでは無い、總ての土地からして古昔の平和と、古昔の妙味とは失せ去るべき運命の下に在るやうに思はれる。無常は、殊に日本に於ては、事物の自然である。そして變化と變化を行ふ者とはまた變化して、末終にそれを容れる餘地無きに至るであらう、――だから悼むのは無駄である。此處の美を造つた今は無き藝術は、また、我等の非常な慰安となる所の聖句を信じて居る、あの信仰の藝術であつたのである。その聖句は云ふ、

草木國土　皆入涅槃

と。

第十七章　家の內の宮

一

日本には死者の宗教が二種類ある——神道に屬するものと、佛教に屬するものと。前者は原始的な信仰で、普通には祖先崇拜と呼んで居る。が、祖先崇拜といふ言葉は、日本人種の祖先だと信ぜられて居る、古昔の神々に崇敬を拂ふばかりで無く、同じくまた神と祀られた君主英雄諸侯、及び著名な人士の大勢にも崇敬を拂ふこの宗教に對して餘りに局限された言葉のやうに自分には思はれる。例を擧ぐれば、比較的近代のうちに出雲の大きな大名が神に祀られた。そして島根の百姓共は、今なほ松平の神社の前に祈を捧げる。その上神道には、希臘や羅馬の信仰の如くに、四大の神があり、あらゆる種々な人事を主宰する特殊の神がある。だから祖先崇拜は、猶、神道の著しい特徴ではあるけれども、それだけでこの國家的宗教は成つて居るのでは無い。またこの言葉は死者に就いての神道の信仰

を――出雲では、日本の他の部分よりか、もつと多くその原始的性質を保留して居る信仰を――十分に述べ現しもしないのである。

て、自分は決して漢學者では無いけれども、國民生活に佛教よりももつと深い根柢を爲して居る程であるのに、西洋では遙かにより少く知られて居る、その日本の國家的宗教に就いて――出雲のその古昔の信仰に就いて――此處で敢て少しく語つてもよからう。チェンバレン並びに、サトウ如き博學な人の手になつた特殊の著書――西洋の讀者は、自分が專門家ならぬ限り、日本の外に在つてそれに親しめさうには思はれぬ著書――の中には述べてあるけれども、神道とは何ぞやの極く乏しい概念すら與へて居る、神道に就いて英語で書いてあるものは、殆んど全く無いのである。神道の古昔の傳説幷びに儀式に就いて、上に述べたこの兩言語學者の著書から、世にも稀な興味あることを多く知ることが出來る。が然し、サトウ氏が自ら認めて居らるゝやうに、『神道の本性は何か』といふ問に對しての明確な答はやはり與へにくい。神道には六種在ると知られて居て、其うちの或る物は外國の學者がまだ誰一人も、時間が乏しい爲め、或は典據が少い爲め、或は機會が無い爲め、檢べ得ずに居るのであるが、その六種の神道に共通な要素をどう說明するのか。その近代

的な表面的な種類に於てすらも、ただ單にその進化發展の夥多の筋道を跡附け、且つその種々樣々な要素、卽ち原始の多神敎と物體禮拜、起原の疑はしい傳說、支那、朝鮮及び他の地方から來た――佛敎と道敎と儒敎とが一緒に混合して居る――哲學的思想の根元を決定するだけにも、歷史家、言語學者及び人類學者の聯合力を要する程に、神道は頗る複雜である。所謂『純なる神道の復活』――外來的特徵を剝奪し、特にその起原の佛敎的な表示徵候悉くを剝奪して、この信仰をその古代の單純さに還さうといふ、政府の援助を受けた、努力――は、その公言した目的だけを思ひ見れば、無限の價値ある藝術を破壞して、しかも起原の謎は依然として、元の如く複雜なるが儘に在るといふ結果を見るに過ぎなかつた。神道は十五世紀間の變化の道途に餘りに深く變化されてしまつて、斯く一片の法令で形成し直すことが出來なくなつて居る。同樣な理由で、單に歷史的幷びに言語的解剖によりて、國民倫理へのその關係を說明せんとする、學者的努力は失敗に終るに相違無い。それが出來る位なら、生命がそれを活動させる身體の要素によつて、生の究極の祕密を說明することが出來よう。が、然しさういふ努力の結果が、日本人の思想と感情の――或る一つの特別階級ので無くて、汎く此國民全體の思想と情操の――深い知識と緊密に結合せられたてあらうならば、その時初めて過去、幷びに現在の神道が充分に理解されるかも知

れぬ。そして、自分は思ふに、これは歐洲と日本との學者の共同の勞力に依つて、成遂げられることであらう。

が然し、其信仰の單純な詩美に於て、子供の家庭訓練に於て、祖先の位牌の前での孝行の崇拜に於て、神道は何を意味して居るかといふことは、此國民の中に數年住居して居る間に、其國民同樣の生活をして、其風俗習慣を採用して居る者に依つて、幾らか知られるかも知れぬ。そんな經驗があれば、少くとも自己の神道觀を述べる權利は要求出來よう。

二

佛敎との國家關係を斷つて神道を鞏固ならしめようとした、明治時代の先見の明ある爲政者等は、自分等の國家政策と全然一致して居る、或る一信仰に新しい力を與へつゝあるのみでは無い、同じくまた、藝術の力の如く全能なものであるのに、日本の知的土壤には決して深い根柢を得なかつた外來の信條よりも、遙かに深奧な生活力を具有して居る、或る一信仰に新しい力を與へつゝあるのである、といふことを疑も無く知つて居たのである。佛敎は千三百年の古昔に、支那から移植されたのであつた、けれども、既に衰頽して居つ

た。然るに神道は、確にそれよりも數千年古いけれども、時代々々のあらゆる變化を通じて、力を失つたと云ふより、寧ろ力を得たやうに思はれる。神道は、この人種の精神同様折衷的で、その物質的表明を助け、或はその倫理を强め得るあらゆる種類の外國思想を我が物にして同化したのであつた。佛教は、恰もそれが以前に婆羅門教の古昔の神々を吸收したやうに、神道の神々を吸收しようと圖つたのであつた。が、神道は、降參するやうに見えて居て、實はその敵手からして力を藉りただけであつた。かくして神道のこの不思議な生活力は、記錄に上つて居ない濫觴よりして、それが發展し來たつた長年月のうちに、極はめて古い時代に情の宗教となつたもので、表面には見えぬが今なほ依然として情の宗教であるといふ事實に基くのである。その儀式と傳統との起原は何んであらうと、その倫理的精神は、この人種のあらゆる最も深い、最も善い情緒と同じものとなつて居る。だからして、殊に出雲では、佛教的神道を創造しようといふ企は、ただ神道的佛教の形成に終つたのであつた。

それから今日の神道の神祕な生活力——改宗させようとする宣教師の努力を斥けるあの力——は傳統、若しくは崇拜若しくは儀式よりも遙かに深い、或る物を意味して居るのである。神道は、眞の偉力は失はずに、傳統崇拜儀式總てが亡びても、矢張り生き殘るかも

知れぬ。教育に因つての一般民心の展開と、近代科學の影響とは確に古代の神道思想の多くを變更し、或は放棄するを餘儀なくするには相違無い。が、神道の倫理は乾度永續することであらう。それは神道はより高尙な意義に於ての性格を——勇氣、禮儀、名譽心、それから特に忠義を——意味するからである。神道の精神は孝の精神であり、義務の嗜好であり、何が故にとは一考もせずして、或る主義への早速の生命投與である。それは兒童の柔順性であり、日本婦人の温和である。それはまた保守主義であり、外國の現在を餘りに多く同化しようといふ輕率な熱誠のあまり、過去全部の價値を棄て去らうとする、國民的傾向への健全な制止である。それは宗教である——が然し、遺傳的道德衝動に變形された宗教であり、——倫理的本能に變質された宗教である。それはこの人種の情緒生活全部であり——日本の魂である。

子供は生れながらに神道である。家庭の敎と學校の仕附はただ生得な物に表現を與へるに過ぎぬ。新しい種を植ゑるのでは無い。祖先傳來の一特性として傳へられた、倫理觀念をただ覺醒さすだけである。恰も日本の幼兒が西洋人の指ては、決して習ひ得られないやうなあんな筆をもち扱ふ才能を繼承するが如くに、我々のとは全然異つた倫理的同感を繼承するのである。一と級の日本學生に——十四歲乃至十六歲の若い學生に——その最も大

事とする願望を言うて見よと尋ねて見よ。その學生が若しその質問者に信頼心を有つて居るなら、恐らくその十の九は『天皇陛下の爲めに死ぬること』と答へるであらう。そしてその願望は、これまで世に生れた殉教の如何な願望もがさうのやうに、純な情から浮出るのである。この忠義の念が、新しい不可知論により又學生社會に於ける、他の十九世紀思想の迅速な發達に依つて、東京のやうな大中心地ではどの位弱められたか、或は弱められなかつたか、それは自分は知らぬ。が、田舎では兒童にとつて依然として叢莽と同じく自然なものである。またそれは――より成熟した知識と固定した信念との結果たる、あの我我の忠義感念とは異つて――理由無してである。日本の青年は決して自己に何故にとは尋ねない。自己の犠牲の美はしさだけで、十分に滿足な動機である。そんな夢中な忠義心が、その國民生活の一部を成して居る。それは――その小さな共和國の爲めに死ぬる蟻の衝動の如く遺傳的に――その女王への蜂の忠義心の如く無意識に――その血液の中にあるのである。これが神道である。

　忠義の爲めに、長者の爲めに、名譽の爲めに、自己の生命を捧げるあの迅速さは、これは近代に在つて、この人種を他の人種と區別する特性となつて居るのであるが、これはまたその人種が獨立して存在するに至つた、最初の時代からしての國民的特徴であつたやう

に思はれるのである。封建制度確立の時代、即ち名譽の自殺が、啻に武士に取つて計りて無く、女子供に取つても、儼乎たる一儀禮となつた時よりもずつと前に、君主の爲めに己が生命を棄てるといふことは、その犧牲が何の役に立たぬ時すら、神聖な義務と考へられて居たのである。種々な實例を古代の古事記から引用し得られるのであるが、そのうち次記の如きは中々感銘的なものである。

目弱王が、齡僅に七歲の時、その父を殺した者を殺して、都夫良大臣が家へ逃げ入り給うた。『その時大長谷王軍を興して、その家を圍みたまひき。射出る矢、葦の來り散るが如くなりき。是に圓大臣、自ら參出て、佩ける兵を解きて、八度拜みて白しけるは、「先日に問賜へる女子、訶良比賣は侍らはむ。また五處の屯宅を副へて獻らむ。賤奴意富美は、力を竭して戰ふとも、更にえ勝ちまつらじ。然れども、己を恃みて賤家に入坐せる王子は、死ぬとも棄てまつらじ」此く白して、亦其の兵を取りて、還入りて戰ひき。爾力窮き、矢も盡きぬれば、其の王子に白しけらく、「僕は手悉傷ひぬ、矢も盡きぬ。今は得戰はじ。如何にせむ」と白しければ、其の王子、「然らば更に爲むすべなし。今は吾を殺せよ」と答詔たまひき。故刀以て其の王子を刺殺せまつりて、乃ち己が頸を切りて死せき』

これと同様に鞏固な例證を、より新しい日本歴史から、今現に生きて居る人の記憶のうちにすら起こつた幾多の例證も含めて、幾千と容易に引用が出來る。また死ぬるといふ事が神聖な義務となり得るのは、人の爲めばかりでは無かつた。或る不慮の場合に、全く個人的な信念の爲めに死ぬる事を、前者に殆んど劣らぬ義務と良心は思つた。だから自分でそれを無上に重要と信じて居る或る意見を抱いて居る者は、他の手段の無い折は、自己の信ずる所に注意を呼び、且つその信念の誠實なるを證明せんが爲めに、その意見を訣別の手紙に認めて、そして自ら己が生命を斷つを常とした。現にそんな實例がつい昨年東京で見られた。國民兵の青年中尉の大原武義といふが、北太平洋に於ける露西亞の力の増大が

註。この文は千八百九十二年の始に書いたものである。

日本の獨立に及ぼす危險を一般に認知せしめては措かぬ、その希望をその行爲の理由として書き記した手紙を殘して、西徳寺の墓地でハラキリして自殺した。が、同年の五月にあつた、それよりも遙かに人の心を動かす犧牲は――最も純粹な最も潔白な忠君の念からの犧牲は――畠山勇子といふ年若い娘のそれであつた。露國皇太子を暗殺しようといふあの企のあつた後、東京から京都へ來て、日本に不面目を與へまた國民の父を――神聖なる天皇陛下を――悲しませ申した彼の出來事に對して、代つて罪を贖はうといふだけのことで、

京都府廳の門前で自殺したのである。

三

近代の神道は、その外的形式に就いては、之を解剖するのは寔に困難である。が、そのまはりに如何にも厚く織り合はされて居る、幾多の外來信仰の込み入つた地合の全體を透して、その最も初期の性質を指示するものを今なほ容易に識別することが出來る。その原始的儀式の或る物に、その古代の祈禱に文言にまた表象に、その神社の來歴に、またその最も貧しい崇拜者の衒氣の無い思想の多くの中にも、神道はあらゆる崇拜の形式のうちの最も古いものとして――ハアバアト・スペンサアが『あらゆる宗教の根本』と呼んで居るものとして――死者への敬虔の念として――明らかに示顯されて居るのである。それどころか、神道の大學者、大神學者に幾度も左うと解釋され來たつて居る。神道の神々は亡靈である。死んだ者は悉く神となるのである。靈之眞柱で、かの大註釋者平田は[註一]『死せる者

註一。日本亞細亞協會の會報に發表されたサトウ氏の立派な論文『純なる神道の復活』より引用。『神』といふ語は必ずしも仁慈なカミを意味しはせぬ。神道には惡魔は無いが、善い神があると共に『惡い神』

があるる。

其の靈魂は、我等がまはり到る處に存在する不可見世界に猶も住りて、その悉く性質を異にし、感化の度を異にする神となる。祀られた社に鎭まり居るもあれば、その墓の近くにさまよふもある。そしていづれも、生ける折と同じく、君親妻子に幸ふことを喜ぶ』そして死者の靈魂はこれ以上のことをする。人間の生命と行爲とを支配するからである。人間の行爲は悉く『神の御所爲である』[註二]と平田は言つて居る。また純な神道の教義の解釋者

註二。サトウ氏「純なる神道の復活」

として平田に劣らず有名な本居は、『[註三]人の要する道德觀念は總て皆な神が、その人の胸へ

註三。サトウ氏「純なる神道の復活」

植附るので、飢ゑた時に物を食ひ、渇した時に物を飲まざるを得ざらしめる、彼の本能とその性質は同じである』と書いて居る。この直覺の教義には十誡の要は無い、固定した倫理法の要は無い。人間の良心が唯一の必要な指導者であると宣べて居る。人間の一々の行爲は『神の御所爲』ではあるけれども、然し人間は悉くその心の中に、正しい衝動と正し

からぬ衝動とを識別し、善神の感化力と、惡神の感化力とを識別する力を具へて居る。如何なる道德の指導者も、人自らの情が爲すほどの確實な指導を爲すことは出來ぬ。本居は『受行ふべき道（ミチ）なきことはおのづから知りてむ。其を知るぞ卽ち神の道をうけおこなふにはありける』と言つて居る。また平田は『眞の德を行はんと欲するならば、眼見えざる世界を恭ひ恐れるが宜い。そすれば惡を行ふことが出來ぬやうにならう。眼見えざる世界を支配し給ふ神々に誓を立てて、自分の心に植附られて居る良心（マゴコロ）を養へ。さすれば決して道にさ迷ふことは無からう』と書いて居る。此心靈的自己修養はどうしたら一番能く得られるか、それを該の偉大な註解者は、殆んど前と同じ簡潔さを以て述べて居る。『祖先の靈に敬虔なることがあらゆる德の源泉である。祖先に對してその義務を果たす者は何人も神に對し、或は己が兩親に對して不敬なるを得ぬ。かゝる人は君主に對しては忠義であり、友人に對しては信實であり、そして妻子に對しては親

註。サトウ氏『純なる神道の復活』より引用。本居の言葉の全體の力强さは、讀者が『シンタウ』といふ語は日本ではその起原比較的に新しいもので、この古來の信仰を佛道と區別せん爲め、漢字を假り用ひたのである事、又、この原始的信仰の昔の名はカミノミチ卽ち『神の道』である事を知らなければ充分の了解が出來ぬであらう。

切溫順であらう』と。

この古代の信仰と十九世紀の思想とは、相去ることどの位であるか。我々がその信仰を笑ひ得るほどに遠いものでは確に無い。原始人の信仰と最も博學な心理學者の知識とが、同じ究極の眞理の門邊で相會して、珍らしくも一致して居ることを見ることもあらう、また一兒童の思想が一スペンサア、或は一ショオペンハウエルの結論を繰返して居ることもあらう。我々の祖先は眞實我々のカミでは無いか。我々の一々の行爲は、實際我々の内に住まつて居る死者の所爲では無いか。我々の衝動や傾向は、我々の能力や弱點は、我々の勇敢や怯懦は、我々がそれよりして生命といふ不可思議極はまる、遺産を受取つた所の彼の今は世に無き無數の人間が創造したものでは無いか。我々は、それが我々の銘々になつて居る所の、そしてそれを、『自分が』とか、『彼等が』とか、『自我』と呼んで居る所の、あの無限に複雜な或る物に就いて、今なほ考へはせぬか。我々の自負或は恥辱は彼等が今迄に造り來たつて居る物の裡に存する、眼見るを得べからざるものの自負、或は恥辱のほか何であるか。そして我々の良心といふも、善惡種々樣々の無數の死滅した經驗の遺傳繼承の總額のほか何であるか。我々は人間の神性を公言する所の、今日の彼の鞏固な精神の確信を尊敬すると同時に、死者は總て神と成るといふ神道思想を輕々に排斥は出來な

いのである。

四

神道の祖先崇拜は、あらゆる祖先崇拜の如くに、ハアバアト・スペンサアがあんなに充分にその源へ跡附けた、宗教進化のあの一般法則に從つて、疑ふまでも無く埋葬の儀式から發展したものである。そして神道の公の崇拜の初期の形式は——フステル・ド・クウランジュ氏が、その驚嘆すべき『古代の町』といふ書物で、希臘人及び羅馬人間の宗教的公共制度は墳邊の宗教から、發達したものであることを示したやうな風に——それより尚一層古い家庭の崇拜から、發達したものと信ずべき理由がある。實際、目今一管區の神道の宮を意味し、その上またその宮の神をも意味するに用ひられて居る、ウヂガミといふ語は、『家庭の神』といふ意味であつて、その現在の形は『家の內の神』或は『家の神』といふ意味のウチノカミの轉訛、又は省略である。尤も神道の解釋家共は、この語をさうで無いやうに說明せんと試み、平田の如きは、アアネスト・サトウ氏が引用したやうに、この名目は共通の祖先卽ち祖先達に、或は同樣の尊敬に値ひするほどそれ程、或る一地方民衆

の感謝を受け得べき者にだけ適用すべきであると明言した。それは篤平田の時代に於ける、またそのずつと以前に於ける、この語の正當な使用法は疑ふまでも無くさうであつたのである。が、この語の語原は確に、その起原を家庭の崇拜に有つて居ることを示し、また宗教制度の進化に關する、近代の科學的信念を確めて居るやうに思はれる

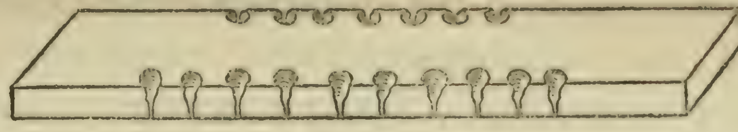
さて、希臘人幷びに羅馬人のうちにあつて、家庭の祭祀が公な宗教の、あらゆる發展膨脹の間(あひだ)も、なほ常に續いて存在して居たと丁度同じに、神道の家庭での崇拜は、數限り無いウヂガミでの地方的崇拜と、種々な國又は郡にある有名なオホヤシロでの民衆的崇拜と、そしてまた伊勢幷びに杵築の大社での國民的崇拜と、併立して現在まで繼續し來たつて居る。家庭での祭祀に關聯した物體のうち、確に外國又は近代の起原に屬するものが多くある。だが、その單純な儀式や、その無意識な詩歌はその太古の妙趣を保持して居る。だから、日本人生活の研究者には、神道の就中最も興味ある方面は、古代西歐人の家庭での禮拜同樣、二重形式で存在して居る、この家内禮拜が提供して吳れるのである。

五

殆んど總ての出雲の住宅にカミダナ卽ち『神々の棚』[註]がある。この上へ普通は神々の名

註、カミ卽ち『上(かみ)に在す方々』卽ち『神々』とタナ卽ち『棚』の意。後の方の初文字タは、トックリ卽ち『德利』のトが複合名詞オ・ミキドックリでは、ドックリになるやう、複合名詞ではドに變る。

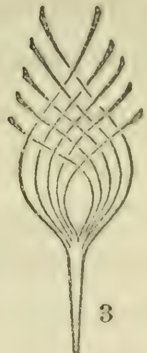
の書いてある牌(その牌の少くも一枚は近くの神社が供給したもの)と、その崇拜者を守護してやるとの、或る神の名に依つて爲された約束の書いてあるのが一番多い、オフダ卽ち神聖な文句若しくは護符とが入つて居る、小さな神道の社(ミヤ)が載せてある、宮が無ければ、その牌或はオフダが或る順序に、最も神聖なものを中位に置いて、ただ置いてある。カミダナに像のあることは極く稀である。それは原始神道は猶太、或は回々敎の律法の如く像をば堅く排斥したからである。そして神道の神體繪圖は比較的近代の――殊に兩部神道時代の――もので、その起原は佛敎に在ると考へなければならぬ。何か像があるとすれば、それは多分杵築でつい近年造られたやうなものであらう。卽ち杵築の大社に關して前に掲げた一篇の文に述べた、大國主神と事代主神との、あの小さな對の像てあらう。



1



4



3



2

1. 杵築大社の火鑽。

2. オミキドツクリ、即ち神に捧ぐる酒を容れる器。

3. クチサシ即ちオミキドツクリの口止め。（他の表象的なる形式あれども、このもの恐らくは最も普通なると共に最も古きものならん）

4. サムバウ、即ち神道の神への御供物を載せる臺。三寶はまた家庭にての禮拜に用ひ、また或る種の家庭儀式にも用ふ。

神道の古事記に見えて居る事件を現した掛物は、これまたその起原は近時のもので、この方は神像よりかもつと普通である。通例カミダナが置いてあるその部屋のトコ即ち床の間を占めて居る。が、より開けた階級の人達の家にはそれは無い。大抵はカミダナの上にはオフダが幾つか入つて居る、質素なミヤのほか何も無い。鏡[*]若しくはゴヘイ——神棚の直

註。鏡は、女神の徽號として、種々な神社の祕密な一番内部の宮の中に置いてある。然し神社で一般公衆の眼の前に普通置いてある、金屬の鏡は實は神道起原のものでは無くて、眞言宗の佛の徽號として日本へ輸入されたものである。鏡が神道では女神の徽號であるが如くに、劍が男神の徽號である。が然し、男神或は女神の眞の徽號はどんな場合と雖も、人目に曝すことは無い。

ぐ上に吊るしてあるか、或は時にその中へミヤを置いて置く箱のやうな、枠組に吊下げてあるかする小さなシメナハに着いて居る、ゴヘイは除いて——のあることは極、極く稀にしか無いことである。シメナハと紙のゴヘイとが神道の眞の表象で、オフダもマモリも全く近代のものである。家の内の宮の前ばかりでは無い、出雲では殆んど總ての家の門口の上にも、シメナハが吊してある。普通は稻藁の細い綱である。が、高位の神官、例へば杵築の大社の宮司の如き人、の屋敷の前のは、その大きさ重さ驚くべきものがある。出雲を旅する者が必ずその記憶に殘す、第一の不思議な事實の一つは、この徽號的な藁繩が遍く

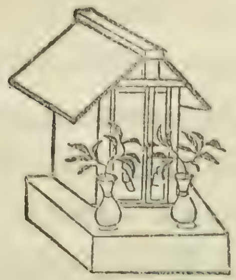
存在して居ることて、時には田のまはりにすら見ることがある。然しこの神聖な儀式が壯大に飾附けられるのは、新年と、神武天皇が日本の帝位に即き給うた日と、そして天皇の誕生日との大祭の時てある。この時は幾哩にわたる街路が、悉く船のケエブルほども太いシメナハて花綵飾をされる。

六

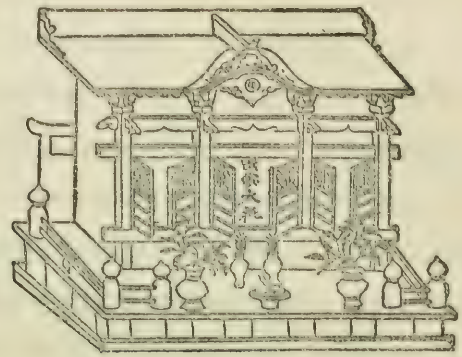
松江の特色はミヤ店てある、――尤も、この古い出雲の町に特有な店といふては無いが、他の州のより大なる町に見らるゝものよりも、遙かに興味深い店てある。一錢以下て買へる子供の玩具のミヤからして、何處か金持の家へ納まるべき十圓或はそれ以上の大きな宮に至るまて、幾百といふ大きい小さい種々な宮がある。かういふ、家の内の宮のほかに、時折、貴重な木材て出來てゐて、漆て塗り金て鍍金した、その價三百圓から千五百圓に至る嵩張つた宮を見ることが出來る　これは家の内の宮ては無い。それは祭禮の宮で、ただ富裕な商人の爲めに造るのてある。それは神の祭日に出して見せるもので、一年に二回行列をつくつてチヨウサヤ[註]！チヨウサヤ！の叫びに合せて、町をかつぎ廻る。各神社の管區



1. スズ、神道の巫女がその神聖な舞に用ふるもの。



2. ミヤ、一番廉い種類の家の内の宮。



3. ミヤ、富裕な家族の有つ家の内の宮。

註。古昔は斯うした行列で宮をかつぎ廻つた、神道の二大祭禮はトシトクジンノマツリ、即ち新年の神の祭禮と、神武天皇即位記念の祭日であつた。後者は今なほ守られて居る。天皇の誕生の祝賀だミヤだかつぐ、他の唯一の場合である。この兩日には神道の徽章たる、裝飾のある稻藁の繩のシメナハと提燈とで街路は美々しく飾られる。その日に囃す言葉（チヨウサヤ！チヨウサヤ！）が何を意味するか、確實に知つて居る者は今居ない。一説には、トシトクジンノマツリと殆んど同時節に昔祝つた——この祭禮は二つとも今は廢れて居るが——サムラヒ共の軍の大祭の名のサギチヤウの轉訛であると。

にはそんな場合に、歌をうたひ太鼓を打いて、飾り立てて見せあるく大きな擔がれる宮がある。家の内の宮は大多數は廉價な構造のものである。頗る立派なのが二圓ばかりで求められる。が、普通の人の家の中に見らるゝ小さな宮は、大抵は五十錢よりも餘程下のものである。そして精巧な或は高價な家の内の宮は、純な神道の精神に反して居る。眞の宮は純無垢の白いヒノキ[註]で造り、釘を用ひずに合せなければならぬのである。自分が宮店で見

註。學名スヤ・オブトユサ。

た物は多くはその幾多の部分が、ただ米の糊で合はされて居た。が、製作者が熟練して居るからそれで充分であつた。純な神道は宮は鍍金も裝飾も無いものでなければならぬと要

求して居る。金持の家に在る小形の美麗な宮は、その美術的建造と裝飾とに依つて、正當に歎賞の念を起こす。が然し、勞働者やクルマヤの家に在る、無地の白木の、十錢か十三錢の宮の方が眞にこの原始的宗敎の特徴たる、あの質素の精神を現して居るのである。

七

宮と神道崇拜の他の神聖な品物とを、その上へ載せるカミダナ卽ち『神棚』は普通床の上六七尺の高さに固定されて居る。一般に言つて手が易々と屆く處より高く置いてはならぬ。が、天井の高い家では宮は時折、箱又は棗つてその上へ立つ他の品物の助を藉らんでは、神聖なお供へ物が出來ぬほどの高さに置いてある。通常それは家の構造の一部では無くして、部屋の何處かの隅で壁そのものへか、或は、此方がもつと通例であるが、部屋と部屋を仕切る半透明の紙の隔障（フスマ）が、それあるが爲め、右に左に辷るカモヰ卽ち溝の彫つてある水平な梁へか、棚承を用ひて附けてある飾の無い棚である。たまに色を附けたり漆を塗つたりして居る。然し尋常の神棚は白木で、宮の大いさ或はそれへ置くオフダ及び他の神聖な品物の數に應じて、大きくも小さくも造られる。或る家では、特に目立

つて宿屋や、小商人の家では、いろ〳〵異つた神樣、殊に財寶と商賣繁昌を司ると信ぜられて居る、神々へと捧げられて居る小さな宮を澤山支へるに足る程長く造つてある。そして松江の商人は通例、それを貧民の家では殆んどいつも街路に面した部屋に置いてある。そして松江の商人は通例、それをその店に造る、――だから通行人やお客は、その家の住人はどんな神樣を信じて居るか一目で解る。それに就いては多くの規則がある。南か東に面して置くのは宜い。が、西に面してはならぬ。そしてどんな事情の下にも、北又は西北に面せしめてはならぬ。これについての一つの說明は、神道に於ける支那哲學の影響で、それに據ると、南又は東と陽性との間に、そして西又は北と陰性との間に、或る關係があるとされてゐるのである。が、此問題に關しての通俗の考は、死人は頭を北向きにして埋めるから北に向ふやうにして――死に關係した一切の事は不淨だから――宮を置くのは甚だ惡るいといふので、西の方角についての規則は固くは守られて居らぬ。が然し、出雲での神棚は多く南向きか、東向きである。極々貧しい者の――時にはただの一間しか無い――家では、部屋の選り好みは殆んど出來ぬ。が、神棚は客間(ザシキ)にも臺所にも置いてはならぬといふが規則で、中産階級の住宅では之を守つて居る。そして士族屋敷では、其置き場は通例家族が住んで居る部屋のうちの、より小さな部屋の一つである。神棚に對しては敬意を表しなければならぬ。

例へば、その方へ足を向けて寢てはならぬ、休みさへしてもならぬ。宗教上不潔の狀態に――屍體に觸つたが爲めに、或は佛式の葬禮に列したが爲めに、或は佛式で埋められた近親に對する服喪の時期中にすら、受けるやうな不潔の狀態に――在る間は、神棚の前で祈禱をしてはならず、その前に立つことさへしてはならぬ。一家のうちの誰かがそんな埋葬をされると、五十日間[註]は神棚は見えぬやうに、純白な紙で蔽はなければならず、また神道

註。或る種のサムラヒ家族で、そんな事情での服喪期間は少くも五十日である。二十五日で充分だといふ人もある。佛教の服喪法は極めて不同で、且つ複雜で、詳しく述べるには多くの紙面を要する。

のオフダ卽ち家の戶口の上に着けてある信心の祈願すら、その上へ白紙を貼らなければならぬ。其服喪期間はその家での火は不淨と考へられて居る。だから期が終ると火鉢や臺所の灰は悉く打棄てて、新規の火を燧石と鋼とで造らなければならぬ。が、葬式だけが合法な不淨の唯一の根源では無い。神道は、純潔と淸淨との宗教だから、餘程廣汎な申命（デウテロノミイ）がある。或る時期の間は女は宮の前で祈禱すらしてもならぬ、況して捧物をしたり、神聖な器物に觸つたり、或はカミの燈を點したりしてはならぬのである。

八

宮の前には、或は神棚の上に置く神道崇拜のどんな神聖な物體でも、その前には、サケの供物を入れる妙な恰好をした德利が二つと、サカキといふ神木の小枝か、お供への花かを挿す小さな花瓶が二つと、それから小さな皿のやうな恰好をした、燈心草の髓が一本菜種油に浮いて居る小さな燈が一つと、置いてある。嚴密に云へば、是等の器具は花瓶を除いては總て皆、古事記の前の方の章に述べてあるやうなあんな、釉藥のかかつて居ない色の赤い土器でなければならぬ。出雲では神道の祭禮に、神の爲めに酒を飲む時は、今猶、淺い圓い皿のやうな形の赤い素燒の土の盃で飲む。が近年、立派な神棚の器具は總て——ハナイケ卽ち花瓶すらも——眞鍮又は唐金で造るのが流行になつた。貧乏人どもの間では、その最も古風な器具が今なほ、殊に遠隔の田舍地方では、隨分と使用されて居る。燈は赤土の質素な皿卽ちカハラケで、花瓶は最も屢〻竹の一節を節の直ぐ下の處と、その五吋許り上の處と切つただけの竹の水容である。

眞鍮の燈は値ひ僅か一厘のカハラケよりも、遙か込入つた品物である。眞鍮の燈は少く

とも二十五錢ぐらゐはする。それは二つの部分から成つて居る。下の方は、非常に淺い幅の廣い葡萄酒用の盃のやうな恰好をしてゐて、非常に太い軸が附いて居て、外側の縁があると共に內側の縁がある。そしてそれに丁度適合するやうな、幅廣い淺い眞鍮の皿、これが上部になつて油を入れるものであるが、それが其內側の縁にきちんと嵌まる。此種の燈にはいつも、平たい環の形した、その環の表面と直角に軸の着いて居る、眞鍮製の小さな品物が備へられて居る。これは浮いて居る燈心を動かして、所要のどんな位置にでも置いて置く爲めに用ふるもので、その直立した小さな軸は、指を油に觸はらせぬ程の長さを有つて居る。

　どんな尋常な神棚にでも見らるゝ、最も妙な品物は酒の容物、卽ちオミキドックリ（御酒德利）の口止である。この口止――オミキドックリ　ノ　クチサシ――は眞鍮のこともあり、見事な薄い木片を結合して、所要の特殊の形に曲げたもののこともある。適當に云へば、この物は、名はさうであるが、眞の口止では無い。其下部は瓶の口を全く充たしはしない。ただ軸を下にして木の葉一枚挿したやうに、その孔に浮いて居るだけである。自分にはその來歷を知ることが困難である。が、その意匠はいろ／＼あるけれども――眞鍮の方が意匠はより巧妙なのだが――全體の形が、その起原は佛教に在ることを思はせるや

うてある。多分この形は佛教の一つの徽號――その淡い輕い（繪圖的に炎のたはむれを思はしめる）炎が純粹な本質の徽號となつて居る彼の神祕な珠、ハウシユ　ノ　タマ――から藉り來たつたもので、この品物は捧物の酒が純なものであると同時に、それを捧ぐる人の情も純なものであることを表示して居るのであらう。

この小さな燈は、この夜毎の無限小の油の出費にすら堪へない程、貧しい家族もあることであるから、あらゆる家で毎晩點されはせぬかも知れぬ。が、毎月一日と十五日と二十八日とにはいつも點す。それはその日は必ず守らねばならぬ、神道の祭日だからで、その日には神に對して供物をしなければならず、その日にはウヂコ卽ち神社の管區內の者は、總てそのウヂガミへ參詣するものと思はれて居る。この三日にはどこの家でも、サケを御供物としてオミキドックリへ注ぎ入れ、神棚の花瓶には神木サカキの小枝か、松の小枝か或は新しい花かを挿す。新年の元日には神棚は必ずサカキ、モロムキ（裏白）、松の小枝、それからシメナハで飾る。そして大きな重ね餅を神へのお供へとして神棚の上に置く。

九

然し神道の昔の神様だけを神棚の前で拜む。一家の祖先或は一家の死人は別な部屋（ミタマヤ卽ち『靈の部屋』と呼ぶ）で拜むか又は、佛式で拜むなら、ブッマ若しくはブッダンの前で拜むかする。

佛教の家內禮拜は出雲の大多數の家で、神道の家內禮拜と共に存して居る。で、死人が御靈屋で拜まれるか、佛壇の前で拜まれるかは、全くその家庭の宗教的傳統に因るのである。その上出雲には――特に杵築では――一家の誰もが佛教の如何なる種類のものをも信じて居ない家があるし、家の者は神道の行をしない眞宗又は、日蓮宗[註]のものが極めて少い

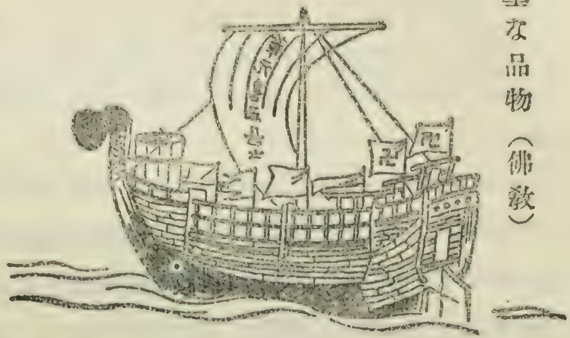
註。斯ういふことには日蓮宗は嚴正だと想はれて居るに拘らず、出雲でのその敎義の信奉者は、多數は同樣にまた熱心な神道家である。概して言つて出雲の眞宗信者も、それと同樣であるかどうかは自分に觀察し得なかつたが、松江の眞宗信者には神社に禮拜するものがあることは自分は知つて居る。佛陀のうちでも阿彌陀と稱するあの形態のみを崇めるのだから、眞宗は佛敎の『唯一神敎徒（ユニテエリアン）』だと言つても宜い。その敎義が神道に反して居るの故を以て、それは出雲では鞏固なる足場は終に得ないで居るやうに思はれる。

日本中他の地方では眞宗は佛敎諸宗のうちで、最も旺盛な最も繁昌な宗派である。

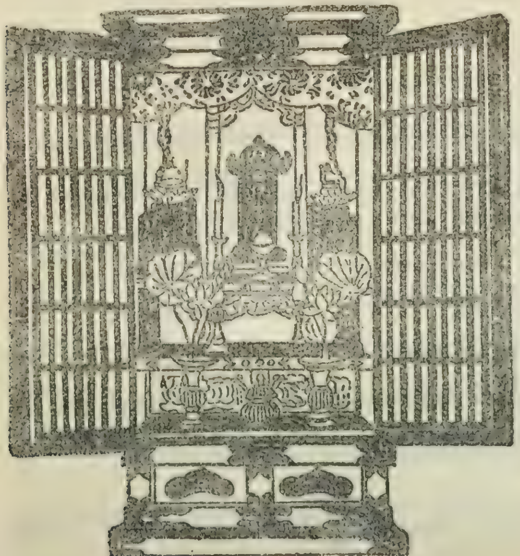
けれど在る。が、死者に對する家内での祭祀は、その家が神道であらうが佛敎であらうが、依然行はれて居る。佛敎を奉じて居る家の死人（ホトケ）のキハイ即ち牌は決して特別な部屋、又は宮に置きはしないで、普通その中へ置いてある佛神の像、又は繪とともに〳〵に家の中の佛式の宮の中に置く（註）——或は、少くとも、それに對する尊敬を神式で無く、佛式

註、モオルス氏は、その『日本の家庭』で、『家の中の佛式の社は床の上に置いてある、——兎も角自分はさう聞いて居る』と述べて居るが、あれは又聞で頗る妙な誤を發表したものである。どんな場合にも床の上へ置きはせぬ。より好い階級の家では特別な設備を佛壇に爲して居る。横に辷る板か又は小さな戸で人目に見えぬやうしつらへてあるが普通で、床か壁の引込んだ處か、又は他の工夫をした處に置く。より小さな住居では他に善い處が無いが爲めに、棚の上に置くことはあらう。そして貧乏人の家ではタンス即ち衣服入の上に置くことはあらう。神棚ほどの高さには決して置かぬが、床の上三呎以下の高さには滅多置かぬ。佛壇のモオルス自らの挿繪（二二六頁）を見ると、決して床の上に在るのでは無くて、戸棚、これは佛壇と混同してはならぬが、戸棚の上の段——極く小さな棚——の上に載つて居る。今問題にして居るそのスケッチは、その繪に見ゆるお供物が盆祭のお供物だから、死者の祭の間に描いたもののやう察しられる。盆の折には家の内の佛壇は、いつも扉を開けて中が見えるやうになつて居り、且つその前へ置くお供物に餘地を與へる爲め、いつもの場處から動かすことが能くある。床の上へ神聖な品物を置くことは

神聖な品物（佛教）



死者の乘る小さな靈舟、シヤウリヤウブネ。（出雲海岸地方）



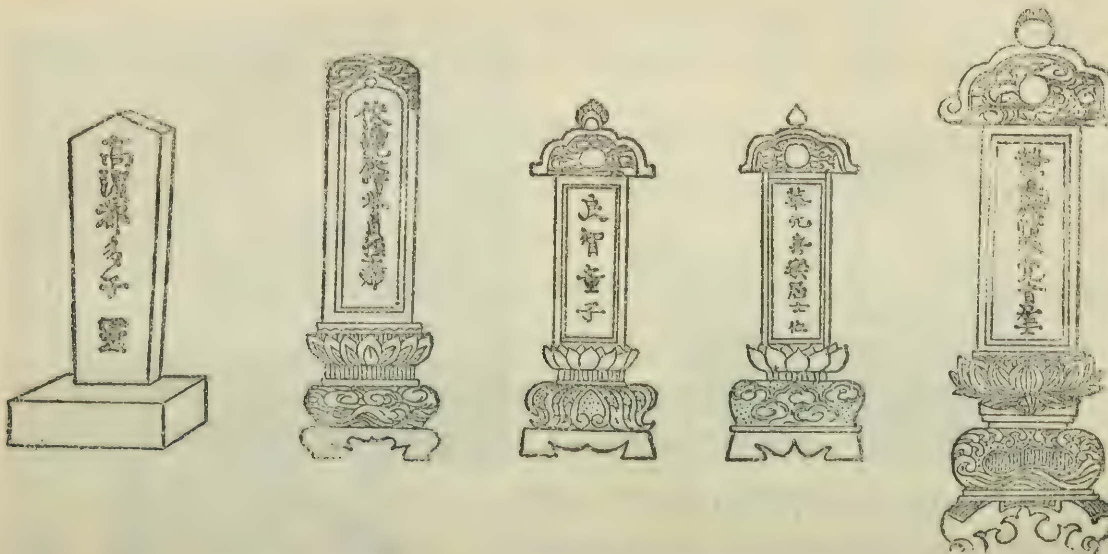
一家の位牌が內部に集めてある禪宗の佛壇。

日本人には非常に不敬な事に思はれて居る。神道の品物と云へば、マモリでさへ床の上へ置くのは罪だと考へられて居る。

て行ふ時はいつも必ずさうてある。佛壇或は佛間の形狀、その聖像そのオフダその繪圖の性質、またその前て唱へる祈禱すら、十五もある異つたシュウ即ち宗派に依つて異ふから、佛間の問題を徹底的に述べる爲めには、餘程大きな書物一冊書かなければならぬことてあらう。だから家の內ての佛式の宮には、大小も價格も壯麗の度合も、種々樣々だといふこと、眞宗の佛壇は、これは自分には一番興味の乏しいものてはあるが、意匠に於て仕上げに於て、最も美しいものと一般に考へられて居ること、を述べて滿足しなければならぬ。極はめて貧しい家の佛壇は、値ひ四五錢のもあるが、富裕な信者は幾千圓といふその拂ひ得る限りのものを、京都て購ふこともあらう。

佛間の形狀幷びに、その在中物の性質は大いに異りはして居るけれども、祖先の即ち葬禮の名牌の形は、此書の位牌[註]の挿繪の第四圖に示したものが普通のものてある。これより

註。佛教信者が死んだ場合には、一人に對していつも位牌を二つ造る。一つは家庭の宮に置いて置く物より大きいが通例で、それはその死者がその檀徒であつた寺で、お供物として毎日それへ茶か水を注ぎ入れる茶碗と一緒に、保存せられる。大きな寺では殆んどどの寺にも、そんな位牌が幾千となく、——死者の



1. 神道の位牌（出雲）

2. 士の妻の位牌

3. 小さき子供の位牌

4. 男子の位牌の普通の形式

5. 士の官吏の（裝飾精緻）位牌

佛教の位牌（禪宗）

靈も亦茶を飲むと想像されて居るから――一々その前に茶椀を置いて、段の上に段を爲して、横にずらりと並んで居るのが見られる。自分は幾列もの茶碗が、たゞ些だけ入れて居るのを見たことがあるから、尤もその罪は恐らく横着な小僧に在るのだらうが、時折そのお供物が失念されることがあるやうである。

ももつと精巧な、高價な珍奇な形のもあり、最も低廉で最も簡素な、より單純な形のもあるが、別紙挿繪の形は出雲と山陰道全部に普通なものである。が然し、大きさには相違があつて、男の位牌は女のよりも大きく、その上、上に冠せ物があるのであるが、女のにはそれが無い。そして子供の位牌はいつも頗る小さい。成人の男の位牌の平均の高さは一呎少し上で、その厚みは一吋許りである。ハウシユノタマ即ち神秘の珠の徽號が、上に載つて居る頂卽ち冠り物があり、普通は何か雲形の裝飾があつて、臺は雲から出て居る蓮華である。一般には全部美々しく漆で塗られ、金色で彩られて居り、位牌そのものは黒漆塗で、金文字で死後の名卽ちカイミヤウ――賢夢白證信士とか、死んだ人が有つて居たと想はれて居た美德を示す他の文字とか――が書いてあるのである。そんな美しい位牌を求め得ない極貧の人のは白木の位牌で、戒名はただその上へ黒文字で書いてあるだけである。が、それよりもつと普通には、戒名を白紙の片に書いて、それを米糊で位牌に貼るのである。生前の名が恐らくその位牌の裏に彫られてゐる。こんな位牌は固よりのこと、幾代と經つ

に連れて積まつて來る。だから、非常に澤山な數を蓄へて居る家がある。

大いに人を感動させる美くしい或る習慣が、古昔よりか餘程普通では無くなりはしたが、今なほ出雲に、そして多分日本中に、殘存して居る。が然し、自分の知り得る限りでは、これはいつも修養ある階級だけに限られて居る。夫が死んだ時、その妻が再縁しないと決心する場合には位牌を二つ造る。その一つには死者の戒名を金文字で書き、今一つのには生きて居るその寡婦の戒名を書く。が、後者には、戒名の初の一字を赤で彩つて、餘の文字は金で書く。それからその二つの位牌を家の佛間に置く。それと同じ様に文字を認めた、より大きな位牌を二つ檀那寺に納める。が、その妻のの前へは茶椀は置かぬ。その唯一つの深紅の字は死者の靈に對して、一生忠實をつくすといふ嚴肅な保證を意味して居る。その上また、その妻はその友人親族、總ての間にその生きて居る間の名を失つて、その後はただその戒名の一部分で呼びかけられる。例へば、俊德院樣と呼ぶ。それはそれよりもつと長いもつと口調の好い、死後の名の俊德院殿情譽貞操大姉の省略である。だから自己の

註。これはサムラヒの戒名の好個の見本である。華族又は士の戒名は賤しい死者の戒名とは異ふ。だから日本人は位牌を一日見て、それに使つてある佛教の言葉で、その死者はどんな社會階級の人だつたか直ぐと言ひ得るのである。

戒名で名を呼ばるゝことは、夫の靈に對する貞操であり、同時に夫を亡くしたその妻の不變の誠實である。それと正しく似た保證を、自分の熱愛して居た妻を亡くした後、男が爲る。自己の位牌の上に見らるゝ深紅な一字は、啻に家内に於てのみで無く、公の崇拜の場處に於ても、その誓を書留めて居るのである。が、鰥は、寡婦とは異つて、その戒名で名を呼ばるゝことは決して無い。

佛教を信じて居る家での朝の、最初の宗教的義務は死者の位牌の前へ、最初の御湯ていれた御茶の小さな茶椀を置くこと――オホトケサンニオチヤタウヲアゲル[註]ことである。日日また御飯の供物もする。そして新しい花を花瓶に挿す。そして香を――これは神道では許されぬのであるが――位牌の前で焚く。夜は、また或る祭禮中は、蠟燭と小さな――宮の燈とは稍ゝ形を異にした燈でリントウと呼ばれて居る――油の燈を點す。毎月死んだ日に相當する日にはシヤウジンレウリ、卽ち佛教信者の植物性食物だけから成る、食物を少し位牌に供へる。ところが家庭での神道崇拜には、新年の一日から三日まで續く特別の年祭

註。『尊き佛に御ン茶を呈上する』の意。佛教の信仰では、死んだ人は佛と成つて其後は輪廻の苦を免れる、と信じはして居なくとも、さう望む。だから「死んだ」といふ言ひ現しを日本語では「佛に成つた」といふ句で表すことが能くある。

があるやうに、佛教の祖先崇拜には七月の十三日から十六日まで續く、年毎のボンク卽ちボンマツリがある。これが佛教の精靈の供養である。その時は佛間は出來る限の裝飾が施され、食物と花との特別な供物が爲され、その靈的訪客の來るを迎へる爲め、全家が美くしくされるのである。

ところで神道には、佛教同樣、位牌がある。が、それは質素極はまつた恰好と材料とのもので――無地の白木の木片に過ぎぬ。普通その高さはただ八吋ばかりである。此位牌は、神の宮が据ゑてある部屋とは別な部屋に置いてある、或る特別なミヤに置くか、又はミタマサンノタナ――『尊い御魂の棚』――と人の呼ぶ小さな棚の上に、ただ並べて置くかする。祖先とその家の死者との棚又は宮は、ミタマヤ或はソレイシャ（御魂の部屋を時に斯く呼ぶ）に置いて、他の部屋にある神の宮がさうのやうに、いつも餘程の高さの處に置く。時々位牌は使用せずに、名前を御魂の宮の木材の上へ直かに書いたりする。が、神道には戒名は無い。死者の生前の名をその位牌に、『ミタマ』（御魂）の語をただ一字添へて、認める。そして月一回のその死亡日に相當する日に、毎月魚と酒と他の食物との御供物を、[註二]特殊の祈禱と共に捧げる。ミタマサンにも亦その特別な燈と花瓶とを捧げ、そして程度は

註一。死者或は神へのこの飲食供物の基を爲す思想は、無考へな批評家がさうと公言して居る程、しかく

不合理なものでは無い。死者は最も蒸氣的な種類の本質だけを要する、空氣のやうな状態になると思はれて居るから、自分共の前に供へられる食物の眼に見える物質を、少しでも減るものとは想はれて居無い。死者はその食物の眼に見えぬ本質だけを吸收するといふのである。だが、果物やそんなやうな他の供物が、數時間空氣に曝された後、その風味を幾分か失ふと、靈魂がそれを味はつた證據だと、昔は考へたのであらう。科學的教育は必然的にかゝる眞實的妄想を消滅せしめる。そしてそれと共に、生者と死者との關係についての優しい美はしい、多くの空想をも消滅せしめる。

劣るが、神に對する儀式に似た儀式を以てして之を敬ふ。

神道若しくは佛教の位牌の前で唱へる祈禱は、それ〳〵その宗教的な法式の文句で始まる。神道信者は、手を三度若しくは四度打つて[註二]、先づ聖禮の『拂ひ給へ』を唱へる。佛教信者は、その宗派に從ひ、祖先へのその祈禱を始める前に、『南無妙法蓮華經』とか『南無阿彌陀佛』とか佛陀に祈り或は佛陀を讃へる、或る他の聖語をつぶやく。神道信者でも佛教信者でも、祖先への言葉は聲高に述べることは滅多無い。口の中で極く低い聲でさゝやくか、又はただ心の中で言ふ。

註二。拍手の數は州に依つて幾分異ふ。九州では拍手は、殊に朝日に向つての祈禱の前は、頗る長い。

一〇

出雲の家庭では夜になると、神へと先祖へとの燈を、その家での信頼を受けて居る奴僕か、又は家族の誰かが點す。神道の正統の規則では燈には純粋な植物性の油――トモシアブラ――だけしか用ひてはならぬことになつて居て、通例は蕓薹の油を使用する。が然し、より貧しい階級の間では、かの昔からの道具の代りに、極小の石油ラムプを用ひようとする明らかな傾向がある。が、嚴密に正統な式を守る人には、これは甚だ間違つた事と考へられて居て、燈をマッチで點すことすら稍〻異端な行ひである。それはマッチはいつも乾度純粋な物質で造らるゝものとは想はれぬのに、神の燈は最も純粋な火――一切の事物のうちに潜んで居る彼の神聖な自然の火――だけで點さなければならぬからである。だから嚴密に正統な式を守る神道家族の家では、どんな家でも、或る小さな部屋があつて、其處にはいつも神聖な火を點すのに用ひる、古昔の道具が入つて居る小さな箱がある。ヒウチイシ卽ち『火打石』と、ヒウチガネ卽ち鋼と、ホクチ卽ち乾かした苔から造つた引火奴と、それからツケギ卽ち脂松の見事な薄切とから、それは成つて居る。引火奴を少し燧石の上

へ置いて置いて、鋼を二三度打つて燻らせて、炎を出すまで吹く。それからその炎で松の木片を燃やして、それで祖先と神との燈を點すのである。若し宮に或は神棚に、數々の大神が數々のオフダで代表されて居れば、時として別々の燈をその一つ一つに點す。そしてその家に佛間があれば、其處の蠟燭又は燈も同時に點す。

神の燈を點すのに燧石と鋼とを使ふ事は、多分一代のうちに廢れてしまふことであらうけれども、出雲では、殊にその田舍地方では、今なほ大いに行はれて居る。安全マッチが全くこの正統な道具に取つて代つて居る處でも、正統の感念は、使用するマッチの選擇に自づと現れて居る。外國製マッチは許容されぬ。土地のマッチ製造者は、外國製マッチには『死んだ動物の骨から造つた』燐が入つて居るから、そんな不淨な火で神の燈を點すのは瀆神であると、首尾能く言ひ囃した。日本の他の部分ではマッチ製造者は『サイキヤウゴホンザンヨウ』（西京[註]の御本山の用に適す）といふ言葉をその箱の上へ捺した。が、出雲での神道感念は、そんな宣言によつて大いに動かされるには餘りに强かつた。それどこ

註、日本佛教の聖都たる京都の別名。

ろか、そのマッチが眞宗の寺で使用するに適當して居る、といふ推擧それ自體が神道信者をして、そのマッチに偏見を抱かせるに充分であつた。だから安全マッチをこの神の國へ見事輸入するまでに、特別の用心をしなければならなかつた。出雲のマッチ製造者は、今からいふ銘を貼つて居る、『純粹にしてカミ若しくはホトケ！の燈を點すに適す』

日本に於て一切の事柄に對しての避け難い危險は火である。一家が火事の時、それが出來たらば、第一に助け出すべき品物は、家の中の神と祖先の位牌であるといふことは、傳統的な規則である。これさへ助け出せば、一家の貴重品は大部分は助かるに極まつて居る。これが無くなれば萬事休すだとさへ言はれて居る。

二

出雲で使用されて居る『ソレイシャ』幷びに『ミタマヤ』といふ言葉は、神道の（普通は櫻の木で出來て居る）位牌が入れてある小さな宮か、又は、其處に位牌が置いてあつて、そして其處へ供物を捧げるやうにしてある、その家の一部分を意味することがあるといふ

ことゝである。さういふ供物は、それが出來るほどの人はみな、机の上に載せることになつて居て、その机は無地の白木のもので、神社で又公の葬式で供物をする時の机と、同じな高い狹い形のものである。

家の中での神道祭祀の際、昔の祖先に向つて唱へる、最も普通な形式の祈禱は聲高くは述べぬ。神道のあらゆる通俗な祈禱の最初の法式の文句『拂ひ給へ』云々を發言してから、その崇拜者は、『我等の遠き昔の祖先の御魂よ、代々の、我々の家族の、また我々の親族の汝等祖先の御魂よ、我々の家の創立者たる汝等に、我々は今日、我々の感謝の喜びを述べる』と、ただ自分の情で言ふのである。

佛教信者の家族的祭祀では、その家のホトケの間に――族の昔に死んだ人達の靈と、つい間近に亡くなつた人達の靈との間に――差別を設けて居る。後者は之をシンボトケ即ち『新しい佛』、もつと嚴密に言へば『新しく死んだ者』と呼んで居る。シンボトケに對しては何等超自然的な恩惠を直接乞ひ願ふことをしない。敬つてホトケとは呼んで居るものの、新しく死んだ者は佛の境涯に達して居るとは、實は考へられて居ないからである。彼方へと長の旅路へ出たばかりで、人に救助を與へ得るよりか寧ろ、自分の方に恐らくは救助を要して居るのである。だから實際、敬虔の念の深い人達の間では、死んだ者がどうし

て居るかといふ事が情の籠もつた心配事である。小さな子が死んだ時は、殊にさうである。幼な子の魂は弱くて、色んな危難に遭ふと思ふからである。だから母は、その子の去つた魂に物言つて、恰も生きて居る息子か息女に物を言ふやうに、忠告をしたり、訓戒したり、やさしく指圖したりする。どんなシンボトケにも、出雲で言ふ普通の言葉は祈禱の形式では無くて、寧ろ懇願或は勸告の形式である。例へば次記の如くである、――

『ジヤウブツセヨ』或は『ジヤウブツシマツシヤレ』

『マヨウナヨ』

『ミレンヲノコサズニ』

斯ういふ祈禱は決して聲高くは述べぬ。これよりももつと西洋の祈禱の觀念に一致して居るのは、眞宗信者がシンボトケの爲めに述べる次記のものである、――

『オムカヘクダサレ、アミダサマ』

言ふの要も無いが、祖先崇拜は、支那及び日本で佛敎の中へ取り入れられはして居るけれども、佛敎起原のものでは無い。これも亦言ふの要は無いが、佛敎は自殺を非認する。

でも日本では、死んだ者の魂はどんな境遇に居るかとの心配が、屢〻自殺を惹起した——或は少くとも、佛教の教義を信じては居ながらも、原始的慣習に執着することもある人達には、自殺は是認されてゐたのである。家來は、死んだなら、自分共の領主或は女領主の魂に勸告援助、若しくは御用を爲すことが出來るかも知れぬとの信念を抱いて、自殺した。だから保元物語といふ小說に、或る家來がその年若い主人が死んだ後、

死出の山三途の河をば誰かは介錯申すべき。恐しく思召さんに付けても、先づ我をこそ尋ね給はめ。生きて思ふも苦しきに、主の御供仕らん。

と言つたとしてある。

家の內での佛教の崇拜では、遠き昔に死んだ者共の魂卽ちその一家の本の佛に對して唱へる祈禱と、新佛に對して爲す言葉とは甚だ異つて居る。次記のはその二三の實例である。これはいつも聲を潛めて言ふ。——

『カナイアンゼン』

『エンメイソクサイ』

『シヤウバイハンジヤウ』

これは商人だけが唱へる。

『シソンチヤウキウ』

『ヲンテキタイサン』

『ヤクビヤウセウメツ』

上記のうちて神道崇拜者も亦用ひるのがある。老年のサムラヒは今なほその階級の特別な祈禱を唱へる、卽ち

『テンカタイヘイ』

『ブウンチヤウキウ』

『カエイマンゾク』

が斯ういふ無言の定り文句のほかに、情に促されてのどんな祈禱でも、歎願であらうと感謝であらうと、固よりのこと唱へても宜い。そんな祈禱は日常生活に用ふる言葉で述べる、否、寧ろ心の中て念ずる。出雲の母親が、病氣の子供の爲めに願つて、祖先の靈に對して述べる次記の短い祈禱は一例である、――

『オカゲデ、コドモノビヤウキモ、ゼンクワイイタシマシテ、アリガタウゴザイマス！』

『オカゲデ』は文字通りに言へば『の御ン蔭で』である。原の文句には自由譯も況んや正確譯も保持し得ない一種靈的な美がある。

一二

斯く、極東の家庭ての崇拜に於ては、愛の念からして死者は神とされるのである。そして此優しい以人爲神が、自己にも爲されると豫知して居る事が、老年の自然の悲哀を慰藉の念を以て和らげるに相違無い。日本では決して死んだ者を我々が爲すが如くに、あんなに早く忘れはせぬ。單純な信仰によつて、死者はなほその愛せる者共のうちに住んで居ると思はれ、家庭に在つてのその地位は、永久に神聖なものとされて居る。そして將に此世を去らんとして居る老齡の家長は、愛らしい唇が家の內の宮の前で、自分の靈に對して夜毎囁いて呉れるといふ事を、信實なる心がその苦しい折には自分に懇願し、その嬉しい折には自分に感謝して呉れる事を、優しい手が自分の位牌の前へ果物や、花の純潔な供物を、

また生前自分が好きてあつた品々の美味な食物を置いて呉れ、自分の爲めに、靈と神との前に置いてある小さな盃の中へ、客に侑める香ばしい茶か琥珀色の米のワインを注いて呉れる事を知つて居る。不思議な變化が此國を襲ひつゝある。古昔の習慣は消えつゝある。古昔の信仰は衰へつゝある。今日の思想は次の代の思想てはあるまい――然し、そんなことは一切、彼はその古雅な質朴な美しい出雲では、幸にも少しも知らずに居る。彼は自分の祖先に對するが如く、自分の爲めに彼の小さな燈が、幾代も〳〵點されることだと夢見て居る。彼は、其極はめて和やかな空想で、自分の忘れられることの無い名が記してある彼の小さな塵だらけな位牌の前て、神道の祈禱にその小さな手を拍つて、そして子たる勤めの辭儀をして居る、まだこの世に生れて居ないものを――自分の子供の子供の子供等を――見て居るのてある。

第十八章　女の髪について

一

家の妹娘の髪は甚だ長い。だからそれを結ふのを見るのは、尠からぬ觀物である。三日毎に一度結ふ。そしてその四錢掛かる作業は、一時間を要するものと認められて居る。實際は殆んど二時間を要する。髪結（カミユヒ）は先づその女弟子をよこす。それが髪を綺麗にし、洗ひ、香を附け、少くとも五通り種類の異つた異常な櫛で梳く。髪は何處から何處まで綺麗にされるから、三日は、或は四日も、我々西洋人の考への及ばぬほど清淨な儘で居る。朝、掃除をする間は、ハンケチ又は小さな紺のタオルて大事にそれを蔽ふ。そして日本の妙な木枕、これは頭を支へるのでは無くて、頸を支へるものであるが、それがこの不思議な作物を崩すこと無しに樂に寢ることを可能ならしめる。

註。前には同じ理由で男女とも同じ枕を用ひた。年若いサムラヒの長い髪は、一種精巧な結びに束ね上げ

てあつたもので、結ふのに随分の時間を要した。髪を短くするのが殆んど一般の習慣となつてからは男は小さな枕蓐のやうな恰好の枕を用ふることになつて居る。

弟子がその受持の仕事を終つた後へ、髪結の本人が遣つて來て髷を造り始める。この仕事に髪結は、その異常な種々な櫛の他に、金を塗つた絲又は色の附いた紙縒の美しい匝と、非常に麗はしい色取りの優雅な縮緬切と、花車な鋼條の彈機と、取付けないうちに髪を其上で所要の形に造り上げる籠形の小さな妙な物とを使用する。

カミュヒはまた剃刀を携へて來る。日本の女は――顏、耳、眉、顎、おまけに鼻も！――剃るからである。剃るべき何があるのか。最も美はしい人間の皮膚といふ天鵞絨の彼の桃の皮のやうな毳毛だけである。が、それを日本人の趣味は取り除けるのである。が然し、剃刀には今一つ使途がある。少女は總て、頭の極くの天邊の處、直徑一吋許り、圓く小さく綺麗に剃つて、それを處女たる標徴にして居る。これは額からその上を横ぎつて後へ持つて來て、後の髪に結はへてある一束の髪で、一部分だけ隱されて居る。女赤ん坊の頭は全部剃る。四五歳になると、頭の天邊の處、其處はいつも大きく剃られて居るが、其處を除いては髪を生やさせる。然し剃髪部の大いさは年々減つて行つて、幼年時代を過ぎると上述した小さな箇所に縮まる。そしてそれも亦結婚後、なほ一層複雑な髪の結ひ方をする

やうになると、無くなつてしまふ。

二

日本の女が多く有つて居る髮のやうな、あんなに全く眞直な黒い髮は、少くとも西洋人の思想には、理髮師(クワフユウズ)の技術を無上に發揮するのに、不適合のやう思へるかも知れぬ。[註] 然し

註。日本人の髮は總て青黒だと想ふのは誤である。二つの分明な人種的標式がある。一つは髮が純黒では無くて濃い褐色で、その上また柔かくて細い。日本人の毛(シュヴルウル)で波のやうに縮れる、自然の傾向を有つて居るのを見ることもあるがそれは稀で、甚だしく稀である。此處で述べることが出來ぬ妙な理由があつて、出雲の女は縮毛を非常に恥ぢる――生れ付の不具なのよりももつと恥ぢる。

カミユヒの手腕はあらゆる美的氣まぐれのまにまに、それを取扱ふことが出來るやうにして居る。尤も、捲毛といふものは無い、また捲髮用の鏝といふものも無い。然し何たる不思議な美くしい形を採るやうに女の髮がされることか！貝形、突出、廻轉、渦卷、引延べ、其各々が恰も支那の大家の書の筆の蹟の繫がりの如くに、それからそれへと和やかに移つて行く！カミユヒの技術は、巴里の理髮師(クワフユウズ)の熟練に遙かに優つて居る。日本人の工夫力は、

この人種の神話時代から、女の髮の結ひ方に美くしい趣向の發明と、改良とに盡くされて

註。古事記執筆の時代にすら髮を結ふ技術は、幾分發達して居たに相違無い。チエンバレン教授のその飜譯の緒言三十一頁を見られよ。また、第一卷第九節、第七卷第十二節、第九卷第十八節、その他を見られよ。

居る。だから、日本ほど斯んなに數多い美くしい結ひ方は、これまで他のどんな邦にも多分無いことであらう。其結ひ方は幾世紀を經て變化し來たつた。或る時は意匠が驚く許り複雜であり、或時は――長い黑髮を束ねず、その儘腰の下まで垂らすといふ、あんなに多くの古風な繪て、我々に傳へられて居る、あの優雅な風習のやうに――みやびな簡單なものであつた。註 然し我々がその記錄を繪に於て、有つて居る髮の型は、一々それ獨得の著し

註。美術の專門家は、それに人の姿が現れて居れば、署名の無いカケモノ或は他の美術品の時代を、女の人物の髮の結ひ方で決定し得るのである。

い妙味を有つて居た。印度、支那、馬來、朝鮮の美の觀念が、この神の國へ到來して、その生得の一層美はしい優美の思想に取込まれて變形したのである。佛教も亦、これは日本の藝術と思想とにいかにも深い影響を及ぼしたものであるが、恐らくは結髮の風にも影響

を與へたのであらう。その女性の神は非常に美しい髪の結び樣をして居るからである。觀音或は辨天の髪を、それから――大寺院の天井の上の、虛空に浮いて居る、あの少女天使――天人（てんにん）の卷髪に目を留めて看るが宜い。

三

その近代の樣式の殊に人目を惹く點は、若い女の顏が具へて居るどんな色白さ、又はどんな麗はしさでも、それを氣持よく引き立てて、その容貌の精巧な光背になるやうに髪を造り上げる方法に在る。だからこの美妙な黑色の後光の背後に、その始もその終も到底も見分ることの出來ぬ、優美な輪結（わむすび）と編込（あみこみ）との一つの謎があるのである。カミユヒだけが、その謎の祕鑰を知つて居る。そしてその全體を裝飾用の奇妙な櫛で支へ、また巧な彫刻のある頭の着いた、金、銀、眞珠母、透明な鼈甲、或は漆塗の木で出來て居る長い細いピン

註。その主要なそして無くてはならぬ髪のピン（カンザシ）は通例長さ七吋許りで二つに割れて居て、その充分鍛へられた二叉は、一對の箸のやうに小さな物を、摘み上げるのに用ふることが出來る。上の方の尖は匙形の小さな凸起になつて居て、それは日本の化粧に特別な用途を有つて居る。

をそれへ差す。

四

出雲の髪結(クワフユウズ)が行(や)る髪の結ひ方は十四種を下らぬ。が、首府では、また東部日本の大都會の或る物では、乾度この術はもつと精巧に發達して居る。理髪者（カミユヒ）は、一定の日に或る定まつた時刻に、その依賴者を訪れて、一軒々々商賣をして歩く。七歳から八歳までの小さな女の子の髪は松江では、ただ『垂れ髪』にして置くので無いなら、普通は『オタバコボン』と呼ぶ樣式に結ふ。オタバコボン（『御煙草盆』型）では、髪をぐるり四吋許りの長さに切つて、額の上の處だけも少し短く剪み切る。そして頭の上は髪を延ばさせて、それを束ねて此番の妙な名を如何にもと肯がしめる、一種特別な恰好の髷にする。女の子が女子小學校へ通ふほどの年齢になると、直ぐとその髪は『カツラシタ』とふ可愛らしい單簡な樣式に結ふか、或は恐らくは、寄宿學校の規定の樣式となつて居る、『ソクハツ』と呼ぶ新規な醜い半洋風の『束ね型』かに結ふ。貧乏人の娘は、中產階級の娘も大多數はさうであるが、その小學校時代は寧ろ短い。その勉學は結婚の出來る四五年前に終

るのが普通で、しかも日本では娘は餘程早く結婚する。處女の初めての精巧な髷は、早くて十四歳或は十五歳に達した時、初めて結ふ。十二歳から十四歳までは、その髮は『オモヒヅキ』と呼ぶ樣式に結ふ。それから型を『ヂョラウワゲ』と呼ぶ美くしい髷に變へる。この型には、複雜の度を異にした、種々な形がある。二年過ぎると、ヂョラウワゲは止されて今度は『シンテフテフ』（『新蝶々』型）か又は『シマダ』又の名『タカワゲ』かになる。シンテフテフ型は普通な型で、種々な年齡の女が結ふもので、大して上品とは考へられて居ないものである。シマダは、これは非常に精巧なもので、上品である。が、その家族が良い身分の人であればあるほど、この髷が小さい。ゲイシャとヂョラウとがその大きくて高い種類の、正しく『タカワゲ』即ち『高髷』といふその名に應ずるのを結ふ。十八歳と二十歳との間に處女は、またこの樣式を『テンジンガヘシ』といふ別な樣式に變換

註。シンテフテフは年いつた人は「イテフガヘシ」とも呼ぶ。尤も原のイテフガヘシは少々異つて居る。サムラヒの娘は本當のイテフガヘシ風に、その髮を結つたものである。その名はイテフの木（學名サリスビユリア・アンデイアンテイフオオリア）から出たもので、その葉は家禽の足の形に能く似た、妙な形をして居る。この結髮をした時の髮の、或る束(たばね)が銀杏の葉に形が似て居たのである。

へ、二十歳と二十四歳との間に『ミッワゲ』即ち環の三つある『三つ髷』と呼ぶ樣式を用ひ、そしてそれと稍〻似ては居るが一層複雜な『ミッワクヅシ』といふ髷を二十五から二十八までの若い女が結ふ。その年齡までは髮を結ふ樣式の變化は、一度々々精巧と複雜の方向にあるのである。が、二十八以後は日本の女は、もはや若いとは考へられぬ。で、その後はただ一種の髷があるだけである、——即ち年のいつた女が用ふる、どちらかと云へば醜い『モチリワゲ』或は『ボバイ』である。

が、結婚する娘は前記の何れとも全く異つた樣式に髮を結ふ。あらゆる樣式のうちで一番美しい、一番精巧な一番金の掛かるのは、文字通りでは『花嫁』といふ意味の語の『ハナヨメ』と呼ぶ、新婦の髷である。その構造(つくり)はその名の如くに優美なもので、藝術的に鑑賞するやうに眺めなければならぬ。その後、人妻は『クメサ』若しくは『マルワゲ』別名『カツヤマ』と呼ぶ樣式に髮を結ふ。クメサは上品では無い、そして貧乏人の髷である。マルワゲ即ちカツヤマは高尙である。前にはサムラヒの女は、特殊な二通りの型にその髮を結つた。處女の髷は銀杏返しして、結婚後の女のは片外づしてあつた。今でも松江では片外づし髷を少しは見ることが出來る。

家（うち）の髪結の、出雲で、その業にかけては一等上手な、オコトサンといふのは三十ばかりの丈は低いが、今猶、餘程人目を惹く女である。その首のまはりに、美術鑑定家が『ギイナスの頸珠』と名づけて居るものをつくつて、可愛らしい柔かい筋が三本ある。これは滅多に無い、女の縹緻の一つであるが、一度それが、コトの身の破滅になりさうであつた。その話は妙な話である。

コトにはその職業生活を始める時分に競爭者が一人あつた、――髪結としては餘程技倆（うで）はあつたが、根性の惡るい女で、ジンといふ名であつた。ジンは次第に其住い得意を皆失つて、小さなコトか流行（はやり）の髪結になつた。ところが、その年寄の競爭者は、嫉妬の憎惡に胸が一杯になつて、コトに就いて怪しからぬ話を造り出した。すると、その造り話が古い出雲迷信の肥えた地面に根附いて、不思議なほど大きくなつて行つた。その話の趣向はコトの首のまはりのその三本の柔かい筋を見て、ジンの惡る賢い心が思ひ付いたのであつた。コトは『ヌケクビ』だと觸れ出したのである。

ヌケクビとは何か。『クビ』とは首をも意味し頭をも意味する。『ヌケル』といふは徊ふ、潜み行く、密行する、窃つと辷り出るといふ意味である。ヌケクビだといふのは體軀(からだ)から離れて、夜――それだけが――忍びあるく首だといふのである。

コトは二度結婚した。そして、その二度目の縁組は幸福であつた。が、その最初の夫はコトに大變な心配をさせ、下らぬ女と一緒になつて、到頭コトを棄てて逃げた。その後その男については全く何の噂も無かつた、だからジンはその男が姿を隱した因由(いはれ)の怖ろしい話をこしらへても大丈夫だと思つた。男がコトを棄てたのは、或る晩眼を覺ますと、その若い妻の頭が枕から起き上つて居て、身體(からだ)の他(ほか)の處は動かずに居るのに、その首は大きな白い蛇のやうに伸びて居るのを見たからである。見ると、その頭はいつまでも長くなる首に支へられて、遠くの部屋へ入つて燈の油を皆んな飲んで、それからそろ〳〵と枕へ――首は同時に縮まつて――歸つて來た。『そこで亭主は起き上つて、大恐(おほおそ)れて家(うち)を逃げてしまひました』とジンは言つた。

話は一つが又一つを生むものだから、いろんな妙な噂が可哀相にコトに就いて擴まり始めた。或る巡査が、夜晩く、身體(からだ)の無い女の頭が庭の壁へ垂れ下つて居る、或る木の實を咬んで居るのを見た。ヌケクビだと知つて劍の平(ひら)でそれを打つた。首は蝙蝠が飛ぶほど早

く縮んで逃げたが、それでもそれが、あの髪結の顔だと解るほどの時間はあつたといふ話もあつた。「え、そりや本當です」と、其事があつたとされた翌けの朝ジンに問れるのであつた、「嘘だとお思ひになりや、コトに會ひたいからと言つてやつて御覽なさい。出られやしません、顔が全るで腫れ上つて居ますから」。ところがこの最後の陳述は――コトはその時分劇しい齒痛を患つて居たから――事實であつた。そして其事實が、この虛事の助けになつた。そしてその作話が地方新聞にきこえると、その新聞は――ただ一般人民の輕信の珍らしい一例として――その事を載せた。するとジンは言ふのであつた、『私しや本當の事をお話し致すんぢやありませんか。御覽なさい、新聞が書いて居ります！』

そこで物見高い人達が、多勢コトの小さな家の前に集つて來て、コトが自殺しないやうにと、始終夫は見張して居なければならぬほどに、コトの生涯を堪へ忍びがたいものにした。幸にもコトには、髪結として數年そこへ傭はれて居た、縣知事の家に心の善い女があつた。で、縣知事はその怪しからぬ事を耳にして、それについて公然の非難の文を書いて、それに自分の名を署して印行した。ところが松江の人達は、その老武士たる縣知事を神の如くに尊敬して居て、その片言隻句をも信ずるのであつた。で、彼が書いたものを見て、自ら恥ぢ、かつまたその虛言とその虛言者を非難した。そしてその小さな髪結は、やがて

一般の同情の爲め前よりか一層繁昌するやうになつた。

　昔時の極はめて異常な信仰のうち、出雲やまた他の處に、亞米利加の所謂『旅興行の附屬(つけたり)の觀物(みせもの)』で生き殘つて居るのがある。日本の附屬觀物(つけたりみせもの)にどんなものがあり得るか、無經驗の外國人は決して想像も及ばぬであらう。或る盛んな祭日には觀物師が出て來て、何處かの寺の庭で蓆と竹との蚱蜢的な芝居小屋を建て、怪しい限りの不思議な物で期待を滿腹させ、そして來るのが不意のやうに、不意に姿を消す。鬼の髑骨、化け物の爪、『羊ほど大きな鼠』、これが自分が見た、最も異常ならざる觀物のうちにあつた。化け物の爪といふは非常に見事な鱶の齒であつた。鬼の髑骨といふは――その頭蓋骨へ巧に角を附けたほかは全く――猩々のであつた。そしてその驚くべき鼠は、自分は馴らした袋鼠だと發見した。自分の充分に合點の行かなかつたのは、ヌケクビの見せ物て、若い女が、見たところ二呎ばかりの長さに首を伸して、その藝當中もの凄いいろんな顏をして見せた。

六

なほ女の髪に就いて不思議な古い迷信が二三ある。

メドウサの神話は、それに對應するものを擁つも、日本の民間傳說に有つて居る。そんな物語の主題は、いつも、髪が夜だけ蛇に變る、そして到頭それは龍か龍の娘かと解る、驚く許り美しい女である。が、古昔は、若い女はどんな女でもその髪は、或る種の苦しい事情の下に居ると、蛇に變ると信ぜられて居つた。例へば、長く抑へ忍んだ嫉妬心の爲めに。

舊日本時代には、分限者てその妾（メカケ又はアイセフ）をその正妻（オクサマ）と同じ屋根の下に置いて居たものが多かつた。苛酷極はまる家長的訓練が、メカケとオクサマとを日中は見た處ては全く和合して、一緒に暮らさなければならぬやうにしても、その二人の心中の憎惡は、夜その髪毛の變形によつて、自づと現れたといふことである。どちらもその長い黒髮が解けて、ひしめいて、相手のそれを嚙まうと力めるのであつた。そして寢て居るその二人の鏡すら、ぶつつかり合ふのであつた。昔の諺は言つて居る、カガミハ

ヲンナノタマシヒ――『鏡[註]は女の魂』――だからである。それから、加藤左衞門重氏といふ人についての有名な傳說がある。その妻の髮とその妾の髮とが夜、毒蛇に變つて、互に蜿き絡んでひしめいて嚙み合つて居るのを視た。そこて加藤左衞門は己が過失の爲めに斯く存する、その人知らぬ劇しい憎惡を大いに歎き、頭を剃り、高野山の佛敎大僧院で僧となり、死ぬる日まで、カルカヤといふ名て暮して居たといふのである。

註。昔の日本の鏡は金屬で出來てゐて、概して美しいものであつた。カガミカクモルトタマシヒカクモルは鏡に關する今一つの珍らしい諺である。恐らくどんな國語で書いてあるものでも、鏡についての最も美しい最も人を感動させる物語は、ヂエムズ氏が譯した『松山鏡』と呼ばれて居る物語であらう。

七

死んだ女の髮は、非常に簡單にしたシマダに幾らか似て居て、何の裝飾も無い、タバネガミと呼ぶ樣式に結ふ。『タバネガミ』といふ名は、稲の束のやうに、一束に結んだ髮といふ意である。この形式のをまた服喪の期中、女は結はねばならぬのである。

が然し、幽靈は髮を長く捌いて、物凄く顔に垂れて居るやうに繪には描いてある。そし

て柳は、屹度その垂れる枝が物悲しさを暗示するからであらう、幽靈が好む木だと信ぜられて居る。その下で幽靈は、その影のやうな髮毛を、その木の長い亂れた髮と交じへて、夜中悲しんで居るといふ。

傳說に據ると、圓山應擧が日本で幽靈を描いた最初の繪師だといふ。將軍が彼を御殿へ招いて『自分に幽靈の繪を描いて呉れ』と仰せられた。應擧はしか致しませうと約束した。が、その命令をどう滿足に果したらばと迷つた。その後二三日して、その一人の叔母が大病だと聞いて、見舞に行つた。非道く瘠せ衰へて、死んで長い間經つた人のやうな顏をしてゐた。病床に侍して看とりして居るうちに、物凄い靈感が彼を襲つた。肉の無い顏と振亂した長い髮を描いて、その匆々のスケッチからして、全く將軍の期待に優る幽靈を一人物した。後、應擧は幽靈の繪師として非常に有名になつた。

日本の幽靈はいつも透明な、そして――ただその姿の上の方だけが判然輪郭が見えて居て、下の方は全く消え失せて居る――異樣に脊丈の高いものに現されて居る。日本人の言ふやうに『幽靈には足が無い』その姿は、地上或る距離の處で初めて見えるやうになる、蒸發氣のやうである。そして美術家の構想では、風に動く蒸汽の如くに、ふわついて、伸び縮みして、ゆらめいて居る。時折變化の女が、生きて居る女の姿をして、繪本に出て來

る。が、それは本當の幽靈では無い。それは狐が化けた女か、又は他の化け物で、その神異な性質はその眼の一種特異な表情と、到底もありさうに無い一種の魑魅的な品の好さとで、それと知ることが出來るのである。

日本の子供は、何處の國の子供とも同様に、恐怖の愉快を非常に面白がる。だからそんな快感がその主たる興味となつて居る遊戯が澤山ある。その中にオバケゴト卽ち『幽靈遊び』がある。子守女か姉娘かが髮を前の方へ解いて、顔の上へ垂れるやうにする。そして繪本の幽靈のあらゆる姿勢を眞似て、呻き聲を立て物凄い身振をして、小さな子等を追つかけるのである。

八

日本の女の髮毛は、その最も豐麗な裝飾であるから、そのあらゆる所有物のうちで、失くするのを一番苦痛とする物である。だから昔時は、不貞な妻を殺すには、餘りに男らしい男は、女の髮を悉皆剃つて、追ひ出すのを充分の復讐と考へて居たのである。ただ最も大なる信仰か又は最も深い愛のみが、女をして自ら進んでその髮總てを捧げしめ得るので

ある、――出雲の多くの神社の前に吊るされて居るのを見る一部分の犧牲は、一房二房の長い太い切髮は、あるけれども。

斯んな犧牲の方面に、信仰なるものが如何なる事を爲し得るか、これは京都の本願寺といふ大寺院に吊るしてある、女の髮毛で編んだ大きなケエブルを見た人が一番能く知つて居る。だが、表示的といふ點では遙かに劣るけれども、愛は信仰よりも力强いものである。夫に死に別れた妻は、古昔からの習慣に從つて、夫の棺に納めて、夫と一緒に埋めるやうに、その髮の一部分を犧牲にする。その量は一定しては居らぬ。大多數の場合、髷の様子がその爲め少しも害はれぬほどに、極はめて少してある。が、亡夫の靈に永久に忠實でゐようと決心する女は全部を棄てる。自分の手てその髮を切つて、そのつや／＼した犧牲全部を――その若さと美しさの印を――死者の膝の上に置く。

決して二度と生やさぬ。

第十九章　英語教師の日記から

一

一八九〇、九月二日[譯者註一]、松江にて

私は出雲松江の尋常中學校及び師範學校に於て一ヶ年間英語教師として奉職する契約をして居る。

尋常中學校は暗青灰色に塗つた歐風の大きな木造二階の建物である。これには約三百の通學生を收容する設備がある。二方は運河、二方は甚だ靜かな街路で境になつた大きな方形の地面の一方に建つて居る。この敷地は舊城に甚だ近い。

師範學校は同じ地面の他の一角を占めた更に大きな建物である。同時に又更に立派である、眞白に塗つて、それから頂上に小さい圓屋根がある。師範學校には僅かに百五十程の生徒しかないが皆寄宿生である。

この二つの學校の間にまだ外にいくつかの教育に關する建物がある、これ等について私

は追々分るやうにならう。

この日は私が學校に出た第一日である。西田千太郎氏（譯者註一）は私をつれてこれ等の學校に案内し、校長及び同僚となるべき人々に悉く紹介し、授業時間の事と、教科書の事につき必要な注意を悉く與へ、凡て必要な物を私の机にのせてくれなどした。しかし授業の始まる前に、かねて官房書記を通じて私と契約のできてゐた縣知事籠手田（コテダ）安定氏（譯者註二）に紹介して貰はねばならない。そこで西田氏は私を往來の向側の別の歐風の建物にある縣廳へ案内する。

縣廳に入り、廣い階段を上り、歐風に敷物をしきつめた一室に入る、その室には出窓もあれば、クッションのついた椅子もある。ひとりの人が小さい圓卓に對して椅子にかけて居る、その周圍に五六人の人が立つて居る、何れも日本の禮服を着て居る、――立派な絹の袴、絹の着物、絹の紋付羽織、――自分の平凡な洋服を恥ぢ入らせる立派な威嚴のある服裝である。これ等は縣廳の役人と教師である、椅子にかけたのは知事である。知事は私に挨拶せんがために立つて巨人の握手を與へる、この人の眼を見て私は一生この人が好きになるやうな氣がする。溫和な力と、大樣な親切の多く表はれた――佛の靜けさが悉く表はれた――小兒のやうに鮮やかな正直な顏である。この人の側にあつては外の人々も甚だ小さく見える、實際この人を始めて見た時は別人種の如き感じがする。私は古への日本の

英雄はこの人と同じ型ではあるまいかと考へて居る時、この人は私に椅子を取るやうに合圖して軟い低い聲で私の通譯の勞を取れる人に話しかける。その顏を見た時に私が豫想した通りの流暢な深い聲に一種の魅力がある。

給仕が茶をもつてくる。

西田氏通譯する、『知事はあなたが出雲の昔の歷史を御存じかときかれるのです』

私はチエムバレン教授の譯にかかる古事記を讀んで、日本最古の國の話を少しは心得て居る事を答へる。日本語で話が暫らくつづく。西田氏は私が昔の宗教と風俗を知りたいのて、日本に來た事、殊に神道及び出雲の傳說に興味をもつて居る事を知事に語る。知事は自分に杵築、八重垣、熊野の名高き神社に詣でてはいかがと云つて次ぎに問ふ、

『あなたは神社の前で手を拍つ起りの傳說を御存じか』

私は知らない事を答へる、そこで知事はその傳說は古事記傳に出て居ると云ふ。

『第十四卷第三十二章にあります、八重言代主神が手を拍つた事が書いてあります』

私は知事の有難い忠告や敎へに對して御禮を云ふ。しばらくの沈默ののち又眞率なる握手をして丁寧に送り出される、そして私共は學校に歸る。

譯者註一。明治二十三年九月二日は始めて登校せし日。當時に學年は九月に始まり七月に終つた。

譯者註二。西田千太郎（今は故人）英語の教師で當時の教頭、現京都大學教授工學博士西田精氏の令兄。

譯者註三。籠手田安定（今は故人）、山岡鐵舟の高弟、古武士の面影のある人、熱心な國粹保存家であつた。

譯者註四。十四卷三十二章と云ふうち、十四卷は古事記傳の卷、三十二章はチェムバレンの譯書の方でできた分ち方、手をうつ事の古き文書に見えたのはこれが始めてと云ふ意味であるが、これを讀めば、手をうつ事はそれから起つたやうに見える。

二

私は中學校に於て三時間教へた處である、そして日本の生徒を教へる事は私の想像したよりは面白い事が分つてくる。各級は豫め西田氏がよく準備して置いてくれるので私の全く日本語を解しない事が教へる事に何等の困難をも來たさない。その上生徒は私が話す時には私の言葉をいつも悉くは解せないでも白墨で黒板の上に書く事は何でも分る。生徒の多數は幼時より日本の教師について、すでに英語を學んで居る。皆非常に順良で又辛抱强

い。昔からの習慣に從つて教師が入り來る時には全級立つて頭を下げる。教師は禮をかへしてのち出席簿を調べる。

西田氏は非常に親切である。できる事は何でもして自分を助けてくれて、つねに及ばざるを恐れて居る。勿論ここにも打勝つべき難點がいくつかある。たとへば生徒の名の分るまでには餘程の時を要するのである、それ等の名の多數は私の前に生徒名簿を置きながら發音する事もできないのである。又各組の名は各教室の入口に外國教師のために、それぞれ英語でかいてはあるが、自分に分るやうになるまでには少くとも數週間を要するのである。それまでのところ西田氏はたえず自分を案内してくれる。氏は又長い廻廊をへて師範學校に行く道を教へて、そこで自分に案内の勞をとつてくれる中山と云ふ教師に私を紹介する。

私は師範學校では只四時間だけ教へる約束になつて居る、しかしそこでも教官室で美しい机をあてがはれ、直ちに我家へ歸つたやうな感じを與へられる。中山氏は私のこれからの生徒に紹介する前に、學校にある面白い物を悉く、私に見せる。生徒への紹介は學校に關する經驗としては、愉快に、かつ、珍らしい物である。私は廊下を通つて案内され、紺の制服をつけた青年の滿ちた白壁の大きな明るい一室に導かれる。さきが三叉になつた一

本足でささへてある極めて小さい机に向つて銘々坐る。室の一方に教師の分の高い机と椅子とのある教壇がある。この机のところに私が席をとると一人が英語で聲を上げる『起立』即ち一同はばね仕かけて動くかのやうに飛び上るやうな擧動て立つ。『敬禮』再びさきの聲が命令する、それは袖に級長の筋のある若い生徒の聲である、そこて一同私に敬禮する。私はこれに答へて頭を下げる、一同席に復する、それから授業が始まる。

師範學校の教師は毎授業時間の始めにこれと同じ軍隊風の敬禮を受ける、ただ命令は日本語でされる。私にだけ英語でされるのである。

譯者註、中山彌一郎（今は故人）

三

一八九〇、九月二十二日

師範學校は縣立である。生徒は品行方正を證する履歴書を出し、試驗をへて入學を許されるが人數には勿論限りがある。生徒は月謝も寄宿料も書籍代をさへも、旅費も、衣服代も拂ふに及ばない。國家の費用て衣食住と學問を受けて居る代り卒業ののち五ヶ年間教員

として國家に奉公すべき義務がある。しかし入學すれば必ず卒業する物とは定まらない。年々三回乃至四回の試驗がある、一定の高い標準の試驗點を得ない生徒は如何にその品行が模範的で如何に勉强に熱心でも學校を退かねばならない。國家の教育事業と云ふ點から何等の容赦も示されない、そしてこの教育事業は生れつきの才能とその才能を證明する高い標準を要求する。

その訓練は軍隊的で、峻嚴である。實際師範學校の卒業生は軍隊[譯者註一]で一年以上も歸休する事を軍法によつて許される程その訓練は完全である、それ程完全な軍人となつて學校を出るのである。行狀も又一の必要物である、特別の評點がこのために設けてある、入學の當時如何に無作法でも、そのままである事は許されない。男らしい精神は養成される、そして粗野の風は排せられ、獨立自制の風は發達するやうになる。生徒は言語を發する時には教師の顏を見なければならない、言語は明確であるのみならず又高聲でなければならない。教場での行儀は教室内の器具によつても幾分よくしないわけに行かないやうになつて居る。小さい机は餘り狹くて肘をかける事ができない、腰かけにはよりかかるところがない、それて生徒は勉强中は固く眞直に身體をもたねばならない。生徒は又極めて清潔にさつぱ、と身を整へ置かねばならない。どこて又いつ教師に遇つても止まつて足をそろへ體を眞

にして兵式の敬禮をしなければならない。しかもこれは書く事もできない程のすばやい美しさでなされるのである。

授業時間中の生徒の態度は强いて云へば餘りによすぎる。ささやきの聲も聞えない、許可なしには書物から頭をあげる事もない。しかし敎師が名を呼んで生徒にあてるや否や、その少年は直ちに立つて、慣れない耳には外の生徒の靜肅沈默と對照して殆んどびつくりする程力のある調子で答へるのである。

師範學校の女子部には五十人程の若い婦人が敎員としての訓練をうけて居るがそれは別の二階作りの四角な大きな風通りのよい建物で、附屬の庭園と共に外の建物と全然別になつて、往來より見えないやうになつて居る。これ等の少女は最新の方法で西洋の科學を學ぶと共に日本の藝術卽ち刺繡、裝飾、繪畫、生花の訓練をうける。洋畫も又敎へられる、しかも立派に敎へられる、それはここばかりでない、到る處の學校で。しかし日本風の方法と聯絡して敎へてある、この聯絡の結果は必ずや將來の美術作品に多少のよい影響を與ふる事を期待してもよからう。繪畫に於ける日本學生の平均能力は歐洲學生のそれよりは少くとも五割は高いと私は思ふ。日本人種の魂は根本的に美術的である、その上幼時より敎へ込まれる極めてむつかしい漢字の書法は、繪畫の先生が透視畫法の講義を始めるずつ

と昔に既に眼と手とを極度に（殆んど西洋人には夢にも分らない程の程度に）訓練して居るのである。

この大師範學校に附屬して、又中學校にも廊下でつらなつた小さい男兒女兒の大きな小學校がある、教師は卒業の時期に達した男女の學生である、かくして國家の奉公に入る前に彼等の天職を實地に練習するのである。教育に關する見物としてはこの小學教育程、同情のある外國人にとつて興味のある物はない。私の見た第一の教室では、極めて小さい女兒男兒の一組が（中にはこの子供等自身の人形の如く不思議に美しいのが居る）眞黒な草紙を机上に置いて屈んで居るところである、所謂墨と筆とを一心に使つてその黒い草紙を一層黒くしようとても努めて居るのだらうと他人には思はれる。實は彼等は一筆一筆漢字と假名とを書く事を習つて居るのである。一筆がよくできたあとでなければ又つぎの一筆を下す事は許されない、一字を書く事はなほさらの事である。第一回の課業は充分終らないずつと以前に白紙は無數の未熟の筆のあとで悉く一様に黒くなつて居る。しかし同じ紙はやはり用ひられる、ぬれた墨は乾いた墨の上では更に黒いあとをつけて容易に見られるからである。

つぎの室てははさみを使用する事を習へる一組の子供を見る、日本のはさみは一つになつてゐて餘程U文字の形にできて居るが私共のはさみより餘程あつかひにくいやうである。小さい子供はひな形又はこれから學ぶ特別の物や符號を切り出す事を習はうとして居る、花の形は最も普通のひな形であるが時としては何かある符號なども題として與へられる。

又ある教室では別の小さい組が唱歌を習つて居る、教師は黒板に白墨で音譜（ド、レ、ミ）を書き、そして手風琴に歌を合せて居る。子供は日本國歌（君が代）及びスコットランドの節に合せてできた二つの日本の唱歌（譯者註二）をすでに知つて居る、その一つをきいて私はこの極東の片田舎に於ても、ずつと昔の種々の樂しい思ひ出にかへるのである。

この小學校では制服を着ない、皆日本服を着て居る、男の子供は藍色の着物を着て、小さい女の子供は蝶々のやうに光つた色々の色の着物を着て居る。着物の上に女の子供は袴をはいて居る、そしてこの袴は鮮やかなうす紫である。

授業時間の間に十分間を休憩なり遊戯なりに與へてある。男の子供は鬼ごつこやかくれんばうや又はその他の面白い遊戯をする、笑ふ、はね廻る、叫ぶ、駈けつこをする、相撲をとる、けれども歐洲の子供のやうに喧嘩やつかみ合ひはしない。小さい女の子供の方は又別に一緒になつて手まりをついたり、又は何か大勢で歌につれて一緒に遊戯をするため

に圓形をつくる。圓くなつて一緒に歌ひ合ふ可愛い聲はたとへやうのない程やさしく又美はしい。

註一。天照皇大神がもすそを結んで、始めてはかまを發明されたと云ふ傳説がある。

註二。かう書いてから二年日本の諸學校に敎師として敎へたが一つも學生間の本氣の爭闘を聞いた事がない。すでに八百人程敎へて居る。

かんごかんごしようや（譯者註三）
仲よにしようや
どんどんとくんて
地藏さんの水を
松葉の水入れて
まつくりかへそ

私はこれ等の生徒を敎ふる若い婦人も若い男子も自分等の敎へ子には非常にやさしい事を認める。遊戯のために着物が亂れたり汚れたりして居る子供はわざへ連れ出されて親身

の兄にされるやうに丁寧にそれを直したり塵をはらつたりして貰ふ。

小學生を敎へて彼等の未來の天職の準備とするまだその上に師範學校の女學生はその近くの幼稚園にも敎ふる事を習ふ。大きな陽氣な日當りのよいいくつかの室のある愉快な幼稚園である、そこでは極めてよい思ひつきの敎育玩具が毎日使用するために棚の上に澤山積んである。

譯者註一。以前は師範學校卒業生には兵役はなかつたがその後六週間現役をやればよい事になつた、この當時は六週間現役制度のできたばかりの頃であらう。

譯者註二。スコットランドの節に合せた二つの日本の歌、一つは「螢の光」一つは『美しき我兒はいづこ』である、前者は Auld Lang Syne 後者は Blue Bell より取つた物ときく。Auld Lang Syne. スコットランドの方言で昔の事、ことに幸福であつた時の事。

譯者註三。東京邊の子供のする『かごめ、かごめ、かごの中の鳥は……』と云ふ遊戯に似たものと云ふ、歌の意味は分らない處はあるが『仲よくにしようや』は『仲よく致しませう』なるべく『まつくりかへそ』は『ひつくりかへそ』と云ふ事。

一八九〇、十月一日

四

しかし私は師範學校について知るところ少いのは止むを得ない。嚴密に云へば私はその教官の一員ではない。私の時間の大部分はこの中學校にあるのである。中學校が私のつとめをたゞ貸して居るに過ぎない。私は師範學校の生徒は教室で見るだけである。彼等は松江に於ける先生の私宅を訪ふために外出する事は許されないからである。それで私は中學校の生徒に對するやうに、師範學校の生徒に對して親しくなる事は望まれない。中學校の生徒は私に『Sir』（あなた）と呼ばないで先生と呼んで、私を謂はば兄のやうに遇するやうに、なりかかつて居る。〔私は教師（Master）と云ふ字を用ふる事を好まない。日本では教師ぶる必要はないからである〕そして私は師範學校の大きな明るい居心のよい教官室に居るよりも、私の机が西田氏のと相ならんで居る餘り綺麗でない寒い教官室に居る方がもつと氣樂である。

壁に日本文字の澤山ある地圖がある、進化論の見方から動物學の事實を示した二三の大きな圖もある、小さい黑い漆塗りの小板のぎつしりつまつた大きな枠がある、それが皆一

面にはまつて居るから、全體の表面が黒板の表面のやうに一樣になつて居る。これ等の黒い小板に白く教師の名、課目、組、時間割など書いてある、むしろ塗つてある、この巧みな板の配列で時間の變りなどは板さへ置き換へれば分る。何れも漢字と假名で書いてあるから、私には全體の案と目的に關する點を除いてあとは分らない。私は私の名の文字と數字のやさしいのだけしか學んでゐない。

銘々の先生の机に藥のかかつた青白色の瀬戸物の小さい火鉢がある、火床に少しの赤い火が入れてある。しばらくの休憩時間に各教師は眞鍮、鐵、銀の小さいきせるて煙草を吸うて居る。この火鉢とあつい茶の一杯が教場の疲勞を慰むるのである。

西田氏との外に一二人の教師は英語が達者なので私共はこの休み時間に時々談笑するが大概は皆默つて居る。何れも授業時間て疲勞するから默つて煙草を吸ふ方を好む。こんな時には聞えるものは時計のひびきと火鉢のふちで吹がらを落す小さいきせるの鋭い音ばかりである。

五

一八九〇、十月十五日

私は今日島根縣全體[譯者註一]の學校の例年の運動會を見た。この競技は二の丸の城內の大廣場で行はれた。昨日圓形のトラックは仕切られ、高飛びのためにしがらみは造られ、參觀人や來賓のために數百の木の腰かけは準備せられ、見事な假屋は知事のために設けられた、何れも日暮までにでき上つた。周圍は板の腰かけの層で段々と高くなり、知事の席には飾りや旗のあるこの運動場は廣大なる圓戲場のやうに見える。十里以內の町村から集つた學童は驚くべき數である。殆んど六千の男女の生徒はこの競爭に加はるために集つた。兩親、親戚、敎師は腰かけの上や門の內で非常な群集をなしてゐた。この一大區劃を見下せる城壁の上には、恐らくこれだけで松江市の人口の三分の一にも當る程の更に大多數の群集が集つてゐた。

各競技の始めと終りの合圖はピストルの發射であつた、この運動場內は一軍團をも容れる程の廣さがあるから、各所に同時に四種の運動が行はれた、そして賞品は知事手づから各競爭の勝利者に授けた。

各學校の各組に於ける選手競走があつた、全體のうちで自分等の五年級の坂根が一等ときまつた、坂根は綽々たる餘裕を示して四十ヤードも他に先んじて決勝點に入つた。彼は私共の學校の運動選手である、强壯であるが同時に温良である、それで私は彼が兩腕に一杯賞品の書物をかかへて居るのを見て甚だ嬉しく思つた。彼は各劍士の左腕に結びつけた小さい土器を割るので勝負のきまる擊劍の仕合にも勝つた。又彼は大きな生徒のうちに入つて跳躍の競爭にも勝つた。

しかし勝利者は外にも數百人あつた、そして數百の賞品は與へられた。一人の左足と一人の右足とを結び合せて二人づつになつて走る競走もあつた。同じく奇妙な競走があつた、この競走に勝つためには走るばかりでなく代る代る這うたり、よぢ上つたり、跳びこえたり、飛んだりする技倆によらねばならない。少女の競走もあつた（空色の袴とさまざまの色の着物を着て蝶々のやうに美しく見えた）、競走者は芝生に散らしてある無數の球のうちから色のちがつた球を三つ拾ふて走らねばならないと云ふのであつた。この外に少女の所謂旗競走もあつた、それから羽根をつく仕合もあつた。

つぎに綱引があつた。しかも綱の一方に百人、他方に百人の大きな綱引であつた。しかしこの日の最も驚嘆すべき運動は啞鈴體操であつた。五百人程のあつさの列をつくつた六

千の男女の生徒が方々の小さい木造の塔から一同を指揮せる體操教師の合圖に隨つて、一萬二千の腕が全く同時に上下し、一萬二千の草履をはいた足が進んだり退いたりした、六千の聲が同時にそろうて啞鈴體操の『一、二、三』を唱へて居た、『一、二、——三、四、——五、六、——七、八』

最後に『城の取りあひ』といふ珍らしい仕合があつた。竹の枠に紙をはつた一丈五尺程の日本の塔の二つの模型が場內の各一方に建てられた。城の內部に蓋のない器に燃燒液があつた、もしこの器がくつがへれば全建築が火になるわけである。二組に分れた少年が紙の壁を造作なくつき破る木の球で城を砲擊した、忽ちのうちに兩方の塔が盛んに火焰を上げた。勿論さきに城の燒けた方がこの仕合に負けたのであつた。

運動は午前八時に始まり、午後五時に終つた。それから合圖に隨つて一萬の聲が莊嚴な『君が代』を歌ひ出した、そして日本の天皇及び皇后兩陛下の萬歲を三唱して終りを告げた。

日本人は自分等の歡聲を上げる時のやうに叫んだり、どなつたりはしない。日本人のは歌ふのである。長い叫びは何れも大きな音樂の合唱の始めの調子のやうに『アァァァァァァァ』てある。

譯者註一。島根縣全體の學校は少し大げさ。

譯者註二。二人三脚の事。

譯者註三。障碍物競走の事。

六

舊日本のこの最も邊鄙な地方にても、植物學、地質學その他の科學が日々教へられる有様を見る事は頗る驚くべきである。植物生理學や植物の組織の性質は立派な顯微鏡の下に研究される、しかも化學と關係して研究される、そして一定の時期に教師は各級を田舍に率ゐて、標本となるべきその地方の花卉草木を採集してその學期の課業を説明する。有名なる札幌農學校の卒業生の教ふる農學は、全く教育の目的で學校が買うて維持して居る田畠で實際に説明される。地質學の課業は、湖水の近傍の山々又は海岸の恐るべき斷崖絶壁を訪れて參考とされる、そこでは學生は、地層の形狀又は岩石の歷史のそこに現れた物を親しく學ぶ。湖水を入るる凹地層及び松江近傍の地方は、ハックスレー（譯者註）のすぐれた小冊子

に示してある教案に隨つて地相學的に研究するところとなつて居る。生物學も又最新最良の方法によつて、又顯微鏡の助けによつて教へられて居る。かくの如き教授の結果は時に驚くべき物がある。私は一人の生徒僅か十六歲の少年が、自ら進んである東京の大學教授のために、海産植物の二百種以上を集めて分類したのを知つて居る。又一人、十七歲の少年が手近に一冊の參考書もなく、そして後に自分の發見したところでは一つの誤りも、とり落しもなく、自分のために松江の近傍で見出される凡ての蝶類の科學的目錄を自分の手帳に書いてくれた。

譯者註　Huxley（1825—1895）は有名なる生物學者、（生物學者なるが故に化石、その他の研究より physiography の著述がある）

七

文部大臣をへて、陛下は明治二十三年十月三十日の日附の勅語を帝國のあらゆる學校に賜はつた。そこで各種の學校の學生教師集つて教育勅語の捧讀をきくのである。

八時に中學校の私共は、講堂に集つて知事の來校をまつて居る、知事は各種の學校でこれから勅語を讀むのである。

まづ事只暫らくにして、知事は縣廳の凡ての官吏と松江市民の重なる者を率ゐて來る。一同起立して知事に挨拶する、つぎに國歌は合唱される。

それから知事は壇に上つて勅語を取り出す、絹表裝の卷物になつた漢字交りの書き物である。知事は徐ろに織物の包裝からこれを引き出して恭しく額に捧げ、これをほどいて再び又額に捧げ、しばらく嚴肅に一息ついて後、彼の朗らかな深い聲で流暢なる辭句を、古風な讀み方で讀み始める、その讀み方は一種歌のやうである——

「朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ

顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ」

それから知事と校長は短い話をする、勅語の深い意味について注意し、かつ一同にこれを記憶し且つ固く守るべき事をすすめる。

そのあと生徒はその日休みとなる、すでに聞いたところを一層よく反省するためである。

八

近代日本の教育制度では凡て教育は極めて親切に穏かに施される。教師は只教師である、英語の意味で云ふマスターと云ふ者に當らない。生徒に對してただ先生即ち兄の關係を有するだけてある。教師は生徒に對して、自分の意志を押し通さうとはしない、罵る事は決してしない、批評がましい事も餘りしない、罰する事も餘りない。日本の教師て生徒を打

つ者は決してない、そんな事をしたら、その人は直ちに自分の位置を捨てねばならない。敎師は決して怒らない、もし怒つたら生徒の面前及び同僚の心中に自分の價値を下げる事になる。實際日本の學校には罰はない。時々大のいたづら者が、休憩時間に校舍內に留め置かれる事はある、しかもこの輕い罰も直接敎師が課するのではない、敎師の苦情をきいて校長が課するのである。こんな場合でもその目的のあるところは娛樂を奪うて苦痛を與ふるのではなく、一過失を示して一般の戒めとするに過ぎない、そして多數の例によれば、一人の少年が自分の仲間の前で自分の過失を深く自覺せしめられる事は、過失をくりかへす事を妨ぐるだけの力は充分ある。鈍い生徒に餘計の課業を强ゆるやうな或は四五百行を寫して眼を勞せしむるやうな殘酷な罰は夢にも見られない。又かりにこんな種類の罰則があつたとしても現在の狀態ではもはや生徒自身が許して存し置かないであらう。日本國中到るところの敎育當局者の大概のやり方は罰してもしなければ充分に制し切れない生徒はその學校に置かないのである、しかし放校と云ふ事もまれにしかない。

學校から家に歸る道すがら城內の廣場を通つて近路をする時に、私は屢〻美はしい物を見る。着物をきて、草履をはいて、帽子を冠らない三十人ばかりの小さい少年の一組がや

はり日本服を着た立派な若い日本の教師に行進しかつ歌ふ事を習つて居る、歌ふ時に列をつくつてそして小さい素足で拍子をとつて居る。教師は愉快なはつきりした高調子の聲の人である、列の一方に立つて歌を一行づつ歌ふ、つぎに凡ての少年がそれにならつてそれを歌ふ。今度はそのつぎの一行を歌ふ、又それを一同がくりかへす。もしまちがへば又改めてその歌を歌ひ直さねばならない。

　それは日本の英雄愛國者のうちの最も貴い楠正成の歌である。

九

　私は教師の方で嚴に失する事があれば、學生の方で中々容赦しないと云つて置いたが、この事は英人や米人の耳に變にきこえるかも知れない。トム・ブラウン[譯者注一]の學校は日本に存在しない、それより通常の公立學校は、デ・アミチスの『クオレ』[譯者注二]にあんなに面白く寫してある理想的伊太利の學校によほど似て居る。その上日本の生徒は一種の獨立を享有してゐてそれを當然と心得て居る、これは西洋の人が嚴しい訓練に必要と考へて居る事と全く反對である。西洋では教師は生徒を放校するが、日本では丁度それ程生徒が教師を放逐す

る事がある。各公立學校は熱心な元氣のよい小共和國で校長と敎師はそれに對して單に大統領と內閣の關係を有するのである。實際校長と敎師は東京の文部省の推薦によつて縣廳が任命したのではあるが事實に於ては彼等の能力及び人格が學生によつて認められて始めてその地位を維持するのである、もし能力なり人格なりに缺くるところがあると思はれる場合には一種の革命的運動によつて放逐されがちである。生徒は彼等の力を時々濫用するとよく云はれて居る。しかしこの說は嚴格なる英國風の訓練を非常に過信して居る西洋人の口から出るのである。（これについて、橫濱の一英字新聞が權力主義を輸入する事を主張した事を思ひ出す）私の觀察は私につぎの事を知らしめた、そして多く經驗をつんだ他の人々もさう信じて居る、卽ち敎師に反抗する生徒の大概の場合に於て、道理が生徒側にあるのである。生徒が嫌ふ敎師を侮辱したり、或は敎場で邪魔をしたりする事は殆んどない、ただその敎師の止められるまでは學校に出ないのである。個人的感情は私の知り得る限りではこんな要求の第二の原因となる事は、時にはあるかも知れぬが、第一原因となる事は殆んどない。擧動が冷淡であるとか、或は更に進んで不親切であると云はれる敎師でも、敎師としての資格、或は公平の念があると生徒の信じて居るうちは、生徒はその敎師に服し又尊敬する、そして生徒は敎師の不公平を發見するに銳敏なると共に、その才能

を認むる事も鋭敏である。又一方に於ては教師の性質がよいと云ふだけでは智識の不充分な事及び智識を傳へる熟練の不足と云ふ事を償ふ事にはならない。私は近傍のある公立學校で化學の教諭を止めて貰ひたいと生徒の要求した例を聞いた。この不平を述べる時、彼等は打明けて云つた『私共はこの先生が好きです。先生は親切です。先生のできるだけをつくして居られるのです。が先生は私共の習ひたいと思ふだけ私共に教へる事はできません。質問に答へる事ができません。先生のなさる實驗の説明ができません。前の先生はこんな事は皆できました。私共は別の先生が欲しいのです』調べて見ると生徒側の云ひ分は全く事實ときまつた。この若い教師は大學の卒業生であつた。よい推薦を受けて來たのであるが教へようとする科學の周到なる知識と教師としての經驗とを缺いてゐた。日本では教師が學位があるので成功するとはきまらない、ただ實際の知識とその知識を容易に又充分に傳へる技倆とによつて成功するのである。

譯者註一。Thomas Hughes（1823—97）の小説 Tom Brown's School-days に表はれた Rugby の學生生活、それには爭鬪も友情も、惡戯も勉强もある。

譯者註二。Cuoré これは日本にも『愛の學校』『學童日誌』など種々の飜譯も、抜萃もあつて人の知るところ、イタリーの小説家 Edmondo De Amicis（1846—）の作。

一〇

今日は天長節である。日本國中の大祭日である、この日は授業はない。が八時に學生敎師悉く天長節を祝するために尋常中學校の大講堂に集る。

講堂の敎壇に黑い絹をかけた卓が置いてある、この卓の上に天皇、皇后兩陛下の御眞影が金の枠に入れて相ならべて眞直に安置してある。敎壇の上になつた部分は旗と花環で裝飾してある。

そのうちに市長、聯隊區司令官、警部長、その他凡ての縣官を引きつれて知事が來る、金モールの大禮服をつけた知事はフランスの將官のやうに見ゆる。これ等の人々は敎壇の左右に默して座につく。つぎに學校のオルガンが突然ゆるやかな嚴肅な美はしい國歌を奏し始むる、凡ての列席者は百代の敬愛をうけて尊くなつて居るこの古への歌詞を歌ふ。

きみがーあ代ーをは
ちよにーいーーいやちよにさざれー

いしの

いはほとなりて

こけの

むーうすーうまーあーあーで

國歌が終る。知事は講堂の右側から威嚴のある徐ろな步調で敎壇と御眞影の前方の場所の中央に進み、御眞影に向つて鄭重なる敬禮をする。つぎに敎壇の方へ三步進んで止り、再び敬禮する。つぎに更に三步進んで最敬禮をする。つぎに六步退いて又敬禮をする。それから席にかへる。

そのあとで敎師は六人づつ同じ美はしい敬禮をする。悉く御眞影に對して敬禮を終つた時、知事は壇に上つて生徒に向ひ、天皇、國家、及び敎師に對する學生の本分について少しの巧妙なる注意を與ふ。それから再び國歌をうたふ、そして一同はその日の殘りを面白く過さうとして退散する。

二

尋常中學校の生徒の過半數はただ通學生（フランスでならエキステルンと云ふところ）である。午前學校に行き、正午に歸りて晝飯をたべ、再び短い午後の課業に出るために一時にかへる。市の生徒は悉くその家庭に居るが市中に親戚をもたない邊鄙な田舍から來て居る多數の生徒がある、そこでこれ等のために學校には寄宿舍の設けがある、そこでは特別な敎師がゐて健全な道德的訓練を行うて居る。しかし餘力あつて別に下宿（但し風儀のよい物に限る）を選ぶ事も、又はどこかよい家庭に宿を求むる事も彼等の自由に任せてある、しかしこの二つの何れかを選ぶものは餘りない。

私は日本程敎育の費用が安價なるところはどこかにあるだらうかと疑ふ。しかもその敎育は、最も優秀なそして進歩した敎育である。出雲の學生は、それを記述しただけで讀者を驚かす事疑を容れない程、西洋人の必要なる費用なる物の考よりも、遙かに少い金額で生活する事を得るのである。米貨殆んど二十弗[譯者註]に相應する高があれば一ヶ年の下宿料に充分である。授業料をこめて一切の費用は一ヶ月七弗程である。間代と一日三度の充分なる

食事のために四週間毎に一圓八十五錢を拂ふに過ぎない。卽ち米貨一弗半よりも多くはない。もし非常に貧窮なれば制服を着るにも及ばない、しかし上級の殆んど凡ての生徒は制服をつけて居る、帽、革の靴をこめて一切の制服の費用は、安い方にすれば三圓半程にすぎない。革の靴をつけない者は學校に居る間は、騷々しい下駄を輕い草履にはきかへねばならない。

譯者註。二十弗は二十圓、當時は下宿料一ヶ月一圓五十錢程であつた、寄宿舍では一圓八十五錢であつたとここに記してあるから七弗卽ち七圓は過大。

一二

しかし尋常中學校に於てさほど立派に與へられる智育は、結局、生活の安い事、授業料の安い事などから想像せられるやうに、さほど安くは得られない。卽ち自然は更に高い授業料を要求して、嚴重に、人の生命に於てその負債をとり立てるからである。

この道理を理解するためには、先づ現今の出雲の學生が米飯と豆腐を喰べながら學ばねばならない近世の學問は、贅澤なる肉食によつて强健になつた頭腦によつて發明され發達

され總合されたのである事を知らねばならない。西洋が日本人の前になげ出した文明を消化する事が充分できるためには、一般の粗食と云ふ事は日本の教育者が解かねばならない難問題である。ハーバート・スペンサーが示した通り、人間の元氣の多少は肉體的精神的何れを問はず食物の滋養如何による物である、そして歴史は美食の人種は氣力旺盛かつ優勝なる事を示して居る。列國民の將來に於て恐らく頭腦が勢力を占むるであらう、しかも頭腦も活力の一つであるからやはり胃を通じて養はれねばならない。全世界を動かした思想でパンと水とでてきたものはかつてなかつた、これ等の思想は、ビフテキとマトンチョップ、ハムエッグ、豚肉とプデンによつてつくられ、さらに強い葡萄酒、強い麥酒、強いコーヒーによつて刺激されたのである。又科學は生長ざかりの少年青年は大人よりも更に一層の滋養物を要する事、殊に又學生は頭腦の勞働より起る肉體的疲勞を恢復するために強い滋養を要する事を教へる。

しかも勉學のために日本の學校生徒の身體が受くる疲勞は如何程であるか。それは歐米の學生の身體が同じ年頃に於て受ける物よりは、たしかに大きいのである。日本の少年に漢字の眞草行の三體や、正確ではないがもつと簡單な言葉で云へば日本文學にある莫大なる文字について必要なる知識だけを具へるために七年の勉學が必要である。その文學も學

ばねばならない、國語の二種類の技術卽ち言文の二體を學ばねばならない、勿論、同じく國史と國民道德を學ばねばならない。これ等東洋の學問の外にさらに履修すべき學科として、外國歷史、地理、算術、天文、物理、幾何、生物學、農學、化學、圖畫、及び數學がある。最も困る事には、英語を習はねばならない、この英語の日本人に困難な事は日本語の組立てを知らない人には想像もできない、この英語なる物が日本語と非常に違つて居るので、極めて簡單な日本語の句でも、言葉の直譯や、或は思想の形だけの直譯だけでは、とても理解する事はできない。そして日本の學生は英國の少年がとても生きて居られないやうな食物をたべながら凡てこれ等の學問を學ばねばならない。その上いつでも貧しい木綿のうすい着物を着て、大寒の時でも敎場にはただ灰の中に赤い炭の少し入つて居る火鉢が一つあるだけで、外に何の火の氣もない。日本帝國が彼等に與へた課程を立派に通過した學生でも、その長い勉强の結果は西洋の學生によつて表はされた結果と同じ程度には殆んどならないのは不思議な事であらうか。追々に學生の境遇もよくなりかけて居る、しかし現在の處新しい過勞のために若い身體若い頭腦の破壞し去る事が餘りに多い。しかも破壞し去るのは鈍い人々でなく、かへつて學校の花、級中の秀才である。

しかし學校の經濟の許す限り生徒を健康にかつ愉快にするためのあらゆる方法、——運動及び娛樂の種々の機會を與ふるためのあらゆる方法は講じてある。勉學の課程は嚴重だが時間は長くはない、そして毎日五時間のうちの一時間は兵式體操に捧げてある、政府から授けてある本當の銃や劍を用ふるので生徒には一層興味がある。學校の近くに立派な運動場がある、ブランコや平行棒や木馬などが備へてある、中學校だけの體操教師が二人ある。ボートがある、天氣さへよければいつでも美しい湖上で面白くこぎ廻る事ができる。知事自ら監督して居る劍道の道場がある、知事は目方の重い人だが、知事の時代の最も巧妙な擊劍家の一人と云はれて居る。敎へられて居る型は古風の物である、劍を使ふに兩手を用ふるのである、突く事は餘りない、殆んど悉く重い打ち込みである。竹刀は竹の長いササラを結んで昔ローマのファシーズ（譯者註）を長くした形に似たやうにできて居る、面とさしこの上衣はその打擊がひどいから頭と胴を保護して居る。この種類の擊劍は非常の敏捷を要する、そして私共の西洋のもつとはげしい流儀よりも一層盛んな運動になる。しかし又別

種類の健康なる運動は著名の地へ遠足をする事である。このために特別の休暇ができて居る。生徒は列をつくり、愛する數人の先生に伴はれ、事によれば彼等のために料理をしてくれる小使をつれて町から出かける。かくして百哩或は百五十哩も旅をする、そして又かへる、しかしもしその旅行が非常に長い場合にはただ强壯な生徒だけが行く事を許される。ワラヂ卽ち素足にきちんと結んである本當の藁の履物ででかける、ワラヂは全く足を伸縮自在ならしめる、豆をつくつたり雞眼（タコ）をでかしたりなどしない。夜は寺に寢る、そして料理は野營の兵士の料理のやうに野天に於てなされる。

このやうなはげしい運動を餘り好かない者には學校の書庫がある。これは年々に增加して行く。生徒が編輯し發行する月刊の學校雜誌がある。又生徒會がある、その定期の會には生徒に興味があると思はれるあらゆる問題について討論が催される。

譯者註。棒を束ね其間より斧の刃を現せしもの、長官外出の時隨行員が擔ひて先頭せし物（ローマ史）

一四

一八九一、四月四日

三四五年級の生徒は私の出すやさしい題について短い英文を一週一回書いて見せる。概して問題は日本に關する物である。日本の生徒にとつて英語の非常にむつかしい事を考へて見れば、私の生徒のうちの或者が彼等の思想を英語て表はす技倆は驚くべきてある。彼等の作文は、個人の性格てはなく國民的感情又は或種の集合的感情の現れたる物として私にとつて又別種の興味がある。普通の日本の生徒の作文に於て私に最も驚くべき事と思はれるのは、彼等は全く個人的特色をもたない事てある。二十の英作文の手蹟までも奇妙に親類的相似を有せる事が分る、この結論を動かす事ができない程に、著しい除外例は先づない。ここに私の机上に最もよい作文の一つがある、その級中の一番の生徒の書いた物てある。ただ云ひまはし方について僅かの誤りを直したに過ぎない。

月

『月ハ悲メル人ニハ悲シク見エ、幸福ナ人ニハ愉快ニ見エル。月ハ旅行スル人ニ故郷ヲ思ハセテ懐郷病ヲ起サセル。故ニ逆臣北條ノタメ隱岐ニ流サレタ後醍醐天皇ハ海岸デ月光ヲ見テ「月ハツレナシ」ト叫ビ給ウタ。

我等ハ雲ナキ月ヲ見ル時、我等ノ心ニ名狀シ難キ感情ヲ起ス。

我等ノ心ハ月光ノ如ク澄ミ且ッ平靜デアルベキデアル。

詩人ハヨク月ヲ日本ノ鏡ニ比ベル、滿月ノ時ニハソノ形ハ全ク同ジデアル。

風流ナ人ハ月ヲ見テ樂ム、コノヤウナ人ハ月ヲ見ルタメニ水ニ臨ンダ家ヲサガシ、ソシテ月ニ關スル詩歌ヲツクル。

月ヲ見ルニ最モヨキ場所ハ月ケ瀬〔譯者註一〕ト姨捨山デアル。

月光ハ美醜貴賤ヲ普ク照ラス。コノ美ハシキ明光ハ我、汝ノ物デナク、一切平等凡テノ人ノ物デアル。

月ヲ見ル時、ソノ滿チ又缺クルハ凡テノ物ノ頂上ハ又ソノ降下ノ始マリデアル事ノ道理ヲ示シテ居ルト思ハネバナラナイ』

日本の教育法に全く通じない人なら、何人でも以上の作文を見て、それに思想と想像の多少の斬新な力を示して居ると思ふてあらう。しかし事實はさうでない。私は同じ題の他の三十の作文に於て同じ思想及び比喩を見出した。實際中學生の同じ題の作文が如何程多數でも、必ずその思想感情に於て甚だ相似て居るのである、しかしそのために面白味が少いと云ふわけではない。概して日本の學生は、想像の方面に於ては殆んど獨創力を表はし

てゐない。その想像は數百年前、幾分は支那に於て、幾分は日本に於て、彼の爲に既に作つてあるのである。幼年時代から彼は二三の早い筆で一枚の紙に寒い朝、熱い日中、秋の夕の感じを容易に描き出すあの不思議な美術家が見たと同じやうに自然を見、又感ずるやうに訓練されて居る。少年時代から彼は古文學に見出される最も美はしい思想や比喩を記憶するやうに教へられて居る。どの少年も青空に立てる富士の形は逆さにした半開の扇に似て居る事を知つて居る。どの少年も滿開の櫻花は最も美しい紅の夏の雲が枝のうちに捉へられたやうに見ゆる事を知つて居る。どの少年も雪の上に木の葉が散つたのと白紙の上に筆で文字の散らし書きにしてあるのとの比喩を知つて居る。どの少年少女も雪の上の猫の足跡が梅の花に似て居る事、雪の上の木履のあとが二の字に似て居ると云ふ比喩の歌句[註一]を知つて居る。これ等はずつと古への詩人歌人の思想である。もつと美はしいものを發明する事は甚だ難いであらう。作文に於ける能事はこれ等の古への思想を正しく記憶し巧みに配列する事で終つて居る。

又同じやうによく學生は、生物であれ無生物であれ殆んど凡ての物に「敎訓」を見出すやうに教へられて居る。私は百ばかりの題（日本の題）を與へて彼等を試みた。題が日本

の物であれば、私は彼等が必ず教訓を見出す事を知つた。私が『螢』と云へば彼等は直ちにその題を選んで燈火を買へない支那の學者が提灯のうちに多數の螢を入れ、夜になつて勉强するだけの光りを得て、後に大學者になる事を得たと云ふ話を私のために書いた。私が『蛙』と云つた時、彼等は柳の枝に飛びつかうとした蛙の撓まない忍耐を目擊して大學者にならうと志を起した小野道風の物語を私のために書いた。私がかく誘ひ出した教訓の少しの例を附加して置く。原文に於て普通のいくつかの誤りを直して置いたが少し變つた處はそのままにして置いた。

牡丹

『牡丹ハ大キク又見テ綺麗デアル、ガ、イヤナ香ヒガアル。コレハ自分ニ人間社會ニ於テ只外見上美麗ナ物デ自分等ノ心ヲ動カシテハナラヌ事ヲ思ヒ起サスベキデアル。只美ノタメニ心ヲ動カス事ハ自分等ヲ恐ルベキ不幸ナ運命ニ陷ラシムルヤウニナル事モアル。牡丹ヲ見ルニ最モヨイ場所ハ中海ニアル大根島デアル。花ノ咲ク頃ハ島中一面牡丹デ紅クナル』

龍

『龍ガ雲ニ乘ッテ天ニ行カウトスル時急ニ恐ロシイ嵐ガ起ル。龍ガ地上ニスム時ハ石又ハソノ他ノ物ノヤウナ姿ヲシテ居ルト云フ事デアル、シカシ上ル時ニハ雲ヲ呼ブ。龍ノ體ハ種々ノ動物ノ各部分デデキテ居ル。虎ノ目、鹿ノ角、鰐ノ胴、鷲ノ爪、ソシテ象ノ鼻ノヤウナ鼻ガ二ツアル。ソコニ教訓ガアル。自分等ハ龍ノヤウニナラウトハ勉メテ他人ノ長所ヲ悉ク見テソレヲ具備セネバナラヌ。』

龍のこの文の終りに先生への手紙がついて居る。それに『私は龍などある物とは信じません。しかし龍に關する種々の話や不思議な繪があります』と云つてある。

蚊

『夏ノ夜私共ハカスカナ聲ノヒビキヲ聞ク、ソシテ小サイ物ガ來テ、甚ダヒドク私共ノ體ヲ刺ス。コレヲ蚊ト呼ブ、英語デハ「もすきとーず」私ハコノ刺サレル事ハ有益ト思フ、何故ナレバ私共ガソロソロ居眠リヲ始メルト蚊ガ來テ、小サイ聲ヲ發シナガラ刺ス、ソコデ私共ハ刺サレテ勉強スルヤウニサマサレル』

つぎは十六歳の少年のものであるが、餘り知らない問題について半解の知識を示した物として特色があると云ふ點でここへ出す。

歐洲ト日本トノ習慣

『歐洲人ハ甚ダ狹イ着物ヲ着ル、又家ニアッテモ常ニ靴ヲハイテ居ル。日本人ハ甚ダユルイ着物ヲ着テ、戸外ヲ歩ク時ノ外ハ靴ヲハク事ハナイ。

私共ノ非常ニ不思議ニ思フ事ハ歐洲デハ凡テ妻ハ兩親ヨリモ夫ヲ餘計ニ愛スル事デアル。日本デハ夫ヨリモ兩親ヲ多ク愛シナイ妻ハナイ。

又歐洲人ハ妻ト路ヲ歩ク、私共ハ八幡ノ御祭リノ時ノ外ハソンナ事ハ全クシナイ。

日本婦人ハ男子ノタメニ女中ノ如ク使ハレ、歐洲婦人ハ主人ノ如ク尊敬サレル。私ハコレ等ノ習慣ハ何レモ惡イト思フ。

私共ハ歐洲婦人ヲ遇スル事ハ甚ダ面倒ナ事ト思フ。ソシテ私共ハ何故婦人ガ歐洲人ニサホドマデニ尊敬サレルカ、ソノ理由ヲ知ラナイ』

外國の問題に關して教場での會話も亦同じやうに面白く又啓發される事が屢〻ある。

『先生、歐洲人が自分の父と妻と一緒に海に落ちたと假定して、そして自分だけ泳げる場合には先づ自分の妻をさきに助けようとすると聞いてゐますが本當でせうか』

『多分さうでせう』と私が答へる。

『何故でせう』

『一つの理由は歐洲人は弱い者を第一に、殊に女や子供を助けるのを男子の義務と考へて居るからです』

『そして歐洲人は自分の父母よりも自分の妻の方を餘計に愛しますか』

『いつでもさうと云ふわけでないが、しかし先づ大概はさうです』

『でも、先生、私共の考によればそれは甚だ不道徳です』

……『先生、歐洲人はどんな風にして赤ん坊をもつてあるきますか』

『抱いてあるきます』

『隨分つかれませう。そして赤ん坊を抱いて女はどれ程あるけますか』

『强い女なら赤ん坊を抱いて餘程あるけます』

『しかしそんな風に赤ん坊を抱いてゐますと手が使はれませんでせう』

『よくは使はれません』

『それではそんな風に赤ん坊をもつてあるくのは餘程惡いやり方です』

譯者註一。月ケ瀬と云ふから月もよからうと出雲の學生が考へた。

譯者註二。『初雪や狗の足跡梅の花』關東では犬の足跡と云ふが、北陸、山陰その他ではかく云ふ。『二の字ふみ出す木履かな』これも『二の字二の字の下駄のあと』と云ふ處もある。

一五

一八九一、五月一日

私の愛する學生は午後によく私を訪問する。彼等は始めに來訪を知らすために名刺を出す。お上りと云はれて戸口に、履物をぬぎ私の小書齋に入り、平伏してお辭儀をする、そして私共は床の上に一同坐る、この床は凡て日本の家では柔かなしとねのやうになつて居る。女中が座ぶとんと菓子と茶を持つて來る。

日本人のやうに坐るには練習が要る、そして歐洲人のうちにはどうしてもこの習慣のできない人がある。實際この習慣に慣れるためには先づ日本服を着る事に慣れねばならない。

しかし一度かく坐る習慣ができたら、これがあらゆる姿勢のうちで一番自然で又安樂な姿勢である事が分る、そして食事の時、讀書の時、喫烟の時、談話の時、どうしてもこの方法を好んで取るやうになる。歐風のペンで書く場合には或はこれがよいと勸められない、私共西洋風の書き方は手首を据ゑねばならない、しかし日本の筆で書くのにはこの姿勢が一番よい、筆を使ふのには腕は全く支へられないで、肘の運動でするからである。私は一年以上も日本の習慣になれたあとで、今椅子を用ふるのが大分面倒になつて來た事を自白せねばならない。

互に挨拶して座ぶとんの上に坐つたのち、暫らくつつましく皆默つて居る、それから先づ私から口を切る。學生のうちには中々よく英語を話すのがある。簡單な文句を用ひて熟語などさけて一言一句徐ろにはつきり云へば皆によく分る。彼等の知らない言葉を用ひねばならぬ時には英和字書を參考する、それには假名と漢字の兩方でそれぞれ國語の意味がつけてある。

大概私の客は長座をするがその長座が退屈だと思つた事は殆んどない。彼等の話と思想はこの上もなく簡單で又率直である。彼等は學問をしに來るのではない、學校以外に先生に習ひに來る事は不公平だと云ふ事は知つて居る。彼等は私に特に興味があると思ふ事に

ついて靈に話をする。どうかすると殆んど話をしない事がある、しかし一種の愉快な默想に耽つて居るやうに見える。彼等の來る眞の理由は同情、意氣投合の靜かな喜びを得んがためである。智力上の同情でなく、只全く好意を表はす同情である、友人と全く氣樂にして居られる時の樂しさである。彼等は私の書物や繪をのぞく、時々私に見せるために書物や繪（よほど面白い變つた物）、私には買へないのが甚だ殘念なやうな、祖先傳來の家寶などを持つて來る。彼等は又私の庭園を見る事を好んで私よりもはるかによくその庭にある物を賞翫する。よく花をもつて來てくれる。どんな事があつても、うるさい事、失禮な事、物珍らしくせんさく好きてあつたり、おしやべりてあつたりする事は決してない。この上もなく丁寧で禮儀正しい事は（フランス人でも考へられぬ程の度合で）、毛髮の色や皮膚の色と同じく、出雲の少年に固有な物と見える。禮儀正しいと同じく又親切である。私を不意に喜ばせようと工夫するのが、私の少年達の特に喜ぶ事の一つである、そこで種種變つた物を私のうちに持つて來るか、或は持つて來て貰ふやうに取計らふ。

　かうして私が見る事の特權を得た奇妙な物、綺麗な物のうちで、阿彌陀如來の或不思議な掛物程、私を喜ばせた物はない。それは大分大きな掛物で、私に見せるために或僧侶から借りたのてある。佛は片手をあげて何か說教の態度で立つてゐ給ふ。御頭の後ろに大き

な月形の後光がある、その月の面を横切つて極めてうすくたな引ける線が流れ出て居る。御足の下には烟の渦卷のやうに重い黑い雲が渦卷いて居る。單に色彩と考案の作品として見ても、それは驚くべき物である。しかしその眞の不思議な點は、色彩や考案に存するのではない。詳しく檢べると凡ての影、雲は只鋭い眼で始めて認むる事ができる程小さい漢字の珍らしい經文からできて居ると云ふ驚くべき事實が分る。そしてこの經文は二つの名高い經、觀無量壽經と阿彌陀經の全文で『蚤の手足よりも大きくはない文字』になつて居る。そして御佛のころもの縫目のやうな强い黑線と見ゆるものは眞宗の稱名、數千遍くりかへして唱へられる『南無阿彌陀佛』の文字でできて居る。昔、何處かのうす暗い御堂で長い忍耐、愛すべき信仰の倦まない沈默の勉强を思はせる。

又つぎに私の學生の一人がその父を說いて孔子の驚くべき像を私のうちに持つて來た、この像は明朝の末に支那でできたものと云はれて居る。人に見せるのに家から外へ持ち出されたのはこれが始めてであると聞いた。以前には誰でもこの尊像に禮拜しようとする者は、その家を訪はねばならなかつた。それは全く美はしい靑銅製である。口を開いて手をあげて、何か說いて居るやうな微笑をもらせるあごひげのある老人の形である。古風な支

那靴をはいて、流れるやうな着物には不思議な神鳥[譯者註]の繪で飾つてある。肉眼では分らない微細な點まで完全にできて居るのは全く支那人の手の驚くべき巧みを表して居るやうである、一枚の齒、一本の毛髪も苟くもしないで、悉く研究の結果であるやうに見える。

又一人の學生は私を親類の家に連れてゆき、名高い左甚五郎の刻んだと云ひ傳へられる木彫の猫を見せる、うづくまつて、じつと目を据ゑた猫である、生きた猫が『これを見て背をたてて、つばを吐きかけると云はれて居る』程眞にせまつて居る。

譯者註。神鳥、不死鳥（神話）、美麗なる鳥にしてアラビヤの沙漠に五百年乃至六百年生活してのち自ら香料などを集め來り、羽翼を以て扇いで火をつくり自らを燒いて再びその灰燼中より若く美しき姿となつて再生する。五百年乃至六百年毎にこれをくりかへすと云はれる、故に不死のしるしとなる。

一六

しかし私は今日松江に住んで居る幾人かの老美術家で更に不思議な猫を造る者があらうと内心信じて居る。そのうちに老いて尊敬すべき荒川重之助氏[譯者註]がある、この人は天保時代

に、出雲の大名に種々の珍らしい物を造つた人で、私は學校の同僚によつてこの人と交際する事を得たのである。或晩彼は私に見せるために頗る不思議な物を袖にかくして私のところへ持つて來た、それは人形である、彫刻して彩色を施した首だけで胴はない、胴は首についた小さな着物で代りにしてある。しかも荒川が手を使うてこの人形を動かすと生きて出るやうである。首の後ろは老人の頭の後ろのやうである。が、顏は嬉しさうな子供の顏である、額は殆んどない、考へ込むやうな風はどこにもない。どちらを向いてもこれを見る人は笑はずには居られぬ程、をかしい顏をして居る。これは何にも心配などのない生れつき愉快な無邪氣な『氣樂坊』である、英語では『陽氣な男』とでも云ふのであらう。これは原作ではないが有名な原物を模した物である、その原作の歷史は荒川が今一方のたもとから取り出した色のさめた卷物に書いてある、そして友人はそれを私に譯してくれる。この小歷史は昔の日本人の暮らしや考の質樸な風を面白く示して居る。

『この人形は二百六十年前、後水尾天皇のために京都の名高い能面の作者によつて造られた。天皇は御寢の前、毎夜枕の傍にいつもこれを置いて、甚だこれを愛で給うた。そしてそれにつきてつぎの歌をおつくりになつた。

世の中を　氣樂にくらせ、
何事も　思へば思ふ、思はねばこそ。

天皇崩御の後、この人形は近衛公の物となつて今もなほ同家に保存してあるさうである。百七年程前に當時の皇太后（おくり名は盛化門院）は近衛公からこの人形を借り、その寫しを造らせ給うた。その寫しを側に置いて甚だ愛で給うた。

この皇太后の崩御の後、この人形は或女官に與へられたが、その姓は書いてない。その後この女官は如何なる理由かによりて髪を斷ち尼となり信行院と云ふ名をとつた。

この信行院を知れる近藤充博院法橋と云ふ人忝くもこの人形を貰つた。

さてこの記事を書く私は一度病氣にかかつた、私の病氣は氣欝から起つた。友人近藤充博院法橋私を訪うて『あなたの病氣を直す物を持つて居る』と云つて、うちに歸つた。そして直ちに歸つてこの人形を持つて來て私に貸した、それを見て私の笑ふやうに枕もとに置いて行つた。

その後私も信行院尼を幸に知つてゐたので、この人を訪ねてのち、この人形の歴史を記しそれについて一首の歌をよんだ』

(九十年程前の日附、記名なし)

譯者註。荒川重之助(龜齋)出雲の有名なる彫刻家。

一七

ある種類の世間の信仰については學生等は健全な懷疑をもつて居ることが分る。無學な階級殊に農民の間に昔からあつて今も行はれて居る迷信、たとへばお守りやお札を信ずるやうな事は科學的教育によつて急速に滅亡しかけて居る。佛教の外形――偶像、佛骨、通俗な儀式――は殆んど一般の學生に何等の感動を與へない。學生は外人のやうに、偶像や宗教上の傳說や比較宗教には興味をもたない、十中八九は周圍にある世間の信仰を代表せる種々の物について寧ろ恥辱を感じて居る。しかし凡ての形式の根本にある深い宗教心は彼等に存して居る、佛教にある一元的思想は新教育のために薄弱にならないで、かへつて發達生長するやうになつて居る。低級の佛教に及ぼす學校の影響は同じく又低級の神道にも及んで居る。學生の全部、或は殆んど全部は皆眞面目な神道に屬して居る、しかし或一

神の熱心な崇拜ではなく、むしろ高等神道が表はして居る物、卽ち忠、孝、父母教師長上に對して從順なる事、祖先尊敬を眞面目に守るのである。卽ち神道は信仰以上を意味する。私が始めて、その特權を許された最初の西洋人として、杵築の大社の前に立つた時、崇高な念と共にかくの如き思想が私に浮んだ。『これは一人種の祖先の社である、これは過去に對するその國民の尊敬の代表的中心である』かくて私も亦この人民の祖先の記念に尊敬を表した。

私が當時感じたと同じく、敎育をうけて一般信仰の標準以上に上つた明治時代の聰明な學生も亦、感ずるのである。そして神道は又彼等に取つて（彼等がその理由を問ふと否とに關せず）家族間の凡ての道德を代表し、又生命と雖も、義務のためには、その義務を果す一道具としての外何の價値もなくなる程、拔くべからざるやうに固有となつて居る忠義の精神を代表して居る。未だこの東洋はその高尙なる方の道德の源を理窟に訴へて解釋する必要はない。西洋種族に於て小兒が鍵板を打つだけの力と彈力が小さい指先にできれば、早速複雜な樂器を彈ずる事のできる程、音樂的知覺の發達して居る事を想像せよ。生得の宗教や本能的の義務の、出雲に於て如何なる意味を有せるかは、かかる比喩によつて始めて分るであらう。

西洋に於て、迷信的信仰から急にさめた自然の反動として起つた最も普通の突飛な破壞的な方の懷疑說は、私の學生のうちに痕跡も認むる事はできない。しかし、かかる感情は外ては（殊に東京では）大學生の間などに見出されよう、その一人の大學生は莊嚴な鐘のひびきを聞いて私の友人に叫んだ。『十九世紀に於て未だこんな鐘などをきかねばならぬと云ふのは恥ではないか』

しかし、物ずきな旅行者のためにこの機會を利用して云うて置く、新しい教育をうけた日本の紳士に佛教の事を說くのは、知識のために信條や儀式を超越して居る人々に本國で基督教を說くと同じく感心せぬ事である。勿論宗教や傳說の硏究をする外人を喜んで助けてくれる日本の學者はある、しかしこれ等の專門家でも『世界見物』的種類のつまらぬ好奇心を滿足させるやうな事はない。又云うて置く、一般人民の宗教的思想や迷信を學ばうと望む外人は教育ある人々からでなく、必ず人民自身から學ばねばならない。

一八

各級に二三人づつある私の好きな學生のうちで、一番誰が好きとは云へない。銘々それ

ぞれの特長がある。しかしこれから書かうとする人々、石原、大谷正信、小豆澤、横木、志田の[語註二一]姓名や容貌は最も長く自分の記憶にはつきり殘るであらうと思ふ。

石原は士族で人物が非常にしつかりして居るので級中に甚だ勢力がある。外の人々と比べるといくらか粗暴な無遠慮な風があるが正直な男らしい處があるので人好きがする。何でも思ふ事は皆云つてしまふ、そして思ふ通りの調子で云ふので時々相手を迷惑させる程てある。たとへば先生の說明の仕方が惡いから、もつと分るやうに云つて下さいと平氣で云ふ。私も時々攻擊されたが、石原が惡いと思つた事はなかつた。私共は互に好いて居る。彼はよく私に花を持つて來てくれる。

或日、梅花の小枝を二つ持つて來てくれた時、私に云つた。

『先生は天長節の式に御眞影に敬禮をなさいましたのを見ました。先生は先の先生と違ひます』

『どうして』

『先の先生は私共を野蠻人だと云ひました』

『何故』

『その先生は神樣（その人の神樣）の外に尊い物はない、そして外の物を尊ぶ者は卑し

い無學の人民に過ぎないと申しました』
『どこの國の人です』
『耶蘇教の僧侶で、英國の臣民だと申しました』
『しかし英國臣民なら女王陛下を尊敬しなければならない。英國領事の事務室に入るにも脱帽しなければならない』
『本國でどんな事をなさるか知りません。けれども仰つた事は私の今申した通りでした。ところで私共は陛下を尊敬しなければならないと思ひます。それを本分と思ひます。陛下のために身命を捧げる事のできるのを光榮と思ひます。しかし先の先生は只野蠻人、無智蒙昧な野蠻人だと申しました。先生如何御考ですか』
『君、私はその人自身こそ野蠻人、野卑な無學な分らずやの野蠻人だと思ふ。陛下を尊敬し、陛下の法律に從ひ、日本のために陛下が召し給ふ時いつでも身命をなげうつ覺悟を有するのは君等の最高の義務だと思ふ。たとへ君自らが外の人々の信ずる事を悉く信じられなくとも、祖先の神々や國家の宗教を尊敬するのが君等の義務だと思ふ。それから誰が云つたにしても、君から今聞いたやうな野卑な惡口に對して憤慨するのは、國家のため又陛下のため君達のつとめだと思ふ』

註一。私は色々の級に、作文の題として『最も大切な願』と云ふ問を出した。殆んど文句まで一樣に『天皇陛下のために』死ぬ事と答へたのが約二割あつた。しかしあとの大部分にはネルソンの光榮にあやかりたい、或は英雄的行動犠牲的精神によつて日本を第一等の偉大なる國民にしたいと云ふ望みが表はれてゐた。この感心な精神が日本の青年の心に生きて居る間は日本はその前途に於て恐るべき物はない。

正信は滅多に來ないが來る時はいつでも獨りで來る。細つそりした、女性的な顏形ちの美少年で、控へ目な、全く落着いた樣子で、上品である。大分眞面目な方で笑顏も餘り見せない。聲をあげて笑ふのを私は聞いた事はない。級の一番になつて、餘りひどく努力もしないでそこに居るやうである。植物を採集したり分類したりしてひまの大部分を植物學に捧げて居る。彼の家族の男子は皆さうだが彼も音樂家である。西洋では見られも聞かれもしない種々の樂器を奏する、そのうちには大理石の笛もある、象牙の笛もある、不思議な形と音色の竹の笛もある、それから笙と云ふ鋭い支那の樂器もある、銀の枠に入れた色色違つた長さの管が十七もある一種の吹く樂器である。彼は始めて大鼓、小鼓、笛、篳篥(ヒチリキ)、それから胴の細長い鍾(ツム)のやうな恰好の、小さい鼓の羯鼓(カツコ)と云ふ物を、寺院の音樂で使用する事を私に説明した。大きな佛式のお祭りの時正信と正信の父及び弟等は寺院の樂人とな

つて皇麞と拔頭と云ふ變つた音樂を奏する。こんな音樂は西洋人の耳には始めのうちは何の趣味もないが聞くに隨つて分つて來る、そして一種特別の不思議な興味のある事が分る。正信の來るのはいつでも私の興味のありさうな佛教か神道のお祭りに參列するやうに招きに來るのである。

小豆澤と正信は全然別人種かと人が想像する程この二人は似たところが殆んどない。小豆澤は大きい骨つぽい、一見愚なやうな男である、顏は奇妙に北アメリカ印度人[四六二]に似て居る。家は富んでゐない、只一つ書物を買ふ事を除いては金のかかる娛樂をする事は殆んどできない。その書物を買ふためにも、彼は金を得るためにひまな時に働くのである。彼は本宮の衣魚である、生れつきの詮索家である。古文書の採集家である、古い寫本や稀本が反古同樣に賣られる寺町やその他の古色蒼然たる古道具屋古本屋を一軒々々徘徊して居る。彼は讀書家である、絕えず書物を借りる、そして最も價値があると思ふところを寫してのち少しも毀損しないで返してくる。しかし一番好きなのは世界各國に於ける哲學及び哲學者の歷史である。西洋哲學史要略と云ふやうなものは色々讀んだ、それから近世哲學に關するもので、日本語に譯してある物は、スペンサーの原理も加へて、皆讀んだ。私はリユイス[四六三]とジョン・フイスクを紹介してやつた、英語で哲學を勉強するのは一通りの骨折でな

かつたが兩方とも充分に分つた。幸にして彼は非常に强健であるから、どんなに勉强しても身體が惡くなる心配はない。神經は針金のやうに强靭である。しかも彼は全く禁慾家である。客の前に茶と菓子を出すのが日本の習慣であるので、私はいつでもその茶と菓子、殊に菓子は杵築でできる特に上等品で、學生が皆好きであるのを、いつも用意して居る。小豆澤だけはどんな種類の菓子も喰べようともしない、そして云ふ『私は末子ですから、直に獨立の生活をしなければなりません。私は大に艱難をしなければならないでせう。それですから今から菓子が好きになつてゐたらかへつて後に困りませう』小豆澤は人間學は中々修めて居る。生れつき注意深いのである、そして不思議な方法で松江にある凡ての人の歷史を知つて居る。彼は古い破れた錦繪を持つて來て校長が十四年前公開演說で主張した意見と今日の校長の意見とが全然正反對である事を證明した。その事について校長に尋ねると校長は笑つて『勿論それは小豆澤です。しかし小豆澤の方が正しいのです、私は當時極めて若かつたのです』と云つた。そして私は小豆澤がいつか若い時があつたらうかと不思議に思ふのである。

　小豆澤の親友橫木は滅多に來ない、いつでもうちで勉强して居るからである。彼はいつでもその級（三年級）の一番で、小豆澤は四番である。彼等二人の交際の始まりの小豆澤

の話はかうである『私は横木が來た時ぢつと見てゐました、そして餘りしやべらないで、早足で歩いて、人の目の處を眞直に見るのを見ました。そこで私はこの男の特色のある事を知りました。私は特色ある人間と交るのが好きです』小豆澤の云ふ事は全く本當である、横木は至極温和な外貌の下に非常に强い性格を持つて居る。彼は大工の子である、そして兩親はその子を中學校に出す事はできなかつた。しかし小學校で拔群の成績を示したので、富有な人[註二]が感心して學費を出さうと云ひ出した。彼は今學校の花である。彼は殊に長い目の著しく平和な顏と愉快さうな微笑をして居る。教場ではいつでも鋭い質問をする、その質問が餘り奇拔なので何と答へてよいか私は時々非常に困る事がある、そしてその說明が腑に落ちないうちは決して質問を止めない。自分が正しいと思つたら仲間の意見などは構はない。或時全級が物理の新教師の講義に出る事を拒んだ時、横木だけは彼等と同一の行動を取る事を拒んだ、先生は理想通りの先生でなくともすぐ止めて貰へさうにはない、又どんなに無經驗でも眞面目に全力をつくして居る先生に不快な念を抱かせる正當の理由がないと論じたのであつた。小豆澤は最後に彼に贊成した。この二人だけ講義に出席したので、終に殘りの學生も二週間の後には横木の意見の正しい事をさとるに至つた。又或時基督教の宣教師が卑しい手段を弄して人に改宗を施さうとした時、横木は大膽にその宣教師

の宅に赴いて彼の仕業の不德義なる事について彼と論じ、遂に彼を沈默さするに至つた。彼の仲間のうちて彼の議論の巧みな事を賞めるものがあつた。彼は答へて『僕は巧みな事はない、道德上不正な事に對して議論するのに何にも巧みである必要はない。こちらが道德上正しい事が充分分つてゐさへすればよい』少くともこれは小豆澤が橫木の云つた事を翻譯して私にきかせた物に近いのである。

註二。この種の美はしい義俠的行動は日本では珍らしくはない。

もう一人の訪問者の志田は餘程虛弱な神經質の子供で、心のうちは藝術でみちて居る。繪畫は餘程上手である、古への日本の大家の立派な繪本を一部もつて居る。最後に來た時には私に見せるために珍らしい物——天女、幽靈、などの版畫を持つて來た。私がこの美しい蒼白い顏と物凄い程細い指を見た時彼も又やがて小さい靈になりはしないかと彼のために恐れずには居られなかつた。

今私は二ヶ月以上も彼に遇はない。彼は餘程惡い、醫師が談話を禁じた程肺が惡いのである。しかし小豆澤は彼を訪うて來て日本の手紙のこの翻譯を持つて來てくれる、その手紙は病氣の少年が書いて寢床の上の壁に貼てはつて置いた物である。

『わが腦髓足下、足下は我を支配せり。足下の知れる如く今や我、自らを支配する事能はず。我願ふ、速に我を回復せしめよ。我をして多く話さしむる勿れ。我をして萬事醫師の命に服さしめよ。

明治二十四年、十一月九日。

志田の病軀より志田の腦髓へ(譯者註五)』

譯者註一。醫學博士石原喜太郎、大谷正信、小豆澤は工兵大佐藤崎八三郎、横木富三郎、志田昌吉。

譯者註二。熊本にてこの原書の校正を見せられし時、この比べやうはひどいと藤崎氏(小豆澤)が抗議した時、決して侮辱ではない、アメリカインド人は世界に於て最も勇敢なる人種であると云つてヘルンに慰められた。藤崎大佐の談話。

譯者註三。Lewes は(George Henry Lewes, 1817—1878)有名なる女流小說家(George Eliot の夫、「列傳體哲學史」「ゲーテ傳」等著作多し。John Fiske(1842—1901)アメリカの人、著作多し、進化論を基としたる著述もあり「The Idea of God」「The Destiny of Man」等あり。

譯者註四。西田千太郎氏は當時校長心得の如き地位にありし故、西田氏の事。

譯者註五。病軀、腦髓等の譯は志田の原文を知つて居られる小豆澤氏(藤崎大佐)の教示による。

一九

一八九一、九月四日

長い暑中休暇は終り、新學年は始まる。

隨分變つて居る。敎へた生徒のうちで死んだ者もある。卒業して松江を永久に去つた者もある。又敎師で變つた者もある、代りの人々も來て居る、そして新校長が來て居る。

又なつかしい知事も行かれた、東北の寒い新潟に轉任された。榮轉であつた。しかしこの人は出雲を治めた事七年であつた、そして誰でもこの知事を愛したが、父のやうに思うてゐた學生等は特に愛してゐた。松江市の住民が別れのために河に集つた。汽船に乘るために通る道筋の町々、橋、波止場、屋根までに人々が群をなして見納めに知事の顏を見ようとあせつた。泣いて居る人が數千あつた。汽船が波止場を離れる時、アアアアアアアアアアアと云ふ叫びが起つた。これは知事の行を盛んにするつもりなのだが私には松江全市の悲みの泣聲のやうに思はれた、そして再びこんな聲を聞きたくはないと思ふ程憂を帶びた物と思はれた。

初年級の姓名と顏は皆自分に珍らしい。疑もなくこれは學校で始めて敎へた日の氣分が

今朝一年甲組の教場へ入つた時、非常にはつきり私に又かへつて來たからである。
日本の教場に入つて、私の前に若い顏がずらりとならんだのを見渡す時の始めての氣分は妙に愉快である。始めての西洋人の眼には見慣れない顏ばかりであるが、どの顏にも共通な、名狀のできない愉快な物がある。はつきりした强い印象を與へる特色のある物はない、西洋人の顏と比べると、それ等の顏は未製品にしか見えないほど、輪廓などおだやかである。喧嘩好きも亦控へ目も好奇心も亦無頓着も少しも表はれてゐない。中には充分發達した靑年の顏だが、何とも云へぬ程子供らしい若々しさと正直さを表はして居るのがある、平凡な顏もあれば目立つ顏もある、又、女のやうに綺麗な顏も少しはある。しかし何れも皆著しい溫和と云ふ特色を表はして居る、全く落ちついて素直な點を除いて愛憎その他何等の念も表はれてゐない佛像の夢みるやうなおとなしさである。後になつてこの溫和な平靜なやうすに、もはや氣がつかなくなるであらう、段々慣れるに隨つて、どの顏にもこれまで氣づかなかつた特色が次第に表はれて、諸君に個人的區別ができるやうになるであらう。しかしその始めての印象が諸君と共に殘るであらう、そして長く親しんだあとで始めて充分分る日本人の性格の或點を、不思議にも豫め示してゐた物である事を、種々の經驗をへたのちにさとる時が來るであらう。始めてのこの印象の記憶のうちに個人性のな

い愛すべき點と個人性のない弱點とを有する日本人の魂を少しのぞいた事を認むるであらう、——窒息するやうな氣壓から急に輕い明るい自由な自然のまゝの空氣の中へ出た時急に清々した感じをもつた事にのみ比べられるやうな精神的安樂を、獨りて居る西洋人が感ずるやうな人生の性質を少し見た事を認むるのであらう。

二〇

文明人の恐るべき顏について書いたのは奇人フーリエではなかつたか。誰にしてもこの極東で歐洲人の顏を始めて見た時どんな結果があつたか、その人に分つたらその人の骨相學的學說が實際の解決を見たらしく思つたてあらう。本國で容貌について『綺麗である』『人好きがする』『特色がある』と教へられて居る物は、支那や日本てはその通りの印象を與へない。西洋のイロハ文字程自分等に親しい顏面表情の種類は、始めての東洋人には分らない。東洋人の始めに認むるところは民族の特性てあつて個性てない。凹んだ眼、凸出した額、鷹のやうな鼻、大きな顎の進化論上の意味（侵略的勢力習慣のしるし）は飼はれた動物が始めて生物を捕食する敵を見て直ちにその性質をさとると同じ種類の直覺力て

穩やかな人種にさとられるのである。歐洲人に滑らかな顏附の、細つそりした、たけの低い日本人は子供のやうに見える、そして『ボーイ』は橫濱の商人の日本人の從者が今日も呼ばれる名てある。日本人にとつては始めての、赤い毛の、あばれものの、醉ひどれの歐洲水夫は惡魔か、猩々か、海の怪物に見えた、そして支那人には西洋人は今も『洋鬼』と呼ばれて居る。日本に於ける外國人の大きな身長、大きな力量、烈しい歩きぶりは彼等の顏から來る變な感じを強くして居る。子供等は彼等が往來を通つて居るのを見て恐れて泣き出した。そしてもつと邊鄙な處ては日本の子供は歐米人の顏を始めて見て今日でも泣き勝ちてある。

松江の或婦人(譯者註一)は私の前て、小さい時のこの珍らしい追懷談を語つた。『私が餘程小さい時分に大名が武術を教へる西洋人を御雇になりました。私の父と大勢の侍がその西洋人を迎ひに出ました、それから澤山の人々が見物に往來の兩側に列んでゐました、以前に西洋人の來た事は一度もありませんてしたから。そこて私共は皆見に參りました。西洋人は船て參りました、當時こちらには汽船はありませんてした。西洋人は非常にたけが高くて、長い足て早く歩きました、それから子供等はその人を見て泣き出しました、顏は日本人の

顔と同じでなかつたからです。私の弟は大聲で泣き出して母の着物に顔を隱しました、そこで母は叱つて申しました「この西洋人は殿樣に仕へにここへ來た大變よい人だからこの人を見て泣くのは失禮千萬です」しかし弟はやはり泣きました。私は恐ろしくはありませんでした。私は西洋人の顔を見上げてゐましたらその西洋人は來てにつこり笑ひました。大きな顎ひげがありました、大變不思議な恐ろしい顔だとは思ひましたがよい顔だと思ひました。それから止つてにつこりして私の手に何か入れました。そして大きな指で私の頭や顔にさはりました、そして何だか分らぬ事を云ふて行つて仕舞ました。西洋人が行つたあとで、私は手に入れてあつた物を見たら、それは小さい綺麗な眼鏡でした。その眼鏡の下へ蠅を入れると中々大きく見えます。その當時私はこの眼鏡は大變不思議な物だと思ひました。今でもそれをもつてゐます」この婦人は部屋の箪笥から取り出して私の前に小さい綺麗な懷中顯微鏡を置いた。

この小さい事件の主人公はフランスの將校であつた。封建制度廢止と共にこの人の勤務は當然なくなつた。この人の[譯者註二]話は今も松江に殘つて居る、そして老人達はこの人に關するはやり節を覺えて居る、彼の外國語のまねと思はれるやうな、早口のでたらめの一種である。

唐人ノネゴトニハ　キンカラクリ　メーダガショー
サイ坊主　ガ　シンベイシテ　ハリシテ　ケイサン
ハンリヤウ　ナ　サツクルルルルレナノンダジユ

譯者註一。松江の婦人とは實は小泉夫人の事、蟲眼鏡はその時與へられたのでなく、夫人の父卽ち出雲の士族で當時佛人の學生たりし人に與へたのをかくの如くに記したのである、この蟲眼鏡は今も夫人が藏して居られる。

譯者註二。明治の初年の頃の事で、名はワレットと傳へられて居る。

二一

一八九一、十一月二日

志田は再び學校へ來る事はない。彼は洞光寺の古い墓地の杉の木の影の下に眠つて居る。追悼會の時、横木は死んだ友人の靈に對して美はしい祭文を讀んだ。

しかしその横木自身も病んで居る。そして私は彼に對して甚だ心配にたへない。醫師の

言によれば過度の勉強から起つた何か腦の病氣で惱んで居るのである。たとへよくなつても始終注意して居らねばならない。中には横木は體格強壯でその上若いから大丈夫だらうと思つて居るものもある。強い坂根は先月血を吐いたが、今はもうよい。そんな風に横木も回復するであらうと信じられる。小豆澤は毎日友人の知らせをもつて來る。

しかし回復は決して來ない。その若い生命の機關の何か不思議のぜんまいが切れた。人事不省が長く續いて時々暫らくの間だけ心が生きて居る。兩親とそれから親戚友人は日夜注意してその氣のついて居る時を利用して何かやさしい事をささやいたり、或は『何か望みはないか』と聞いて見ようとして居る。それから或晩その返事がある

『はい、僕は學校へ行きたい、學校を見たい』

そこで一同がこのよい頭腦も全く駄目になつたのではないかと思ひながら返事をする。

『もう夜中過ぎてあるし、それから月もない。その上夜は寒い』

『いえ、星て見えます――僕はもう一度學校を見たい』

一同は最もやさしくすかして見ても駄目であつた、死にかかつて居る少年はただ最後の願を悲しげに執念深くくりかへして居る。

『僕はもう一度學校を見たい、今見たい』

そこで隣室で小聲で相談が始まる、それから簞笥の引出しが開いて暖い着物が用意される。それから房市と云ふ丈夫な下男が提灯をつけて來て、やさしい無骨な聲で叫ぶ――

『富さん、わしの背中にのつて學校へ參りませう、なーに近いから、坊つちやんにもう一度學校を見せて上げます』

大事に一同が綿入てこの少年を包む、それから小兒のやうに房市の肩に腕を置く、そしてこの丈夫な下男は寒い街を通つて安らかに彼を負うて行く、父は提灯をもつて房市の側から急ぐ。そして小さい橋向うの學校まで遠くはない。

大きな薄墨色の建物は夜目に殆んど眞黑に見える、しかし横木には見える。彼は自分の教室の窓を見る、樂しかつた四ヶ年いつも毎朝下駄を音のしない草履にはきかへた屋根のある生徒昇降口を見る、今寢て居る小使の部屋を見る、小さい塔に眞黑くかかつて居る鐘が星あかりに影をうつして居る處を見る。

それからささやく。

『今みんな思ひ出せる。忘れてゐた――そんなひどい病氣だつた。みんな又思ひ出す。あゝ、房市、お前は本當に親切だ。僕はもう一度學校を見たので非常に嬉しい』

それから又彼等は長い人の通らない街を通つて急いで歸る。

二三

一八九一、十一月二十六日

横木は明晩、友人志田の側に葬られるのである。

貧しい人の臨終に、友人や隣人がその家に來てできるだけの世話をする。遠い親戚へ通知をやる者もある、凡て必要な準備をする者もある、又死んだときまれば僧侶[註一]を迎へに行く者もある。

註一。全然神道の人か或は神佛兩方に屬してゐても、葬式は神道の式にする人はこの限りでない。松江では、高い位地の役人などは、きまつて神式で葬式をする。

僧侶は使が行かぬうちに、檀家の人が夜、死ぬのを知つて居ると云はれる、死んだ人の魂が寺の戸を一度ひどくたたくからである。それから寺僧は起きて僧衣をつける、そして使が來る時『承知して居ります、用意して居ります』と答へる。

その間に屍骸は家の佛壇の前に運ばれて床の上に置かれる。頭には枕が置いてない、拔身の刀は惡魔除けに手足のところに置いてある。佛壇の戸は開かれ先祖代々の位牌の前には蠟燭をともしてある、そして香を焚いてある。親戚友人は皆香を贈る。それ故如何に珍らしく貴くとも、外の時に香を人に贈るのは不吉となつて居る。

しかし神棚は白紙で見えないやうに隱される。戸口に打ちつけてある神社のお札は凡て忌中は[註二]つつみ隱されねばならない。凡てその間は家人は誰でも神社に近づいたり、神に祈つたり、鳥居をくぐつたりしてはならない。

註二。死者が神式で葬られる場合は別。松江では忌は五十日　五十一日目に一家殘らず圓城寺灘（圓城寺のある山のふもとの湖岸）へ行つて淸めの式を行ふ。圓城寺灘の岸に地藏の丈の高い石像がある。その前でお祈りをして、湖の水で手を洗ひ口をすすぐ。それから親戚へ行つて朝飯を喰べる、淸めの式は、なるべく、いつも未明に行はれる。忌中にはうちの人は親戚知り合ひのうちで食事をしてはならない。しかし神式で葬式をした場合にはこんな儀式を守るには及ばない。

屍骸とこの部屋の入口との間に屛風が擴げてある、白紙の一片に書いてある戒名は屛風の上にはつてある。死人がもし若ければ屛風はさかさに立てられねばならぬが老人の場合

にはさうはされない。

親戚友人は屍骸の側で祈禱する。そこには一千の祈りをくりかへす間に、數へるための一千の豆粒の入つた箱が置いてある、その不慣れな旅路にある靈魂はこの祈りのために助かると信じられて居る。

僧が來て讀經をする、それから葬送の準備になる。死體は溫湯で洗つて眞白の着物を着せる。しかし死人の着物は左前に合せる。それ故偶然にでも、人の着物を外の場合そんな風に合せるのは不吉と考へられる。

死體が木の駕籠のやうな物に見える妙な四角な棺に入れられた時、親戚は彼等の血を代表する男女それぞれの髮の毛や爪を切つて少しづつ入れる。そして棺の中へ六厘入れる、六道の辻に立つて居る地藏のためである。

家で葬列ができる。僧が小さい鐘をならして先導する、童子が新佛の位牌を持つて行く。行列の先驅は全く男子の親戚や友人である。何かの意味を表はせる白い小旗を持つ者もある、花を持つ者もある、一同は提灯を持つ、――これは出雲では成人（オトナ）は夜葬られるからである、子供だけは晝葬られる。つぎに棺が來る、墓を掘つたり、葬式の助けをしたりするのを仕事として居る人々の肩に轎（カゴ 譯者註）のやうにかつがれて居る。終りに女の會葬者が來る。

この人々は頭から足まで幽靈のやうに白い頭巾をかむり白い着物を着て居る。[註二] 提灯のあかりだけで照らされた出雲の葬式の行列のこの白衣の一群よりももつとまぼろしのやうな物は想像ができない。一度見たら屢〻夢に歸つてくる物すごさである。

註二　しかし昔の武家の葬式では婦人は黑いなりをした。

お寺で棺は玄關の前の敷石の上に置かれる、そして讀經と悲しげな音樂とで別の佛事が行はれる。それから行列は再びつくられ、お寺の庭を一度廻り、それから墓地に進む。しかし死體は二十四時間の後でなければ埋められない、死んだと思つた人が墓のうちで生きかへる事のない用心である。

出雲では火葬は殆んどない。この點に於ても外の點に於けると同じく神道情操の有力な事が明らかである。

譯者註。出雲では「山の者」と云ふ。

二三

見納めに私はもう一度彼の顏を見る、彼は首から足まで白裝束をつけて、幽界の旅路のために白い帶をつけて、死の床にねて居る、しかし謎のやうなむつかしい英語の說明を聞いた時のいつもの微笑と殆んど同じ奇妙な溫和な風で眼を閉ぢたままで微笑して居る。ただ今の微笑は一層不可思議な事に關する一層大きな知識を得たので、更に一層美はしいやうである。洞光寺の御堂の香の烟のうちに、佛の黃金の顏ばせもその通りに微笑し給ふ。

一八九一、十二月二十三日

二四

洞光寺の大梵鐘は横木の追悼會(譯者註一)のために徐ろに規則正しく分時砲（弔砲）のやうに鳴つて居る。その豐かな靑銅のうなりの幾しきりが湖の上で動搖し、街の屋根の上に漲つて、そして四方の綠の山々に對し深い哀音となつて消える。

古風な儀式のこの追悼會は哀れの深い會てある、これは餘程以前日本の佛敎で採用され

たが、支那から由來した美はしい物である。又費用のかかる儀式である、そして横木の兩親は甚だ貧しい。しかし凡ての費用は學生と教師の進んで寄附した物で辨じた。出雲の禪宗の各寺院から來た僧侶は洞光寺に參集した。市中の教師及び學生全部は、この大寺院の本堂に入つて高い祭壇の左右に座を取つた、外側の長い階段に一千の靴と草履をぬいて疊の上に坐つた。

正面玄關の前に、高い佛壇に面して新しい佛壇が置かれた、その開いた戸のうちに漆と金の故人の位牌が光つて居る。佛壇の前の小さい臺の上に線香の束の入つた香爐と、果物、菓子、米飯、及び花の供物が置いてある。佛壇の兩方にある丈の高い美事な花瓶には花の枝が一杯に巧みにさしてある。本尊の前には大きな蠟燭立――その光つた眞鍮の臺は卷きついた怪物、上り龍下り龍になつて居る大きな蠟燭立に蠟燭が燃えて居る、佛說にある神鹿のやうな、神龜のやうな、三昧に入つた鶴のやうな形の香爐から香が卷き上つて居る。そしてこの向うに、大きな奥の間のほの暗き處に、佛は圓滿具足の微笑をもらし給ふ。

佛壇と本尊との間に小さい机が置いてある、その兩側に僧侶が相對して列をなして坐る、圓頂の列、朱の絹の僧衣、金の縫のある袈裟の立派さ。

大きな鐘が鳴り止む、靈魂に對する食物の供養の讀經である施餓鬼が行はれる、急に朗

かな、音調のよい打ち物の音に伴はれた哀音の讀經て、音樂的な法會が始まる。その打ち物は木魚の音である、木で造つて漆を塗つて金箔を置いた大きな魚の頭である、妙な理想化した海豚(イルカ)の頭のやうである、これで拍子を取るのである、法華經（譯者注）の觀世音菩薩普門品を誦んで居る、それにはかくの如き廣大な祈りがある。

眞觀淸淨觀、廣大智慧觀、悲觀及慈觀、常願常瞻仰、無垢淸淨光、慧日破二諸闇一、能伏二災風火一、普明照二世間一

導師等の聲々がひびき渡る同音で明らかに高く歌ふと共に、その他の一同の僧の合唱はこの有難い經文を深い低音で唱へる、そして彼等の讀經のひびきは寄波のつぶやきに似て居る。

木魚はその鈍いひびきを止める、深き感動を與ふる讀經が終る、そこで重なる司會者即ち名高き寺々の高僧は一人づつ位牌に近づく。銘々ひくく頭を垂れて線香に火を點じ、これを青銅の小さい鉢に眞直に立てる。銘々はしばらく經文を唱へる、その始めの音は故人の戒名の文字の音である、そしてこの位牌の文字の順序によつて唱へられた經文は、聖い折句になる、それを香語と云ふ。

それから僧侶は席にかへる、暫らくの沈默のあとで祭文の朗讀、即ち故人の靈に告ぐる文の朗讀が始まる。各級から選擧されて一人づつ出た學生が始めに述べる。選ばれた學生は起立して、高い壇の前の小さい机に近づき本尊を拜し、懐から紙を取り出し、漢文を朗讀する時の節のよい朗々たる哀調で讀み上げる。かく銘々が愛の滿ちた悲しみと希望の言葉で死者に對して生者の愛情を語る。そして最後に學生のうちから、一人のやさしい少女（師範學校の女生徒）が出て、小鳥のやうに柔和な調子で述べるがために起立する。祭文を讀み終つた時、銘々は本尊の前の机の上に紙を置いて禮して退く。

今度は先生の順番である、そこで一人の老人が小さい机の處に席を取る、詩人として名高い、教師として尊敬される、漢文の先生片山翁である（註三）學生一同父の如く愛して居るので、翁が『故島根縣尋常中學校四年生』と始める時不思議に一同水を打つたやうになる。

『維レ明治二十有四年二月二十有三日

島根縣尋常中學校教諭　片山尚絅

辱ク追福ノ靈場ニ侍スルヲ獲テ焄蒿悽愴（クンカウセイサウ）ノ至ニ堪ヘズ敢テ

故島根縣尋常中學校四年生橫木富三郎君

靈ニ告グ、尙綱本校敎諭ニ承乏スル前後五年其間學生ノ優秀ナルモノ鮮シト爲サザルモ其忍耐勇進勉メテ倦マズ審問愼思科ニ盈チテ校則ヲ遵守シ師訓ヲ服膺シ業ニ敏ニ行ニ愼ム

君ノ如キハ復タ得易カラズ冀北ノ野良馬ナケレバ古人之ヲ馬ナシト稱ス本校尙ホ龍駒ナカランヤ然レドモ

君ニシテ逝ク、予其尤ヲ拔クノ嘆ニ堪ヘズ

君ハ十七年九ケ月ト聞ク、學業專修ノ好年期ニシテ前途有爲ノ基礎殆ンド六七仭ニ及ブ、而シテ病ノ爲メニ逝ク、其病因ヲ問フニ腦ニ急劇ノ症ヲ呈セリト、以テ平素ノ苦學ヲ證スベク益々半途ニ斃ルノ愛惜スベキヲ感ズ已矣、其成業ヲ見ルニ及ハス、若シ君ヲシテ其天壽ヲ全ウシ社會ニ立ツアラシメンカ必ズ其業ニ敏ニ行ヲ愼ム者以テ終始ヲ貫キ身ヲ立テ家ヲ興スヤ推テ知ルベキノミ、

君ノ敎場ニ在ル手ヲ擧テ問ヲ發シ自ラ低テ筆記セル或ハ勇壯活潑銃ヲ提テ馳驅セル其擧其容尙ホ目睫ヲ離レズ而シテ今再ビ之ヲ見ルニ由ナシ噫天何ゾ衰殘爲スナキノ尙綱ヲ殘シテ此進取爲スコトアル可キノ

君ヲ奪フヤ尙綱ノ

君ニ於ケルハ職務ニ因テ師弟タルニ過ギズ尚ホ其情義ノ感ズル所自ラ堪ルコト能ハズ
尚稚子アリ本年二十四歳遠ク相州横濱ニ在リ素ヨリ豚犬ニシテ
君ニ比ス可キニ非ルモ老父ノ胸間夢寐ニ忘レズ況ヤ俊抜ナル
君ノ親父タリ慈母タリ兄弟姉妹タルモノ此不幸ニ遭遇スルニ於テヲヤ其衷情以テ如何
トナス思ウテ此ニ到レバ涙先ヅ胸ヲ衝キ復タ言ヲ爲スコト能ハス嗚呼
君ハ逝ケリ乃チ逝クト雖モ其業ヲ勉メ其行ヲ愼メルモノハ永ク本校學生ノ模範ト爲テ
朽チズ是職員學友ノ感懐追慕已ム能ハズシテ茲ニ謹デ清酌庶羞ノ典ヲ具シ敬ンデ
君ノ霊ヲ祭ル所以ナリ尚クハ
來リ饗ケヨ

それからすすりなきの聲は木魚の突然再び鳴り出したのに壓せられて、導師の高い調子の稱名合唱の聲が有難い涅槃經を誦し始める。生死の大海を解脫して通る凱歌である、その高い音調と木魚の反響の下に妙へなる經を誦する波濤の如き一百の聲の低音は大海のくだけるやうに響いて聞える。

諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂。

譯者註一。この追悼會は、四年生橫木富三郎、三年生志田昌吉、三年生妹尾丑之助三人のために催された物、著者は都合上橫木の分にしたのである、時は明治二十四年十二月二十三日の事故、當時著者ヘルンは熊本高等中學校へ轉任したあとの事であつた、この記事は全く小豆澤（藤崎大佐）の通信を參考として書いた物、當時の新聞記事によれば、會するもの二百餘名（中學生全部）來賓は齋藤師範學校長以下職員及び死者の親戚、僧侶は二十餘名、佛式を營み、終りて中學校長木村牧氏及び片山教諭の祭文奉讀、ついで五年級總代遠藤靜衞、四年級總代三浦倫吉、三年級總代外山林次郎、二年級總代錦織甚六、同窓會總代內田實、神門輔仁會總代今岡義一郎諸氏の祭文朗讀あり、次で參拜者一同に茶菓を供し、散會せしは五時なりしとある。

譯者註二。この追悼會で讀んだ經文は佛遺教經であつた、藤崎大佐がその全文を譯してヘルンに示したが、その內容は追悼會に讀む物としては適切でないとして法華經にかへた。

譯者註三。片山は有名なる漢學者片山兼山の孫、滋賀縣師範學校長より轉じて松江中學の教諭となりし人。

第二十章　二つの珍しい祝日

一

日本のお祭の外觀的象徴は、始めてそれを見る外人に取つては、最も不可解の謎である。それは數も多く、種類もまた多い。西洋に於ける祝祭休日の裝飾に關するいかなる物とも全然異つてゐる。それは一つ〳〵或る信仰、または或る傳説に基いた意義を有する――その意義には日本のどんな子供にも知られてゐるが、外人に取つては臆測を加へることさへも不可能だ。しかし苟も日本の民衆の生活と感情について幾らか知らうと欲する者は、少くとも祭禮の象徴の中に就いて、最も普通なものの意味を學ばねばならない。特にかゝる知識は日本美術の研究者に取つて必要である。その知識がなくては、只單に無數の意匠の陰微纖細なる氣分と妙味に氣が付かないばかりでなく、また多くの場合に於て、意匠そのものが不可解で了はるに相違ない。數百年間、祭禮の象徴は日本人によつて、さま〳〵の優

美なる裝飾手段に利用されて、金屬細工に、陶器に、朱塗りや黑塗りの漆器などの、最も卑近なる家具に、小さな眞鍮の煙管に、煙草入れ袋の止め金など、種々の物の上に現はれてゐる。普通の裝飾的意匠の多數は、象徵的だといふことさへも出來るだらう。意味が最も明白と思はれる形象――西洋の骨董購求者が最もよく知つてゐる、かの動植物の匹儔なき習作――さへ、或る倫理的意義を有するのが常であるが、それは少しも認められてゐない。または下等な宿屋の紙障の上に、一氣呵成で揮毫された極めて普通の意匠――一匹の海老――松の枝――水の渦卷いた中を、よた／＼歩いてゐる龜――一對の鶴――竹の細枝――を取つて見るがよい。漫遊の外人は、何故にかやうな意匠が用ひられて、他の意匠を用ひてないかを質問しようと考へることも稀れだ――假令彼の旅行中に於て、それらの意匠が左ほど變更も加へないで、二十個所までも繰返されてあるのを見た場合にも、怪まない。それらの意匠が因襲的となつたのは、全く或る意義の象徵だからである。幾ら無學の日本人でも、その意義を知つてゐるが、外人は毫もそれに氣が付かない。

註。西洋のある一派の俗物や、自分免許の藝術批評家の間では、日本美術が『眞に通つてゐる』といふことに關して熱心に唱道すると、その文士を冷笑する風になつてゐるから、私はこゝに、この動植物の形の

作品について、英國の最も有名な、現存せる博物學者の言葉を引用してもよからう。ウオラス氏の權威は、こゝに指せる俗物連中によつてさへも、鼎の輕重を問はれることはあるまい——

「モーナイク博士は或る日本婦人によつて描れた、日本の植物の彩色畫を、澤山蒐集して持つてゐる。それは私の從來見た中では最も卓越せるものである。一莖、一枝、一葉、悉く一と筆で成つて、頗る複雜せる植物の特徵及び配景は天晴れよく現にされ、また莖及び葉の關節は極めて科學的模式に示されてゐる」

（ウオラス氏著、「馬來群島」第二十章）

これは一八五七年に書かれたので、日本へまだ西洋畫の輸入されない頃だ。この一と筆で葉などを描くといふ技巧は、依然として日本では普通である——最も平凡な裝飾師の間に於てさへ。

この問題については、一個の百科全書が書けるほどであるが、私の知る處は甚だ僅かで、特別な一論文にも足りない。しかし說明のために、私は敢て今猶ほ日本のすべての地方で守られる、二つの古い祝日に、陳列される珍しい品々について語らう。

二

第一は新年の祝日で、三日間つゞく。松江では、その式が特に面白い。他所では廢れた

り、またはどし／＼廢れつゝある幾多の祝祭習慣が、この古い町には依然として、まだ保存されてゐるから。その際、町々は盛んに飾られ、店は閉ぢられる。注連繩又は注連飾——神話的時代から神道の尊い象徵となつてゐる藁繩——が、家々の正面に沿うて、花綵形に吊るされ、それが連接して左にも右にも、一哩も長いたゞ一本の注連繩となつて見え、藁の垂飾と、白くひら／＼する御幣が附いて、眼の達する限り町の兩側に延びてゐる　日本の國旗——昇る朝日の國の表象なる大きな赤い圓盤を、白地に現はせる——が、玄關の上に翩翻する。それから同樣の國家的表象が、軒端に沿うて、或は街路や神社の廣小路を横切つて、列を作つて吊るされた無數の提燈の紙面にも輝いてゐる。それから、あらゆる門や戶口の前に門松が立ててある。だから一切の街道はずらりと綠の色が並んで、また花やかな色に滿ちてゐる。

　門松はその名の示す以上のものを有してゐる。それは一本の若い松、或は松の一部分に、梅の枝と笹が結付けてある。松、竹、梅、は象徵的意義の生長てある。昔は松のみ用ひられたが、應永年間から竹が加へられ、また更に後になつてから梅が加へられたのだ。

註。門松について佛敎の諺がある——門松や冥途の旅の一里塚。

松には多くの意味がある。しかし最も一般に承認せられる芽出度い意味は、逆境に際し、忍耐して、元氣よく押通すといふのだ。他の樹木の葉が凋落するのに、松ばかりは緑の色を變へない如く、眞正の男兒は困難に當つても、勇氣と力を失はない。松はまた私が他の章で述べた通り、老齡猶ほ元氣旺盛なることの象徵となつてゐる。

いかなる歐洲人も、恐らくは竹の謎を推測し得ないだらう。それは一種の洒落を象徵する。節と發音する漢字に、二つの意味があつて、一つは竹の節を意味し、他の一つは德、忠實、不變を意味する。だから竹は慶瑞として用ひられる。『節』といふ名は、屢〻日本の少女に與へられてゐるのを注意するがよい――丁度フエース（信仰）、フキデイーリテ（忠實）及びコンスタンス（不變）といふ名が、英國の娘に與へられる如く。

梅――その象徵的意味について、私は既に日本の庭園に關する章で幾分述べてゐる――は、必しも用ひるとは定つてゐない。時としては神道の尊い表象の榊が代用される。また時としては、ただ松と竹ばかりで門松を作ることもある。

新年の祝日に用ひらるゝすべての飾りは、珍しい、奇異なる種類の意味を有する。して、すべての中で最も普通なもの――注連繩――さへ、最も複雜なる象徵を有する。第一にその起原は、古事記に載つてゐる如く、太陽の女神が、一旦隱れた窟から出るやうに誘はれ、

それからまたそこへ歸らうとするのを、或る神が入口に藁の繩を張つて禦いだといふ、最も古い傳說によるのは、說明するにも及ぶまい。第二に注意すべきは、注連繩の厚さは何うであらうとも、その捻り方は左に向はねばならぬといふことだ。その譯は、古の日本の哲學では、左が淸い側、卽ち吉の側となつてゐるからだ。多分歐洲の無學階級に於て今日に至るまで猶ほ普通となつてゐる信仰、卽ち心臟は左方に存するといふ古い信仰に基くのだらう。第三に注意すべきは、緣飾材料の如く總(ふさ)をなして、一定の間隔を置いて繩から垂れてゐる藁は、その總の位置に隨つて數が異らねばならぬといふことだ。それは三本といふ數から始まつてゐる。だから、第一番目の總は三本の藁、第二番は五本、第三は七本、第四はまた三本、第五は五本、第六は七本といふ風に、繩の全長を通じて數が變化して行く。藁の總と交互に垂れてゐる御幣の起原も、また太陽の女神の傳說中に求められねばならぬ。が、御幣はまた太古、神々に捧げた布帛を表はしてゐる。布を獻ずる習慣は夙に廢れたのである。

しかし御幣の外に、まだ讀者が意味を想像し得ないやうな幾多のものが附いてゐる。その中に、羊齒の葉、橙、ゆづり葉、小さな炭の束(たば)などがある。

何故羊齒の葉（もろもき又は裏白(うらじろ)）を附ける？その譯は、羊齒は子孫繁殖の象徵だから。

その枝が分かれて、更にまた枝が出る如く、家族が榮え、子孫が増加して行く。

橙（だい〳〵）はどういふ譯?それは『代々（だい〳〵）』といふ漢字があるので、橙は吉兆の果實となつたのだ。

しかし炭はどういふ譯?それは繁昌の不變を示す。この觀念は全く珍異だ。炭の色を變へることは出來ない如く、我々の愛する人々の幸運も、一切永久不變でありたい!ゆづり葉の意味は、前章に說明して置いた。

家の前の大きな注連繩の外に、室々の床の上にも、注連繩や注連飾が吊るしてある。それから、後門の上や、二階の廊下の入口の上（もし二階があれば）には輪注連（わこめ）[註二]が懸けてある。それは極小さい注連飾を捻つて、一種の花輪形にしたものに、羊齒、御幣、ゆづり葉が飾り附けてある。

註二。注連繩と注連飾の差異は、後者は專ら裝飾的で、藁繩に諸種の珍しい物が結付けてあることだ。

しかし祝日の大なる家庭的裝飾は、神棚の裝飾だ。家々に祀る小さな宮の前に、二枚の大きな餅を据ゑる。して、宮は花や、小さな注連飾や、榊の枝で美々しくする。また貨幣を一本の絲に繋いだものや、蕪菁や、大根や、魚類の王なる鯛や、烏賊（するめ）や、神馬草（じんばさう）[註三]も献げ

られる。またその名が欣ぶと同音だと考へられてゐるため、愉快欣喜の象徴である海草の昆布や、餅と藁で作つた造花の餅花もある。

註三。これは馬尾藻科に屬し、氣胞を澤山有する。食用海草のさま〲の種類が、日本人の食料の可なりの部分を占める。

三寶は奇形の小さな臺で、其上に神々への供物を載せる。出雲の殆どあらゆる裕福な家には、自家用の三寶を有つてゐる――しかしかやうな家庭用の三寶は神社に用ひられるのよりは小さい。お正月が到來すると、橙、米、餅、鰯、力祝餅、黑豆、勝栗、それから立派な海老が、すべて體裁よく家庭用の三寶に並べられる。客が來る毎に、その前へ三寶を据ゑる。すると、客はそれに向つてお辭儀をする。彼はそれによつて、たゞに三寶の上に盛られた品々によつて表さるゝ一切の幸運が、その家に來るのを心から願ふといふことを示すのみでなく、更にまた、その家に祀つてある神々に敬意を表はす。黑豆は身體の力と健康を意味する。何となれば、豆といふ字と字形は異つても、健康といふ文字は、同じく『まめ』と發音するからだ。しかし何故に海老を用ひるか？こゝにまた珍しい觀念が存する。海老の胴體は二重に曲つてゐる。非常に高齢まで生きながらへる人の身體もまた曲が

る。だから海老は非常なる高齢の象徴になる。して、藝術的意匠に於ては、私共の知人が海老の如く腰が曲がるまで――歳月の重荷の下に――永く生きるやうにと願ふ意味である。また勝栗はその名の第一の文字は勝利、征服を意味するから、成功の象徴である。

お正月の祝節に伴ふ奇異な習慣や象徴が、少くとも他に百もある。それを叙述するには一巻の大冊を要するだらう。私は不注意な觀察にさへも、すぐ氣付くやうなもの僅かばかりを擧げたのに過ぎない。

三

私が話さうと思ふ今一つの祝日は、節分である。それは日本の舊暦に從ふので、太陽年の始――冬が和ぎそめて春となる季節――に當る。チエムバリン教授の語を藉りて云へば、一種の期日不定の祭日といふべきものである。して、主として惡魔拂ひの儀式のため有名だ。節分の宵には、日が暮れて間もなく、『厄落し』卽ち惡魔を追拂ふ人が、錫杖を鳴らし、奇異な聲を振り立て、『鬼は外！福は内！』と叫びながら、町中を巡る。彼は呼び入れられると、その家で少許の料金で以て、簡單なお祓ひを行ふ。このお祓ひは佛教の經文

の或る部分を誦するのと、錫杖をがら〳〵鳴らすだけてある。

註：この錫杖は奇異な形の杖である。地藏の像は普通それを持つた形に現はされてゐる。今猶ほ托鉢僧はそれを携へる。大いさは數種ある。厄落しの持つのは頗る短い。傳說によると、錫杖が發明されたのは、佛教の巡禮者の途上で、昆蟲又は他の小動物が、知らずに踏まれぬやう警戒を與へるためであつた。

それから、白豆が四方へ向つて家中で投げられる。ある不可思議な道理で惡魔は白豆を好かない——して、それを避けて逃げ出す。かやうにして撒かれた豆は、後に掃き集めて、春の初雷の鳴るまで入念に保存して置いて、その時に及んで食べる習慣である。しかし何故さうするのか私にはわからない。また惡魔が白豆を嫌ふ由來をも、私は發見することが出來ない。が、この嫌惡の點については、白狀すれば私も惡魔と同感だ。

惡魔がすつかり追拂はれた後、まだ戻つて來ないやう、小さな呪ひの物が、家のすべての入口の上に置かれる。これは燒串ほどの長さと厚さのある、小さな一本の竹條と、一枚の柊の葉と、乾鰯の頭から成立つてゐる。竹條を柊の葉の中央に突き刺し、鰯の頭を竹條の一端の割け目へ挾み、他の一端は戸の直ぐ上の柱の接ぎ目へ入れてある。しかし何故に惡魔は柊の葉と鰯の頭を恐れるのか、誰人も知らないやうだ。坊間に於ては、凡て是等の

珍しい習慣の起原は、全然忘れられてゐるらしい。して、今猶ほかゝる習慣を維持してゐる上流家庭も、この祝節に關する迷信を信じないのは、今日の英人が寄生木とか、葛の魔力を信じないと同様である。

この年々惡魔を追拂ふ、古い面白い習慣は、代々日本の藝術家に取つて眞興の源泉であつた。外國人が幾多の藝術品の微妙なる氣分を味ふやうになるのは、ただ民衆の習慣と思想を相應に曉つた後のことである。その藝術品を實際買つて見ようと思ふのは、ただそれが非常に奇異にも人目を惹くからであるが、日本人の生活を知らない以上は、かゝる作品は、少くとも、その內的意味に關しては、不可解に終はらざるを得ない。過日ある友人が、私に香ばしい革の、小さな名刺入れを呉れた。一方の側面には惡魔の顔を浮かして印してあつた。惡魔の廣く開いた口の孔を通して、內部の絹裏地に畫かれたる、愉快なる幸運の女神、お多福の圓ぽちやの笑顔が見えた。それだけ見ても、それは珍しい、綺麗なものであつたが、その意匠の眞價は、新年を祝する滑稽的象徴――『鬼は外！福は內！』であつた。

春の初雷のときに節分の豆を食べる習慣のことを語つたから、私はこの機に際して、また百姓達の間には廢れてゐない雷の迷信に關して、少しく述べてみよう。

四

雷の嵐がくると、大きな褐色の蚊帳が吊られる。して、婦人や子供達——恐らくは全家族——は、嵐の終はるまで、その下で坐つてゐる。昔から電光は蚊帳の下に居るものを一人も殺し得ないと信ぜられてゐる。雷獸は蚊帳を通り抜けることが出來ない。最近のこと、私の宅へ野菜を賣りに來た年老いた百姓が、私共に話した處によれば、彼と彼の全家族が、雷鳴の際、蚊帳の下に屈んでゐると、實際彼等の部屋の向うの緣側の柱を『電光』の駈け上つたり、駈け下りたりするのが見えた——『電光』は猛烈に柱を引抓いたが、蚊帳のために入ることは出來なかつた。家屋は電擊によつて、大損害を被つたけれども、彼はそれを雷獸の爪の所業に歸した。

雷獸は雷鳴の嵐最中に、樹から樹へと飛んで行くと、人々は云つてゐる。だから雷鳴電光の際、樹木の下に立つのは甚だ危險だ。雷獸が人の頭とか、肩の上へ載るかも知れない。

雷獸はまた人の臍を食べるのが好きだと云はれてゐる。だから雷鳴の時、用心して臍をよく蔽つて置かねばならぬ。また成るべく俯臥する方がよい。雷獸は線香の香が嫌ひだから、雷鳴中は線香をいつも焚く。電擊を被つた樹木は雷獸の爪で引裂かれ、傷けられたものと考へられてゐる。して、その木材木皮は附近の住民によつて注意して集められ、保存される。挫かれた樹の木材は、齒痛を癒す特效があると云はれてゐるから。

雷獸が捕獲されて、籠に入れられた話は、幾多もある。嘗て雷獸が井へ墜ちて、繩や釣瓶に纏れて、生捕になつたといふ話がある。また出雲の老人達は、嘗て雷獸が松江の天神さまの境内で、眞鍮の籠に入れて、見せ物にしてあつたのを記憶するといつてゐる。それは狸に似てゐて、晴天の日には、すや〳〵と籠中で眠つてゐるが、空に雷鳴が起ると、興奮してきて、非常な力を得、その眼は燦然と閃くのであつた。

五

しかし白豆を毫も怖れないし、また普通の惡魔の如く容易に追拂ふことも出來ない、非常に惡い魔物が居る。それは貧乏神だ。

が、出雲の人々は、往々貧乏神を逐拂ひうる一種の家庭的禁忌の法を知つてゐる。

日本の臺所では、煮燒をするに先つて、僅かばかりの炭火を、初めにかの頗る有用で、簡單な家庭用の道具の火吹き竹で赤熱に吹き起す。火吹き竹は通常長約三尺、直徑二寸ほどの竹の管で、火の方へ向ける一端に、ただ極めて小さな孔が殘してある。炊事を務める女は、他端を脣に當てて、管を透して炭火の上を吹く。かやうにして活氣ある火が、數分間にして得られる。

時を經ると、火吹き竹は焦げて、龜裂を生じて、駄目になる。そこで新しいのを作る。すると、古いのが貧乏神を退治する禁忌に使はれる。その中へ一厘錢を入れて、ある呪文を唱へる。それからその一厘錢の入つたまゝ、その古くなつた道具を單に表の戸口から町中へ投げすてるか、または附近の川へ擲り飛ばす。これが――私はその譯を知らないが――貧乏神を戸外へ投げ出して、隨分長い間、歸つてくることの出來ぬやうにしたのも同じ事だと見做されてゐる。

貧乏神の目に見えぬ存在が、どうして發見されるかと問ふ人もあるだらう。

英國で夜間あの凄いかちつ〲といふ音を發する、茶立て蟲(ちやたてむし)の一種は、日本の貧乏蟲と

いふ名の親類を持つてゐる。この蟲は貧乏神の召使で、それが家の内でかちつ〳〵といふ音を發するのは、かの甚だ歡迎されない神様の存在を報ずるものと信ぜられてゐる。

譯者註。英國にて、その蟲の啼き聲は、死人のある前兆だといふ迷信がある。

六

節分の祝日の今一つの特色は、それを記述する價値がある――人型(ひとがた)の賣られることだ。それは白紙で作れる男、女、子供の小さな雛形で、ただ數回巧みに剪刀を使つて切り出したものである。男女の差別は、袖と小さい紙の帶の形の變化で示してある。神道の社祠で賣られ、これを家族一人毎に一枚宛買受けると、神官は一枚々々に當人の男女別と年齡を書く。家へ持歸つて、それ〳〵に分配し、各自その紙で輕く身體を摩擦し、神道の小さな祈を唱へる。翌日是等の人型を神官に返へす。神官はその上に向つて或る一定の文句を誦した後で、神聖な火で燒いてしまう。この式によつて一年間その家族はすべて身體上の災難を免がれるものと思はれてゐる。

註。節分との關係はないが、こゝに述べて置きたい一つの事柄がある。

出雲には書道の神聖といふ、有益なる——また昔は乾度頗る重要であつた——迷信が、今猶ほ遺存する。何かを書付けたもの、或は印刷したものでも、皺くちやにしたり、蹂躙したり、汚したり、或は賤用に供してはいけない。もし書類を破毀する必要がある時は、紙を焼かねばならない。ある小さい宿屋へ泊つた時、私が自分で書いた、文字の一杯に滿ちた紙を、引裂いて屑にしたために、優しく叱りを受けたことがあつた。

第二十一章　日本海に沿うて

一

七月十五日の事、――私は伯耆に居る。

白い途は低い絶壁の海岸、――日本海の岸に沿うてうねりくねつて行く。いつでも左手に、岩山の断片や砂丘の層の上から、渺茫たる大海が見える。ずつと向うに、同じ白い太陽の下に朝鮮の存在する青白い地平線まで、青い皺を湛へて居る。時々絶壁の端が急に取れて、私共の前に突然寄せ来る浪の現れる事がある。いつでも右の方には別の海、――背後に大きな青白い峯を有する、遙かの霞んだ青い連山まで達して居る緑の静かな海、――稲田の大きな平面、その表面には音のない波が、今日朝鮮から日本までその青い海を動かすのと同じ大きな風の下に、互に追ひかけ合つて居る。

一週間、空には一點の雲もなかつたが、海は幾日も怒つてゐた、それて今その大波のつぶやきは遙かの陸まで響く。いつでもこの通り盆の三日間――卽ち舊暦七月十三、十四、十五の三日間は海が荒れると云はれる。それて十六日に精靈船が出たあとて、誰も海に出ようと云ふ者はない、船の借りやうがない、漁夫はうちにゐて出ない。その日の海はそこを超えて、幽界へ歸らねばならない精靈の通路となる。それて、その日の海は佛海と呼ばれる。そしていつも十六日の夜、――海は穩かであらうが荒れてゐようが、――一面に水の上は大空へすべり出る朧げな光――精靈のかすかな火――てかすかに光る、それから遠く離れた都會のつぶやきのやうな聲のつぶやき――魂の不分明な話聲――が聞える。

二

しかし時として入港しようと一所懸命になつた船がやはりおくれて、十六日の夜遠く沖合に居る事がある。そんな時に精靈が船の廻りに高く現れて、長い手をのばして『田籠、田籠おくれ――田籠おくれ』とつぶやく。決してそれを拒んではいけない、しかし桶を渡す前に、底をぬいて置かねばならない。偶然にでも完全な桶を海に落したら、その船に乘

り合せた人々こそ災難、――何故と云へば、精靈は直ちにそれに水をみたして船を沈めにかかるのだから。

佛海の時分に、恐ろしい見えない力のある物は精靈ばかりではない。未だ最も强い魔が居る、それから河童（かっぱ）[註]が居る。

しかしいつでも游泳者は恐ろしい醜惡な河童を恐れる、河童は水の底から延び上つて人を引きずり込んで、腸を喰ふ。

ただ腸だけ。

河童に捕へられた人の死體は餘程たつてから岸に打ち上げられる。大きな波のために長い間岩に打たれたり、魚類のために嚙まれたりしなければ、外から見て何の創もない。しかし輕くてうつろで――よく枯れた瓢簞のやうに空虛である。

註　河童は本來海の化け物ではなく河の化け物である、それで河口に近い海に出る。
　松江から一哩半ばかり、河内川に臨んだ河内村に河子の宮或は河童の宮がある、（出雲では一般に「河童」とは云はないで「河子」と云ふ。）この小さい社に河童が書いたと云はれる證文が保存してある。話によれば、昔河内にすむ河童が村の人を澤山、それから家畜を澤山捕へて殺してゐた。ところで或日の事、水を飲みに河に入つた馬を捕へようとして、馬の腹帯の下へどうかしたはずみで自分の頭をねぢ込んだ

驚いた馬は、水の中から跳び出して河童を野原へ引きずつて來た。そこで馬の主人さ大勢の農夫は河童を捕へて縛り上げた。村中の人が化け物を見に來た、化け物は頭を地につけて、何か云ひながらお情けを乞うた。農夫達は卽座に化け物を殺さうとしたが、馬の主人は同時に村の庄屋であつたので云つた。「それよりも河内村の人や家畜に今後決して手を觸れない事を誓はせた方がいゝだらう」そこで誓約の證文を作つて河童に讀んで聞かせた。河童は字が書けないが、手に墨をつけて證文の終りに押す事はできる。これには異存もなかつたので、その通りにしてから、河童は赦された。それからさき、河内村の住民や家畜はこの化け物に襲はれる事はなかつた。

三

程なく、進むうちに、左手の青色の波浪の單調と、右手の綠色の大波の單調とは灰色の墓地の出現によつて破られた、――それは私共の車夫が全速力で走つて、その直立した石の大きな群がりを通り拔けるのに十五分は充分かかる程長い墓地であつた。これが現れるといつでも村に近づいた事を示す、しかし墓地の驚くべく大きいのに比して、村は驚くべく小さい事が分る。墓地の沈默の住民の數がその墓地を有せる村の人々よりも多い事は幾千の幾百倍である、――その村は、數里の海岸に沿うて散在して、防風としてはただ陰氣

な松並樹があるだけの、草葺き屋根の全く小さい部落である。無數の、全く無數の墓石又墓石、——過去に對する現在の價の物凄き無數の證人、——そして古い、古い、古い、——そのうち數百は餘り長くそこにゐたので砂丘から吹いて來る砂だけで形も毀れ、碑銘も全く消えて居る。陸地が存在するやうになつてから、この風の吹く海岸にこれまで生きてゐた人々悉くの墓地をさながら通過して居るやうである。

そしてこの墓場には悉く——今盆だから——墓が新らしい程新らしい燈籠、——墓場の燈籠である白い燈籠がある。今夜多數の墓場は都會の火のやうな光で輝くであらう。しかし又燈籠のない無數の墓、古い幾萬の墓もある、——何れも家が斷絶したしるし、或はここを去つた子孫がその家族の名をさへ忘れたしるしてある。古い時代の人々、その人々の精靈を呼び戻してくれる者はない、愛する地方的記憶もなくなつて居る——彼等の一生に關する一切の事はずつと以前に消滅して居る。

四

ところで大多數の村はただの漁村である、そしてそのうちに嵐の前夜船出をして再び歸

つて來ない人々の古い草葺きの家がある。しかし溺死者も近傍の墓場に墓がある、その下に何かその人の物が埋めてある。

何であらう。

この西の方の人々の間には、外の土地では無頓着に捨てられる物――臍の緒――はいつも保存される。丁寧に幾重にも包まれて、最後の上包みに父と母と幼兒の名と、出生の日の時刻とを書いて、――家の守袋に納めて置く。娘は嫁入りの時、新家庭へ携へて行く、息の方のは兩親が保存してくれる。死ぬ時はそれを一緒に葬る、外國で、或は海で死ぬ事があれば、遺骸の代りにそれを墓に納める。

五

船に乘つて海に行き、そこに止まつて歸らない人々に關して、この遠隔の海岸では妙な信仰が行はれる、――墓の前に白い燈籠をかける優しい信仰よりは、たしかに、もつと原始的な信仰である。溺死者は決して冥途へは行かないと信じて居る者がある。彼等は永久に流れの間に漂ふ、潮の動搖と共にうねる、船のあとに續いて動く、大波の碎ける時に叫

ふ。激浪の跳ぶ時上るものは彼等の白い手である。礫をざらざら音をさせたり、引浪が引く時游泳者の足をつかんだりするのは彼等の拳である、それで船乗はこのお化けの事を婉曲に云つて、非常にそれを恐れる。

それで船には猫を飼ふ。

猫はお化けを追拂ふ力がある物ときめられて居る。どうして、又何故かについて私に告げてくれる人が未だ見つからない。私は猫は死者を支配する力があると考へられて居る事だけを知つて居る。死骸と猫だけを置いたら、死骸は起きて躍り出さないだらうか。猫のうちでも三毛猫はそのために船乗に最も貴ばれる。しかし三毛猫が得られない場合には外の猫でもよい、それで船が港に入ると、その船の猫は大概――船側のどこか小さい窓から覗いたり、大きな舵の動いて居る廣い場所に坐つたりして居るのが見られる、――即ちもし天氣がよく、海が靜かであれば。

六

しかしこんな原始的な恐ろしい信仰があつても、盆の時節には美はしい佛教の信仰を行

ふ事には變りはない、それでこの小さい村々から十六日に精靈船が出る。精靈船は日本の外の地方よりも、この海岸では餘程精巧に又費用をかけて造られる、骨組の上を藁で包んで造つてあるだけではあるが、何れも細（コマカ）い點まで完全にできて居る小船の面白い模型である。三尺から四尺までの長さのもある。白い紙の帆に戒名が書いてある。新しい水を入れた小さい水入れと香爐をのせてある、それから上側板に神祕的な卍（マンヂ）をつけた小さい紙の旗がひるがへる。

精靈船の形とそれを流す時と仕方に關する風習は國々によつて餘程違ふ。精靈船の代りに燈籠だけ、――その目的のためにのみ造られた特別の種類の燈籠――を流すのが或漁村の習慣だと私は聞いて居る。

しかし出雲の海岸、及びこの西の海岸に沿うた他の地方では、精靈船は海で溺死した人のためにのみ流される、それから流す時刻も夜でなくて、朝である。死んでから十年間は毎年一囘、精靈船を流す、十一年目からはこの儀式はない。稻佐で見た多くの精靈船は全く美しかつた、そして貧しい漁村の人々にとつては隨分多額の金がかかつたに相違ない。しかしそれを造つた船大工の話では、溺死した人の親戚は悉く金を寄附して、年々小さい

船を求める。

七

上市と云ふ寂しい小さい村の近くで、私は名高い聖い樹を見物するためにしばし休息する。それは大通りに近いが低い丘の上の森の中にある。その森に入ると、三方が甚だ低い崖で圍まれた小さい谷のやうな處へ出る、その上の方へ計られぬ程老いた巨大な松の樹が何本か聳えて居る。その大きなうねつた根は崕の表面を貫いて岩を割つて出て居る、それからその交つた松葉はその盆地に綠のたそがれを作つて居る。一本は甚だ妙な形の大きな根を三本つき出して居るが、その端が何か祈禱の文句を書いた長い白い紙や、海草の供物て巻いてある。何かの傳説によるよりは、むしろこの根の恰好が一般の信仰から見てこの樹を神聖にしたらしい、それは特別の崇拜の目的物である、そして小さい鳥居がその前に建ててある、それには最も不器用なそして妙な種類の奉納文がのせてある。私はその飜譯をここに出す事はさし控へる――しかし人類學者や民俗學者にはたしかに特殊の興味があるに相違ない。樹木の崇拜或は少くとも樹木のうちに存在すると想像される神の崇拜は大

多數の原始的種族に多分共通な、そして以前は日本にも博く行はれた、生殖器崇拜の珍しい遺物である。實際それが政府によつて禁止されてから二三十年にもなるまい。小さい溜地の向う側に、大きな、堅くない岩の上に同じく不器用な、同じく妙な物――祈禱者の物が置いてあるのを見る。二つの藁人形――互にもたれかかつた男女の人形である。細工は子供らしく不器用である、それでも藁一本で女の髮を巧みにまねて女は男と區別ができる。それから男には、今封建時代の老年の殘存者しかもたない丁髷がついて居るから、私はこの祈禱者の物は何か古への、そして全く慣習的模型によつて造られたものであらうと思ふ。

さてこの奇妙な奉納物はそれ自身問はず語りをしてゐる。愛し合つて居る二人の男女は男の過ちで別れる事になつた、多分どこかの女郎に迷うて女に不實をする氣になつたのであらう。それから不實をされた女はここに來て迷の雲を晴らし、誤れる心を直して貰ふやうに神に祈つた。その祈りは聞き屆けられた、二人は再び一緒になつた、それで女はそのために二つの妙な人形を自分の手で造つて、――彼女の無邪氣な信仰と感謝の心のしるしとして――松の樹の神に捧げた。

八

濱村と云ふ小さい美しい村に着いた時、日が暮れた、明日から内地の方へ向うから、ここは海岸での私共の最後の休み場所であつた。私共の泊つた宿屋は甚だ小さいが甚だ物綺麗に小ぢんまりして居る、それから有難い温泉がある、宿屋はその温泉の出口に近い所に建つて居る。不思議な程落に近いこの温泉はこの村の家全部の浴場に供給して居ると私は聞いた。

宿屋では最上等の部屋を私共にあててくれる、しかし私は明日流す事になつて往来の入口に近く、臺の上に置いてある甚だ立派な精靈船を見るために暫らく止まる。ほんの少し前にでき上つたらしい、新しい藁屑がそのあたりに散らかつて、戒名は未だ帆の上に書いてない。この船は貧しい寡婦とその息子、二人とも、この宿屋の奉公人である人達の物であると聞いて驚く。

私は濱村で盆踊を見ようとあてにしてゐたが、失望する。村では警察が踊りを禁じて居

る。コレラを恐れてこんな嚴重な衞生規則を出す事になつた。濱村では飲料、料理用、洗濯用として水を使用してはならない、ただ温泉だけを使用するやうに命令されて居る。

非常に聲のよい小柄な中年の女が晩飯の時給仕に來る。二十年以前、既婚の女がしたやうに齒を黑くして眉を剃つて居る、それでも彼女の顏はやはり愉快な顏である、若い時には並すぐれて綺麗であつたに相違ない。女中として働いては居るが、宿屋の人々と親類になつて居るので、親類相當な思ひやりで待遇されて居るらしい、この女の話では精靈船は夫と弟――八年前、二人ともうちの見える所まで來て死んだこの村の漁師（レウシ）達――のために流される事になつて居る　隣りの禪寺の僧が翌朝來て帆の上に戒名を書いてくれる、このうちには漢字を書く事の上手な人はゐないから。

私は彼女にきまりの僅かな心づけをする、それから私の從者によつて、彼女の身の上を色々尋ねる。彼女は自分よりずつと年上の夫と結婚して、甚だ幸福にくらしてゐた、それから十八歳の少年であつた弟も一緒にゐた。よい船を一艘と少しばかりの地所を持つてゐた上、彼女は機織が巧みであつたので、とにかく樂にくらしてゐた。夏になると漁師（レウシ）は夜、魚を取る、船が皆出ると二哩か三哩の所で、一群の星のやうに、沖に一列の漁火を見るの

は綺麗である。天氣の悪くなりさうな時には出ない、それでも月によつては、颱風が突然起つて、帆を上げる暇もないうちに、船に追ひつく。彼女の夫と弟が最後に出た晩はお寺の池のやうに海は静かであつた、颱風は夜明け前に起つた。それからの事は、私共のはるかに不器用な言語で、私が飜譯する事ができない程あつさりした悲哀な調子で彼女は述べる。

―船と云ふ船は皆歸りましたが、夫の船だけは歸りません、夫と弟は外の人達よりもずつと向うに行つてゐたので、そんなに早く歸られませんでした。みんな見て待つてゐました。波は一分毎に高くなり、風は恐ろしくなるやうでした、それで外の船も流されないやうにずつと岡の方へ引上げて置かねばなりませんでした。ところが不意に夫の船が大變、大變早く來るのが見えて來ました。喜びましたね。隨分近く來たので夫の顔も弟の顔も見えました。ところが不意に横波が船の一方にぶつかつたので、船が水の中へ沈んで、出て來ませんでした。それから夫と弟が泳いで居るのが見えました、しかし波で上げられる時しか見えません。山のやうな波でした、それで夫の頭と弟の頭がずつとずつとずつと上つて、それから下へ下りる、それで私達の方で見える程波の頂上に上る時いつも二人が「助けて」と呼んでゐます。しかし強い人達でも恐れてゐます、海は餘りこはい、私はただ女

です。それから弟はもう見えなくなりました。夫は年取つてゐましたが、大變强い、それて長い間泳いてゐました、――餘り近いので、私は夫の顏が恐れて居る人の顏のやうてある事が分りました、――そして「助けて」と呼んでゐました。しかし助けてくれるものはありません、それてたうとう夫も沈みました。それでも沈む前に夫の顏が見えました。

『それからあと、長い間、その時見た通りの顏がいつも見えました、それて私は眠られないて泣いてばかりゐました。それから私は佛様や神様へその夢を見ないやうにとお祈りを致しました。もうその夢は見ません。が、かうしてお話をして居る時でも、やはり夫の顏が目に見えます。……その時分私のむすこはほんの子供でした』

この簡單な話を終る時彼女は忍び泣きをしないでは居られなかつた。それから、不意に疊まで頭を下げて、袖で涙をふいて、こんな風に私情を少し露出した事を丁寧にわびて、そして笑つた――日本の禮儀の眞髓とも云ふべき柔らかな低い笑であつた。私は白状するが、この笑は話その物よりも一層深く私を感動させた。適當な時に私の從者は巧みに話題を變へて、私共の旅について、それから旦那様がこの海岸の古い習慣や昔話に興味をもつて居る事について、輕い話を始める。そして私共の出雲漫遊の話を少しして彼女を喜ばせ

る事ができた。
彼女は私共に何處へ行くかと尋ねる。私の從者は多分鳥取までと答へる。
『あゝ、鳥取。さやうでございますか。……ところで、鳥取の蒲團と云ふ古い話がありますが、旦那樣は御存じでゐらつしやいませうね』
ところがその旦那樣は御存じでない、そして熱心にそれを聞かせて貰ひたいと云ふ。そして私の通譯の唇から私が先づきいた通りにここにその話をかく。

九

昔、鳥取市の至つて小さい或宿屋が開業してから始めてのお客として一人の旅商人を迎へた。宿屋の主人はその至つて小さい宿屋の評判をよくしたいから、このお客は尋常以上の親切を以て迎へられた。新しい宿屋ではあつたが、持主が貧しいから道具――家具器物――の大部分は古手屋から求めたのであつた。それでも一切の物はさつぱりして、氣もちよく、綺麗であつた。お客は御飯も旨く喰べ、暖い酒も澤山飲んだ、それから柔かな床は疊の上にのべられたので、お客は眠りにつくために橫になつた。

「ここで暫らく話を中止して、日本の寢床について一言云はねばならない。誰からちに病人でもない限り、讀者は日中どこか日本家屋に入つて部屋と云ふ部屋を悉く、それから隅から隅までのぞいて見ても床と云ふ物を見る事は決してない。實際、西洋の床と云ふ意味のものは存在しない。日本人の云ふ床には寢臺もバネもしとねもシートも毛布もない。ただ蒲團と云ふ厚い綿を入れた、むしろ、平均につめ込んだ厚い夜具があるだけ。疊の上に何枚かの蒲團を敷いて、何枚かの蒲團をその上にかける。富んだ人々は五枚六枚の蒲團の上にねて、好きな程の蒲團をかける事もできるが、貧しい人々は二枚か三枚で滿足せねばならない。それから、西洋の爐の前の敷物より大きくも厚くもない木綿の蒲團から長さ八尺幅七尺と云ふ金持ちでなければ着られないやうな重い立派な絹蒲團に至るまで勿論種類は多い。その上着物のやうに大きな袖のある大きな蒲團の一種で夜着と云ふのがある、殊の外寒氣の强い時にこれを着ると大層氣もちがよい。凡てこんな物は、日中は見えないやうに、壁に工夫して造つてあつて、ふすまで閉ぢてある押入れにしまつてある。——ふすまと云ふのは優美な圖案で普通裝飾された光澤のない紙を張つた綺麗な境をつける引戸である。これから又そこに妙な木の枕もしまはれる、この枕は眠つてゐても亂れない

やうに日本髪を保存するためにできて居る。

この枕も多少神聖である、しかしそれに關する信仰の起原と正しい性質については私はよく知つてゐない。これだけ知つて居る、卽ち足で枕にさはる事は甚だ惡い、たとへ偶然にてもそんな風に蹴つたり動かしたりする事があれば、その不行状の償ひとして、手で枕を額に押戴き、『御免』と云つて恭しくもとの場所へ戻さねばならない」

さて、暖い酒を澤山飲んだあとでは、殊に寒い晩で床が暖い時には、熟睡するのがきまりである。ところでこのお客はほんの少ししか眠らないうちに、その部屋の中で聲がするので目をさました、——同じ問を互に問うて居る子供の聲であつた、——

『兄さん寒からう』

『お前寒からう』

部屋に子供が入り込むなどと云ふ事はお客を困らせるかも知れないが、驚かす事にはならない、と云ふのは、日本の宿屋には戸と云ふ物はなくて、部屋と部屋との間にただ紙のふすまがあるだけだから。それで何か子供が暗がりに間違つて自分の部屋に迷ひ込んだに相違ないとお客に思はれた。彼は何かおだやかに小言を云つた。ほんの暫らく静かになつ

た、それから優しい細い悲しげな聲が耳もとで『兄さん寒からう』と問うた、すると又別の優しい聲がいたはるやうに『お前寒からう』と答へた。

彼は起きて行燈にあかりをつけて部屋を見廻した。誰もゐない、障子は皆しまつてゐた。戸棚を調べた、何にもない。不思議に思ひながら、あかりをつけたままで、又横になつた、すると、直ちに又枕もとで、聲が訴へるやうに話した。

『兄さん寒からう』

『お前寒からう』

それから始めて彼は夜の寒さでない寒さでぞつとして來た。何度も何度も聞いた、その度毎に益々恐ろしくなつて來た。聲は蒲團の中にある事が分つたからであつた。そんな風に叫んだのは掛蒲團だけてあつた。

彼は急いで自分の僅かな所持品をかき集めて、階段を下りて主人を起し、事の次第を語つた。すると主人は大層怒つて答へた、『お客様の御意に召すやうに、萬事やつて居るわけです、全く、ところでお客様は餘り御酒を召し上つたので、變な夢を御覽になつたのです』それでもお客は直ちに拂をして外へ行つて宿をさがすと云ひ張つた。

翌晩又一人の客が來て宿泊を求めた。おそくなつてから主人は、前夜と同じ事て起され

た。不思議にも今度の客は酒を少しも飲んでゐない。主人は何か妬む人があつて、自分の商賣の邪魔をするのだらうと邪推したので、怒つて答へた、『お客樣のお氣に召すやうに萬事注意して居ります、それに緣起の惡い迷惑な事をおつしやいます。この宿屋は私の生計のための物である事は——御承知でせう。何のためにこんな事をおつしやるのか、不都合千萬です』そこでお客も怒り出して、大きな聲でもつとひどい事を云つた、そして二人は非常に怒つて別れた。

しかしお客が行つたあとで、主人はどうも變だと思つたので、蒲團を調べに二階のそのあき間へ行つて見た。そしてそこに居る間に彼は聲を聞いた、そして彼は二人の客の云つた事は全く事實である事を發見した。叫んだのは一枚——只一枚——の掛蒲團であつた。あとは靜かであつた。彼はその蒲團を自分の部屋へ運んだ、それから、朝まで、それを着て寢て見た。その聲は夜明けの時刻まで續いた、『兄さん寒からう』『お前寒からう』それで彼は眠られなかつた。

夜明けに彼は起きて蒲團を買うた古手屋の主人に遇ひに行つた。古手屋は何も知らなかつた。彼はもつと小さい店からその蒲團を買うたのであつた、そしてその店の主人は町のずつと郊外に住んで居る一層貧しい家からそれを買うたのであつた。それで宿屋の主人は

尋ねながら、つぎからつぎへと行つた。
それから最後に、その蒲團は貧しい家族のものであつた事、それからその家族が住んでゐた郊外の小さい家の家主から買うた事が分つて來た。それでその蒲團の話は、かうであつた、——
その小さい家の家賃は一ヶ月僅か六十錢であつた、それでも貧しい人達にとつては中々の大金であつた。父は一ヶ月に二三圓しか儲けられない、母は病氣で仕事ができない、それから子供が二人、——六つと八つの男の子があつた。それからこの人達は鳥取では外から來た人達であつた。
或冬の日に父が病んだ、一週間病んだあとで、死んで葬られた。それから長い間床についてゐた母はそのあとを追うた、そして子供等だけ殘つた。助けて貰ひに行く人を誰も知らなかつた、そして生きるために何でも賣られるものを賣り始めた。
澤山はなかつた、死んだ父と母の着物、それから彼等自身の着物の大部分、木綿の蒲團、それから僅かなあはれな道具類——火鉢、椀、茶碗、それから外のつまらぬ物ども。毎日何か賣つて、最後に一枚の蒲團の外何にもなくなつた。それから何にも喰べる物のない日が來た、それから家賃が拂つてなかつた。

恐ろしい大寒が來た、その日は餘り雪が高く積つたのでその小さい家から遠く離れて出て行かれなかつた。それで一枚の蒲團の下に一緒にゐて、一緒にふるへて、子供らしく互に慰め合ふより外はなかつた、——

『兄さん寒からう』

『お前寒からう』

火はなかつた、火をつくる材料は何もなかつた、そして暗くなつた、それから氷のやうな風が小さい家の中へ悲鳴をあげて入つて來た。

彼等は風を恐れたが、家賃を取立てに荒々しく彼等を引起す家主を一層恐れた。彼は惡相をした無情の男であつた。そして拂つてくれる人のゐないのを見て、子供等を雪の中に追出し、たつた一枚の蒲團を取上げて、家に鍵をかけた。

彼等は銘々青いうすい着物を只一枚しか着てゐなかつた、外の着物は皆食物を買ふために賣られたからであつた、それからどこへ行くあてもなかつた。餘り遠くない處に觀音堂があつた、しかしそこまで行くには雪が餘り深かつた。それで家主が行つてから、家のうしろにたどり戻つた。そこで寒さのための眠氣が彼等を襲うた、そこで彼等は暖を取らうとして抱き合つた。それから眠つて居る間に神々は、新しい蒲團——物すごい程白い、そ

して非常に綺麗な蒲團――で彼等を包んだ。それで彼等はもう寒さを感じなかつた。長い間彼等はそこに眠つてゐた、それから誰か彼等を發見して、千手觀音堂の墓場に彼等のための安眠の床がつくられた。

こんな話を聞いたので、宿屋の主人は蒲團をそのお寺の僧侶に寄附して、小さい魂のために讀經して貰つた。それで蒲團はそれから物を云はなくなつた。

一〇

話が一つ出ると又別のが出る、それで今夜珍しいのを澤山聞く。最も著しいのは私の從者が急に想ひ出した話で――出雲の傳說である。

昔、出雲の持田の浦と云ふ村に或農夫がゐた、餘り貧乏なので子供をもつ事を恐れてゐた。それで妻が子供を生む毎に川に投げ込んで、そして死んで生れたのだと云ふ事にしてゐた。男の子の事もあり、女の子の事もあつたが、生れ兒はいづれも、夜、川へ投げ込ま

れた。こんなにして六人殺された。

しかし段々年がたつに隨つて、農夫は以前より富んで來た。土地を買つたり、金を蓄へたりする事ができた。それからたうとう妻は七人目の子供、男の子を生んだ。

そこで男は云つた、『もう子供は養つて行ける、それから年を取つてから世話をして貰ふむすこが要る。この男の子は綺麗だ。それてこれは育てる事にしよう』

そして幼兒は成長した、このかたくなな農夫は毎日自分で自分の心が分らくなつて來た、――それは毎日むすこ可愛の念が募つて來たからであつた。

或夏の夜、彼は子供を抱きながら庭に出た、子供は五月たつてゐた。

夜は非常に美しく、大きな月が出てゐた、それて農夫は叫んだ、――

『あゝ、今夜珍らしいゑゝ夜だ』

すると子供は父の顏を見上げながら、おとなの言葉て云つた、――

『おとつあん、わしをしまひに捨てさした[註]時も、丁度今夜のやうな月夜だつたね』

そしてそれから子供は同年の外の子供と同じになつて何にも云はなかつた。

農夫は僧になつた。

註。この農夫と子供の言葉は出雲の方言。

二

晩飯も風呂もすんだが、餘り著くてねられないから、獨りで村の墓地を見に出かける、その墓地は砂丘の上にある長い墓地である、砂丘と云ふよりはむしろ砂の山で、頂上だけ少し土に蔽はれて居るが、その崩れかけて居る側面を見ると今日の汐よりもつと巨大な古代の汐で創造された歴史を物語つて居る。

墓地に達するために膝まで砂を渡る。大きなそよ風の吹く暖い月夜である。盆の燈籠は澤山あるが、海の風は大概の火を吹き消した、ただあそこ、ここに極めて僅かな火が柔らかな白い光を投げて居る、——綺麗な社(ヤシロ)がたの、何かの象徴の形のすきの間のある木の箱に白い紙をはつた燈籠である。時刻はおそいから私の外に人はゐない。しかし今日はここで餘程心づくしの仕事が行はれたわけである、凡て竹の筒には新しい花や小枝が挿され、水鉢には新しい水が滿たされ、墓石は清められて綺麗になつてゐたからである。それから

墓地の一番奥の隅に、一つの甚だ質素な墓の前に、完全な小さい日本の美味を盛つた皿や椀をのせた美しい膳を私は見つける。それから新しい箸と小さい茶の碗がある、御馳走のうちには未だ暖いのもある。愛情のこもつた女の仕事である、その小さい草履の跡は路の上に未だあざやかに殘つて居る。

一二

アイルランドの俚言にどんな夢でも、もしその夢を見た人がさめてから想ひ出さうとして頭をかく事をさへしなければ想ひ出せると云ふのがある。しかしこの用心を忘れたらその夢は決して記憶にかへつて來る事はない、吹き去られた烟のたな引きの渦巻は元の通りの形にはできないと同じ事である。

千の夢のうち、九百九十九までは全く望みなく消えて無くなる。しかし珍しい經驗によつて想像が妙に印象を受けて居る時に來る、或珍しい夢、――旅行中に特に起り易い夢――は實際の出來事のやうに全くはつきりと印象されて、記憶に殘る。

私がこれまで書いたやうな事を見聞したあとで、私が濱村で見た夢はこんな夢であつた。

どこか青白い廣い敷石のある場所——事によればお寺の中庭のやうな所——それはかすかな日光で染められて居る、そして私の前に若くもなく老いてもゐない婦人が大きな灰色の臺の下に坐つて居る、その臺は何をのせて居るのか私は女の顔しか見られないから分らない。そのうちに私はその女に覺えがあると思つた——出雲の女であつた、それからその女は氣味惡くなつて來たやうだ。唇は動いてゐたが、眼は閉ぢてゐた、そして私は彼女を見ないわけには行かなかつた。

それから數年の距離を通つて細くなつて來るやうに思はれる聲で、柔らかな悲しい歌を始めた、そして聽いて居ると、ケルトの子供歌のかすかな記憶が自分に歸つて來た。それから歌つて居るうちに、一方の手で長い黑い髮を解いたら、それが石の上に環になつて下つた。それから下つて見たら黑くはない、青い、——青白い、日のやうな青色になつて、速い青い細波をあちこちにつくつて押しよせながら、うねり始めた。その時、不意に、その細波は遙かに、ずつと遙かに續いてゐて、女はゐなくなつて居る事に氣がついた。音のない波の長いのろい閃きをもつて、天の端まで青い大波をあげる海が、ただあるだけであつた。

それから眼をさまして、私は夜中に本當の海のつぶやき——佛海の巨大なかれ聲、——

歸りかゝる精靈の潮——を聞いた。

第二十二章　舞妓について

日本の宴會の初めほど靜かなものはない。日本人でない以上は、誰人も開宴の光景を見て、結末の騒かさを恐らくは想像し得ないだらう。

羽織を着た客達は、全く音を立てずに、また物も云はないで、座布團の上に、彼等の席に就く。漆塗の食膳が彼等の前に疊の上に据ゑられる。それを運んでくる女中達の、露出せる足は、少しの音も立てない。暫くの間は、一座たゞ微笑と輕い動搖があるのみで、恰も夢の中のやうだ。外部からの響も滅多に聞えて來ない。それは料理屋の座敷は、通常濶やかな庭園で街路を隔ててゐるからだ。たうとう饗宴の主人が、上品なお定まり文句で鎮靜を破る。『お粗末で御座いますが――どうぞ御箸を！』そこで客は一同默禮して、箸を取上げ、食べはじめる。しかし箸は、巧みに使はれて、音は少しも聞えない。女中達が極めて靜肅に、客毎にその杯へ熱い酒を注ぐ。して、二三の料理品を食べてしまつて、數杯の酒を乾した後で、漸くにして喋々の語聲が起つてくる。

すると、忽然わつと輕く笑ひ出し乍ら、數名の若い娘が入つてくる。彼等はお定まりのお辭儀をする。列座の客の中間にある、廣い場處へ滑べるやうに行つて、酒を勸める。その款待振りの優美と巧妙は、普通の娘では企及し得ない。彼等は綺麗で、絹の贅澤な服裝をして、女王のやうな帶をつけてゐる。して、銘々の美しく結つた髮には、造花や、驚くべき櫛や留針や珍らしい金の飾りが附けてある。彼等は初對面の客に向つても、以前から知つてゐた如くに挨拶をする。彼等は冗談をいひ、笑ひ、きやつ〱と面白さうに叫ぶ。これが宴席に聘せられる藝者なのである。

註。京都の言葉では舞妓（まひこ）といふ。

三味線が響く。藝者は通例の來客よりも更に多數を容れ得る大廣間の一端にある賑やかな處へ退いて、數名のものは年齡の一寸分かりかねるやうな一人の女の指揮の下に、囃の組を作る。それにには數個の三味線と、少女が打つ小さな太鼓がある。他のものは、一人づつで、又は二人づつの組になつて、舞踊する。それは全く優美な姿勢から成つた、輕快で陽氣な踊りで、二人の娘はいかにも數年の稽古を積んだればこそ初めて出來るやうに、よく足を揃へ、身振を一致させて、共に踊るのだ。が、私共西洋人が舞踏と稱するものに似

てゐるよりは、寧ろ所作に似てゐる場合が一層多い――袖や扇子を異常に振つたり、眼や容貌を美はしく、機敏に、控へ目に、全然東洋風に働かせたりして所作を演ずる。藝者の行ふ舞踊に、もつと肉感的なのもあるが、通常の場合や、上品な客の面前では、彼等は日本の美くしく古い傳說、例へば海神の娘に愛された漁師浦島の傳說のやうなものを活寫する。また折々はただ數個の美辭を以て天眞爛漫たる感情を旨く鮮やかに表現せる、古い漢詩を吟ずることもある。して、絶えず酒を注ぐ――その熱い、淡黄色の、睡氣を催す酒は、柔かな滿足を客の血管に漲らせ、陶然恍惚裡に入らせる。すると、阿片を喫した人の醉眼に映ずる如く、平凡は驚異喜樂と變はり、藝者は極樂の少女と變はり、世界は事物自然の理では、到底あり得べくもないほど立派な光景に變つてくる。

最初非常に靜かな宴會が、段々と賑かな騷ぎになつて行く。客の列は亂れて、三々五々の集團となる。藝者は笑ひながら、喋りながら、この一團から、彼の一團へと移つて、酒を注ぐ。酒杯[註]は叩頭の禮を以て獻酬される。客が古い武士の歌、卽ち漢詩を吟じ始める。一人か二人は、踊るものさへある。或る藝者は膝まで衣裳を捲くり上げる。して、三味線は『金比羅、舟、舟』の急調を奏し始める。その音樂につれて、彼女は輕快敏捷に8の字の形に走る。それから、酒德利と杯を持つたまゝ、一人の若い客も同じ8の字形に走る。

もし兩人が線の上で出逢へば、衝突の失策を起した方が、一杯の酒を飲まねばならぬ。音樂はます〳〵早くなつて、走るものもます〳〵早く走る。それは彼等は調子に合はせねばならぬからだ。して、藝者が膝を占める。室の他の方面では、客と藝者が拳をやつてゐる。彼等は拳を打ち乍ら歌ふ。相向き合つて、手を拍ち、折々小さな絶叫を發して、勢よく指を差し出す。して、三味線が拍子を取る。

註。酒杯を杯泉で滌いでから、他客のと交換することが習慣である、友人の酒杯を求むるのは、厚意の表彰である。

ちよいと——どん〳〵！　お互だね、
ちよいと——どん〳〵！　御出てましたね、
ちよいと——どん〳〵！　しまひましたね。

さて、藝者と拳を打つのは、全然冷靜なる頭腦、敏捷なる眼、それから多大の熟練を要する。子供時代からあらゆる種類の拳を打つことに仕込まれてゐるから——しかも拳の種

類は多い――萬一彼女の敗ける場合があつても、それは概して禮儀上から敗けるのに過ぎない。最も普通の拳の表象は、庄屋と狐と鐵砲である。もし藝妓が鐵砲の表象をすれば、相手の客は直ぐに、音樂に合はせて、庄屋の表象をせねばならぬ。庄屋へ向つて發砲することは禁制だからである。もし相手が庄屋の表象をすると、彼女は狐の表象を以て應ずる。狐は人間を瞞して、客の負けとなる。して、もし彼女が最初狐の表象をすると、客は鐵砲の表象をせねばならぬ。それて狐を殺すことが出來る。しかし始終、男は女の明眸軟手を注意してゐなければならぬ。眼も手も美くしいから、ただ瞬間でも、男が油斷をして、その美しさを考へでもすると、それに惱殺されて負けを取ることになる。

譯者註。原文の拳の說明を少しく修正して置いた。

外見上では、非常に親しさうてあるが、日本の宴席では客と藝者の間には、一種の嚴重な禮儀が、いつも守られてゐる。いかほど客の顏が酒で赧らんできても、彼が女を愛撫しようとするのを見受けることはない。女は單に人間の花として、宴席に現はれたので、眺めるためてあつて、決して觸れるためてないといふことを彼は忘れない。日本に於ける漫遊の外客が、屢々藝妓や給仕女に對して無遠慮な馴々しさに陷るのは、假令微笑を以て耐

へ忍ばれてゐても、實際は頗る嫌惡されてゐるので、またこれを傍觀する日本人からは、非常に俗惡下劣の證據と見做されてゐる。

暫くの間、快興は加つて行く。しかし夜半が近づくに隨つて、客は一人々々いつの間にか分らぬやうに、こつそり去つて行く。それから賑ひは次第に消えて、音樂は止む。たうとう藝妓共は最後の客を玄關へまで送り出して、『左樣なら』と笑ひ聲で叫んだ後、長い間空腹てゐた彼等は、靜まり返つた廣間で、始めて彼等の食事に就くことが出來る。

藝妓の役目はかやうなものだ。が、彼女の裏面はどんなもの？彼女の思想、感情、彼女の祕密な身の上はどんなもの？煌々たる宴席の燈光圈を離れ、酒の霧が彼女の周圍に釀せる幻影外に於ける、彼女の生活の眞面目はどう？

君と寢やるか、五千石取るか、

何の五千石、君と寢よう。

と、昔の歌を彼女が愚弄するやうに、甘美な聲を迸らせて歌つてゐる際の如く、いつも彼女は惡戲者だらう？或はまた、

お前死んだら、寺へはやらぬ、
燒いて粉にして、酒て飮む。

と、彼女がうまく歌ふ、其熱烈なる約束を守り得るものと、彼女を思つてもよいだらう？
『何、それについては』と、或る友が私に告げた。『つい昨年のこと、大阪のお鎌といふ藝妓は、その歌の通りにやりましたよ。茶毘に附した戀人の屍灰を酒に混ぜて、宴會の席上、多數の客の前で飮んださうです』多數の客の前で！物語に取つて惜しいことだ！

註。昔、藤枝外記といふ將軍の旗下がゐた、五千石の祿を受けてゐた——當時に於ては大なる收入であつた。しかし彼は吉原の遊女綾絹と戀に落ちて、彼女を妻にしようと願つた。彼の上司が、祿と戀のいづれかを選べと彼に嚴命した時、男女の戀人達は密かに或る農家へ逃げて行つて、心中をした。そこで、兩人に關して上の歌が作られた。今猶、それは歌はれる。

藝妓の一團の住む家には、奇異な像が床の上に置いてある。それは粘土製のこともある。稀には黃金で作られ、最も普通には陶器で作られる。それは拜まれ、菓子や餅や酒などの供物が上げられ、その前に線香が燻ぶり、燈明が輝いてゐる。それは猫の像である。直立

して、一本の足を伸ばして招くやうな形をしてゐるから、『招き猫』といふ名がある。それは氏神様だ。それは幸運、富豪の最上、宴遊者の眷顧を齎らす。それで、藝妓の本性を知つてゐる人々は、この像は取りも直さず藝妓の像だと斷言する――冗戲好きで、綺麗で、柔かで、若くて、しなやかで、愛撫的で、而かも燒き盡くす火の如く殘酷だ。

また彼等は更に一層わるいことを彼女に關して語つてゐる――彼女の蔭には貧乏神が寄り添つて歩いてゐる。狐婆は彼女の姉妹だ。彼女は青年の滅亡者、財產の蕩盡者、家族の破壞者だ。彼女は戀を單に彼女の利益となるべき放蕩の源としてのみ知つてゐる。して、彼女が墓を作つてやつた人々の財產によつて、みづからの富を作る。彼女は可愛らしい僞善の最上の熟練家、最も危險なる陰謀者、最も飽くことを知らざる射利漢、最も冷酷の情婦だ。それは全部眞實とは云へないが、これだけは眞實だ――職業上藝妓は、小猫の如くに肉食の猛獸なのだ。實際眞に愛らしい小猫も澤山ある通り、眞に愉快な藝妓もあるに相違ない

藝妓はたゞ、青春と優美だけを混ぜた戀、殘念といふ心や、責任といふ觀念の加はらぬ戀の幻影を慕へる、愚かな人間の慾情に應ずるために作られたものに過ぎない。だから、彼女は拳を打つことの外に、人情を戲弄する手管をも敎へられてゐる。さて、宇宙永遠の

法則によれば、人間はこの不幸な世の中で、三つのものを除けば如何なる遊びをしても無害である。三つといふのは生、愛、死だ。是等三者は神々の手に保留されてある。といふのは、誰人も是等を戯弄すると災を招かずに居れないからだ。だから拳或は少くとも圍碁以上、更に重大なる遊びを藝者と共にすることは、神々の御氣に入らないのである。

藝妓の經歴は奴隷として始まる。貧窮な親から綺麗な子を契約の下に買受けて、十八年、二十年乃至二十五年間も、買主は彼女を使用する權利がある。彼女は藝者達だけの住む家で、養はれ、着物を與へられ、藝を仕込まれる。して、子供時代を嚴しい訓練の下に過ごす。彼女は禮儀作法や、優美な風姿や、鄭重な言葉を敎へられる。また幾多の歌の文句と曲調を諳誦せねばならぬ。それから、遊戯や、宴會婚禮の給仕や、衣裳の着こなしや、美容の法を知らねばならぬ。彼女の有する身體上の藝能は、すべて注意して修養される。後に及んで樂器を取扱ふことを敎へられる。先づ鼓を敎へられる。これは餘程の練習なくては、すこしも音を發しない。つぎに鼈甲または象牙の撥で、少しく三味線を彈くことを習ふ。八歳或は九歳の頃は、彼女は主として鼓を打つものとして宴席に侍する。そのとき彼女は最も可愛らしい子供であつて、鼓を二回打つ間に、徳利を一と振りふつて、一滴も零

さないで、正しく滿々と酒を杯に注ぐことを、最早知つてゐる。
それから後は、彼女の訓練は一層殘酷となる。彼女の聲は充分柔軟自在ではあるが、まだ力が足りない。冬の夜の最も凍つた時刻に、屋根へ出でて、血が指から泌み出て、聲が嗄れてしまふまで、歌つたり彈いたりせねばならぬ。その結果猛惡な風邪に罹るのが目的だ。或る期間の嗄れた囁き聲を經過すると、彼女は聲の調子が變はり、力が出來て、客の前へ出て、歌ひ踊る資格を得る。
この資格で、彼女は通常、十二歳乃至十三歳で初目見をする　もし綺麗で上手であれば、招聘が繁くなつて、一時間二十錢乃至二十五錢の割合で報酬を受ける。そこで初めて彼女の買主は、これまでの稽古に注ぎ込んだ時間、費用、骨折に對して拂戻しが出來てくるのであるが、しかも買主は兎角寛大ではない。これから多年の間、彼女の一切の儲けは、買主の手に歸して行く。彼女はすこしも得る處なく、自身の衣裳さへも所有しない。
十七八歳にもなると、彼女は技藝の上で名聲を博してゐる。最早幾百の饗讌に侍したので、一見して、町の重要な人物、一人々々の性格、すべての客の身の上がわかる。彼女の生活は、主もに夜間の生活で、藝妓となつてからは、旭日の昇るのを滅多に見ることはない。酒を飮んでも本心を失はぬやうに、七八時間食事をしないでも身に障らぬやうに慣れ

てきてゐる。幾多の戀人も有してゐる。或る程度まで、自分の好きな人に微笑を向けても勝手である。しかし彼女は何事にも優つて、彼女の魅力を自身の利益のために利用するやう、充分よく敎へられてゐる。彼女を身受けする意志と能力ある人を見出さうと望んでゐる――その人は、戀の愚かさと諸行無常を說ける佛敎の經文中に、幾多の新しく、立派な意味を、將來發見すること殆ど請合だ。

彼女の經歷の話を、この點で、私共は打切らう。これから後の彼女の物語は、彼女が若くて死ぬる場合を除けば、往々不快なものになり勝だからである。もし早世の節は、仲間から葬式を營まれ、その名殘りが種々の珍らしい儀式で保たれる。

時として、多分讀者が夜間日本の町を逍遙するとき、寺の山門から藝妓の鋭い聲と共に浮んでくる音樂を――三味線の響を耳にするだらう。それは奇異な事件と思はれるだらう。して、奧深い境內は見物の人で滿ちてゐる。それから群集を押分けて、寺の階段に達すると、二人の藝妓が本堂の疊の上に坐し、三味線を彈き乍ら歌つてゐて、今一人のは小さな机の前で踊つてゐるのが見える。机の上には位牌が置かれ、机の前には小さな燈明が輝き、唐金の碗には線香が燃えてゐる。果實や菓子など、記念の式日に死人に供する習となつてゐる僅かの食品が獻げてある。机の上の戒名は、ある藝者の戒名であつて、亡くなつた女

の友達は、一定の日に寺へ集つて、彼女の靈を歌と踊を以て欣ばせるのだといふことがわかる。その場合には、希望のものは誰でも會費なくして、その式に參會することが出來る。

しかし昔の藝妓は、今日の藝妓のやうではなかつた。或るものは白拍子と呼ばれて、彼等の心は左ほど無情ではなかつた。彼等は美しかつた。彼等は黃金の飾をつけた、女王らしい形の帽子を被り、華麗な衣裳を纏ひ、大名の館で例の舞をした。その一人についての昔話がある。私はそれは語る價値のあるものと思ふ。

一

今も猶、さうであるが、昔は日本の若い畫家は、全國各地を徒步で旅行する風があつた。それには名所を見たり、寫したり、且つまた多くは非常に風致に富める地にある寺院に藏せらるゝ名畫佳什を研究するためであつた。主もにかゝる遍歷の結果として、今日非常に珍重せられる、かの風景畫や、風俗畫の美麗な書籍が出來たのだ。それによると、日本人のみが日本の風景を描き得ることを最もよく示してゐる。讀者が日本畫家の日本の自然を解

釋する技巧に昵じんてくると、同じ方面に於ける外國人の試作は、妙に平凡無氣力と見えてくるだらう。外國の畫家は、彼の見るものの寫實的映像を與へる。しかしそれ以上の何をも與へない。日本の畫家は彼の感じたもの――季節の氣分、正しくその時間、その場所の精確なる感じを與へる。彼の作品は西洋の藝術には滅多にない暗示力の特質を有する。西洋の畫家は緻密なる細部を現はし、彼の惹き起こす想像力を滿足させる。が、東洋の彼の同胞畫家は、細部を抑へてしまふか、または理想化する――遠いものを霧に浸したり、風景に雲を纏はせたりして、彼の經驗を單に奇異なもの、美しいもののみが、其感覺と共に殘つてゐる記憶となすのである。彼は想像力に超越し、それを興奮させ、それをしてただ瞥見の中に認めた美を、慕ひに慕はしめるまゝにしておく。それにも係らず彼はかゝる瞥見に於ても、一種の殆ど魔法と思はるゝやうな方式で、ある時の感じ、ある場所の感じを表現することが出來る。彼はきつぱりした現實よりは、寧ろ回想と感覺の畫家だ。して、こゝに彼の驚くべき力の祕訣が存してゐる――この力は彼が感興を得た場面を未だ嘗て見ざる人では、味到し得られない。就中彼は非個人的だ。彼の描ける人物の形は、すべての個人性を缺いてゐる。しかもある階級の特徴を示す類型として無比の價値を有する――百姓の子供らしい好奇心、少女の羞恥、女郎の媚態、武士の自己意識、子供の可笑しげに、

落付いた可愛らしさ、老人の諦め悟つた温和。旅行と觀察によつてこの藝術は、發達させられた。それは決して畫房の所産ではなかつた。

餘程昔のこと、繪畫修業の一青年が、京都から江戸へ山を越えて、徒步で旅をしてゐた。當時は道路の數は乏しく、また惡路であつたので、旅行は、今と比ぶれば非常に困難で、『可愛い子には旅をさせ』といふ諺も行はれてゐた。しかし土地は今とは異らなかつた。今と同じやうな杉や松の森、竹藪、草葺の屋根を有する尖つた村落があつた。泥濘の中に腰を曲げた百姓の大きな黄色の蓑笠が、段々をなして相連る稻田の中に點綴せる光景も同じであつた。路傍からは、今と同じ地藏の像が、今と同じ寺へと通つて行く巡禮者に笑顔を向けてゐた。して、今と同じく、夏の日には、すべての淺い川の中には褐色の裸の子供が笑つてゐて、すべての川は太陽に向つて笑つてゐた。

が、繪畫修業の青年は、『可愛い子』でも何でもなかつた。彼は從來幾多の旅をして、粗食と荒々しい宿に馴れ、あらゆる難境をも堪へて利用してきた。しかし今度の旅には、ある夕方既に暗くなつてから、食物も宿も獲られさうにない、田や畠の見えない地方に入込んだ。或る村へ達しようと、山を越えて捷徑を求めた際、道に迷つたのであつた。

月はなく、松の蔭のため、その邊は眞暗であつた。彼の迷ひ込んだ處は、全く荒涼たる土地のやうに思はれた。ただ松風の音と鈴蟲の絶え間なく鳴く聲ばかりであつた。彼は躓きながら進んで行つた。どこかの川の堤へ達すれば、それに隨ひて村落へ出られるものと思つてゐた。たうとう一本の川が突然彼の道を遮つたが、それは絶壁の峽間に注ぐ急流であつた。止むを得ず後戻りをして、最も近い絶頂へ登つて、そこから人里の徵候を認めようと決心した。が、そこへ達してみると、見渡す處、たゞ山岳重疊であつた。

彼が丁度星の下で、その夜を過ごさうと覺悟してゐると、登つてきた山の向うの方の坂の下に、まさしく或る人家から洩れ出る一つの細い黄色の燈光を認めた。彼はその方へ足を進めて、やがて百姓の家らしい一軒の小屋を發見した。先きに見た燈光は、まだその鎖せる雨戸の隙から流れてゐた。彼は急いで行つて、戸を叩いた。

二

戸を叩いて數回呼んでから、漸つと內側に何か動く氣配がした。それから、何の御用ですかと尋ねる女の聲がした。その聲は殊の外美しかつた。またその姿は見えぬ女の言葉が、

彼を喫驚させた。といふのは、彼女は都の洗煉された言葉で話したからである。彼は修業中の青年であること、山中で道に迷つたこと、出來るならば、食事と一夜の宿を得たいこと、それから、もしそれが出來ないならば、最寄りの村へ行く道を敎へて貰つても有難く思ふといふことを答へた――それに案內者を雇ふ費用は、充分有つてゐることも附加へた。返答として彼女の聲は、更に二三のことを質ね返へした。彼の通つてきた方向から、その家へ達し得たことを、女は非常に驚いた樣子であつた。が、彼の答によつて、明かに疑ひを晴らしたものの如く、內側から叫んで言つた。『すぐ參ります。今晩、村へお出になるのは御困難でせう。道中が御危うございますから』

暫く手間取つてから、雨戶が開かれ、女が提燈を持つて現れた。自身は影にゐて、旅人の顏を照らすやうに、それを翳した。彼女は無言のまゝ、彼を吟味し、それから簡單に云つた。『お待ち下さい。水を持つて參りますから』彼女は盥を取つてきて、それを戶口の階段の上に載せ、また手拭を薦めた。彼は草鞋を脫ぎ、足を洗つて、旅の塵を拂ひ、して、さつぱりした室へ案內された。その室が家の內部全體を占めて、背後に小さな板圍ひをした場所が、臺所となつてゐるやうであつた。木綿の座布團が出され、また火鉢が彼の前へ置かれた。

その時、彼は初めて女主人を觀察する好機會を得た。して、彼は彼女の容貌の美麗と優雅に驚いた。年齡は彼より三歳乃至四歳位多いかも知れないが、まだ若い盛りであつた。たしかに彼女は田舎娘ではなかつた。前と同じく殊の外、美くしい聲で彼に語つて云つた。『今は獨り者でゐますので、こゝへ客をお泊め申す譯には參りませんが、これから先きへ今夜お歩きになるのは、乾度お危うございます。二三の百姓家も程遠からぬ處にありますが、この暗さではそこへも案內無くては、道がお分かりかねます。ですから、明朝まで御留め申上げます。御粗末では御座いますが、夜具を御用立てますから。それから、御空腹ていらつしやるでせうから、たゞまづい精進料理なんですが、どうか御遠慮なく召しあがつて下さい』

註。精進料理は、少しも動物類の材料を含まない佛教の食物である。ある種の精進料理は、頗る食慾を促す。

飢ゑてゐた旅人は、この勸めを非常に欣んだ。若い女は小さな火を焚いて、默つたまゝ、二三の料理を調へた——菜の葉を煮たもの、油揚、干瓢、それに一杯の粗飯——それから、その食物の性質について、詫び乍ら、手早く客の前へ出した。が、彼の食事中、女は殆ど物を云はなかつたので、その打解けぬ樣子は彼を困惑させた。彼が試みた二三の質問に對

し、彼女は單に點頭いたり、或は僅かに一語の返答をするに止まるので、彼は間もなく談話を控へて了つた。

兎角する內に、彼はこの小さな家は一點の塵を留めぬほど淸潔で、彼の食事に用ひられた器物は、また申分の無いものであつたことを觀察した。室內にある數個の安い道具も小綺麗であつた。押入や膳棚の紙障は、たゞ白紙ではあるが、大きな漢字の立派な揮毫で飾られてゐた。その文字は、かゝる裝飾の法則に隨つて、詩人や畫家の好む題材――春花、秋月、夏雨、山と海、空と星、河水或は秋風――に因んだものであつた。室の一方の側には、一種の低い壇に佛壇が載せられて、その漆塗りの小さな扉が開いてゐる處から、內部の位牌が見えて、野花が捧げられた間には、燈明が輝いてゐた。して、この佛間の上には月の光背を負つた觀音像の、並々ならぬ價値ある畫がかかつてゐた。

青年が僅かの食事を濟ましてから、女は云つた。『立派な夜具を差上げる譯に參りません。また紙の蚊帳が一枚しかありません。夜具と蚊帳とも私の使つてゐます品ですが、今夜はいろ〳〵の用事がありまして、私は寢る時間が無いのですから、どうか御休みなすつて下さい。まことに御粗末さまで相濟みませんが』

彼はそこで、彼女は何か不思議な理由があつて、全くの獨り暮らしだので、厚意的口實

の下に彼女の唯一の寢具を彼に薦めてゐるのだと悟つた。彼はかゝる過度の歡待に對して眞面目に抗議を申立て、床の上、何處でも熟睡が出來ること、それから蚊を少しも頓着しないことを斷言した。しかし彼女は姉のやうな口調で、是非とも彼女の希望に從つて吳れと言つた。實際彼女には或る仕事があるから、出來る限り早く勝手にさせて戴きたい。だから、彼を紳士だと心得てゐる以上、彼が彼女の希望通りに處置させて吳れるものと信じてゐるといつた。そこには唯だ一つの室より無かつたから、彼はこの言葉に對して、抵抗は出來なかつた。彼女は布團を延べ、木枕を持出だし、紙の蚊帳を吊るし、寢床の横の佛壇の方へは、大きな屛風を擴げ、それから、彼がすぐに寢につくことを望むやうな素振を見せて、お休みを告げた。彼は思ひも寄らぬ厄介を女にかけることを考へて、躊躇し乍らも、その言葉に應じて寢に就いた。

三

若い旅人には女主人の睡眠を犧牲にするやうな親切が、いかにも氣の毒に思はれて、それを受け容れ難くはあつたが、寢床はなか〳〵に心地よく感ぜられた。彼は餘程疲勞して

ゐたから木枕の上に頭を載せるや否や、一切のことを睡夢の裡に忘れてしまつた。

しかし彼が奇異な音によつて目を醒まされた時には、まだ眠つてから間もない程のやうに思はれた。たしかに跫音ではあるが、物靜かに歩く足の音ではなかつた。寧ろ興奮せる急速の跫音と思はれた。だから、强盗の侵入ではないかとも心に浮んだ。自身については損失となるほどのものも持たないから、心配にも及ばなかつた。彼の憂慮は主として彼に款待を與へた親切なる女に對しててあつた。紙の蚊帳の兩側には、四角形の小さい褐色の網が小窓のやうに嵌めてあつたので、それから外を覗いて見た。が、如何なることの起こつてゐるにせよ、高い屏風に塞がれて、見えやうはなかつた。呼んで見ようと思つたが、若し眞に危險の場合ならば、狀況をも究めないで、自身を現はしては、無效に歸し、また思慮を缺ぐだらうといふ考によつて、この衝動は抑へられた。彼を不安ならしめた物音は、續いて行つて、ますます不思議になつた。彼は萬一の覺悟をして、必要の際は、若い女主人を防禦せんがために、一身を賭けようと決心した。急いで着物を緊めて、靜と蚊帳の下から拔けて出て、屏風の端へ這つて行つて窺つた。彼が見た光景は、全く彼を喫驚させた。

燈明の輝いだ佛壇の前で、若い女は華かな服裝をして、獨りで踊つてゐた。彼は彼女の衣裳を白拍子のそれと認めた。尤も從來白拍子が着てゐるのを見たものに比すれば遙かに

華麗であつた。衣裳によつて天晴れ引立つた彼女の美は、その淋しい時刻と場處に於て見ると、殆どこの世とも思はれぬほどであつた。が、更に一層驚くべきは彼女の踊りであつた。霎時彼は凄い疑惑が疼くのを感じた。百姓達の迷信なる狐婆の物語が、彼の念頭に閃いた。が、佛壇の光景、觀音の畫像が、その空想を散らし、その愚かさに對して彼を恥ぢ入らせた。同時に彼は女が彼に見られるのを欲しないものを注視してゐるのだと氣付いたので、客の義務として、すぐに屛風の背後に歸らねばならぬと悟つた。しかしその光景は彼を魅惑した。彼は愕き乍らもまた空前の妙舞を欣賞せざるを得なかつた。して、眺め入るに從つて、彼女の魅力はます／＼加つた。不意に彼女は喘ぎ乍ら停まつた。帶を解いた。上衣を脫がうとして振り向いた。すると、彼女の眼が彼の眼と出逢つて、びつくりした。

彼は直ちに女に詫び入つた。彼は突然急速な跫音に目が醒めたので、夜は更けて、淋しい場處だから、女主人のため不安に思つたのだと云つた。それから、踊りを見て驚いたこと、その妙技に心を奪はれたことを告白した。『どうか私の好奇心を宥して下さい』と彼はつゞけていつた。『私にはあなたが何と申すお方か、また何うしてかやうな踊りの名手になられたものか、それが不思議で堪まりませぬから。西京の舞妓は皆見ましたが、まだいかほど有名な女でも、あなたに及ぶものはありません。それで、一たび拜見しましてか

らは、私の眼を外づす譯に參らなかつたのです』
初め彼女は立腹の樣子に見えたが、彼の言葉の終はらぬ內に、表情は變つてゐた。彼女は微笑を浮べ、彼の前に坐つて云つた。『いいえ、怒つてはゐません。たゞ御覽になつたのを遺憾に存じますだけなのです。噫あのやうに獨りで踊つてゐたのを、氣狂ひとでも御考へなさつたのでせうから。では、その譯を申上げねばなりません』
それから、彼女は身の上話をした。彼は少年の時、女の名を聞いたことを思ひ出した――彼女の藝名は白拍子中最も有名な名であつた。彼女は都門の寵を一身に蒐めてゐた。それがその名聲と美の眞盛りに、一朝何故とも、何處へとも知れず、華やかな世界から消え失せた。彼女はその愛人なる青年と相携へて、富と幸運から逃れ去つたのであつた。青年は貧しかつたけれども、彼等は二人で簡易且つ幸福な田舍の生活を營むだけの資產を有した。彼等は山間に小さな住宅を作り、數年間たゞお互同志を中心に暮らした。男は彼女を拜まんばかりに愛慕してゐた。彼の最大の樂しみの一つは、彼女が踊るのを見ることであつた。毎夜彼は得意の曲を奏し、彼女は彼のために踊るのであつた。が、或る冬の長い寒さに、彼は病に罹つて、彼女のやさしい看護の效もなく、亡くなつた。それから後、女は死んだ人に獻げるさま〴〵敬愛の儀式を行ひつゝ、男の名殘を伴侶として獨りで暮らして

きた。日毎に位牌の前へは慣例の供物を供へ、夜毎に昔通り彼を慰めるために踊つた。若い旅人が目撃した踊りは、かやうな次第であつた。彼女は説明をつゞけて、疲れた客の目を醒ましたのは無禮であつたこと、しかし彼が熟睡したと思はれるまでは控へてゐたこと、それから、極めて輕やかに踊るやうにしたことを述べて、全く覺えず知らず彼の安眠を妨げたことの寛恕を求めた。

彼女は一切の話を終つてから、少しの茶を薦め、二人で飲んだ。それから、哀訴せんばかりに、彼に再び寢に就くやう懇願したので、彼も止むなく、幾多衷心からの謝わりを述べ乍ら、また蚊帳の下へ歸つて行つた。

彼は充分長く熟睡した。目を醒ますと、日は既に高かつた。起きてみると、昨夕と同じい質素な食事が、彼に準備してあつた。彼は飢えてゐたけれども、女が彼のために自らの食物を節約したかも知れないので、控へ目に食べた。して、彼は出立の用意をした。しかし彼が受けた一切の待遇に對して、謝禮の金を拂はうとしたとき、女は何をも受けることを拒んだ。『差上げましたものは、お金をいたゞくほどのものでなく、また何を致しましたのもたゞ厚意からなのです。どうか、こゝで御困りになつたことは御忘れ下すつて、何と云つて差上げますものもありませんてしたが、たゞ心持だけを御汲み取つていたゞきま

すれば』と云つた。

彼はそれでも幾らか彼女に取らせようと努力した。しかしたうとう、いかに强ひても彼女を困まらすばかりと知つたので、言葉を盡して感謝を陳べ、別かれを告げた。して、心の中では、立去るのを遺憾に思つた。彼女の美しさと上品さは、彼が彼女以外のものには告白しかねる程、彼を惹きつけたからであつた。彼女は彼にこれから先きの道を示し、山を下つて行く彼の姿が沒するまで見守つてゐた。一時間後に、彼は本道に出てた。最早道筋はよくわかつた。すると、急に殘念な思ひが浮んだ。彼は自分の名を女に告げることを忘れたのであつた。瞬間彼は躊躇した。それから、『何、どうでもよい。俺はいつまでも貧乏だから』と獨言をいつた。して、彼は旅をつゞけた。

四

幾多の歲月が經つた。また幾多の流行もそれにつれて移り變つた。して、畫家も年が老いた。しかし、彼は既に名聲を博してゐた。彼の作品の妙に感じて、大名達は競つて彼に厚遇を與へたので、彼は富裕の身となつて、帝都に堂々たる邸宅を有した。諸國から多く

の若い畫工が、彼の許に弟子入りをして、萬事奉公を勤め乍ら、彼の敎へを受けた。彼の名は全國に知れ渡つてゐた。

さて、一日ある老婦人が尋ねてきて、彼に面談を求めた。弟子達は、彼女の粗服と哀れな姿を見て、たゞの乞食と思ひ、荒々しく彼女の用事を問うた。が、彼女が『私の參つた譯は、御主人でなくては云へません』と答へたので、狂女と信じて、『主人は今、西京にゐないのだ。またいつ頃歸られるかも、我輩にわからない』といつて撒いた。

が、老婦人は再三再四やつて來た——毎日、毎週やつて來ては、その度毎に『今日は主人は御病氣だよ』とか、『今日は非常に御多忙だから』とか、『今日は澤山の御來客だから、面會は出來ない』とか、何か眞實でないことを答へられた。それでも女は、毎日一定の時刻に、またいつも襤褸包に卷いた一個の束を携へて、來つゞけた。て、遂に弟子達は彼女のことを師匠に告げるのが最も得策と思つて、彼にいつた。『こゝの御門前に乞食と思はれる老女がゐます。御目にかゝりたいと申して、五十回以上も參りましたが、その譯をいひません。たゞ御師匠にだけ御願ひを申上げたいといつてゐます。どうも氣狂ひと存じますから、思ひ止まらせようとしますが、いつもやつてきます。これから何う致したら、よろしいものかと思ひまして、御耳に入れます』

そこで師匠の畫家は言葉鋭く答へた。『なぜ、誰もそのことを今日まで言つて呉れなかつた?』して、自身で門へ行つて、彼も昔貧しかつたことを想起し乍ら、親切に女に話しかけて、施捨を求めるのかと尋ねた。

が、女は金錢も食物も要らないが、たゞ自身の畫を描いてもらひたいとの希望を述べた。彼はその願を怪しんで、女を家へ入らせた。女は玄關へ入つて、跪いて、携へてきた包の紐の結び目を解き始めた。包を開けたのを見ると、畫工は黄金模様の刺繍を施せる華麗珍奇な絹の衣裳を認めた。しかし使ひ損じと、年月の經過のために、擦り耗らされ、色は褪めて、當年の全盛を偲ばせる白拍子の衣裳の名殘であつた。

老女が一つ〳〵衣裳を擴げ、慄へる指で皺を伸ばさうとする間、ある記憶が畫家の腦裡に動いて、しばらく漠然と浸み渡つたが、不意に燃え上つた。その追想の優しい衝動の裡に、彼は再び淋しい山家を見た――彼が無報酬の歡待を受けた家、彼の臥床を設けられた小さな室、紙の蚊帳、佛壇の前に微かに輝く燈明、深夜そこでたゞ獨り踊つてゐた人の異様な美しさを見た。そこで、老齢の訪問者の驚いたことには、この諸國諸大名の寵を受けてゐる彼が、彼女の前に低頭していつた。『瞬間でも御顔を忘れてゐた無禮を宥して下さい。しかし最早お互に御目にかゝつてから、四十年を越えました。今はよく思ひ起しまし

た。あなたは嘗て御宅へ私を迎へて下さつたのです。あなたは唯一つしかない寝床を私に讓つて下さいました。私はあなたの踊を見、またあなたから一切身の上話を聞かせてもらひました。あなたは白拍子でした。して、私はその御名を忘れは致しませぬ』

彼がさう云ふと、女は喫驚困惑して、始めは答へも出來なかつた。といふのは、年は老い、また非常に艱苦を嘗め、且つ記憶力さへ衰へかけてゐたからであつた。が、彼がますます親切に話を向け、昔彼女がいつたことをさま〴〵思出させ、彼女が佗住居してゐた家の狀況を說いて聞かせると、女もまた想ひ出だし、喜悅の淚を浮べて云つた。『たしかに祈願を見そなはし玉ふ觀音樣のお導きです。しかし不束な家へ先生が御出下さつた頃は、私も今のやうではありませんでした。先生が御覺え下さつたのは、佛樣の御奇蹟のやうに存じます』

それから、女はあれから後の彼女の簡單な物語をした。幾星霜の後、彼女は貧乏のため、かの小さな家を手離さねばならなかつた。で、年が寄つてから、彼女の名の夙くに忘れられてゐた大都會へ獨りで歸つてきた。彼女の家を失つたのは心苦しかつた。しかし年老い、身體弱くなつては、いとしい亡き人の靈を慰めるために、最早每夜佛壇の前で踊ることの出來ないのが、更につらかつた。だから、踊りの衣裳姿の畫を描いてもらつて、佛壇の前

へ掛けたいのてあつた。これがために、觀音に熱心な祈願をしてゐた。して、亡き人のために、平凡な作品でなく、最も優れた畫が望ましいため、この大畫家の名聲を慕つて、尋ねてきたのてあつた。て、踊の衣裳を携へてきたから、それを着た姿を描いて貰ひたいと願つた。

彼は親切さうな微笑を呈しつゝ一切の話を聽いた。それから『御望みの繪を描くことは、欣んで致します。今日は延期の出來ない、是非仕上げねばならぬことがありますが、明日こゝへ御出下されば、御望み通り、また私も全力を盡して、描いて上げますよ』と答へた。

しかし女はいつた。『わたしはまだ一番、氣にかゝつてゐることを御話申上げてゐませんのです。それは、それほど御手數を煩はしましても、御謝料と申しましては、白拍子の衣裳の外、何も差上げる譯に參らないことてす。それも昔は高價なもので御座いましたが、その品物と致しましては三文の値段にもなりませぬ。でも、今では白拍子もゐなくなりまして、當節の舞妓はこんな衣裳を着けませんから、珍らしい物と思召になつて、先生が御受け下さるかとも存じましたのて』

『そのことは、すこしも御心配に及びません』と、親切なる畫家は叫んだ。『これて昔の御恩を幾分かても御返へしが出來れば、私は嬉しい次第です。だから明日、御望み通り

描いてあげます』

女は三拝して、禮を陳べ、それから、また云つた。『失禮で御座いますが、もう少し申上げたく存じます。それは何卒このやうな今のわたしでなく、昔御覽になつたやうな、わたしの若い頃の姿をお描き下さいますやう』

彼は『私はよく記憶してゐます。あなたは非常に御綺麗でした』といつた。

是等の言葉に對して、女が感謝の辭儀をした時に、皺のよつた容貌は、嬉しさうに輝いた。して、女は叫んだ。『では、いよ／＼祈願が叶ふことになりました。かやうに不束なわたしの若い頃を御覺え下さつてゐるからには、どうぞこのまゝでなく、御親切にも、みにくゝはなかつたと、今仰せ下さいました通りの、わたしの昔の姿を御描き下さいませ。どうか、先生、わたしを今一度若くして下さいませ。亡くなりました人の靈に美しく見えますやう、美しくして下さいませ。その人のための御願で御座います。先生の名畫を拜見致しますれば、あの人もわたしの最早踊れないのを勘忍して呉れませうから』

もう一度、畫家は彼女に安心をさせて、それから云つた。『明日御出下されば、描いて上げますよ。私が見た時のやうな、若い美しい白拍子のあなたを描いてあげます。また、三國一の大富豪から依頼を受けたと同様に、念を入れて、うまくやつて見ませう。御心配

なく、たゞ御出なさい』

五

そこで、年老いた白拍子は約束の時刻に來た。して、柔かな白絹の上に畫家は彼女の姿を寫した。しかし、その際、畫家の弟子達の眼に映ぜる彼女の姿ではなく、鳥のやうな明るい眸を持つて、竹の如く嫩かで、絹や黃金の衣裳で天人の如く輝いてゐた、若い頃の彼女の記憶を寫したものであつた。名工の靈筆の下に、消えてゐた美しさは歸つてきて、褪せてゐた華かさはまた咲き出でた。畫が出來上つて、落款を捺してから、彼はそれを立派に絹で表裝し、杉の軸を附け、象牙の風鎮を備へ、吊るすために絹紐を附け、白木の小箱に收めて、女に渡した。それから彼は金子若干をも贈物として强ひて取らせようと、勸めたけれども、彼女はその補助を受納しなかつた。

『いえ、實際わたしは何も要りませぬ。ただ畫だけがわたしの願で御座いました。これまで畫のために祈願をこめてゐたので御座います。最早大願成就、この上この世の願は持ちませぬ。またかやうに俗なこの世の願を持たずに死にますれば、佛道往生も難くはなか

らうと存じます。たゞ殘念に思ひますのは、先生に差上げますものとては、この衣裳の外、何も御座いません。先生の深い御親切に對しましては、これから毎日先生の將來の御幸福を祈願致さうと存じます』

畫家は笑ひながら、きつぱり斷言して、『いや、これは何でもないことです。白拍子の衣裳だけは、それであなたの御心持が一層御宜しいなら、頂戴致します。昔、私のために、あなたが御不便を忍んで、しかも何うしても謝禮を受け下さらなかつたから、今に私は御恩を着てゐる積りです。その夜の樂しい思出になります。ですが、今は何處に御住居なさつてゐます？この畫の掛つた處を見たいものです』と云つた。

が、女は賤しい住家を御目にかけるも心苦しいと、丁寧に辯解して、所在を明さなかつた。それから再三低頭、禮を述べ、貴重な畫を携へ、嬉し淚を浮べて立去つた。

畫家は一人の弟子を呼んで、『急いで、あの女の人に分らぬやう、後へ追いて行け。して、何處に住んでゐるか、報告してくれ』といつた。そこで、弟子は見えないやうに、女について行つた。

餘程の時間が經つてから、弟子は歸つてきた。して、聞く人に取つて、面白くないことを云はねばならぬやうな風に笑ひ乍ら云つた。『先生、あの女に追いて行きますと、町を

出まして、死刑場に近い、磧へ行きました。そこの特種部落のやうな小屋に住んでゐます。汚い、廢つた場所で御座います』

『だが、明日その汚い廢つた場所へ私を案内してくれ。私の存命中は、あの女に食べものや着物に不足させたり、困らせたりはさせないから』と畫家は答へた。

弟子達が皆不思議に思つたので、彼は白拍子の物語をした。それから始めて皆、彼の言葉を奇異と思はなくなつた。

六

翌朝、日が出てから一時間すると、師匠と弟子は町の界から向うの方で、無宿者の集まる磧へと歩いて行つた。

小屋の入口は一枚の雨戸で閉ぢてあつた。師匠は幾たびも叩いて見たが、應答がなかつた。すると、戸は內から締めてなかつたので、輕く開けて、隙間から呼んだ。誰も答へないから、彼は入ることに決心した。同時に異常な鮮明さを以て、彼が疲勞せる青年修業者として、山中の小屋の前に立つて、戸を叩いた瞬間の感が念頭に返つた。

彼が獨りで靜かに入つてみると、女は一枚の薄い、ぼろ〳〵の布團にくるまつて、一見すると寢たやうに横つてゐた。粗末な棚の上に、彼は四十年前の佛壇を認めた。中には位牌があつた。して、當時と同じく、今も小さな燈明が、戒名の前で輝いてゐた。月の後光を負つた觀音の幅は無くなつてゐたが、佛壇に面した壁には、彼の贈つた畫が掛けてあつた。して、その下には一言觀音(ひとこと)[註]――この觀音はたゞ一つの祈願を叶へ玉ふだけだから、一回以上、願を掛けてはならぬ――の御札があつた。荒涼たる家の中には、その外のものは、たゞ巡禮の衣と托鉢の笻及び鉢だけであつた。

註。この觀音の寺は、奈良の大佛の寺から遠くない。

が、師匠はこれらのものを眺めて、躊躇してはゐなかつた。彼は眠つてゐる女を醒まし、欣ばせようと思つて、二回も三回も、元氣よく彼女の名を呼んだ。

すると、忽然彼女の死んでゐるのに氣がついた。して、その顏を凝視し乍ら、彼は不思議に思つた。それは案外若く見えた。青春の妖精とも見ゆる、何となく美しい趣が、そこへ歸つてきてゐた。悲哀の皺は、彼よりも更に偉大なる幻影の師匠の手によつて、奇異にも滑かに和らげられてゐた。

第二十三章　伯耆から隱岐へ

一

自分は隱岐へ行くことに決心した。

宣教師でさへそれまで一度も隱岐へ渡つたものは無かつた。そしてその海岸は、軍艦が日本海を巡航してその傍を汽走するといふそんな稀な場合を除いては、西洋人の眼に未だ嘗て觸れなかつたのである。それだけでも隱岐へ行く充分の理由となつたのであらう。だが、日本人すら隱岐のことは全く知つて居らぬといふ一層有力な理由が自分に提供せられた。日本帝國の中で一番知られて居ない部分は、異つた言語を使用して居る、稍〻異つた人種が住まつて居るルウチユウ。アイランヅ卽ち琉球を除いて、恐らくは隱岐であらう。これは出雲と縣を同じうして居る國であるから、新任の島根縣知事はいづれも就任後一度巡視するものと思はれて居り、縣警察部長は時折視察に出かけて行く。その上また松江や

他の町の商家で、年に一度注文取を隱岐へ送るのが幾軒かある。更にまた、――それは殆んど總て小さな帆船で行ふのであるが――隱岐とは餘程盛んな取引がある。がそんな公務上並びに商業上の交通は日本歴史の中世時代に於けるよりも、大して能く隱岐を今日世間へ知らしめる性質のものでは無かつた。隱岐については、東洋の種々な人種の想像的文學にあんなに大いに出て來る彼の荒唐無稽な女護の島に能く似た、異常な物語が今なほ日本西海岸の普通人の間に行はれて居る。さういふ古い傳說に據ると、隱岐の國の人の道德觀念は極めて奇妙なもので、最も嚴肅な禁慾者でも此國に住んで居ては浮世の快樂に對するその冷淡さを維持して行くことは出來ぬ。そして此處へ遣つて來る他國人は、着いた時にはどんなに金持でも、女の誘惑の爲めに、やがて素裸で貧乏になつて其本國へ歸らなければならぬといふのである。自分は珍奇な國での旅行にはもう充分の經驗があることだから、そんな不思議な話は總てみな、隱岐は『人の知らぬところ（テラ、インコグニタ）』といふそれだけの事實以上何も意味してゐないと確信して居た。そして隱岐の國の人の普通一般の品行は――西部諸國の普通人民の品行に依つて判斷して――自分の本國の無智階級の者共の品行よりも餘程優つて居るに相違無いと信ぜんとする氣持にさへなつて居つた。

この事は後になつて確にさうと自分は見屆けた。

暫くの間自分は自分の日本人友達のうちに、隱岐は古昔武人簒奪者が廢立した後醍醐後鳥羽兩帝の配流の地であつたといふ、自分が既に知つて居る、事實のほか、どんな知識をも與へて呉れるものを一人も見出し得なかつた。ところが到頭、全く思ひがけ無くも、前に隱岐へ行つたことがあるばかりて無く、用事あつて數日のうちにまた行かうとして居る一友を——前の學校の同僚を——發見した。で同行を約した。その男の隱岐に就いて語る所は今迄行つたことの無い人達の話とは著しく異つて居つた。隱岐の人達は出雲の人達と殆ど同じ程に開けて居て、好い町があり立派な小學校がある、と言ふ。人間は甚だ質朴で信じられない程に正直で、そして他國人に極めて親切である。日本人が初めて日本へ來た時このかた、即ちもつと浪漫的な言葉て言へば『神代』このかた、その人種を變へずに居る事をその唯一の誇として居る。みな神道信者て出雲大社教を奉じて居るが、佛教も亦、主として私人の澤山な醵金に依つて、維持されて居る。そして非常に居心地の好い宿屋があるから、全く氣安く感ずるだらう、と斯う言ふのであつた。

その男はまた隱岐の學校で使はせる爲めに出版された隱岐の事を書いた小さな本を呉れた。自分はその本からして次に記すやうな簡單な事實の摘要を得た。

二

オキノクニ卽ち隱岐の國は、出雲の海岸から百哩許りの、日本海の二群の小島から成つて居る。近い方の一群の名の島前（ダウゼン）は、種々な小島のほかに、互に近く存在して居る三つの島を含んで居る。チブリシマ卽ち知夫里島（時にヒガシノシマ卽ち東の島とも呼ぶ）、ニシノシマ卽ち西の島、及びナカノシマ卽ち中の島がそれである。このいづれよりも遙か大きいのは主島たる島後（ダウゴ）で、その多くは人の住んで居ない種々な小島と共に他の一群を爲して居る。オキといふ名はもつと一般にこの群島全部に用ひるのであるが――この島を時にオキと呼ぶ。

公には隱岐は四つのコホリ卽ち郡に分たれて居る。知夫里と西の島と一緒になつて知夫里郡を成し、中の島が小島一つ添へられて海士（あま）郡をつくり、島後（だうご）は穩地（おち）郡と周吉（すき）郡とに分たれて居る。

此等の島はいづれも山が多くて、その面積のほんの一小部分しか耕やされて居らぬ。主たる財源は漁業で、住民の殆んど全部が太古からして常にそれに從事し來たつて居る。

冬の幾月間は隱岐と日本西海岸との間の海は小舟に取つては太だしく危險て、その季節には島は本土とは餘り交通はしない。たつた一艘の客用汽船が隱岐へ伯耆の境から通ふ。直線ては伯耆の境から隱岐の一番の港の西鄕までの距離は三十九里だといふ。だが、汽船は其處への途中他の島々に寄港する。

隱岐には小さな町が、否むしろ小さな村が、隨分と澤山ある。そのうち四十五は島後に在る。その村は殆んど總て海岸に位して居る。主要な町には大きな學校がある。全島の人口は三萬〇百九十六人だと述べてある。が、町々村々のそれ〴〵の人口は書いて無い。

三

出雲の松江から伯耆の境へは汽船てたゞの二時間の旅てある。境は島根縣の一番の海港てある。不快な臭氣に充ちた見つとも無い小さな町で、たゞ港としてのみ存在して居るのてある。何の工業も無く、商店は殆んど一軒も無く、貧小な、そして興味は更に貧小な神社が一つあるだけてある。その主な建物は倉庫、水夫の遊び場處、それから四五軒の大きな汚い宿屋て、その宿屋には大阪行き、馬關行き、濱田行き、新潟行き、いろんな他の港

行きの汽船を待つて居る客がいつも一杯に込んで居る。この海岸では汽船は何處へも規則正しくは通はぬ。汽船の持主は時間通りといふ事に全然何等の營業的價値を置いて居らぬから、客はこんな事があらうとは到底も思はなかつた程長く、いつも待たなければならぬ。それで宿屋は喜んで居る。

だがその港は——出雲の高い陸と伯耆の低い海岸との間の長い海門にあつて——見事なものである。風から完全に蔽遮されて居て、殆んどどんな大きな汽船でもはひれる位に深い。船は家屋に接して碇泊が出來るので、港には和船から最近建造の蒸汽飛脚船に至るまでのあらゆる種類の船がいつも輻湊して居る。

友と自分とは幸にも一番好い宿屋の裏座敷を占めることが出來た。殆んど總ての日本の建物で、裏座敷が一番好い部屋である。境ではその上に、賑やかな埠頭と、その後ろに出雲の山々が空を背に綠の巨濤の如く起伏して居る、日に光つた入江全體を見渡すと更なる便宜がある。見て面白いものが澤山あつた。あらゆる種類の蒸汽船や帆船が宿屋の前に二た列び三列びに重なつて投錨して居て、裸體の船人足がその獨得な方法で以て荷積したり荷揚したりして居た。そんな男は伯耆や出雲の一等强壯な百姓の中から集めるので、身體

の運動毎にその鳶色の背中に筋肉が波打つ程の實際立派な身體をしたものも居た。見たところ十五六歳の男の子が――仕事を習つて居るので、まだ重荷を擔ぐほどには丈夫で無い見習が――幾人か手傳をして居た。殆んどその皆んなが、血管破裂の豫防に、紺布の幅廣い紐を腓(こむら)に捲付けて居るのに自分は氣が付いた。そして皆んな働きながら歌を歌つた。交る交るにやる妙な合唱が一つあつて、船艙に居る男が（英語のホオアエイ！に當る）「ドッコイ、ドッコイ」と歌つて合圖をすると、艙口に居る男は、下から揚つて來る荷物が見える度毎に、間に合せの文句でそれに應へるのであつた。

　　ドッコイ、ドッコイ！
女子の子だ。
　　ドッコイ、ドッコイ！
親だよ、親だよ。
　　ドッコイ、ドッコイ！
チョイチョイだ、チョイチョイだ。
　　ドッコイ、ドッコイ！

松江だ、松江だ。

　　ドッコイ、ドッコイ！

此奴も米子(よなご)だ。云々。

だが此歌は輕い早い仕事に歌ふものであつた。重い袋や樽を他の男よりも强壯な男の肩へ載せるといふ、もつと苦しいもつと遲い勞働には、前のとは餘程異つた歌が伴なふのであつた。

ヤンヨイ！

　ヤンヨイ！

ヤンヨイ！

　ヤンヨイ！

ヨイヤサアアノドッコイシ！

いつも三人で重荷を持上るのである。最初のヤンヨイで皆んな屈む。二度目のて三人ともそれへ手をかける。三度目のは用意が出來たといふつもり。四度目のてその重荷が地を

離れる。そしてヨイヤサアアノドッコイシといふ長い掛聲て、それを受取らうと待構へて居る逞しい肩の上へそれが落されるのであつた。

その勞働者の中に能く笑ふ裸體の男の子が一人居た。そのやかましい騒ぎの中でも、如何にも愉快げに鳴り響いてきこえる程の、その宿屋て評判になつて居るくらゐの、立派な中音部（ゴントラルト）の聲を有つた子であつた。お客の一人の或る若い女が二階の縁側へ見に出て來て、『あの子の聲は赤い聲だ』と言つた。それを聞いて誰も彼も笑つた。（譯者註）深紅色と喇叭の音とに就いて或る有名な話がある。光と音との性質を今ほど知つて居なかつた時分にその話が

譯者註）ロックの『人間の悟性』第三卷第四章第十一節に、『深紅色はどんなものかとその友人が尋ねたら、その盲人は喇叭の音のやうですと答へた』とあり。

可笑しく思へた程には今は可笑しくは思はれぬ。その話を此時想ひ出したけれども、この場合自分はその評語を非常に表現的な言葉だと思つた。

隠岐通ひの汽船はその日の午後に着いた。だが、埠頭に近寄ることが出來なかつたので、

自分は望遠鏡でその船尾の一瞬時の瞥見を得ただけであつた。金の英字で OKI—SAIGO といふ名が讀めた。どの位の大きさかといふ考へを得ないうちに、長崎からの大きな黒い汽船が間へ辷り込んで、丁度それを遮つて投錨した。

自分は日が暮れて皆んなが仕事を止める迄、荷積や荷揚を觀たり赤い聲の子が歌ふ歌を聽いたりして居た。それから今度はその長崎汽船を觀て見た。幾艘か他の船が出港したため宿の前の埠頭へ寄つて來て、二階の緣側の眞下に居たのである。その船長乘組員はどんな事にも急いで居るとは見えなかつた。みな一緒に前甲板に坐り込んで、其處へ提燈の光りで御馳走が並べられた。藝者が船へ上がつて皆んなと一緒に御馳走を食べて、三味線の音に合せて歌を唄つたり、皆んなと拳を打つたりした。夜遲くまで御馳走と遊興は續いた。そして驚く許り多量の酒を飲んだのであつたが、亂暴もしなければ騷動もしなかつた。だが酒は飲料のうちで一番眠氣を誘ふものである。だから夜中になると、甲板に居殘つて居るものは三人しか無かつた。そのうちの一人は酒は全く飲まなかつたが、いつまでも物を食ひたがつて居た。その男に仕合な事にはモチの箱を提げて夜商ひのモチ屋が船へ上がつて來た。モチといふは米の粉で造つて地產の砂糖で甘味を附けたケエキである。空腹なその男はそれを皆んな買つて、それしか無いのかと餅屋を恨んだほどであつたが、それでも

少しその餅を食へと仲間の者へ差出した。すると初めに勸められた男がまあこんな風な返事をした。

『わしやちや、餅にや、此世界では用はねや。酒さへ、この世にありや、他にや何んにも要らぬわ』

もう一人の男は斯う言つた。

『わしやちには、女子がこの浮世の一番えいもんだ。餅や酒にや、この世の用はわしや有たぬわ』

が、その餅を皆んな平らげてしまつてから、空腹であつた男は餅屋の方へ向いて斯う言つた。

『あゝ餅屋さん。わしやちや、女子や酒にやこの世の用は有たぬわ。餅よりえいもな、この憂世にやあらせんわ』

四

隱岐西鄕は正八時に出帆するから直ぐ切符を買ふが宜からうと、翌朝早く知らせを受け

た。日本の習慣に從つて宿屋の下男が荷物その他の一切の心配をせんで宜いやう取計つて呉れ、自分等の切符も買つて呉れた。一等賃金八十錢。そして急いで朝食をすますと、宿の小舟が我々を運ぶべく窓の下へやつて來た。

島根縣の汽船では洋服は不便な事を經驗して知つて居るから自分は和服を着、靴を草履に穿き換へた。船頭は大船小船のごちやごちや居る中を早く漕いだ。そしてそれを出離れると、遠く中流に、自分等を待つて居るジヨウキが見えた。ジヨウキといふは汽船を呼ぶ日本語である。この語は不快な解釋を與へることの出來るものとは、その時まだ自分は思つて居なかつたのである。

見ると、もつとづんぐりはして居るが、長さは殆んど港内用の曳船ぐらゐで、他の點に於ては宍道湖通ひの小人島的汽船に餘程似て居たから、僅か百哩の短い旅でも、これでは少々險呑だといふ氣がした　が、その外部の視察はその内部の神祕を探る手掛りを與へては呉れなかつた。着いて、小さな角な穴からその右舷へ登つた。直ぐと自分は、重い天井を有つた、高さ四呎幅二呎の舷門の中で、――幅二呎の孔の中を直徑三呎の荷物を押し通して行かうと踠いて呼吸(いき)の根を止めて居る船客に――恐ろしく挾み絞められて動けなくなつてしまつた。進むことも退くことも不可能で、そして自分の後ろでは機關室の格子がこ

の地獄のやうな廊下へ非常な熱を浴びせつゝあるのであつた。自分は頭の後を天井へ押附けて待つて居なければならなかつたが、不思議にも荷物も乗客も皆、壓し潰されて這ほつて行つた。それから部屋の戸口へ着いて、山なす草履と下駄の上を一等船室へころがりこんだ。磨いた木細工や鏡があつたりして部屋は小綺麗で、ぐるりに幅五吋の壁沿長椅子があり、中央の處は、高さ六尺ぐらゐあつた。そんな高さなら比較的に仕合な譯ではあつたが、天井を横に張り渡してある磨いた眞鍮の棒からして、ありとあらゆる小荷物が大事に吊り下げてあつて、しかもその中には啼く鑫斯（チョンギス）の籠が二つもあるのであつた。その上にまた船室は早や既に極度に塞がれて居た。言ふ迄も無く誰も彼も床の上に居り、しかも殆んど誰も彼もが一杯に身體を伸ばして寢そべつてゐた。それにまた暑さがこの世のものとは思へぬ程であつた。ところで、出雲やそんなやうな地方から、大海で商賣をする目的で船に乗つて海へ乗り出す者は、決して立つて居るものでは無く、古風に辛抱強く坐つて居るものと思はれて居るから、沿海或は湖水通ひの汽船は、そんな姿勢だけを可能ならしめる目的を以て建造されて居るのである。自分は、船室の左舷の側に戸が一つ開いて居るのを見たから、身體や手足のこんがらがつて居る上を——その中には藝者の所有に係る美くしい足が二本あつたが——拔き足さし足で行つて見ると、それは別な舷門で、

これ亦屋根があつて、のたくりくねつて居る鰻が入つて居る籠て屋根まで詰つて居るのであつた。出口は其處には無かつた。そこでかの足總ての上を越え戻つて、今一度右舷の舷門を試めしてみた。そんな短時間のうちにすら、不幸な雛つ子が入つて居る籠で半分も其處ははや塞がれてしまつて居た。が自分は、自分の心を傷ましめる狂亂的なキャッキャと いふ啼聲にも拘らず、向う見ずに籠の上を突進して、旨く船室の屋根の上へ出る道を見付けた。綱の大きなとぐろ卷のある一隅のほかは其處は全部西瓜が占領して居つた。自分はその綱の内側へ西瓜を入れて、日に照らされながらその上へ腰をかけた。居心地よくは無かつた。だが、いざといふ場合生命の助かる機會があらうと考へ、下に居る人達は神樣だつて乾度救ふことは出來まいと思つた。先刻の押し合、へし合の間に自分は伴と離れてしまつたのであつたが、その男を見出さうと企てることを恐れた。前の方を見ると二等室の屋根の上に火鉢一つ取卷いて三等客が一杯居た。その多勢の中を通り拔ける事は出來さうに思へぬし、退く事は鰻か雛つ子かを殺すことになつたらう。だから自分はその西瓜の上に腰掛けたのである。

すると船は耳の潰れるやうな叫聲を出して進行し始めた。と直ぐに煙突が自分の身體へ――所謂一等船室は隨分の船尾にあつたから――煤を雨と降らせ始め、次いでその煤に交

じつて小さな燃殼がやつて來て、その燃殼には折々赤熱のものもあつた。だが自分は、かの雛つ子に再度の攻撃を加へずに自分の位置を變ずる方法は無いかと思案しながら、なほ暫くの間西瓜の上で燒けながら坐つて居つた。到頭自分はその噴火山の異陸に移る必死の努力を試みた。そしてその時初めてこのジョウキの特性が分つて來た。自分がその上に坐らうとする物はひつくりかへり、自分がそれて身體を支へようとする物は直ぐに、いつも船外の方向へ、外づれた。外見では靜止になつて居るか或は堅固に締め括つてある物が、用心して檢べて見ると、危險なほど動き易いものであり、西洋の思想に據ると動くべき筈のものが永遠不易の小山の根のやうに固着して居つた。どんな方向にでも誰かを不幸ならしめるやうに綱か支索かをどうにかして張り得たなら、此船のものが正にそれであつた。そんな難儀な目に會つて居る最中に、この恐ろしい小舟が搖れ始めて、西瓜があつちこつちと非道くぶつつかり始めたので、自分はこのジョウキは惡魔が設計しまた建造したものだといふ結論に到達した。

その事を自分は友に語つた。友は全く思ひがけ無くも自分と又一緒になつた許りでは無く、燃殼や煤を防ぐやうに、船のボォイを連れて來て自分等二人と西瓜との上へ日蔽を張らせたのであつた。

彼は叱るやうに答へた。『そんなことは無い！この船は兵庫で設計して建造したもので、實際もつと惡く出來上つたのかも知れぬ、若し……』

自分はそれを遮つて『濟まぬが、君の意見には全然同意出來ぬ』と言つた。

彼は自說を曲げずに『いや、自分で判るよ。船體は立派な鋼鐵だし、その小さな機關は驚くべきものだ。五時間で、何百哩走れる。そりや大して居心地は好くない。が、非常に早くて堅牢だ』と言ふ。

『空が荒れりや、僕はむしろ和船の方が宜い』と自分は抗辯した。

『だが和船は空が荒れゝば海へ出はしない。空が荒れさうな樣子が見えただけでも、和船は港に碇泊して居る。時々至る一と月も待つ。どんな冒險も決してせぬ』

自分はそれを確信する事は出來なかつた。だが、出雲の海岸に沿うて、長い海門から日本海へ突進するにつれて、眼前に段々廣く展開し來る素晴らしい眺望と、無類の好天氣とが嬉しくて、一切の不快を——西瓜の上に坐つて居る不快すらも——自分は直ぐと忘れた。頭上の青い和やかな大空には一點の雲も無く、一切を映す大海の金屬の如き平らかさには少しのゆらめきも無かつた。船が搖れるのなら、それは疑も無く荷物を積み過ぎたからであつた。左舷には——間を置いて途絶えては不思議な小さな入江をつくり、其處には漁村

が隱れて居る、くすんだ綠色の、起伏高低して長く續いて居る――出雲の山々が後へ後へ
と飛んで行く。右舷數哩離れて、伯耆の海岸が何も無い白い地平線へと遠のいて、砂濱の
閃が呈する白い絲筋に緣取られた暖かい青い線となつて、次第に微かに消えて行く。そし
てその向うに、中心に、影のやうな偉大な金字塔が――大山の靈峰が――儼乎として中天
へそゝり立つて居る。

友は左舷のとある峰の頂に見える一群の松に自分の注意を惹くべく腕へ手を觸れて、笑
つて日本の歌を一つ歌つた。船がどんなに速く進航して居たか、此時始めて判つた。それ
は事代主神の社殿の上の、風つぽい山に立つて居る、美保關の有名な四本松が認められた
からである。元は五本あつた。一本は嵐の爲に根こぎにされたので、出雲の或る歌よみが、
後に殘つた四本に對して今自分の友が歌つた文句を詠んだのである。

セキノゴホンマツ
イツポンキリヤシホン
アトハキラレヌ
　メウトマツ

意味は『關の五本松のうち一本は伐られて四本殘つて居る。これはもう一本も伐つてはならぬ――夫婦の松であるから』である。それで美保關では、四本松の繪が描いてあつて、其繪の上に蜘蛛程の小さな金文字で『セキノゴホンマツ』の歌が書いてある美しい盃や徳利を賣つて居る。それは記念の品で、他にも其處の綺麗な店で買へる珍らしい綺麗な土産の品物がある。美保關神社の繪のついた瀨戸物や、事代主神が大きな鯛をそれが入りさうにない小さな籠へ入れようとして居る處を現はした煙草袋用の金屬の留金（こめがね）や、この神の笑顏を示した光澤のある燒物で出來て居る滑稽な面（めん）などである。それはこの恵比須卽ち事代主神は正直な勞働の、殊に漁師の、守り神で、『幸福な者が笑ふといつもその神樣は喜ばれる』と人の言ふその父神たる杵築の大神ほどには笑を好かれはせぬが、でも上機嫌な神樣だからである。

船が岬を――古事記の美穗を――過ぎると、美保關の港が我等の前に開けて、港内中央の島にある辨天神社が見え、その脚部を水に浸して居る半月形に建ち並んだ古風な家並が見え、遠くまで名のきこえて居るあの神社の大鳥居と御影石の唐獅子が見えた。すると直ぐに多勢の乘客が立上つて、顏を鳥居の方へ向けて神道祈念の柏手を始めた。

自分は友に斯う言つた。

『舷門に繋つ子が一杯入つて居る籠が五十もある。だのにあの人達は常に災難が出來しませぬやうにと事代主神に祈願して居る』

友の答へるには、『では無くて自分の幸運を祈つて居るのだらう、尤も「金持になりますやうにと人が御祈をすると神樣達はたゞ笑つておいでだ」といふ話なんだが。然し美保關の大神に就いては面白い話がある。或る時非常に横着な男が美保關へ參つて金持になりますやうにと御祈をした。するとその夜その男は夢に神樣を見た。神樣は笑つて自分の御草履の片方を脱いで、それを能く檢(み)て見よと仰せになつた。そこでその男は見て見ると、その草履は重い眞鍮で出來て居たが、踵に大きな穴が開(あ)いて居た。處で神樣の仰しやるには、「お前は働かずに金を得たいと思つて居る。わしは神ぢやが、決してなまけはせぬ。見よ、わしの草履は眞鍮で出來て居る。それでも非常に働いて隨分と歩いたから、まるで摩り切れて居る」』

五

この美くしい美保關灣は二つの岬の間に開いて居る。一方はミオ（古風な綴に從ふとミ

ホ）岬て、一方は土地の人が頗る不適當にも『地藏鼻』（チザウノハナ）と今呼んで居る地藏崎（チザウザキ）である。この地藏鼻は激浪の折には此海岸での最も危險な場所で、隱岐から歸る小舟の恐怖の的になつて居る。天氣の好い折にも其處には殆どいつも大うねりがある。でも自分等の船がその巍々たる海角を過ぎた時には水が鏡の如く靜かなのを見て驚いた。その音無しの海がなんだか怪しいやうな氣持がした。その音無しといふ事が、熱帶的暴風に先立つ浪と風との美くしい欺瞞的な眠を想ひ出させたからである。だが友は斯う言つた。

『幾週間も斯んなで居るだらう。六月と七月の始とはいつも非常に平穩だ。盆前に危險になるやうなことはありさうに無い。だが先週美保關に一寸した疾風（はやて）があつた。土地の者はそれは神樣の御立腹で起こつたのだと言つて居る』

『卵てか？』と自分は尋ねた。

『いゝや、クダンだ』

『クダンて何んだ？』

『クダンのことを今迄聞いたことが無いのかい？件といふのは人間の顏をして牛の身體をしたものだ。たまく牛が生むもので、それは起こらうとして居る事の前兆だ。ところ

が件はいつも本當のことを言ふ。だから日本の手紙や證文には――「件の如くに」卽ち、「件が眞實を語るが如くに」といふ――クダンノゴトシ(註)といふ文句を使ふが習はしだ」

註。この妙な意味は和英字書に載つて居らぬ。字書にはこのイディオムはたゞ「前述の如く」といふ句で譯してある。

「だがどうして美保關の神樣が件に腹を立てられたのだい?」

「剝製の件だつたといふ事だ。自分はそれを見はしなかつたから、どんなに出來て居たか君に話せぬ。大阪から旅の見世物師が境へ來て居たのだ。虎や、色んな珍らしい動物や、その剝製の件を持つて來て居た。そして出雲丸に乘つて美保關へ來たのだ。その汽船が港へ入ると不意の疾風(はやて)が起きた。すると神社の神官は、何か不淨な物を――死んだ動物の骨や何んかを――此町へ持つて來たから神樣がお腹立ちになつたのだと言つた。そこで見世物師は上陸さへ許されず、乘つて來たその汽船で境へ歸らなければならなかつた。ところがそれが出て行つてしまふと、空は再び晴れて風は吹き止んだ。だから或る人達は神主が言つた事は本當だと思つた」

六

確に大氣には自分が想像して居たよりも餘計に濕氣があつた。眞實能く晴れた日には、大山(たいせん)は隱岐からだつて分明に見えるのであるが、船がやつと地藏鼻を通り越すと、この巨峰は地平線と同じ色の濛氣に包まれだして、二三分すると幽靈が消えるやうに消え失せた。この突然の消失の感銘は、實に異常なものであつた。その峰だけが視界から消えて、それを蔽うたものは地平線並びに空と少しも識別の出來ないものであつたからである。

その間隱岐西鄕はその航路中この海岸から一番遠く距つた地點へ達すると、今度は日本海を横ぎつて一直線に疾走し始めた。出雲の綠色の山々はすさり退いて靑くなり、伯耆の妖魔のやうな仄かな海岸は雲の帶の如くに地平線へ溶け始めた。その時自分はこの恐ろしい小蒸汽船の速力に對する自分の驚を白狀せざるを得なかつた。それにまた殆んど何の音も立てずに進行した。それ程にその驚くべき小さな機關の運轉は圓滑であつた。が、深いゆるやかな搖れ方をして、重々しく搖れはじめた。眼には海は油の如く平らであつたが、水の表面の下に感ぜられる眼に見えぬ長いうねりが――太洋の脈搏が――あるのであつた。

伯耆は蒸發してしまつた。出雲の山々は灰色に變り、その灰色が見て居るうちにずん／＼淡くなつた。それが次第々々に色無しになつて——透明になるやうに思はれた。と思ふうちに無くなつてしまつた。在るものは白い地平線て接合して居る青い空と青い海とだけてあつた。

自分は恰も陸から數千哩離れてても居るやうに淋しかつた。ところがその薄氣味わるい時に、閑が出來て西瓜の中に居る自分等に加はつた老年の水夫が頗る物淋しい話を聞かせて呉れた。佛の海のことを話し、七月の十六日に海へ出て居るのは不運なことを話した。大きな汽船すら盆中は航海をしない、どんな船員だつてその時分は船を海へ出すことを敢てしない、と言ふのである。そしてその男は、その話したことを信じて居るに相違無いと自分は思ふほどに、如何にも質朴に眞面目に、次に記す話を物語つた。

「最初のは私がまだ至つて若い時てありました。北海道から乘り出したのてありますが、長い航海てありまして、風が逆ひ風てありました。そして十六日の夜になつたのてあります、丁度此處のこの海て仕事をして居た時にてあります。

「すると全くだしぬけに、暗闇の中に、私共の船の後ろに——餘つ程近く來るまて氣が

付かなかつたのでありますが　眞つ白い――大きな和船が見えました。空から出て來たやうに思へましたから、皆んな變だといふ氣がしました。人聲がきこえる程私共の船に近い處に居りまして、その船體は私共の船よりもずつと高く突立つて居りました。大變早く走つて居るやうに思へました。だが、一向前よりも近く寄つて來ません。私共は大聲で呼びかけました。だが何んの返事もありません。それからぢつとその船を見て居るうちに、その走り方が本當の船のやうではなかつたものでありますから、私共皆んな恐ろしくなりました。海は恐ろしい荒でありまして、私共の船は急に横へ傾いたり、船先を水へ突込んだりしますのに、その大きな和船はゆるぎもしないのであります。丁度私共が恐ろしいと思ひ出したその時、急にその船は消えてしまつて、一體本當に船が見えて居たのかどうか信じられない程でありました。

「それが最初のであります。が、四年前に私はまだもつと不思議な物を見ました。和船て隱岐の國むけて行きをりましたが、今度も風で遲くなりましたから、十六日の日に海に居つたのであります。朝の事でありました、正午少し前でありました。空は黑く、海は非道い荒でありました。處が突然に、汽船が一艘私共の通つた跡を、大變早くやつて來るのが見えました。機關の、カタカタ、カタカタといふ音が聞える程近くへ來ました。が、甲

板に人一人見えません。それからその船は、いつも同じ距離に居て私共の船を追つかけ始めまして、こちらてその船の航路を外づれようとしますと、いつも方向を更へて、丁度私共の跡を追ふやうにするのであります。そこで私共はその船が何んだかと怪しみました。が、その船が姿を消すまでは確とは分らなかつたのであります。泡のやうに消えたのであります、少しも音を立てずに。いつ見えなくなつたか確かとは誰にも分りませんでした。誰もその消えるのを見たものはありません。一番不思議な事は、その船が見えなくなつた後て、私共の船の後ろて機關が――カタカタ、カタカタ、カタカタと――運轉して居るのがやつぱり聞えて居た事てあります。

『私の見たのはそれだけてあります。が、私共のやうな船頭で、もつと澤山見た者を私は知つて居ります。時には幾艘も後を追ふことがあります、――一度にてはありませんが。一艘が近くへ來ては消え、それから又一艘、それからまた一艘と來るのであります。それが後へ來る間は恐がるには及びません。が、そんな船が、風に向つて、前に走つて居るのを見ると、それは大變惡るいのであります。船の者はみんな溺れて死ぬることになるのであります』

七

船を取卷いて居る光り輝いた空漠は、一時間足らずの間、引續き何の汚點も無かつた。すると自分等の船がそれへ向けて走つて居る地平線からして、灰色の小さなぼんやりしたものが出來て來た。ずんずん長くなつて、雲のやうに思はれた。實際雲だつたのである。が、徐々と、その下に、薄皮のやうな青い色をしたものが、その白雲を背に形を成して、やがて明確に一つながりの山になつた。段々高くなり青くなり、小さな鋸の歯のやうになり、その眞ん中に他の山の三倍の高さに聳えて、雲に括られた、色の淡い山が見えた。それは西の島にある、隱岐の聖山燒火山であつた。

燒火山には傳說がある。自分はそれを友から聽いた。その頂上には權現樣の古い社殿がある。十二月の三十一日の夜、靈火が三つ海から現はれ出て、社殿の處へ昇り、社殿の前の石燈籠の中へはいり、燈のやうに燃えて居る、といふことである。その光りは一度に海から現はれるのでは無く別々に現はれて、一つ一つ峰の頂へ上つて行くのである。みんなその光りが水から昇るのを見に小舟に乘つて出る。が、心の淸淨な者にだけ見えて、よこ

しまな考や願を有つて居る者はその靈火を見ようと待つて居ても駄目である。

船が進み行くうち、眼前に、海の表面が、前には眼に見えなかつた妙な舟で——美くしい黄色な素敵に大きな四角な帆を掛けた長い輕い漁船で——突然點々を打つたやうな觀を呈した。あの帆は何んて美しいだらうと友に言はずには居れなかつた。友は笑つて、あれは古疊で出來て居ると言つた。自分は望遠鏡で眺めて見て、如何にも友の言つた通り、古疊の藁編の上掛であることを知つた。にも拘らず、青い和らかな水の上に隱岐帆船のこの初めての淡黄の點在は面白い眺であつた。

註、日本の住宅の床は、その種々な部屋と一致して居る區劃に分けられて居る非常に大きな盤、頗る淺い木盆に譬へることが出來よう。その分界には、水平よりも幾寸か高くなつて居て、部屋と部屋とを分つフスマ卽ち横辷りする目隱しの便の爲め造つてある、溝のある敷きのかかつた木造物が縁して居る。この區劃には、タタミ卽ち輕い藁布團(マトレス)ほどの厚みで、上を美しく織つた稲藁で蔽うた蓆(マート)をきつちりと其中へ入れて、仕切りと水面にならせてある。その蓆(マット)の四角な端はきちんと合ふ。そしてその蓆(マート)はその家の爲めに造るのでは無くて、その家を蓆(マット)の爲めに造るのだから、どのタタミも全く同じ大きさである。だから部屋部屋の充分に出來上つて居る床は、大きな軟かいベットのやうなものである。固よりのこと日本の家では一切靴を穿くことは出來ぬ。その蓆(マット)は少しでも汚れると、直ぐと新らしいのと取換へる。

その帆船は黄色な蝶が通つて行くやうに疾走し去つて、海はまたも空になつた。稍〻左舷に當つて、次第に近づく青い絶壁の線のうちの一點が次第々々に形が出來て來て色を變へた。上の方は冴えない綠て、下の方は赤味を帶びた灰色である。それが分明になつて表面に黑い場處のある大きな岩と判つて來たが、陸の他の部分はまだ青の儘で居た。その黑い場處は近づくに從つて黑さを增して來た、――それは陰影に充ちた大きな山峽であつたのである。するとその先の青い絶壁も亦綠になつて、その裾の處は赤味を有つた鼠色になつた。船はその大きな岩の右手へと進んで行つた。見るとその岩は、他と離れて居る、人の住まつて居ない、波嘉島といふ小島であつた。と思ふ次の瞬間に船は早や高い知夫里島と中島との間を、隱岐群島の中へと航進しつゝあるのであつた。

八

第一印象は殆んど薄氣味惡るいものであつた。兩側とも海水から眞つ直ぐに屹立して、高い綠色の森閑とした小山が、夏の水氣の爲めに色合を變へて、青色の絶壁と峰と海角との奇妙な通景を爲して、眼前に蜿蜒と伸びて居た。人間が住んで居る形跡は少しも見えな

かつた。山はそのむきだしの岩の蒼白い麓から、なだらかに高まつて行つて、丈の低い草木が生えて居る小暗い荒地に及んでゐた。聞えるものは、藝者の鼓の微かな音のやうなボムボムボム！ボムボムボム！といふ自分等の蒸汽船の小いさな機關の音だけで、絶對に何の音も無かつた。そしてその殺伐な靜寂が數哩續いた。たゞ材木になる大木が無いといふ事が、峰を有つこの山々はいつか人の足に踏まれたことがあることを證明して居るだけであつた。ところが全く突然に、左の方に、山のとある皺の處に、灰色の小さな村が現はれた。すると汽船は鋭い叫び聲を發して停つた。その折その山々が、その叫びを七たび反響した。

此村は知夫里島の（中島は右舷に見える島なのである）知夫里村といふので、確に漁師の屯所に過ぎぬものであつた。先づ、入江から壁の如く突き出て居る石を積み上げただけの波止場があつた。次に、その隙間から或る神社の前の鳥居が見え、十軒許りの人家が、その後ろに一軒、その後ろに一軒、屋根の先きに屋根と、凹んだ小山を登つて居るのが見える大きな樹木があつた。それから、その樹木の上の方に當つて、荒涼たるが中に、段々畠になつた耕作地が少しばかりあつた。たゞそれだけであつた。汽船は郵便物を渡す爲めに停つて、すぐとそれを通り過ぎた。

ところがそれからは、豫期に反して、風景が前よりか美しくなつた。兩側の岸が同時に後すざりもし、また高くもなり、船は高い島三つて取圍まれて居る內海を横斷しつゝあるのであつた。初には我々が進む路は霞が濛々とかかつて居る小山に妨げられて居るやうに見えて居た。が、それが段々近づいて綠色になると、兩側とも小山と小山の間に、突然素晴らしい見事な割目が開けた、――それは、幾十種の、天鵞絨のやうな藍色からして絶妙なそして妖異な淡い色合に至るまでの、種々な度合の青から成つて居る、峰と絶壁と岬との何ん哩と續いた驚歎すべき通景(みとほし)を見せて居る山の門であつた。薄い色の靄が遠いもの總てを夢のやうにぼかし、嵯峨たるむき出しの岩をばいろんな色の幻で包んで居つた。

總じて西部及び中部日本の風景の美は、他の邦土の風景の美とは異ふ。それには獨得の特性があるのである。時折外國人は、山道での或る眺望によつて、或は飛沫の霧を透して見た突出した一望の海岸によつて、以前の旅行の記憶が突然喚起せらるゝのを覺えることがあらう。然しこの似て居ると思ふ幻想は來るも迅いが消えるのも迅い。委曲の諸點が直ぐ判然として來て、前に見た事の無いものになる。そしてその懷ひ出は形(かたち)だけが起こしたものて、色が起こしたものでは無いといふことに氣付く。尤も人目を悅ばすいろんな色が

あるにはあるが、山の綠の色では無い、土地の色では無い。耕作された平地、伸びつゝある稻の廣い地面、これが暖か味のある綠に近い色を提供することはある。が、然しこの自然の全體の一般的色調は薄黑である。廣大な森林はどすぐろい。草の色合は苛いか鈍いかである。熱帶地方の風景に燃えて居るやうな、火のやうな綠は存在して居らぬ。そして咲き盛る花も、それが燃え出る四邊の草木の重い色調と對照して、それで一段と美妙な光りを放つのである。公園と庭園と耕作された野原の他には、靑綠の色合が妙に暖か味と軟か味とを缺いて居る。だから英吉利の芝生の美はしさを成す所以の、あんな豐麗な綠は何處にも之を見出すことを希望する要は無い。

でも東洋のこんな山水には、不思議な大氣が造り出す――異常な色の――美妙な、仙鄕的な、言ふに言はれぬ幻の色の――妙趣がある。水蒸氣が、――幾百通りの色調を有つた靑と鼠色との蠱惑を峰々に浴びせ、むき出しの絕壁を紫石英に變じ、黃玉色の朝に妖魔の如き紗を展べ擴げ、眞晝の光耀をば地平線を磨り消して誇大し、夕をば黃金の煙もて充たし、水面を唐金色ならしめ、日沒をば眞珠母の靈的な紫と綠とて緣取して――遠近を惑はしめるのである。さて、あの驚歎すべきヱホンを――今は非常に稀になつて居るあの繪本を――造つた古昔の日本畫工は、その蠱惑の或を色に凝固させようと試みたもので、そし

て殆んど不思議な程度にまでその背景に成功した。正しくその理由の爲めに、その前景に、日本の農業の特色を知つて居ない外國人には謎になつて居るものが少小ある。さういふ古い繪本には、燃え立つ鬱金色の畑があり、微かに紫を帶びた野があり、深紅と雪白との樹木を見るであらう。そして恐らく諸君は『何んて馬鹿な』と叫ぶであらう。が、然し日本を知つて居れば、『氣持がいゝほど眞實だ』と叫ぶであらう。といふのは、その燃ゆる黄色の畠は菜種が咲いて居る畠だと知り、一面の紫はゲンゲの花盛りの野だと知り、雪白や深紅の木は空想のものでは無くて、斯の國の梅の木と櫻の木との特有な或る開花現象を忠實に現はしたのだと知るであらうから。が、こんな色彩誇張は、特別な季節の極く短い時期の間だけ目撃し得らるゝので、一年の大部分を通じて內地の山水の前景は、色の點に於ては、餘程くすんで居ることが多い。

この背景の魔法を行ふのは霞である。でも霞が無くとも、日本の山水には一種奇異な殺伐な暗い美が——言語では容易に判然と述べ難い美が——ある。その祕密は之を山嶽の異常な線に、山脈の妙に唐突な凹凸と皺波とに求めなければならぬ。互に能く似て居る山は一つも無くて、銘々がそれ獨特な風變りな恰好を有つて居る。山脈が可なりな高さに達して居る時には、柔らかに次第に膨らんで居る線は稀である。一般の特徴は唐突であり、そ

の妙趣は不規則の妙趣である。
疑も無くこの不思議な自然が、不規則が裝飾の上に有つ價値に就いての、その無類な感念を、第一に日本人に鼓吹したのであり――日本人の藝術を他のあらゆる藝術と異ならしめる所の、そして之を西洋に教へるのが日本人の特別な使命であるとチエムバレン教授が言はれて居る所[註]の、構圖のそのたゞ一つの祕密を日本人に教へたのであつた。確に、どんな人でも一たび古昔の日本の裝飾藝術の美と意義とを悟るやうになると、その後はそれに對應する西洋の藝術に殆んど面白味を見出すことが出來なくなる。その人が眞に學び得たことは自然の最大の魅力は不規則に存す、といふことである。そして恐らくは、人生と作品との最大魅力はこれ亦不規則といふことに存しはせぬか、といふ問題について少からざる價値を有つ文が物されることであらう。

註、「日本のことども」の中にある藝術章參照。

九

知夫里村から船は、西の島に在る浦郷の港に向つて西進した。近づくに從つて燒火山が壯大な觀を呈して來た。遠く離れて見ては溫順しい美しい恰好に見えたのであつたが、その青の色調が發散すると、その貌が凹凸になり物凄くさへなつた。全部薄黑い青綠に包まれたぎざ／＼な大きな山で、その青綠の中から、ぼろ切の中からのやうに、此處其處に非常に亂暴な恰好をしたむき出しの岩が突き出て居るのである。その絕頂の不規則な線へ落日の光りが射した時、其岩の一つが非常に大きな灰色の頭蓋骨のやうに見えた事を自分は覺えて居る。この山の麓に、中の島の海岸に面して、上は瘠せこけた灌木に蔽はれて居る、高さ數百呎の、金字塔形の岩山が――モンガクザンが――突立つて居る。その荒涼たる山頂に小さな社殿がある。

タクヒザンとは燒く火の山といふ意味で――恐らくはその靈火の傳說か或はその噴火時代の古代の記憶かに基いての名である。モンガクザンといふは文覺――高僧文覺上人――の山といふ意味である。文覺上人は隱岐へ逃れ來て、多年此山の頂でその甚重な罪惡の贖

罪苦行を行つて、獨りで住まつて居たといふことである。上人が眞實隱岐へ來られたことがあるかどうか、自分は言ふことが出來ぬ。さうで無いと公言する口碑がある。だが兎に角この小峰は上人の名を數百年有ち來たつて居るのである。

さて文覺上人の身の上は斯うてある。

數世紀前、京都の都に、その名を遠藤盛遠といふ衞戍の將があつた。ある貴いサムラヒの夫人を見て戀し、その夫人がその熱望を聽くことを拒むと、自分が申述べる方策に同意しなければ、その一家を滅ぼすと誓言した。方策といふは或る夜、自分を邸內へ忍ばせてその夫を殺させよといふので、それを果してから自分の妻になれといふのであつた。

然し彼女は、同意した振をして、自分の貞操を全うする高潔な計略を案出した。卽ち、夫に勸めて都を立去らしめて置いてから、遠藤へ手紙を送つて、或る夜その邸宅へ來るやうにと言ひ送つた。そしてその當夜、彼女は夫の服を身にまとひ、髮を男の髮の如くつかね、夫の臥す處に寢ねて、眠つた風をして居つた。

すると遠藤は深更に拔身を携へてやつて來て、一擊の下にその睡眠者の頭を打切り、そして髮を手に首を摑み上げて見ると、それは自分が戀して無禮なことを言ひ掛けたその女の首であつた。

そこで彼は非常な悔恨の念に打たれて、近くの或る寺へ急いで行つて、自分の罪を白し、悔悟をして髮を切り、出家となつて文覺といふ名を名乘つた。そして後年彼は至徳の境に達した。だから今でも彼に祈念する人があり、彼の靈は國内到る處に尊崇されて居る。

今東京の淺草の、觀音樣のあの大きな寺へ行ける小さな妙な通路の一つに、見世物になつて居る驚くべき像を——たゞ木で造つたものではあるが、生きて居るやうに見える人形を——日本の古い傳說を說明して居る人形を——いつでも見ることが出來る。其處へ行くと、右手に血まみれな刀を持ち、左手に美しい女の首を提げて、遠藤が立つて居るのが見られる。その女の顏は、たゞ美しいだけであるから、諸君は直ぐ忘れるかも知れぬ。だが遠藤の顏は、地獄そのものであるから、忘れることはないであらう。

一〇

浦鄕は大きさは多分充分美保關ほどはあり、美保關同樣、半圓を爲して居る嶮しい小山の麓の狹い地面に建てられて居る妙な小さな町である。が、美保關よりももつと原始的でもつと色彩に乏しい。そしてその街路は、といふより寧ろ路次は、船の舷門の幅も無いぐ

らゐに、家々がなほ一層密接に絶壁と海との間に詰め込まれて居る。船が錨を投ずると、自分の注意は突然不思議な光景に惹きつけられた。それは、町の屋根の上高く、臺地になつて段々高まつて居る嶮しい丘の横にある墓地に、風に飜つて居る不分明な長い恰好の物が澤山白く見える眺であつた。その墓地には灰色の墓と佛像とが澤山あつて、その墓一つ一つの上に、細い竹竿に結びつけた白紙の妙な旗があつた。遠眼鏡で見るとその旗には、佛教の文言の南無妙法蓮華經、南無阿彌陀佛、南無大慈大悲觀世音菩薩、其他の聖語が書いてあるのが見えた。訊ねて見て、毎年盆前の全る一と月の間、他の種々な裝飾的或は表象的な品物と共に、さういふ旗を墓の上に樹てるのが浦郷の習慣だと知つた。

　海には裸體の水泳者が一杯居て、笑ひながら歡迎の語を叫んだ。そして、輕い迅い小舟が澤山、裸體の漁師に漕がれて、乘客と荷物とを求めに矢の如く出て來た。自分は此時初めて隱岐の島の人の體格を觀察する機會を得た。そして、男は老幼とも强壯な容貌をして居るのに感心した。成人は自分には出雲海岸の男子よりか丈が高くもつと力强い型に見えた。そして鳶色の背や肩に、櫓を漕いで居る時、非道い勞働をさせに擇まれた人間のうちに在つてすらも、日本では割合に稀なものを――筋肉の素晴らしく立派な發達を――見せたものが少からず居つた。

汽船は浦鄕には一時間停つて居たから、上陸してそこでの一等の宿屋で食事する時間があつた。頗る清潔な小綺麗な宿屋て、食事は境の宿屋のよりか無限に優つて居つた。でも請求した代金はたつた七錢、そしてそこの老亭主は與へた茶代の全部を受取ることを斷り、半分以下を納めて殘部を手柔かに强ひて自分のユカタの袖の中へ返した。

二

船は浦鄕から中の島にある菱浦へと進んで行つた。そして島々の間を進航するに從つて景色がいつも層一層と美しくなつた。その水道は百と形を異にした山々の間を非常な深みの靜けさを以て流れて居る大きな河だと思ひ誤らせる程の幅しか無かつた。その長い美しい眺めは到る處、海の霞で靑味を帶びた峰々の壁に遮ぎられて居て、兩側には深い底から眞直ぐに聳え立つて居る赤味がかつた灰色の絕壁があつて、その粗雜な面のどんな小さなごつごつも、少しの捩ぢゆがみも無しに、恰も鏡にうつしたやう、かつきりと水に映じて居つた。菱浦に達するまでは水平線は顏出しをしなかつた。しかも其折も、恰も河口から見るやうに、高い二つの海角の間からだけ見えるのであつた。

菱浦は浦郷よりか遙か綺麗である、が、人口は餘程少い、そして漁村といふよりか、寧ろ農を主とした繁榮な町といふ外貌を有つて居る。山の多い島の內地へと次第になだらかに上つて居て、其處に可なりの面積の耕作地を見せて居る、低い小山が造つて居る入江の緣に沿うて曲つて居る町である。家屋は稍〻散在してゐて、多くの場合庭園あるが爲めに孤立して居る。そして海に面して居る建物は中々立派な近代的な構造である。浦郷は隱岐中での一番好い宿屋を自慢にして居る。そして新しい社寺が二つある——どちらも個人の寄進に係るもので、一つは禪宗の寺、一つは出雲大社敎の社である。前述の宿屋の持主たる金持の寡婦がその寺を建立したのであり、この土地で一番の富裕な商人がその社を寄進したのである。この社はその大きさにしては自分がそれまで見たうちで一番立派なミヤの一つであつた。

一二

隱岐群島の主島たる島後は、時にはそれを『隱岐』と呼びもするのであるが、島前諸島

の東北八哩離れて非常に危險な漫々たる海の向うに在るのである。船は浦郷を去ると、直ぐそれへ向けて進んだ。その大海へ出て行くには、中の島と西の島との間にある狹い妙な海峽を通る。其處は絕壁が非常に大きな城塞の――層を爲して高まつて居る稜堡や堡壘の――形を爲して居る。古昔は唯一つの塊てゐたものが何か驚天動地の大衝擊を受けて分れたやうに見える巨大な岩が三つ、その水路の口近く深い海から、壞れた塔の如くにそゝり立つて居る。そして船がそれを左舷にして通る中の島の最後の海角は、これは赤裸々の赤い大きな岩で、烏帽子岩と呼ばれて居る程あつて、如何にも妙な恰好をした一點となつて地平線上に浮ぶ。

船が海のうねりへ辷り出ると、大海の深底から立ち現はれて居る他の異常な形をしたものが見える。地平線を後ろに突兀たる半面影像になつて見える『蝙蝠』といふのは、大きな穴が一つ突き拔けてゐて、その穴が眼のやうにぎら／＼光つて居る。その先きに大きな岩が二つある。曲つて、尖んがつて、上の處で殆んどつながつて居るから、蟹がその挾み爪を擡げて居るのに怪しくも似て居る。それからまた、極く近くへ寄るまでは、船を漕いで居る人間の姿かと思はれる小さな黑い岩が見える。その先きにまた島が二つある。人の住まつてゐない、近寄れもせぬ、そして其の邊には警戒を要するうねりが何時もある松島

と、それよりも高いぐらゐて、赤味を帶びた巨大な絶壁となつて海の中から飛び出して居る大森島とてある。その忌はしげな巨岩には何か物凄い力が――その横を通る時自分等の船をゆるめかせ震はせる何か不可思議な力が――あるやうに思はれた。が、自分は大森島のその恐ろしい絶壁の下に驚嘆すべき或る色彩を見た。その絶壁が傾く入日に照らされて居たので、輝やかしいその岩の光りが水に落ちて居る處は、その濃藍色の漣が一つ一つ唐金の光りを閃めかせてゐた。自分は金屬性の菫色インキの海のことを考へた。

島前から、天氣が惡るくない折は、島後の絶壁を判然と見ることが出來る。その絶壁には、此處其處に白墨の白さの線條がついて居て、霞のかかつた日にもその青色の中に拔け出て見えるのてある。その絶壁の上に大きな山が一つ見える。それは伯耆の船乘には目標點の、大滿寺山てある。尤も島後は中々の大きな一と塊りなのてある。

その絶壁はずん／＼綠色に變つて行つた。そして自分等の船はそれに隨いて東の方へ半時間許り走つた。するとその絶壁が思ひがけ無く且つ大きく開けて、遙かに陸地の方へ廣うなつて居る、小山が四方を圍んで居る、そして船が一杯に居る、素敵に見事な入江を見せた。ごちや／＼した帆柱の向うに、長く灰色の一線を爲した家並の正面が、半圓形の絶壁の麓に、そつと眼に映つて來た。西郷町なのてある。そして果てのこと船は石の波止場

に着いた。そこで自分は隱岐西郷に一と月の別を告げた。

一三

西郷は一大驚異であつた。見るであらうと期待して居た大きな漁村では無くて、行つて見ると境よりも遙かに大きく美しく且つあらゆる點に於てもつと近代的な町であり、立派な商店に充ちた長い街路のある町であり、勝れた公共建物のある町であり、全體の樣子が商業の繁榮を示して居る町であつた。建物の大多數は商人の二階建の手廣い住宅で、物すべてが晴々した新しい觀を呈して居つた。家々の錆がして無い木造部は、まだ黑ずんで灰色になつては居らず、屋根瓦の青い色はまだ生ま〳〵して居つた。それはこの町が大火後近い頃建ちなほり、それも前よりか大きい美くしい設計で建ちなほつたからだと知つた。

西郷は實際よりかも大きく見える。家數は千軒ばかり、それは西部日本のどんな地方に於ても少くとも五千の人口を意味するのであるが、西郷ではそれよりも餘程多くの人口を意味するに相違無い。千軒ばかりのこの人家が三つの長い街路、ニシマチ、ナカマチ、ヒガシマチ（それ〳〵西町、中町、東町といふ意味の名）を成してゐて、それを數多くの横

丁と路次が區分して居る。此處を不釣合なほど大きく見せるのは、その街路が妙に捩ぢれて居るからて、海岸の不規則な出入に隨いて曲つて、重なり合ひさへもして居て、或る地點から眺めると、在りもせぬ深さがあるやうに思はせるからである。それは西鄕は、結構な地位てはあるけれども、奇態な地位に在るからである。八尾（やび）川といふ川の河口に近くその兩岸を縁取つて居て、その上に色んな出張つた陸地へ延び出して居るほかに又その見事な入江の內側の大部分に沿うて擴がつて居るのである。が、外觀よりか小さくはあるけれども、その蛇とうね〳〵して居る街路を皆んな歩くのはたつぷり半日仕事である。

八尾川で區分されて居るほかに、此町は橋が澤山に架つて居るいろんな水路で切斷されて居る。背後の丘陵には大きな建物が數々立つて居て、そのうちには三百の生徒を容れる設備のある小學校があり、富裕な或る市民の寄進に係る（まだ新しい）綺麗な佛寺が一宇あり、監獄があり、大きさの割には隱岐どころか島根縣中ての一番美くしい日本建築だといふ評判に背かぬ病院があり、また小さくはあるが甚だ立派な庭園が數々ある。

港はといふと、夏の日なんかは、船の碇泊して居るのを三百以上數へることが出來る。不平家は、殊に今なほ木の錨を用ひて居るやうな種類の不平家は、深いと言つて零す。が、軍艦は何んとも言はぬ。

一四

決して一度も、西部日本の何處ででも、西鄕に居た時ほど居心地よかつたことは無い。薦められて行つた宿屋には、客は友と自分と二人きりであつた。二人が占めた二階の、天井の高い廣い部屋は一方には大通りを見渡し、一方には宿の庭の横を流れて居る八尾川の河口の向うの美くしい山の風光を恣にすることが出來るのであつた。海風が晝も夜も吹き斷えぬので、暑い季節には客へ侑めるのが日本の習慣の、あの綺麗な扇子が不用であつた。食物は驚く許り上等で、珍らしい程變化に富んで居り、欲しければセイヤウレウリ（西洋の料理）を——フライにした馬鈴薯添へてのビステキ、ロオスト・チキン其他を——注文して宜いと言はれた。自分は旅行中は純日本式食事を守つて手數を避けることに決めて居るから、その申出を利用はしなかつた。が、住民五千の他の日本都市では何處だつて得ること殆んど不可能なものを西鄕で申出を受けようとは少からぬ驚異であつた。が然し浪漫的見地からしては此發見は失望であつた。日本全國のうちで一番原始的な土地へ遣つて來たのだから、近代化する總ての勢力の範圍外はるか遠くに自分を見出すことと想像してゐ

たのであつた。だからフライにした馬鈴薯添へてのビステキを懐ひ出させられたのは幻滅てあつた。此島には新聞も電信も無いといふその後の發見も充分には自分の慰安にならなかつた。

ところが如上の楽（たのしみ）を味はふことを妨げる重大な障害が一つあつた。それは、何物にも浸徹する、到る處に存在する、重くるしい非道い臭氣――肥料として使用する、魚の腐る臭氣てあつた。幾噸といふ烏賊の臟腑を八尾川の向側の田畠に使用するので、何處の家へもその惡臭を眠ること無き海風が吹いて來る。暑さの折は大抵な家ては香（かう）を焚きつゞけて居るが駄目てある。三四日續けて町の中に居ると、前（ぜん）よりかその臭氣に堪へ得るやうになる。が、たゞの二三時間ても町を去ると、歸つて來た折、自分の鼻が習慣の爲めにどんなに痲痺して居たか、町を出た爲めにどんなに力が恢復したか、を知つて驚く。

一五

西郷へ到着の翌日の朝、或る若年の醫師が自分を訪問して、その家て食事を共にして吳れと乞うた。西郷に泊つた外國人は自分が初めてであるから、自分を見るの好機會を有て

ば一家の者も自己も甚だ愉快とするといふことを頗る率直に説明した。が、その人の生得の懇懃が、他國人の好奇心に滿足を與へてやるのに自分が感じたかも知れない、如何なる躊躇にも打ち克つた。自分はその人の美くしい邸宅で非常に愛想よく待遇された許りでは無い、そのうち多くは斷らうと力めても斷り切れなかつた數々の贈物を實際背負ひ込んで送り出されたのであつた。が、然したゞ一つ自分は、先方の感情を害する惧れがあつても、頑として聽かなかつた。それは驚くべきバティセキ（この品物に就いては後に話さう）の贈物であつた。啻に非常に高價なだけでは無い、非常に稀なものだといふことを知つてゐたから、自分は頑張つて受納を拒んだ。主人は到頭屈したが、後で私かにより小さいのを二つ自分の宿へ送り屆けて呉れた。是は日本の禮儀として返戻することが出來なかつた。西郷を去る迄に自分はこの紳士から他の數々の思掛け無い親切を蒙つた。

其後間も無く西郷小學校の教師の一人が自分を訪ねて呉れた。自分が隱岐に興味を有つて居ることを耳にして、手製の此島の美くしい地圖二枚、西郷のことを書いた小さな本一冊、それから贈物としてその人が作つた隱岐の蝶類昆蟲類の蒐集を持參したのであつた。全くの他國人に純粹な厚意の斯んな驚くべき表明に出遇ひさうなことはたゞ日本だけでのことである。

今一人の訪問者て、自分の友に會ひに來たのは、前述のと同じやうな日本人獨得な行爲を演じたが、これは自分に少からぬ苦痛を味はしめた。三人は坐つて居て一緒に煙草をふかした。その男は日立つて美くしい煙草入と、小さな銀の煙管の入つて居る煙管筒とを帶から取出して、煙草を吸ひ始めた。その煙管筒は黑珊瑚のやうなもので出來てゐて、珍らしい彫がしてあつて、そして透明な瑪瑙の玉を通した三色絹糸組合せの重い紐てタバコイレ（パウチ）に着けてあるのであつた。自分がそれを賞めるのを見ると、突然袂から小刀を取出して、自分が止め得ないうちに、その煙管筒を煙草入から切り離して、それを自分に進上すると言つた。自分は、その驚歎すべき紐を切つた時、その男自らの神經を切り斷ちてでもしたやうな氣持がした。でも、一旦切つてしまつた後てその賠物を斷るのは極めて失禮であつたらう。自分は返禮に或る賠物を受けさせた。が、この經驗後自分は、隱岐に居る間は、どんなものでもその持主の面前てはもう賞めぬやうに用心した。

一六

日本のどの國にも特有の方言がある。隱岐の方言は、斯く孤立して居る邦ては豫期し得

らるゝ如くに、殊に際立つて居る。が然し西鄕では出雲の方言が廣く用ひられて居る。其處の町民は風俗も習慣も餘程出雲の田舍人に似て居る。尤も、出雲人が澤山交じつて居るし、大きな商賣は大抵他國人の手に依つて營まれて居るのである。女は出雲の女ほどに人目を惹くやうには思へなかつた。中々美くしい女を隨分と見かけたが、それは他國者であつた。

が然し、或る國民の肉體的特徴を正當に硏究の出來るのはたゞその內地に於てである。隱岐の島人の肉體的特徵は——その多くを自分は訪れた——漁村で一等能く認めることが出來る。到る處で立派な强壯な男と元氣な女とを見た。そしてその强健には氣候と不斷の運動とが與つて力あるのであらうが、滋養になる食物が非常に豐富で低廉なことが同じく與つて力あるのだと自分は思つた。實際、隱岐で生活するのは非常に樂で、他の海岸の人で生活に困難を感ずる者は、働く機會を得さへすれば、報酬は前より少くても、隱岐へ移住して來るほどである。自分に面白かつた光景は、天氣が好いと、日沒二時間前にいつも海へ突進し始める漁船の盛んな行列であつた。筋骨逞しい漕ぎ手が——女が多い——その輕い船を推して行く驚く可き迅さは、數代の根氣强い經驗に依つて初めて得られた熟練を語つて居るのであつた。も一つ驚いた事は船の數であつた。或る晚、沖合に、自分は三百

と五つの松明を視界に數へることが出來た。松明一つは一と乘組を示すのである。そして此處の海岸の四十五ヶ村の殆んど何の村からでも同時にこれと同じ光景を見ることが出來ると知つた。人民の大部分は、實際、夏の夜は海で暮すのである。漁期中脚の迅い汽船で夜、出雲から濱田へ旅しても意外の光景に接する。百哩の間、地平線は松明で燃えて居る。一と海岸全體の勞役が、その偉大なイルミネエションに示されて居るのである。

　そこの人間はこの不毛な地にあつて、强壯さを減じたといふより寧ろ增したやうに思はれるけれども、此國の牛馬は退化したやうである。著しく小形である。出雲の小牛よりも大して大きからぬ牛や、山羊の大きな程の小牛を自分は見た。馬否、むしろ小馬は隱岐がむしろ自慢をして居る特別な品種のもので――至つて小さいが丈夫である。もつと大きな馬が居るとは聞いた。が、一匹も目にしなかつたし、またそれは輸入されたものかどうか分らなかつた。自分が隱岐の小馬を初めて見た時、佐々木高綱の軍馬が――クログルッの物語唄に見えるカイラットといふ馬に劣らず日本の物語に有名な馬が――隱岐の產であつたとこの島人が明言するのが自分には奇妙に思へた。ところがその馬は嘗て隱岐から美保關まで泳いだといふ口碑がある。

日本には殆んど何の郡何の町にも其處のメイブツ或は其處のメイショがある。或る場處のメイブツといふのは、天產物であらうが人工品であらうが、其處の特別な物產である。或る町或は郡のメイショといふのは其處の觀處で――何か宗教的、傳說的、歷史的或は愉樂的の理由で――訪ねて行つて見る價値のある場所である。社寺や庭園、異常な樹木や奇妙な岩、それがメイショである。其處からして美くしい景色が眺められる場所、又は、春は櫻の花とか、夏の夜は螢のちらつく光りとか、秋は楓の紅葉とか、或は支那の詩人がそれへキンリョウ（金龍）といふ面白い名を與へて居る水上のあの蛇のやうな長い月光の漾ひとかいふやうな、愉快な光景を眺め樂しむことが出來る場所も、同樣にまたメイショである。

この一章の原文にケムブツとあるのは、メイショケムブツといふ言葉からして原著者が誤つてケムブツた、メイショを意味する語のやう思つて用ひたものに相違無いから、譯文ではそれを訂して置いた。（譯者識）

隱岐の大名物は日御崎の大名物と同じて――鯣てある。これは支那にも日本にも大いに需用のある食料品てある。隱岐と日御崎と美保關との烏賊はいづれもイカ（セピアの一種）と稱せられて居る。が、美保關で獲れるのは白くまた長さが普通十五吋あるのに、隱岐と日御崎とのは十二吋を越すのは稀て且つ色も赤味を帶びて居る。美保關と日御崎との漁業は殆んど世に知られてゐない。が、隱岐の漁業は日本全國はおろか、支那、朝鮮にも名がきこえて居る。この島が繁榮を來たし、且つ又その極く僅かの部分しか全く耕作の出來ない海岸に、三萬の生靈を支持し來たつて居るのは、全く海の耕作に由つてである。非常に多額の烏賊を船て本土へ運ぶ。が、隱岐にとつて此產物の最上の顧客は支那人てあると聞いて居る。この供給がいつか絶えてもすれば、その結果は想像も及ばぬ不幸なものてあらう。だが、今のところ、この漁獲は數千年行はれ來たつて居るけれども、無盡藏のやうに思はれる。幾百噸といふ烏賊を捕り、貯藏し、毎月々々輸出し、そして幾百英町の地面がその臓腑や殘物で肥沃にされて居るのである。この漁獲に就いて警察の或る役人が自分に色んな事を語つてきかせた。西郷の東北海岸てはたゞの一と晩に二千尾以上の烏賊を捕ることは敢て珍らしい事ては無いといふ。網數四五度の獲物の重さて船がはちきれたことが

あるから、積入れるのに用心しなければならぬといふ。が然し、このセピアのほかに、同じく食用の重要物産を供給して呉れる別種のカトル・フイッシュがこの海岸に群集して居る。それはあの恐ろしいタコ即ちオクトパスである。一匹の重さ十五貫即ち殆んど百二十五英斤の章魚を時々中村の漁場近くで捕る。そんな化け物のやうな動物にこれまで人が危害を蒙つた記録が無いと知つて自分は驚いた。

　隠岐の今一つの名物は――知られて居て然るべきであるのに餘り世に知られてゐない――バテイセキ即ち『馬蹄石』といふ美くしい眞黒な石である。島後にだけ在るもので、しかも大きな塊になつては居らぬ。重さは燧石ぐらゐて、且つまた燧石のやうに殺げる。が、これは磨きの效く石で、磨くとその光澤は瑪瑙のやうである。紋理も斑點も全く無い。その強度な黒色は決して變らぬ。いろんな美術品を馬蹄石で造る。硯、盃、小箱、小さなダイ即ち花瓶や小さな肖像を載せる臺など。此材料は出雲の湯町の美くしい瑪瑙同樣に細工が出來るから、飾玉すら造られる。そんな品物はその製造元でも割合高價である。

　馬蹄石の起原に就いて妙な傳説がある。馬蹄石は、その色か、或は屢〻その天然狀態に於て見られる所の、叉曲線を爲して殺げ易い傾向があるので生ずる所の半圓形の痕かが、思ひ樣によつては馬の蹄に何處か似て居るのでその名があるのである。が、傳説に據ると、

或る神馬の――源氏の勇士佐々木高綱のあの驚く可き牝馬の――蹄が觸つて出來たのだといふ。その牝馬には子があつたが、島後の或る深い池へ落ちて死んだ。牝馬は水に映つた己が頭の影に欺かれて自分もその池へ飛び込んだ。が、子は見つからなかつた。長い間徒に探して歎いた。が然し堅い岩さへその牝馬に同情して、その蹄が水の下で觸つた處が馬蹄石に變つた、といふのである。

殆んど馬蹄石に劣らず美しい、そして同じく黑い、今一つの隱岐名物がある。それはウミマツ卽ち『海松』と呼ぶ珊瑚性の海產物である。煙管筒や筆立や他の小さな品物をそれで製造する。そして、磨くと黑漆で塗つたやうである。海松で造つた品物は稀で且つ高價である。

ところが眞珠母の物品は隱岐では甚だ廉い。そしてそれがまた別種の隱岐名物になつて居る。アハビ卽ち『鮑（シイ・イア）』の貝殼を、これは西部日本の此邊の海では驚く許りの大きさに達するが、それを巧に磨きまた切り斷つて、その表面の虹色の光りが恰も百通りの色の火がきらめくやうに見える不思議な皿や鉢や盃や、その他の器物に變へて居る。

一八

松江で出版された或る小さな本に據ると、隱岐の國のメイショは、その四つの主もな島の三つの間に分けられて居る。知夫里島だけが特に興味のあるものを何一つ有つて居ないのである。數代の間、島後での人引きつけ場處は、都萬目里の頭無し地藏の寺と、油井村にある瀧(檀鏡瀧)と、下村の玉若酢神社の前の大杉と、それから其處に馬蹄石があるといふ津井の池といふ小さな湖水とであつた。中の島には、海士村に、流罪になり給うた後鳥羽天皇の御墓と、時折其處に御住みになつて居た、そして今日に至るまで御遺物が保存されて居る、助九郎といふ古昔の長者の邸宅とがある。西の島は、別府に、流罪になり給うた後醍醐天皇記念の神社と、無雲の日には其處から此群島全體の壯觀を眼にすることが出來るといふ、燒火山の頂上の、あの權現樣の神社とを有つて居る。

知夫里島は名所は無いけれども、知夫里といふ貧乏小村は——隱岐通ひの汽船が西郷への途中必ず寄港するあの知夫里村は——此群島の傳說總てのうち恐らくは最も興味あるものの舞臺である。

五百六十年前、配流の後醍醐天皇は警護者の眼を脱れて西の島から知夫里へどうかかうか逃げ終せられた。するとその小村の色黒の水夫共は、必要あらば生命を賭しても、天皇に仕へ申さうと申出た。皆はその船へ、多分その子孫が今も出雲や伯耆へ持出すのと同じ干烏賊であつたらう、『乾たる魚』を積込んで居る處であつた。天皇は首尾能く伯耆か出雲へ上陸させて呉れゝばお前等を忘れまいとお約束になつた。そこで皆の者は天皇を或る小船にお乘せ申した。

處が出船して少ししか行かないうちに追手の船が見えた。そこで天皇に向つて横に臥てお出でになるやう申上げ、玉體の上へ高く乾魚を積み上げた。追手の者は船へ乘込んで捜索した。が、非道い臭の鰑へは手を觸れようとも思はなかつた。そして知夫里の者共は訊問されると、話をこしらへて、虚僞(うそ)の手掛を天皇の敵に話してきかせた。斯くして鰑のお蔭でこの善良なる天皇は遠島を免れ得給うたのである。

一九

自分は名所のうちの或る物を實地見る上に於て色々な困難があることを知つた。隱岐全

體に、唯々山路があるだけて、道路といへる道路は全く無い。従つてまた、西郷一番の醫者が輸入した、街路てだけ使用の出來る一臺を除いて、人力車は一臺も無い。駕籠さへこれもその醫者が使用する一挺を除いて、他には無いのである。强壯な百姓が言ふ處に據つても、路は恐つそろしくてこぼこて、それにまた遠さが、殊に一年のうちて一番暑い今、うんざりさせる。小馬は傭へる。が、出雲西部の此處と似寄つた未開地ての自分の經驗が、たゞ瀧一つ見るだけのことに、辷り易い壑を通り早瀬の床に沿ひ、松が一杯生えて居る小山を幾つも越えての長の苦しい乘馬をしたところて、愉快も利益も得られはせぬと思はせた。自分は檀鏡の瀧見物の念は放棄した。が、出來ることなら、顎無し地藏は見ようと決心した。

自分は、その苦痛は深さ幾百哩かと思へるあの齒痛に——時間空間の觀念を亂すあの齒痛に——惱まされて居た折、初めて松江て顎無し地藏のことを聞いたのてあつた。その時思ひ遣りの深い或る友が斯う言つた。——

「齒痛を病む者は顎無し地藏に祈願する。顎無し地藏は隱岐に居られるが、出雲の人達はそれへ祈願する。治ると、宍道湖か、川か、海か、或は流れ川へ行つて、梨子（ナシ）

を十二、十二ヶ月の月々に一つづつ流す。水の流れがそれを皆んな海を越えて隠岐へ持つて行つて呉れると信じて居る。

『ところで、アゴナシヂザウといふは顎の無い地藏といふことである。といふのは、その地藏はその或る前生に下顎に非常な齒痛を病まれ、苦しさの餘りその顎を裂取り、それを投げ棄て、そして死んでしまはれたといふことだから。それからその地藏は菩薩になられた。それで隠岐の者共は顎の無いその像を造つた。そして齒痛を病む者はみんな隠岐のその地藏に祈願する』

この話は面白かつた。自分は、それに必要な勇氣と現世の後果に對する虚心とを缺いては居るが、顎無し地藏がされたやうにしたいといふ強い希望は一度ならず感じたからであつた。その上、この傳說は齒痛に對して如何にも人情のある甚深な理解を示し、またその犧牲者に對して如何にも廣い同情をほのめかして居るので、自分は幾分か慰められた氣がした。

にも拘らず自分は顎無し地藏を見には行かなかつた。見ようにも顎無し地藏はもう居られぬといふことが判つたからである。その消息は、或る晩、友人が齎らしたのである　そ

れは松江の士族で、今隱岐に居着いて暮して居る年の若い警察官と、その細君であつた。二人は夜明け前に出發して、途中三十二個處も早瀨を涉つて、自分等に會ひに島を横斷して歩いて來たのであつた。細君はやつと十九で非常にほつそりした可愛らしい女であつたが、それでもその長の非道い旅行に疲れた樣子はして居なかつた。

その有名な地藏に就いて知つた事は斯うであつた。顎無し地藏といふ名はその本當の名のアゴナホシヂザウ卽ち『顎治ほし地藏』を俗民が言ひ訛つたのである。その像の安置してあつた小寺は火事で焚けて、その像も一緒に焚けてしまつた。たゞ、像の下の方の一と破片だけ、或る年寄の百姓女が今恭しく保存して居る。佛敎が國敎で無くなつた爲めに、隱岐の國でのその信仰の資源が全く絕やされたので、その寺を再建することが出來ぬ。だが都萬目里の百姓共はそのお寺の在つた處へ、その前へ鳥居を立て、小さな神道のミヤを建てた。そしてその宮で今でも皆んな顎無し地藏への祈願をする。

この最後の奇妙な事實は加賀の潛戸で、地藏の像の前に建つて居るのを見た小さな鳥居を懷ひ出させた。西部日本の斯ういふ遠隔な地方では、古昔日本の他の部分で佛教が神道の諸神を併呑したと丁度同じに、今は神道が佛教の通俗な諸佛を我がものにして居るのである。

二〇

自分は津井の池と玉若酢神社とへは、この二つの名所は船て行かれるから、行つた。ところが津井の池は大いに自分を失望させた。其處への路は、殆んど全く垂直な絶壁を爲して居る恐ろしく危險な海岸に沿うて居るので、極く穩やかな天氣の折で無ければ行かれぬ。が、海は見事に澄んでゐて、水面下非常な深さの處にある物體を眼で見分けることが出來る。絶壁に隨いて一時間許り行くと、そこの濱邊は全く小さな圓い漂石だけで成つて居る入江のやうな處へ着く。その漂石は長い畝になつて居て、その畝の外側の緣は、寄せては引く浪の度毎に小銃の一齊射撃の如きガチャガチャといふ音を立ててあちこちと轉がつて、いつも動いて居る。動く石の球のこの畝の上へ登るのは頗る氣持が惡るい。が、上がつてからたゞ二十碼ばかり歩きさへすれば、三方木の茂つた小山に取圍まれて津井の池が見える。淡水の大きな水溜りといつた程のもので、幅は五十碼はあらうか、別に驚くべき點は何も無い。水底は――たゞ泥土と小石とだけで――岩は一つも見えぬ。この池の何處かが仔馬一匹溺らすに足る程いつか深かつたとは信じ難い。自分は深さを試しに向岸まで泳い

て見たかつたが、そのことを言ひ出しただけて早や船頭達の感情を害した。此池は神樣の池で、眼に見えぬ怪物が守護をして居るから、それへ入るのは不敬であり危險であるといふのである。自分は之に對して地方的觀念を尊重せざるを得ぬ氣がしたから、馬蹄石は何處にあるのかと訊ねるだけて甘んじた。船頭共は池の西側の小山を指さした。その指示は傳說とは符合しないのである。その天然その儘の山の横腹には何等人間の勞働の痕跡をも發見することが出來なかつた。確に其處から數哩以内には人間の住み家は無かつた。それは見るも忌はしい荒涼を極めた場處[註]であつた。

註。互に遠く距てずに池が二つある。自分が行つたのは、ヲイケ卽ち『雄池』で、も一つのはメイケ卽ち『雌池』といふのであつた。

日本を旅行する人には名所の評判を當てにして多くを期待するのは愚である。名所の大多數に附隨して居る興味は全く想像力の行使に賴る。そして、そんな想像力を行使する能不能はまた此國の歷史と神話とに通じて居るか居ないかに賴る。圓岡や岩石や樹木の根株が、幾百年間、單にそれに關する地方傳說の爲めに、百姓共の崇敬の目的物となり來たつ

て居るのである。毀れた鐵の釜だとか、綠青に蔽はれた唐金の鏡だとか、錆びた刀の身の破片だとか、赤い陶器のかけらだとかが、それが保存されて居る社寺へ幾代の巡禮者の足を惹き來たつて居るのである。自分が參詣した方々の小さな寺で、そこの寺寶はと見ると、お盃一杯に載せた小石であつた。初めてそんな小石を見た時自分は、その小石一個一個に日本字で貼札がしてあつたから、其處の僧侶が地質學か鑛物學を研究して居るのだらうと思つた。能く見て見ると、その石そのものは、たゞその附近の岩石の標本としても、絕對に無價値なものであつた。然し其處の僧侶や子僧がその石總ての一つ一つに就いて語り得る物語は面白いどころのものでは無かつた。その石は、實際、佛教的傳說の連禱を吟誦するに使ふ粗末な數珠玉の用を爲して居るのであつた。

津井（さゐ）の池の經驗後自分は下西村（しもにしむら）で何等異常な物を目にしようと期待する理由（わけ）は無かつた。ところが今度は自分は考違をしてゐたので愉快であつた。下西村といふは西鄕から船で一時間足らずで行ける小綺麗な漁村である。船は荒れては居るが美くしい海岸に沿うて行くと、古昔はその上に堅固な城があつた、御城山（おしろやま）といふ、角（かど）を截り取つた妙な形の小山の前を通る。其處には今はただ松の木に取圍まれた小さな神社があるだけである。下西村とい

ふその小村から玉若酢神社までは、歩いて二十分、稲田と野菜畠の間の非常にでこぼこな道を通つて行かねばならぬ。だが、その神社の位置は、その神聖な木立に取巻かれて、色んな色の山脈が縁取して居る風景の中心にあつて、うつとりする程印象的である。その建物は嘗ては佛寺であつたらしく思はれる。今は隠岐で一番大きな神社である。その門前に、高さは著しいものでは無いが、周圍は實に驚くべき有名な杉の木がある。地面から二碼の處でその周圍が四十五呎ある。その杉がこの聖地へその名を與へて居るのである。すなはち隠岐の百姓は決して玉若酢神社とは言はずに、ただ『オホスギ』（大杉）と言つて居る。

口碑の言ふ所に據ると、此木は八百餘年前或る尼が植ゑたのである。そしてこの木の材木で造つた箸で物を食ふ者は決して歯痛を病まず、且つ非常な高齢まで生きるといふ。

註。或る木は歯痛を治す力があると想はれて居ることに就いて言へば、柳の木に於いて妙な迷信があることとを書いてもよからう。歯痛を病む者は柳の木へ時々針を刺す。その木の靈が痛いので歯痛治癒の力を行はざるを得ぬやうになると信じてである。しかし隠岐で之を實行して居るといふ記録は自分は一つも發見し得なかつた。

二一

後醍醐天皇の御靈を祀つた神社は中の島の別府にある。別府は半月形に連なつた小山の裾の、入江を繞取つて居る草葺田舎家の長い一本街筋から成つて居る繪に見るやうな美くしい漁村である。此處の風俗の純朴と保健的な全くの貧窮とは、隱岐にしても、實に珍らしい程である。他國人を泊める旅籠屋風の家が一軒ある。其處では茶を出さずに素湯を出し、菓子を出さずに乾豆を出し、米を食はせずに黍を食はす。が然し、茶が無いといふ事は米が無いといふ事よりも意味が深い。が、別府の者は、その强壯な容貌が實地證明して居るやうに、相當な滋養に事缺いては居らぬ。船が海へ出て居る間に女や子供が耕やす小さな庭で出來る野菜が澤山あるし、それに魚類は豐富だからである。佛寺は一字も無いが、氏神の社がある。

後醍醐天皇の神社は入江の一端の黒木山と呼ぶ小山の頂上に在る。その小山は高い松の木に蔽はれて居て、そこへの途は甚だ嶮しいから、自分は辷ることの無い草鞋を穿くが宜からうと考へた。登つて見ると神社は小さな木造のミヤで、高さはやつと三呎、年月の爲

めに黒くなつて居る。その横の茂みの中に、もつと古い、他の宮の遺跡がある。何んの形にも刻んでない、そして何んの文字も彫つてない大きな石が二つ社前に置いてある。覗きこんで見たら、ぼろ／＼に崩れさうな金屬の鏡と、竹を細くへいだものへ附けた煤けた紙の御幣と、赤い陶器の小さい御神酒德利が二つと、それから一厘錢が一つ見えた。そこの大きな松の幹の間からして、その神々しい暗がりを貫き射す青い暖かい光りで見える、海岸と山と峰との愉快な瞥見があるだけで、他には何も見るものは無かつた。

かの善良な天皇が隱岐の百姓共の間に、御滯留になつて居たことを記念するものはこの見すぼらしい宮だけである。が、鳥取縣の米子（よなご）近くの五千石村（ごせんこくむら）といふ小村に、父君を慕うて配處へ供しようとして歿せられた天皇の御姫君ヒナコ（譯者註）內親王の記念に、目下義捐金でもつて立派な石の記念碑が建設中である。內親王御永眠の場處近くに有名な栗の樹が一本ある。それに就いて斯んな話がある。天皇のこの姫君が御病氣の折栗をと乞ひ給うたので、幾つか奉つた。が、一つだけ手に取つて、それを一寸嚙んで御捨てになつた。それが根附いて堂々たる大木になつた。ところがその木に生る栗は皆んな小さな齒の痕のやうな痕が

譯者註。ヒナコ內親王に非ず。瓊子內親王なり。五千石村大字福市の安養寺は同內親王の開基と傳へらる。

ある。日本の傳說では、樹木すら君に對して忠であつて、その忠誠の念を無言で色々な優しい方法で以て示さうと力めるからである。そしてその木はハガタノクリ卽ち「齒形の栗の木」と呼ばれて居る。

二二

隱岐見物に行く餘程以前に、竊盜といふやうな犯罪は、その小群島の人達は知つてゐない、品物を仕舞ひ込んで置く事は未だ嘗て必要と思はれたことが無い、天氣さへ好ければ住民はその家を天つ風に開放して眠る、といふ事を自分は聞いてゐたのであつた。

ところが注意深い硏究の後、この驚くべき敍述は餘程の程度まで眞實であることを知つた。少くとも島前の群島には盜人は一人も居ない、そして、實際に犯罪は一つも無い。三萬〇百九十六人といふ人口のある島前島後全體を取締るのに十人の巡査で充分である。巡査一人々々が數多の村をその監督の下に有つて居て、それを日を決めて規則正しく訪ねるのである。ところが、どんなに長い間そのうちの或る村に居ないでも、それに乘ずる者はあつたためしがないやうである。巡査の仕事は大抵は衞生法規を勵行することと、報告書

を書くことに限られて居る。村の者は喧嘩もこれまで殆んどしないのだから、拘引の必要を見ることは滅多に無い。

島後の島だけにはこれまで一寸した竊盗があるので、隠岐のうちでも此處ばかりは盗人に對する用心をする。以前には監獄は無かつたもので、竊盗といふことは嘗て耳にしたことはなかつたのである。て、今も島後の者は、そんな罪を犯して此島で拘引された少數の者も隠岐生れの者では無くて、本土から來た他國者だと主張して居る。西鄕の港が現時の如き重要な地位を占めないうちは、竊盗は隠岐に無かつたものといふ事は、是は全く眞實らしい。西部日本の全商業が、帝國の他の部分との蒸汽船の交通の迅速な發達の爲め、增進をした。そして西鄕港はその新狀態の爲めに、商業上には利する所あつたが、道德上には損したらしく思へるのである。

ても國法の犯罪は、西鄕に於てすら、今なほ驚く許りに少い。西鄕には監獄がある。自分がその町に滯在中に其處に入つてゐたものはあつた。が、その在監者は（その如何なる形式のものも日本の國法で嚴禁してある）賭博とか、或はもつと輕い法令に違犯したとかいふやうな輕罪に處せられたものだけであつた。重罪を犯すと、その犯罪者は隠岐では罰しないて、出雲の松江にある大監獄へ送るのである。

が然し、島前は中分無しの正直といふ古昔ながらの評判を完全に維持して居る。その三つの島のうちでは、人間が記憶して居る範圍内では、盗人はこれ迄一人も無い。また大した口論も無く、喧嘩も無く、どんな人間にも人生を悲慘ならしめることが何一つ無い。土地は未開で荒涼たるものであるが、誰も彼も頗る氣持よく暮して行くことが出來る。食物は廉くて澤山あり、風俗習慣はその原始的單純を保つて居る。

二三

外國人の眼には出雲の住宅すら盗人に對するその防禦は馬鹿げて見える。この帝國の東部の諸市では竹の棒で造つた忍びがへし（シュヴォー・ド・フリィズ）が廣く用ひられて居るが、出雲ではこれは餘り見かけぬし、またそれが設けられて居る建物の眞に弱點たる處を守りはせぬ。外側の壁や垣についていへば、それはたゞ目隱しか裝飾的境界の用を爲すだけで、誰でもその上へ登れるのである。その上また尋常普通の日本家屋へは、誰でも懷小刀一挺で道を切開いて入つて行くことが出來る。アマドは柔い木で造つた溝へ辷る薄い目隱しで、ただの一撃で容易く破れるものであるし、出雲の大抵な家では力強い一と引つ張りに抵抗の出來る錠は無い

のである。尤も日本人自らもその木造の板壁が夜盗に對して無效な事を充分知つて居るから、その費用の出せる者は皆んなクラを建てる。クラといふは非常に厚い土の壁があり、素敵に大きな海老錠で締る狹い重い戶があり、屋根に近く高い處に、鐵棒の棧のある非常に小さな窓が一つある、火に耐へ且つ（日本では）殆んど夜盗に耐へる重い小さな建物である。クラは白く塗つてあつて外觀は甚だ小綺麗である。が然し黴び易くもあり暗くもあるから住宅には使用出來ないもので、たゞ貴重品の貯藏所たる用を爲すだけである。クラの物を盗むのは容易では無い。

が、邸內に立派な番犬が居てもすればいざ知らず、出雲の住家へ『どろばうに』入るには骨は折れぬ。盗人はその計畫の途に横たはる困難は、入いり終せた後に遭遇しさうな事柄だけだといふことを知つて居る。その困難を考へて居るから、盗人は普通刀を携へて居る。

が然し、盗人は刀の使用を必要とするやうな危地に身を置くことは欲しない。そこでそんな不快な萬一を避けんが爲めに魔法の助を藉りる。

邸內をあるき廻つてタラヒ――一種のタッブ――を探す。一つ見つけると、庭の或る處て口にしがたい或る動作をやつて、裏返しにした盥で其處を蔽ふ。これが出來れば不思議

な眠がその家の者總てを襲ひ、自分の好きなどんな物でも、音も聞かれず姿も見られずに、持逃げることが出來ると信じて居る。

が、出雲の家では誰もその魔法をほどく魔法を知つて居る。毎晩、休む前に、用心深い家婦はハウチヤウ（臺所用のナイフ）が臺所の床板の上に置いてあつて、それへカナダラヒ（眞鍮製の洗ひ鉢）がかぶせてあつて、その裏返しにされた底の上にザウリといふ音を立てぬ藁製のサンダルが片足分、これ亦裏返しにして載せてあるかどうかを確める。この一寸した魔術は盜人の魔力を無效ならしめるのみならず、盜人に――假令や姿を見られず音を聞きつけられずに家に入り終せても――何物も持ち去ることを得ざらしめるものと家婦は信じて居る。が、實際非常に疲れてても居なければ、家婦は晩に雨戸を締める前に、盥が家の中へ取入れてあるかどうかをも注意して見るのである。

さういふ（善良な家婦が主張する所の豫防の）手段を怠つたが爲めに、若しくはさういふ手段を講じたにも拘らず、一家の者が眠つて居る間にその家へ盜人が入ると、翌朝早くその夜盜の足跡の穿鑿をして、その足跡一つ一つへ灸をすゑる。斯うやると、その夜盜の足が遠くへ走れぬ程に痛くなり、容易く警官に捕へられると望まれ、或は信じられて居る。

註。モグサは英語のマグワアト・ブラントの日本名モエクサ卽ちモグサ（燃える草）の訛である。その樣

雑の小さく圓錐形にしたのを漢法に據つて燒灼に用ひるのである。その小さな圓錐形を患者の皮膚の上へ置いておいて、火をつけ、盡きるまで燃ゆるに委す。その結果は深い瘢になる。モクサは醫治に用ふるのみならずいたづら子の罰にも用ひる。これに就いてはチエンバレン教授の『日本のことども』のうちにあるあの興味深い註を一讀されたい。

二四

自分がオコリ（瘧即ち間歇熱）、その輕い種類のは或る季節に或る地方に流行るが、そのオコリの原因に就いての異常な迷信を初めて耳にしたのは隱岐に居た時であつた。が、この妙な信仰は、出雲及び山陰道の多くの地方に、古くからある信仰だといふことを、後に知つた。これはあらゆる神祕を説明するのに佛教を用ひた、その用ひ方の珍らしい一例である。

オコリはガキボトケ即ち飢餓に苦しんで居る精靈が起こすのだと言はれて居る。嚴密に云へばガキボトケは印度佛教のプレタで、即ち永久の飢渇の苦界たる餓鬼道に止まるやう處罰された靈魂である。が、日本佛教では、ガキといふ名は、生存者中にそのものを記憶

して居る者が一人も無い、從つておきまりの食物や茶の供物をして與れる者の無い靈魂にも與へられて居る。

さういふ靈魂は苦しいから、生者の體内へ入つて暖みと滋養とを得ようとする。ガキに這入られる人は、ガキは冷たいものだから、初め非常に寒く感じて震へる。が、その寒氣の次に餓鬼が暖くなると、烈しい熱を感ずる。自分では嫌に思つて居る、その宿主のお蔭て暖たまつて滋養を吸ひ取つてしまふとその餓鬼は出て行く。で、熱は一時歇む。だが別な日に、丁度同じ刻限に、餓鬼は歸つて來るので、その犧牲者はその取つ附く奴が暖くなつて、その飢を滿足してしまふ迄は震へたり燃えたりしなければならぬ。その患者へ毎日遣つて來る餓鬼もあり、一日置きに或はもつと間違にも遣つて來る餓鬼もある。簡單に言へば、如何なる種類の間歇熱も、その發作は餓鬼が居るからで、發作々々の間はそれが居ないからだと説明されて居るのである。

二五

ホトケ（これはヌレ注ボトケ、ガキボトケとかいふやうな複合詞ではボトケとなる）に就

いては言ふも不思議な事がある。

註。ヌレボトケ『濡れ佛』。雨風に曝されて居る佛像をいふ。

ホトケといふ語は佛陀を意味する。

ホトケといふ語にまた——立派な生涯を送れば死者の靈は佛陀の道に入るか、或は佛陀に成るかすると信ぜられて居るから——死者の靈をも意味する。

ホトケといふ語は、婉曲な言ひ方から、その上また死骸をも意味するやうになつて居る。だからホトケヅクリといふ動詞は『物凄い顔をして居る』、死んで長い間經つた人のやうな顔をして居る、といふ意味を有つて居る。

それからホトケサンといふ語は——ホトケサンは『佛樣』——眼の瞳子に映つて見える顔の映像に與へて居る名である。法華經の佛世尊では無く、我々銘々の中に住まつて居られる彼の小さな佛——卽ち靈[註]——である。

註。民間傳説に據れば、神或は龍の子は左右とも眼に佛が二つづつ見える。日本の物語歌の或ものに見える、それに詠まれて居る、勇士が眼に四つ佛を有つてゐたとあるのは、その眼が左右とも二重瞳子であつたことをいふのである。

ロゥゼッティは『眺めて我は汝が心、汝が眼の影に見ぬ』と歌つた。東洋思想は正しくその逆である。日本の戀人は『眺めて汝が眼の影に、我が有つ佛を我は見ぬ』と言つたであらう。

斯くも奇妙な信仰に關しての心靈學說は何うであるか。斯うでもあらうかと自分は思ふ。卽ち、靈はそれ自らの體內に在つてはいつも眼に見えずに居るものであるが、妖術者の鏡に映るが如くに、他人の眼にその姿を映すことはある。己が愛する女の眼を凝視して、その女の魂を見分けようとしても無益である。その眼には、透いて己が魂の影だけ見えるのである。その向はたゞ全く神祕で——無窮に達する。

が、斯ういふ事は眞理では無いか。自我は、ショオペンハウエルが驚嘆すべくも述べて居るやうに、意識の暗黒點なので、恰も視神經が眼に入る點は、物が見えぬのと同じである。我々は自己を他人でだけ見るのである。他人を通じて初めて我々は我々の如何なるものたるかを朧氣に察するのである。それで、他の者を最も深く愛して居るといふことに於て、つまり自分自身を愛して居るのでは無いか。我々の人格と稱するもの、個性と稱するものは普遍なる實在の無限無數の震動に他ならぬのでは無いか。我々は總て、不可知的な

先極に於ては一つのものでは無いか。思慮すべからざる過去を有つて居る一つのものでは無いか。永遠の未來を有つて居る一つのものでは無いか。

譯者註。アアトマンの思想が恐らく多くの讀者の心の中に起こるであらう。（アアトマンとは、個々の靈がそれから出て來る最高の大靈の名）

二六

隱岐では、出雲でと同じで、小學校が古い迷信の多くを徐々ではあるが、確實に滅ぼしつゝある。漁師ですらその新時代の者はその父祖が信じて居たものを笑ふのである。自分が通譯を通じて燒火山の靈火のことに就いて質問した、或る利發な若年の水夫から次記のやうな侮辱的な答を受けたのにはいさゝか驚いた。——『えゝ、私共が野蠻人であつた時分には、そんな事を信じてゐたものでありますが、私共は今は開けて居ります！』

だが此男は幾分か時世に先んじて居たのである。その男の村には、出雲の何處にも殆んど匹敵を見ぬ程度にまで狐の迷信が流行つて居ることを自分は發見した。その村の來歷は

餘程妙であつた。記憶の及ばぬ太古からして、其處はキツネモチの部落だと評判されて居たのである。言ひ換へると、其處の住民は悉く魔力を有つた狐の持主であると一般に信じられて居り、また多分自分共もさう信じて居たのである。それで皆んなが同樣に狐持なのだから、一緒に飮み食ひも出來、困らずに御互同志の間で嫁婿の取り遣りが出來たのであつた。近處の百姓共は彼等を氣味わるく恐ろしがつて、理窟に叶つたことでも叶はぬことでも、彼等の要求に從つた。狐持は非常に繁昌した。ところが二十年許り前に出雲からの他國者が彼等の村に住みついた。その男は根氣が好く、怜悧で、また多少の資本金を有つて居つた。地面を買ひ、いろんな事に拔け目なく資本を投じて、暫く許り每日月のうちに其處での一番の金持になつた。頗る立派な神社を建てて之をその村へ寄附した。だが、本當に人望のある人になることを妨げる故障がたつた一つあつた。狐持では無く、また狐は嫌だと言つたことさへあつたからである。他の者共と異つて居るといふ此事が村に不和を生む懼れとなつた。殊に此男はその子供を他國者へ片附け、斯くて非狐持部落といつたやうなものを狐持共の眞ん中へ造り出したからである。

　そこで餘程前から狐持共はその過剩な魔物を、此男に無理に有たせようとして居る。月の無い夜、此男の住宅の門のあたりに影が忍びあるいて、かう小聲で言ふ、——一體れ！

今日から此處へ來るだ！』すると、上の障子が手荒く開かれて、怒つたその家の持主の聲が斯うきこえる、――『此處は嫌ひだ！戻れ！』[註] するとその影は逃げて行く。

註。千八百九十二年東京發行の一日本新聞紙は、島根をたづねた或る醫師の言を典據として、隱岐の人は人狐を信じて居りはせぬ、犬神を信じて居るのだと述べて居る。これは島根で殊に石見で屢〻使ふイヌガミモチといふ言葉を文字通りに考へて起きた間違である。それはキツネモチといふことを婉曲に言つただけのことである。イヌガミは即ちヒトギツネで、これはいろんな動物の姿に身を現ずるものと想はれて居る。

二七

菱浦には烏賊が無いし、いやな臭も全く無かつたから、自分は隱岐の他の何處よりも此處が面白かつた。だが、兎も角、菱浦は西郷よりも興味があつたらうと思ふ。その綺麗な小さな町の生活が特に古風であり、また機械といふものが輸入されて出雲や他の地方では殆んど滅びて居る古風な家庭産業が、今なほ菱浦には殘つて居る。仕事が大儀になると互に代り合つて、木綿の著物や絹の著物を織つて居る、薔薇色の娘達を見て居るのは愉快で

あつた。そんな平穩な古風な生活が總て開放されて人の見るに任してあるのだから、自分は好んでそれを眺め見た。それから他にも愉快な事があつた。それは其處の入江は水泳に絕好な場處であり、その海岸の興味ある處、何處へでも直ぐに乘せて行つて吳れる小船がいつも居るからであつた。夜はまた海風が自分の占めて居る部屋を氣持よく涼しくして吳れるし、緣側からは波止場の石段へ緩やかな冷たい光りと碎ける入江の浪を――美くしい燐光を――眺めることが出來、また隱岐の母親がその赤ん坊を寢かさうとて、世界で一番古いねんねこ歌の一つを歌ふ聲を聞くことが出來るのであつた。斯う歌ふ、――

ねんねこ、お山の
　兎の子、
なぜまたお耳が
　長いやら、
おつかさんのおなかに
　居る時に、
枇杷の葉笹の葉

喰べたそな、
それてお耳が
長いそな。

その節が特に美はしくまた哀調を帶びて居て、出雲や日本の他の地方で、それと同じ言葉で歌ふ節とは全く異つて居つた。

或る朝、自分は別府へ行かうと思つて船を一艘傭つて、その日だけその宿屋を出ようとする間際に、宿の老主婦が自分の腕に縋つて叫んだ。『一寸お待ちなさい。葬式に行き違ふのは善くありません』自分は角を振返つて見たら、岸に沿うてその行列の來るのが見えた。神葬で――子供の葬式であつた。年の行かぬ子供が眞つ先きに神道の徽號を――小さな白い旗と、神木サカキの枝とを――手にして來た。そして棺の後にその母が歩んで居つた。若い百姓女で、大聲出して泣いて、そのお粗末な紺の著物の長袖で眼を拭いて居つた。すると自分の横に居た宿の老婦が斯う囁いた。『悲しんで居りますが、まだ年が若う御座いますから、屹度あの子はあの人の處へ戻つて來ませう』それは、自分のその善良な老主婦は信心深い佛教者であつたから、その葬式は神道で營まれて居たのに、その母の信仰は

自分のと同じだと屹度思つて居たからであらう。

二八

佛教には西洋人の信仰には全く無いところの不思議にも美くしい或る慰藉がある。

その初めての子を亡くする年若い母親は、死んだその夜からして、その子が歸つて來る事を――夢だけにては無く、再び人間に身を現じて歸つて來る事を――少くとも祈り得るのである。斯く祈りながら、その死んだいとし子の名の初めの一と文字を、その小さな死骸の手の裡に書くのである。

幾月か經つて、女はまた母親になる。急いでその赤ん坊の花と柔かな手を檢べて見る。果して！だ。自分が書いたと同じ文字がそれに――その柔かな掌に薔薇と美しい母斑となつて――在る。そして戻つて來た魂が、生れた計りのその子の眼で、過ぎし昔の日のやうな眼附をして、母親を見る。

二九

死を話題にして居る間だから、隱岐にも出雲にも在る原始的ではあるが、人心を動かす或る習慣に就いて——死後直ぐとその死者の名を呼ぶといふ習慣に就いて——語つても宜からう。呼ぶ理由(わけ)は、その呼び聲が去り行く魂に聞こえるかも知れず、その爲め時には歸つて來ようといふ氣になるかも知れぬ、と考へられて居るからである。だからして母親が死ぬると、その子供が先づ第一にその母親の名を呼ばねばならぬ、それも子供みんなのうちで一番年若いのが（その子を一番可愛がつて居たから）眞つ先きに呼ばねばならぬ。それからその夫(をつと)、それからその死者を愛して居た者皆んなが順番にその名を呼ぶのである。

それから氣絶したり又は何かの原因で無感覺になる者の名を聲高く呼ぶのがまた習慣である。そしてこの習慣の根柢を爲す奇妙な信仰がある。

殊に心痛或は悲嘆の餘り失神する者のうち、死の間際まで近寄るものが隨分多勢あるもので、それ等の人はいつも同じ經驗をするといふ話である。この信仰についての自分の問に答へて或る人が斯う言つた、『突然何處か他所へ行つて居て——たゞ疲勞はして居るが

――非常に愉快だ、といふ氣持がします。そして餘程遠方にある或るお寺へ參りたいといふ心になつて居ります。やがてのことそのお寺の前庭の門へ着きますと、門内にそのお寺が見えますが、それは驚くほど大きな美しいお寺であります。それからその門を潛つてお寺へ參らうと、その前庭へ入ります。ところが突然、友人が遙か後ろの方から自分の名を――それも非常に非常に熱心に――呼ぶ聲がきこえます。そこで後戻りすると、ひよいと正氣に返るのであります。少くとも自分の心で生きたいと思ふと、呼ぶ聲には耳を藉さずに、今申したやうになります。然し實際生きて行くことに飽いた者は、呼ぶ聲には耳を藉さずに、お寺の中へはいり込みます。その寺でどんな事が出來(しゆつたい)するものか、誰も知つて居りません、そのお寺へ入るもので、その友人の處へ歸つて來るものはありませんから。

『だから大聲立てて呼ぶのであります、氣絶した者の耳の穴へ。

『ところが、死ぬる者は皆んな、冥途へ行く前に、長野縣の信濃の國にある、善光寺といふ大きな寺へ一度お參りするといふことであります。ところがそのお寺のぼんさんが說敎をされる時にはいつも、その說敎を聽きに本堂へ集つて居る、みんな頭へ白い布片(きれ)を附けて居る靈魂がそのぼんさんには見えるといひます。だから氣絶した者の眼に見えるお寺は善光寺かも知れません。だが私には分りません』

三〇

自分は流罪になられた後鳥羽天皇の御墓參りをしようと思つて、菱浦から中の島の海士村へ船で行つた。途中の景色は美くしく、また自分が初めてこの群島を通り拔けた時に見たよりも輪廓が和らかであつた。海の中から突つ立つて居る小さな岩礁には海鴎や鵜が一杯に止つて居た。それが、櫂の長さも距離の無いくらゐ近く寄つても、船を殆んど何んとも思つて居なかつた。野育ちの禽獸が斯く人を恐れぬといふことは、獵銃を携へた觀光客がまだ訪はない、日本の斯んな僻遠の地を旅しての、一番氣持のいゝ印象の一つである。日本での初期の歐羅巴及び亞米利加の狩獵者は、單に物を殺すといふ我儘勝手な快樂の爲めに生き物を殺して、彼等が『獵鳥獵獸（ゲエム）』だと考へて居る物を其處いら中から絶滅するのに何等の困難をも見出さず、また何等悔恨の念を感じなかつたやうである。その手本を『青年日本』が今や眞似しつゝあるので、鳥類の絶滅は狩獵法でやつと不完全に阻止されて居るのである。幸ひにも政府は或る種の狩獵不德を妨止する爲め干涉を爲して居る。燕が日本の家の中で巣を造る習慣に眼を留めた或る畜生共が、昨年、何千羽といふ燕の皮をば誘

惑的な代償で買ひ求めようと申出た。その廣告の效果は頗る殘酷なものであつた。が、警官はその殺害を止めるやう早速通牒を受け、それを實行した。それと殆んど同じ頃、横濱の或る洋字新聞紙上に、ある「改宗した」漁師が、その漁師の仲間で佛教を信じて居る者共が生命を助けてやれと賴んだのに、龜を一匹殺せと外國人傳道者に勸められて殺したことをば、基督教觀念の勝利だと公言してある、要職に在る或る人からの手紙が載つて居た。

海士村は、極めて小さな村で、海から一哩の小丘に至る間の狹い野原の稻田の中に在る。上陸場から村まで約一哩の四分の一。それへ通じて居る狹い路は、村のはづれの處で、松の木に蔽はれた小山の裾を廻る。その小山に中々美くしい神社がある。小さくはあるが見事な建築で、石段と石敷きの歩道とを通つて行けば達せられるのである。例の石の唐獅子と燈籠とがあり、社前には紙と女の髮毛との普通な簡單な供物がある。ところがその奉納物のうちに、今迄出雲で見たことの無い妙な物があるのに氣が付いた。それは竹で器用に造つた、網も竿もちやんと附いて居る小さな井戸釣瓶であつた。百姓が雨乞をする時かういふのを此神社へ持つて來るのだと船頭が言つた。そこの神樣は諏訪大明神といふのであつた。

後鳥羽天皇が長者助九郎の屋敷にお住居になつて居たと稱せられて居るのは、この諏訪大明神が其處の氏神であるらしく思へる隣村であつた。助九郎の屋敷は殘つて居て、今なほその長者の後裔の所有(もの)であるが、その後裔なるものは頗る貧乏になつて居る。流罪になられた天皇が御使用になつたといふ茶碗や、此家族が保存して居るといふ御滯在の他の記念品を拜見したいと自分は乞うた。が、家に病人があつたが爲めその家へ入れて貰ふことは出來なかつた。そこでその家の庭を――一つの名所になつて居る、有名な池のある庭を――一瞥しただけであつた。

池は助九郎ノ池と呼ばれて居る。そして七百年の間その池の蛙が鳴くのを耳にしたものは無いといふ話である。

といふ理由(わけ)は、後鳥羽天皇が或る夜その池の蛙が鳴くので御眠になれなかつたので、起きて外へ御出ましになつて『だまれ』と御命じになつた。そこでその蛙は今日に至るまで幾世紀の久しき、依然として無言て居るのである。

池の近くにその當時大きな松の木が一本あつた。風の夜のその颯々の音が天皇の安眠を擾したてまつつた。そこで天皇はその松の木に向つて『靜かにせよ』と仰せになつた。その爲めそれからといふもの、その木は一度も颯々の音を立てない、暴風(おほかぜ)の折にも。

譯者註。増鏡に「潮風のいとこちたく吹き來るを聞こしめして「我こそはにひしまもりよおきの海のあらきなみ風心して吹け」、「同じ世にまたすみのえの月や見ん今日こそよそにおきの島守」年もかへりぬ。所所湍々あはれなる事をのみ思しなげく」とある。

だがその木は無くなつて居る。殘つて居るものとてはその木材と皮との破片少しだけて、それは隱岐の古老が遺物として大切に保存して居る。その破片の一つを自分は西鄕の醫者の――他の處てその人の親切に就いて自分が述べたあの醫者の――客間の床て見せて貰つた。

天皇の御墓は村から歩いて十分許りの距離にある小山の山腹に在るのである。松江の月照寺の壯大な古い庭にある松平家の墳墓の一番小さなものよりも、壯大といふ點に於て遙かに劣つては居るが、恐らくは貧乏な小さな隱岐の國が提供し得る最上のものであつたらう。だが、これは御墓の本來の在り場所では無い(譯者註)ので、明治六年に勅命によつて現今の位

譯者註。御墓はもと此處にあつたのである。明治六年御遺骨を攝津國水無瀨宮に遷され、今は此處は御火葬場址と稱せられ居る。

置へ移轉されたのである。黑く塗つた高い塀が、いや塀といふよりか太い杙の柵が、長さ百五十呎、幅五十呎許りの三段の平地に、卽ち三段の低い臺地（テレエス）に、なつて居る地面を取圍んで居る。その中は松の木で暗くなつて居る。この小さな最後の一番高い臺地の中央に御墓はあるので、水平に置いてある灰色の大きな平たい一枚石である。臺地から臺地へ石階を三四段登るので、門から御墓まで石敷の狹い步道がついて居る。その門口、これは一年にたつた一度參詣者に開くのであるが、その門口を少し入つた處に御墓に面して鳥居が一つあつて、一番上の臺地の前に石燈籠が一對ある。總じて頗る質素である。が、一種の感銘を與へる力を有つて居る。其處の靜けさを破るものはたゞ蟬の疳高い叫びと、あの奇妙な小さな蟲の――その啼聲は巫女がその神舞（かみまひ）に打ち振る小さな鈴のチリンチリンといふ音と丁度同じな鈴蟲の――リンリン響く音とだけてある。

三一

菱浦へ二度目に行つた折には、自分は約八日滯在した。だが、浦鄕にはたゞ三日居た。浦鄕は行つて見たら滯留するには面白味の少い處てあつた、――其處の奧が西鄕のよりも

少しても強いからといふ爲めては無くて、やがて述べる他の理由の爲めであつた。

西郷へ寄港した外國軍艦は一艘だけでは無く幾艘もあつたもので、英吉利や佛蘭西の海軍士官は、その姿をその町で幾度も見せて居るのである。丈が高く、髪毛が美しく、巖疊てあつたから、隠岐の者は、西洋人は誰も彼も同じ身長で同じ顏色だと今も想つて居る。自分はその町て唯の一と晩ても泊つた最初の外國人てあつて、しかも二週間も滯在してゐたのてある。が、自分は身體が小さいし色は黒いし、おまけに日本人のやうな服裝をしてゐたから、普通の人達の間に餘り注意を惹き起こさなかつた。日本の何處かの邊鄙から來た、妙な顏附の日本人だと皆んな思つてゐたのである。菱浦でも同じ考が暫く行はれて居て、自分が外國人だといふ事實が一般に知れ渡つた後でも、其處の人達は全然何等の迷惑をも自分に感ぜしめなかつた。街路を歩き廻つたり、入江を泳ぎ渡つたりする自分を見慣れてしまつたからてあつた。ところが浦郷では事が全く別てあつた。自分が最初其處へ上陸した時は、日本着物を着てゐたし、半ば顏を蔽ひ隠す非常に大きな出雲風の帽子をかぶつて居たして、どうにか人目を逃れ了せたのである。自分が西郷へ向けて去つた後で、西洋人が――島前へは本當に初めての西洋人が――實際來て居たのを知らずに居たのだと知つたに相違無い。といふのは自分の二度目の訪問は、加賀浦外、何處ででも一度も自分が

起こしたことの無い程の、大騷ぎを起こしたからである。

宿屋へ入る間も無く街路は、自分を見ようとする驚く計りの群集に全く塞がれてしまつた。その宿屋は不幸にも町角にあつたから直ぐに兩側から包圍された。自分は二階の大きな裏座敷へ案內された。すると疊の上へ坐るや否や、その大勢の者が、皆んな草履を階段の下で脫いで、少しも音を立てずにそつと二階へ上り始めた。禮儀正しいから部屋へ入つてみはしない。だが、四五人のものが入口から一度に顏を出し、お辭儀をし、にこりと笑ひ、ぢつと見て、それから階段に後から一杯詰めかけて居る者に讓る爲めに引き退るのであつた。召使の者が自分に晝食を運んで來るのは容易な業ではなかつた。そのうち、街路を隔つた向側の家の二階座敷が見物人で詰つた計りでは無い、自分の部屋が見渡される——北と東と南との——屋根といふ屋根が悉く無數の男と男の子とに占められた。それからまた多勢の少年が、自分の窓の下の廊下の上の狹い廂へ（どういふ風にしてか自分には想像も出來なかつたが）登りもし、三方にある自分の部屋の入口はどれもこれも人の顏で一杯になつた。すると瓦がずつて、いくたりか男の子が下へ落ちたが、誰も怪我したものは無かつたやうである。そして奇怪極まる事は、そんな素敵な體操の藝當を演じて居る間、死の靜けさがあつた事である。その群集を現に眼で見て居なかつたなら、街路に人つ子一

人居ないのだと自分は想つたかも知れぬ。

亭主は叱りだした。が、叱つても駄目と知つて巡査を呼んだ。巡査は、此處の人達は一度も外國人を見たことが無いのだから許してやつて呉れと自分に乞うて、街路から追つ拂つて欲しいかと自分に尋ねた。しようと思へば小指一本上げただけで巡査は左う爲し得たことであらう。だが、その光景が面白かつたから、その人達に去れとは命じないやう、然し、早や少しそれを損じもした程であるから、日蔽の上へは登らないやう子供等に言つて貰ひさへすれば、と自分は頼んだ。巡査は非常に低い聲で話して、皆んなへ極めて有效に言つてきかせた。自分がそれから浦鄕に居た間、誰一人その日蔽に近寄ることもようしなかつた。一體日本の巡査はどんな新規なことにも一度以上口をきくことは決してしないで、それてゐて口をきけばいつも必ず效果を奏する。

が然し、一般の好奇心は少しも減ぜずに三日間續いた。浦鄕から自分が逃げ出さなかつたならもつと續いたであらう。外出をするといつも後から大勢の者が、濱の砂利をゆすぶる波の音のやうにガラ〳〵と下駄の音を立てて、跟いて來る。が、その特殊の音のほかには、何の音もきこえなかつた。一ことも物を言ふものはなかつた。これは心的能力全部が見たいといふ念の激しさに緊張して口をきくことが不可能になつた爲めかどうか、それは

自分は斷定することは出來ぬ。だがそんなにも激しい好奇心に少しも亂暴といふ點は無かつた。許可無くして自分の部屋へ上がつて來るといふことを除いては、無禮に近いやうなことも決して無かつた。部屋へ入つて來るのも、如何にもおとなしく入つて來るので、その侵入者を咎めて欲しくない程であつた。とは言ふものゝ、三日に亙るそんな經驗は苦しかつた。暑さにも拘らず、眠つて居る間人に見て居て貰はぬやう、戸や窓を閉めなければならなかつた。自分の所有品に就いては全然心配は無かつた。竊盜は此島には無いからであつた。だが自分の身のまはりに斯く絶えず無言な群集を見る事は、しまひにはうるさいよりももつと惡るいものになつた。無邪氣ではあつたが、薄氣味が惡るかつた。自分が幽靈になつたやうな——聲の無い者共に取卷かれて、冥途へ新たに來たのでは無いかといふやうな——氣持にされたのである。

三二

日本人の生活には內密といふことが、どんな種類のものも殆んど全く無い。實際この國民間には、我々西洋人が內密と呼んで居るものが存在して居ないのである。人と人との生

活を仕切る紙の壁があるだけであり、戸は無くして横に辷る目隱があるだけであり、日中使用する錠も閂も無く、天氣が宜いと家の表側が、いや横側すらも、文字通りに取外づされて、家の内部が廣く空氣にも光線にも公衆の環視にも開放されるのである。富裕な人でも日中其表門を鎖しはせぬ。宿屋の中で、或は普通の住宅でも、他人の部屋へ入る前に誰も戸を敲くといふ事をせぬ。障子又は襖のほかに敲くべき物が何も無いので、それは敲けば必ず壞れる。そして紙の壁と日光との此世界では、誰も一緒に居る男や女を憚りもせず、恥づかしがりもせぬ。爲す事は總て、或る意味に於て、公に爲すのである。個人的慣習、特癖（もしあれば）、弱點、好き嫌ひ、愛するもの惡むもの、悉く誰にも分らずには居らぬ。惡徳も美徳も隱す事が出來ぬ。隱さうにも隱すべき場所が絶對に無いのである。そして此狀態がずつとの太古から續き來たつて居る。少くとも普通の幾百萬といふ人達には、人に見られずに暮すといふ事は考へも及ばぬ事であつたのである。日本では、人生に關する一切の事件を公衆の耳目に公開するといふ條件の下に初めて、氣持よくまた幸福に暮して行けるのである。といふ事は、西洋には全く存在して居ないやうな、異常な道德狀態であるといふ譯になるのである。日本人の性格の異常な妙味を、一般人民の無限に親切であることを、その本能的に禮儀正しいことを、批評嘲笑皮肉又は諷刺に耽る如何なる傾向も

日本人には無いことを、身自ら經驗して知つて居る者にだけ、これは完全に了解が出來るのである。自分の同輩を貶して自己の個性を發展せしめようと努めるものは一人も無い。自己をえらい者のやうに見せようと試みるものは一人も無い。銘々の弱點が萬人に知られて居り、何物も隱すことも僞ることも出來ず、そしてつくり飾は一種の輕い氣狂としか人に思はれない社會にあつては、そんなことをしても何の效もないことであらう。

三

松江の昔のサムラヒで、今隱岐の島に暮して居るものがある。彼の武人の大階級が廢止された時、その少數の機敏な者共は、風俗が昔のまゝ古風であつて、土地が低廉なこの小群島で運試しをやつて見ようと決心した。幾人も成功した――この島では人間が心底から正直て風俗が淳朴な爲めてあつたらう。といふのは、經驗のある商賣人と競爭しなければならぬといふと、他處てはどんな商賣にもサムラヒは滅多に成功し得なかつたからである。失敗した者もあるが、暮して行けるほどの種々な卑しい職業に從事することは出來た。

封建時代のそんな老生存者のほかに、この帝國の斯んな非常に僻遠な貧乏な地方て、新

たな生活狀態に雄々しくも面と向つて居る、嘗ては高貴な家族の子達が――有名な家系の若樣やお孃樣が――幾人も隱岐に居るといふことを自分は知つた。一市の住民が嘗ては頭を下げた人の息女が稻田での苦しい勞働を敎はつて居つた。時代が異つて居たなら要職を望み得られた若人が、隱岐ヘイミンの忠實な下男となつて居つた。それからまた或る者は警官となつて自己を幸運だと正當にも思惟して居るのであつた。

註。日本の警官は殆んど全部、今は名をシゾクと呼ぶサムラヒ階級のものである。自分は世界で一番完全な警官だと考へてよろしいと思ふ。が、現今それに目立つて見えて居るあの素ばらしく立派な忠實な一代經つた後、保持して居るであらうかどうか、それは疑はしい。大切なのはそのサムラヒ氣質である。

基督敎國の銃劍が、利得といふ堅い動機の爲めに、日本に强ひた文明の彼の大變化は、最近の社會崩解の種々な危險よりも、もつと大きな種々な危險に陷らないやうに、此帝國をまだ救ふことは疑を容れぬ。が然し、その變化は無慈悲なほど突然なものであつた。英吉利の地面育ちの上流社會がその收入を奪はれた結果を想像して見ても、それと似寄つた剝奪が日本のサムラヒに及ぼした結果は、之を精確に理解することは出來なからう。といふ譯は古昔の武人階級は禮儀の道と戰爭の術とだけしか知つて居なかつたからである。

それでそんな話を聞いて自分は、樂山神社の出雲での最後の大祭にあつた奇異な行列のことを考へずには居られなかつた。

三四

樂山といふは、其處で出來る光つた黄色い陶器と、其處に在る小さな神社とて知られて居るだけで、松江から小一里の、廣い稻田の向うの、木の茂つた小山の麓に眠つて居る小村である。そしてその樂山神社の祭神は家康の孫であり、松江の大名の祖先たる、直政てある。

松平家の人のうち、月照寺の古い實に立派な庭で、石の龜や獅子に護られて、佛教の土地に永眠して居らるゝ方がある。然し、その長い家系の元祖の直政は、樂山に祀られて居る。そして出雲の百姓共は今猶、その宮の前て柏手打つて拜んて、その慈悲と庇護とを願つて居る。

さて以前は樂山神社の毎年のマツリ卽ち祭禮にその村社から松江の城へ直政のミヤを持つて來るのが慣習てあつた。おごそかな行列を立てて、城の地域の中心にある――石の獅

子や狐が居る、その崩れさうな庭が巨大な樹木で日蔭になつて居る、御城内稲荷大明神と楠松平稲荷大明神といふ――あの妙な古い一族守護の神社へそれを運び來たつたものである。神道の式事が兩方の社殿で營まれてから、そのミヤは樂山へ行列で持ち歸るのであつた。そしてこの年々の儀式はミユキ又はトギヨ、卽ち祖先來の家への祖先の『御幸』と呼ばれて居つた。

譯者註。樂山神社は其後松江城内千鳥公園に移され、松江神社と改稱。楠松平稲荷大明神の社は壞たれて今は無い。

ところがかの革命は一切のものを變じた。大名は無くなり、城は荒廢に陥り、サムラヒ階級は廢止されて所領を奪はれた。そこで直政公のミヤは三十年以上も松平の家へ御幸をしなかつた。

ところが少し前のこと、偶〻松江の或る老人達がラクザンマツリの舊慣を古に復へさうと考へた。そこでミユキがあつた。

直政公の宮は裝飾をし、幕を張つた傳馬船の中に安置し、川と掘割とを通つて、古昔大名が江戸へその年々の參勤に出かけたり、それから歸つたりする時、その松蔭道を通つた

昔の松原街道の東端まで運ばれた。その傳馬船を漕いだものは總て、若い時分に出雲の最後の殿樣松平出羽守の御座船を始終漕いだ老年のサムラヒであつた。いづれも昔の封建時代の衣裳を着けて居た。そして其古風な船歌を――オフナウタを――歌はうとした。だが最後にそれを歌つてから一代以上の年月が經つて居るのであつた。中には齒を失くしてしまつて言葉の發音が旨く出來ぬものもあつた。また、みんな年を取つて居たから、櫓を漕ぐ努力に直ぐと息を切らせた。それにも拘らず御座船を所定の場處まで漕いだ。

其處からして宮は松原街道の横の或る地點まで擔ぎ運ばれた。その地點といふはこの國の大名が將軍の都から歸る時、いつも休息し、また列を爲して必ず出迎に來る忠實な家來に接見した、オチヤヤ即ち御茶屋が古昔あつた處である。御茶屋は今は無い。だが、舊慣に從つて、宮とその護衞の者共とは其處て、野花や松の木の間て、待つた。ところがその時不思議な光景が眺められた。

といふのはこの大殿樣（おほとのさま）の靈を迎へんが爲めに、これ亦靈かと思はれる姿の者が――墓場の土から立現れた姿の者が――長い行列を立てて出て來たからである。前立（まへだて）の附いた冑を冠り、鐵の面を着け、鋼の胸甲をよろひ、腰に二本の刀をさした武士が出て來、頭に髷をつけた鎗持が出て來、カミシモを着た家來が出て來、ハサミバコを肩にした男が出て來た

のである。だが、それ等は靈では無くて、最後のダイミョウに仕へて物の具を身に着けたことのある松江の老年のサムラヒであつた。そしてそのうちには、その生存して居る大臣即ち年とつたカロウの姿も見えた。そして行列が町の方へ向ふと、是等の人はその古昔の名譽の位置を執つて、年で腰は曲つて居るが、宮の前に立つて雄々しく行進した。

その行列がどんな印象を他の外國人に與へたか自分は知らぬ。自分には、その老人達各各の身の上が幾分分つて居るので、その光景は、忘れられた古昔の慣習のその物語とは別な、封建時代の行列としてのその興味とは別な、或る意義を有つて居つた。今日はその老サムラヒ共は一人殘らず悉く言ふに言へぬほど貧乏して居る。彼等の美くしい屋敷はとつくの昔に失くなり、彼等の庭園は稻田と變つて居り、彼等の家寶は無慙にも賣却され、開港場の外國人へ高價で轉賣しに、骨董屋の手に殆んど無代で買はれたのであつた。しかもなほ、賣れば隨分の金が得られる物を、彼等には何の役にもたたなくなつた物を、彼等は貧困と屈辱の中にあつて大事に抱へ來て居るのであつた。前よりも苦しい新規な生活狀態の下に在つて、どんな悲慘な缺乏に迫られても、その甲冑と刀劍とは彼等は決して之を手離す氣になり得なかつたのである。

川岸も、街路も、緣側も、青瓦の屋根も、人で塡まつて居た。行列が通る時は非常に靜

かであつた。年の若い人は、將來に於てはたゞ繪本で、そして古めかしい日本芝居で見るよりほかない物を現に目のあたり見るといふこの機會の稀有な價値を思うて、靜まりかへつて眺めて居つた。そして年老いた人は、その青年時代を懷ひ起こして、無言で泣いて居つた。

かの古昔の思想家が『如何なる物もたゞ一日のものなり、憶ふ者も、憶はるゝ者も』と述べたのは名言である。

三五

歸航の途、再び自分は隱岐西鄕の船室の屋根の上に——今度は幸にも西瓜の邪魔を蒙らずに——坐つて、その荒れた島の海岸が青白い海のかなたに、一條の白い地平線へと消え行くのを見た時の陰欝の念を自分と自分に說明して見ようとした。一つには自分が決して二度とは會へぬ多くの人達から受けた親切の追懷が起こしたに相違無い。一つにはまた、その古い土地そのものとの自分の親しみと、物の恰好と場所との懷ひ出が——島と島との間の水路を通る時の長い青い奇異な觀物、石の多い入江に隱れて居る仄かな灰色を帶びた

漁村、小さな原始的な町の狹い街路の蠱魅的な珍妙さ、日々に親しんで可愛くなつた峰や谿の形と色合、神秘な長い名を有つ神を祀つた木蔭深い社殿への曲りくねつた壞れた小徑、未知な地平線のあかるみから蝶と漂ふ黄色な帆船の懐ひ出が——起こしたに相違無い：だが自分は考へるに、それは恰も或る山水の景が朝の光りに浸つて、その種々な色に和められるが如くに、あらゆる記憶がそれに浸りそれに和められる一種特別な感じに——自分が熱帶の北でこれ迄入つたことのある何處よりかも、いろんな狀態が自然の情に近いのである、西洋生活の言語道斷な機械世界を遠く離れて居るのである、といふ感じに——一層多く基づいて居たと思ふ。それで——鳥賊の臭にも拘らず——日本の他の處では感じたことの無い、遠くへ手を伸ばす、彼の高壓文明の力から免れることの充分の喜悦を、其處で感じた爲めに——少くとも島前では、人生の人工的なもの總ての範圍を餘程超越して、自己といふものを知るの歡喜を其處で感じた爲めに——主として、その爲めに自分は隱岐を好むのだ、といふやうに自分には思はれた。

第二十四章　魂について

象牙の玉のやうに頭の光る老人の植木屋金十郎は、いつも彼のために置いてある火鉢で煙草を吸ひに私の書齋の外側の板の間の端にしばらく腰をかけた。そして煙草を吸つて居る間に手傳の小僧を叱らねばならなくなつた。小僧は何をしてゐたか私はよく分らなかつた。ただ私は金十郎が魂を一つ以上もつて居る人らしくなるやうにせよと云つて居るのを聞いた。それでその言葉が面白かつたので私は出て行つて金十郎の側に坐つた。

『金十郎さん』私は云つた『私は自分では魂が一つあるかもつとあるか知らない。しかしあなたはいくつもつて居るのか聞かせて下さい』

『私はやつと四つもつて居ります』と金十郎は動かす事のできない自信をもつて、答へた。

『四つ』と私は分らなかつたやうな氣がして反響のやうに云つた。

『四つです』彼はくりかへした。『しかしあの小僧は魂一つしかもてません。それ程辛

抱が足りません』

『そしてどうしてあなたは魂四つある事が分りましたか』私は尋ねた。

『賢い人があります』小さい銀きせるから吸殻を落しながら彼は答へた『こんな事を知つて居る賢い人があります。それからそんな事を書いた古い本があります。人の年齢と生れた時と天の星とで魂の數が判じられます。しかしこれは昔の人の知つて居る事で、西洋の事を學んで居る今の若い人は信じません』

『それから金十郎さん、あなたよりもつと澤山魂をもつて居る人は今ゐますか』

『ゐますとも。五つもつて居る人も、六つの人も、七つの人も、八つの人もゐます。しかしどんな人でも九つ以上は神様がお許しになりません』

「ところでこれは、一般の事としては、私は信じられない、何にしろ世界の向う側には魂を無數有して、それを皆使用する事を知つて居る婦人を記憶して居るから。外の女が着物を着るやうに、そして一日に幾度もそれを着換へるやうに、この婦人は自分の魂を取換へてゐた。そしてエリザベス女王の簞笥の中の着物の數でもこの不思議な人の魂の數と比べては物の數でもない。その理由で彼女は二度と同じに見えた事はない、そして考や聲を

魂と共に變へた。どうかすると南部の人となつて眼が茶色になつた、又再び北部の人になつて眼は灰色になつた。時として十三世紀の人になつたり、時として十八世紀の人になつたりした、それで人がこれを見て、皆自分の感覺を疑つた、そして皆彼女から寫眞を何枚か貰つてそれを比較して見て、眞相を發見しようとした。ところで寫眞師は、彼女が非常に綺麗なので喜んで寫眞をとつた。が、やがて彼女が二度と同じでない事を發見して、彼等も困つてしまつた。そこで彼女に最も感嘆してゐた人でも彼女を愛するなどと云ふ氣になれなくなつた。それは愚かな事だから。彼女は要するに魂は餘り多くあり過ぎた。それて私の書いたこの事を讀んだ方のうちでこれが本當である事を保證して下さる方があるだらう」

「金十郎さん、この神國ではあなたの云ふ事は本當でせう。しかし、黄金でつくつた神樣しかない國が外にあります、そんな國では、物事がさうよく整つてゐません、それでそこの人々は魂の病で惱んでゐます。と云ふのは、半分しか魂がない人があつたり、全く魂のない人があつたりするかと思ふと、又それぞれ仕事も滋養も與へてやれない程澤山魂があり餘る程持ち込まれて居る人もあります。それでこんなやうな魂はその持主を殊の外苦

しめます。…つまり、これは西洋の魂てすが、…しかし一つ二つてなく、もつと澤山の魂をもつてゐて何になるのてすか、どうか、それを聞かせて下さい』

『旦那、もし皆が同じ數や性質の魂をもつてゐたら、きつと皆が同じ心になるのてせう。しかし人は皆お互に違ふ事が分ります、それてその違ふのは魂の數や性質が違ふからてす』

『そして魂を少してなく、澤山もつて居る方がよいのてすか』

『い〻のてす』

『そしてたつた一つ魂をもつて居る人は不完全な人てすか』

『大層不完全てす』

『それても大層不完全な人て完全な先祖をもつて居る人もあるてせうね』

『さうてす』

『それぢや今日たつた一つ魂をもつて居る人て九つの魂をもつた先祖から出て居る人もありませう…』

『はい』

『それては先祖にはあつたが子孫にはないと云ふ外の八つの魂はどうなつたてせう』

『あ〻それは神様の仕業てす。神様だけが私共銘々のために魂の數をきめて下さいます。

えらい人々には澤山、つまらない人には少し』
『それなら兩親から魂が傳はるわけぢやないね』
『いゝえ、大へん古いものです魂と云ふものは、その年數は數へられません』
『そしてこんな事を承りたい、人は魂を分ける事ができますか。たとへば京都に一つ、東京に一つ、松江に一つ、皆同時にもつて居られますか』
『できません、いつでも皆一緒です』
『どうして。一つの中に又外のがある、丁度印籠のいくつもあるあの漆を塗つた小さい箱のやうにですか』
『いゝえ、それは神樣でなければ分りません』
『そして魂は決して分れませんか』
『時々分れる事もあります。しかし人の魂が分れたら、その人は狂人になります。狂人は魂を一つなくした人です』
『しかし死んだら魂はどうなります』
『やはり一緒になつてゐます。……人が死ぬと魂が家の屋根に上ります。そして四十九日の間屋根の上に停まつてゐます』

『屋根のどこにですか』

『屋根の棟に魂がとまつてゐます』

『見えますか

『いゝえ、魂は空氣のやうです。小さい風のやうに屋根の棟の上をあちこち動きます』

『何故四十九日でなく、五十日の間屋根にゐないのでせうか』

『魂が去つてしまはねばならぬその前に七週間と云ふのが與へられた時間です、七週間て四十九日になります。しかし何故かうなるのだか私に分りません』

私は死人の魂は家の屋根にしばらく停まつて居るものと云ふ昔の信仰を知らないてはなかつた、それは多くの日本の芝居、殊に人を泣かせる加賀見山と云ふ芝居に充分明瞭に出て居るからである。しかし私は前に三重又は四重或はそれ以上の魂の事は聞いた事はなかつた、それて私は金十郎に彼の信仰の基づいて居る處を知らうと思つて聞いて見たが駄目てあつた。祖先傳來の信仰、彼の知つて居る事はそれだけてあつた。

註一。あとで私はこの老人が、それを充分說明するためには大きな本になるやうな或種類の信仰――支那の占星學に基づいて居るが佛敎や神道の說で附加修正されて居るらしい信仰をただ云つてゐた事が分つた。

この複雜な魂の考は支那の十二宮と十の天體系の間の星學上の關係の豫備知識がなければ說明ができない。チェンバレン教授の『日本事物』と云ふ立派な、小さい本の『時』と云ふ不思議な文を讀めば多少會得ができよう。この關係が分つたとして、支那の星學上の系統では毎年は『五行』―木、火、土、金、水、のどれかに支配を受ける。そして誕生の日と年によつて、人の氣質は天體的にきまる。記憶し易いやうにしてある日本の歌に、五行の何れかに屬すべき魂は性質の數が詠み込んである、――即ち木に九つ、火に三つ、土に一つ、金に七つ、水に五つの魂がある、―

『きくからに、總密の山に、土一つ、七つ金とぞ御推量あれ』

銘々が『長』『幼』と分れるから、五行が十の天體系となる。その影響が十二支の影響と混交して、―

―それが皆、時、所、生命、幸、不幸、等に關係して來る。しかしこんな事を云つて見ても、この問題は實際如何に非常に複雜して居るか分らない。

老植木屋の云つた書物――歐洲のどの國にもある占の本のやうに日本で普く知られて居る本は三世相である。これは今でも求められる。しかし、から云ふ事に通じて居る人の說では、金十郎の意見と反對で、魂を餘り澤山もつて居るのは餘り少いのと同じく惡いと云ふ事である。九つの魂をもつて居るのは『氣がおほすぎる』事になつて――正しい目的がない事になる、一つしかないのは早い智慧が缺けて居る。支那の占星學によれば、『天性』『性格』と云ふ方、この場合『魂』と云ふ言葉よりも或はもつと正確であらう。こんな信仰から生れ出た奇妙な想像が澤山ある。數百のうちから一つ例を引けば、火の性の人は水の性の人と結婚してはならない。それでどうしても一度和合しない二人の事を『火と水のやう』と云ふ俚言

がある。

大概の出雲人のやうに、金十郎は神道の信者であると共に佛教の信者でもあつた。佛教では禪宗、神道では出雲大社に屬してゐた。しかも彼の本質論はどちらの物でもないやうに思はれた。佛教では、人の魂は複雜にいくつもあると云ふ說は敎へない。一般の人には分らない古い神道の書物がある、それには金十郎の說と甚だ隔りはあるが似寄つた說をのべてある、しかし金十郎はそれを見た事はない。その書物によれば人間には皆二つの魂がある、一つは執念深い荒魂（アラタマ）、一つは寛大なる和魂（ニギタマ）である。その上人間には大禍津日神（オホマガツヒノカミ）の魂も、又それと反對の力ある大直毘神（オホナホビノカミ）の魂もついて居る。これは正しく金十郎の考てはない。しかし私は金十郎が魂の分れる事があると云つたので平田の書いた事を思ひ出した。平田の敎では人の靈魂はその肉體を離れ、その人の姿となつて、本人の知らないうちに憎んで居る敵を亡ぼす事があると云ふのである。そこで私はそれについて金十郎に尋ねた。金十郎は荒魂や和魂のことは聞いた事がないと云つた、しかし私にこんな事を告げた

『旦那、人が妻に內證で他に愛して居るものがある事を妻にさとられると、その隱し女は時々どんなお醫者でも直せない病氣になる事があります。そのわけはその人の妻の魂が一つ、餘程の腹立ちて、その女のからだにのりうつつてその女を殺さうとするのです。し

かし妻の方でも魂が一つなくなつたから病氣になるか、或は暫く狂氣になります。

『それから日本の私共には知られて居るが、西洋のあなた方がお聞きになつた事のないもつと不思議な事がもう一つあります。神様の力で、正しい目的で時々魂がそのからだから暫く離れて、その最も祕密にして居る思ひを云ふやうになる事があります。しかしからだにはその時何の苦痛も起りません。そしてその不思議な事はこんな風に起ります

『或男が或女を愛してゐます、結婚する事も自由ですが、その女の方でも自分を愛してくれて居るかどうかは分りません。男は神社の神主に遇うて、その疑を話し、[註二]神様の力を借りてその疑を解かうと致します。そこで神主はその男の名は聞かないが、年齢と生れた年月日時刻を聞いて神様に分るやうに記します、そして七日たつて又神社へもどつて來るやうに申します。

註二。普通稲荷堂。大きな神社ではこんな事は行はれない。

『そしてその七日の間に神主はその疑の解けるやうに神に祈りを致します、それから一人の神主は毎朝冷い清い水で沐浴して食事毎に神の火で煮焚した物だけを喰べます。そして八日目にその男は神社へ歸つて來て、神主の迎へてくれる奥の一室へ入ります。

『儀式が行はれて、何か御祈禱が始まります、それがすんで皆默つて待つてゐます。それから齋戒沐浴をしてゐた神主の全身が不意に烈しく震ひ出します、丁度大熱で震ひ出して居る人のやうです　ところでこれは神樣の力で、その愛して居るかどうか分らぬと云ふ女の魂が神主のからだへ、全くおづおづと入つたからです。女は知りません、その時どこにゐても、すつかり眠つてゐてどうしたつて起す事ができないのですから。しかしその女の魂は神主のからだへ呼び込まれてゐて、本當の事をしか云へないのです、そして思つて居る事を皆云ふやうになります。そして神主は自分の聲でなく、女の魂の聲で申します、そしてその魂になつて、少しも僞りなく「好きです」とか「嫌です」とか申します、それも女の言葉で。もし嫌ならばその嫌の理由を申します、しかしもしその答が好きな方のなら、云ふ程の事はありません。そしてそこで神主の身ぶるひは終ります、それは魂が神主から去つたからです、そして死んだやうに俯向きになつて倒れて、長くそのままになつてゐます』

こんな不思議な話が皆すんだあとて私は尋ねた、『金十郎さん、あなたは神樣の力て魂が離れて、神主の心にのりうつつた事を知つて居るのなら、聞かせて下さい』

『はい、私は自分で分つた事があります』
私は默つて待つてゐた。老人はきせるをたたいて、火鉢の側へなげ出して、手を組んで、それから話す前にしばらく蓮の花を眺めた。それからにつこりして云つた——

『旦那、私は大層若い時に結婚しました。長い間子供がありませんでした、それからお仕舞に妻が忰を一人生んで、そして佛になりました。しかし忰は死なないで大きくなつて立派に達者になりました、そして西南戰爭の時天子樣の軍隊に入りました、そして九州の南の方の大戰爭で男らしく討死致しました。私には可愛い忰でした、忰が天子樣のために討死ができたと聞いた時私は嬉し泣きに泣きました、さむらひの忰にとつてこれより立派な死に方はないのですから。そこであの立派な城のある、名高い都の熊本近くの或山の上に忰が葬られました。そこで私もその墓を綺麗にするために參りました。しかしここでも二の丸にある記念碑[譯者注一]に忰の名はやはり彫つてあります、その記念碑は天子樣のために忠義と名譽の戰爭に倒れた出雲の人々のために建ててあるのです。そして私は忰の名をそこで見ますと嬉しくなります、そして忰と話します、さうすると大きな松の樹の下[譯者注二]で忰が又私の側を歩いて居るやうな氣が致します……しかしそれは別の事です。

『私は妻のために悲しみました。一緒にゐた間、私共は何一つ厭な事を云ひ合つた事はありません。そして妻が死んだ時、私はもう二度と結婚はしまいと思ひました。ところが二年たつてから兩親は家に娘が欲しくなりました、そしてその事を私に云つて、貧乏だが家柄のよい綺麗な娘の話を致しました。その家は私の親戚で、その娘が一人で一家を支へて居るのでした、娘は絹の着物、木綿の着物を織つて、それで極僅かの金を儲けてゐました。それでその娘が親孝行で美しいのとその家の運が惡いのとで、私の兩親はその娘を貰つてその家の人達を助けるやうに思つたのです、その頃は私共も少し米の收入もあつたものですから。それでいつも兩親の云ふ通りになつてゐましたから、私は兩親の一番よいと思ふ通りに任せました。そこで仲人を呼んで、婚禮の準備に取りかかりました。

『娘の兩親の家で、私は二度娘を見る事ができました。そして始めて見た時には自分は幸福だと思ひました、娘は大層綺麗で若かつたからです。しかし二度目に娘が泣いて居るのと、その眼が私の眼を避けて居るのに氣がつきました。そこで私は力を落しました、それは、私は娘に嫌はれて居る、それから皆が娘を強ひてこんな事にしたのだ、と思つたからです。そこで私は神様に聞いて見ようと決心しました、そして婚禮を延ばして貰ふやうにして、材木町[譯者註三]の柳の稻荷様へ參りました。

『そしてからだが震ひ出すと、神主に娘の魂がのりうつつて話し出して、私にかう白狀しました「私の心はあなたを嫌ひます、そして顏を見ても病氣になります、外に私の好きな人があるからです、そしてこの婚禮は私に强ひられたのだからです。しかし私の心ではあなたは嫌でも、兩親は貧乏で年寄で、私獨りでは長く續いて兩親を養ふ事ができない程私の仕事が苦しいから、あなたと結婚しなければなりません。しかしどれ程私が忠實な妻にならうとしても、私のためにあなたのうちは少しも良い事はありません、それは私の心は中々執念深くあなたを嫌つて居るからです、そしてあなたの聲を聞いても胸が惡くなります、それから顏を見ると死にたくなります」

『こんな風に眞相が分つて、私は兩親にそれを云ひました、そして私は娘に知らないで迷惑をかけた事を赦して貰ひたいと丁寧な手紙をやりました、そして世間の口に上らないで婚禮の破談になるやうに長い間假病を使ひました、そしてその家へ贈物を致しました、そして娘は喜びました。娘はその後愛して居る若い男と添ふ事ができたからです。兩親は再び妻帶を强ひませんでした、そして兩親が亡くなつてから獨りでくらしてゐます……ああ旦那、あの小僧の實にいけない事を御覽なさい』

私共の話込んで居るのに乘じて、金十郎の若い助手は竹の棒と絲切れとて卽席釣竿とし老人の煙草入れから盜んだ煙草を小さい玉にしてその絲の端につけて置いた。この餌て彼は蓮池で釣をしてゐた、そして一匹の蛙がそれを吞んで小石のずつと上に高くさがつてゐた。大の字になつてぐるぐる廻りながら癇癪と絕望の餘り狂亂の痙攣で蹴つてゐた。

『梶』と植木屋は呼んだ。

小僧は笑つて釣竿を落して、平氣な顏をして私共の處へ走つて來た、蛙の方は煙草を吐き出して蓮池の方へぶくぶくかへつた。たしかに梶は叱られる事を恐れてゐなかつた。

『後生が惡い』老人は象牙頭をふりながら云つた。『おい、梶、お前の後生はよくないぞ、心配だ。蛙にやるための煙草ぢやないよ。旦那、この小僧は魂一つしかもちませんと申したのは本當でせう』

譯者註一。二の丸、松江の舊城。この記念碑は故籠手田知事が以前島根縣官民に說き、十年戰爭の島根縣出身死者のため、銅を鑄て建てしもの、もと二の丸にありしが數年前天守閣の入口の邊へ遷した。

譯者註二。記念碑の二の丸にありし時は、その附近に直政公手植の松と稱する二本の亭々たる巨松ありしが、一本は今も老幹依然聳えて壯觀をなせども一本は枯れた。ここではこの松のことを云つて居る。

譯者註三。この稻荷は數年前まで存在せしが、『新大橋』架設の際、道路新設のためと小さい神社併合實

旗のためとて、今は鍛冶町の船玉稲荷と併合された。松江の人は「柳稲荷」と呼んでゐたのは社の背後に老柳ありしため。

第二十五章　幽靈と化け物について

一

法華經によれば、『夜叉の形を以て得度すべき者には、夜叉の形を現じてまで法を說く』佛があつたと云ふ。それから同じ經に、佛にこんな約束がある、「彼がその荒野に淋しく住んで居る間に、自分は彼と交際させるために夜叉を大勢送るつもり」この約束は、菩薩をも叉送らうと云ふ證言で餘程その恐ろしさが緩和されて居る。しかし私が僧侶になる事があつても、荒野に住む事は注意して避けたい、私は日本の化け物を見て、それを嫌ふからである。

昨夜、金十郎は私にその化け物を見せた。その化け物は氏神の祭禮に町へ來た、祭りの夜に見られるやうな珍らしいものが澤山あるので、私共は日が暮れてから神社の方へ出かけた、金十郎は家の紋をつけた提灯をもつて伴をした。

朝のうちひどく雪が降つたが、もう天も、刺すやうに寒い靜かな空氣も、ダイアモンドのやうに澄み渡つて居る、それから脆い雪は歩く時足の下で快くばりばり音を立てる、それて私は思ひついて云ふ、『金十郎さん、雪の神樣と云ふ物はありますか』

『分りません』金十郎は答へた。『私の知らない神樣は澤山あります、神樣の名を殘らず知つて居る人はありません。しかし雪女と云ふ物はあります』

『それはどんな物です』

『眞白な物で、雪の中で色々變な顏をして見せます。別に害を加へる事はないが、ただ恐ろしがらせるだけです。晝のうちは顏を上げて、獨り旅の人をおどかすだけですが、夜になると時々樹よりも高くなつて暫らくあたりを見廻してから、急に雪になつて降つて來ます[註一]』

註一。日本の他の地方では、私の聞くところでは、雪女は甚だ綺麗な女となつて現れ、若い男を淋しい場所へ誘つて、血を吸ふと云はれて居る。

『どんな顏をしてゐます』

『白い——眞白です。非常に大きな顏です。それから淋しい顏です』

『金十郎の云つた言葉は淋しいてあつたが、私の考ては、それは『陰氣な氣味の悪い』と云ふ意味てあつた』

『金十郎さん、あなたは見た事がありますか』

『私は見た事はありません。しかし私の父が子供の時分に、外の子供と遊ぶつもりて、雪の中を隣りのうちへ行かうと致しますと、途中て、雪の中から大きな白い顔が出て淋しさうにあたりを見廻したさうてす、恐ろしさの餘り聲を出して逃げて歸つたと申します。そてうちの人が皆出て見ると何にもない、雪ばかり、それて皆がこれは雪女を見たのだとさとりました』

『ところて、金十郎さん、この節、人は雪女を見ますか』

『はい。大寒の時節に、やぶ村へ參詣する人は、時々見ます』

『やぶ村に何かありますか』

『やぶ神社があります、それはやぶ天皇さんと云ふ風の神の名高い古い神社てす。松江から九里ばかりの山のずつと上にあります。その神社の大祭は二月の十日と十一日にあります。それてその日には妙な事があります。ひどい風を引いて居るものがやぶ神社の神様になほるやうにお祈りをして、その大祭の日に神社へ裸參りを致しますと誓ひます』

『裸てすか』
『さうてす、わらぢをはいてふんどしや、ゆもじ一つてお參りを致します。それて大勢の人は、その頃雪が深いのてすが、神社の方へ雪の中を裸て行くのてす。それから男は銘々御幣と抜身の刀を奉納します、女は銘々鏡を奉納します。それから神社ては、神主がその人々を迎へて妙な儀式を行ひます。古式によつて、神主は病人のやうななりをして、寢てうなります、それから漢方て處方致しますす草根木皮のくすりを飲みます』
『寒さて死ぬ人はありませんか』
『ありません、出雲の農夫は達者てす。その上早く走りますから神社へ着く頃は熱い程てす。それから歸る前に厚い暖い着物を着ます。しかし時々途中て雪女を見ます』

二

お宮へ行く往來の兩側は聖いしるしのある提灯の列て照らされて居る、社殿の大きな廣場は假小屋、店、芝居小屋の小都會と變つて居る。寒さも厭はず、集つた人の數は驚くべきものてあつた。いつもお祭りに人を喜ばせる普通の物は悉くある上、普通てない物も中

々あつた。ありふれた見世物のうちで、生きた蛇の帯をした娘のゐない事だけが物足りなかつた、多分季節が蛇にはさむすぎるのであらう。占や手品や、軽業や踊りがあつた、砂で繪をかく男もあれば、アウストラリヤ産のヱミユや、色々の藝を仕込んである琉球産の大蝙蝠の一つがひのある動物園もあつた。私は、神社に參詣してから、何か不思議なおもちやを買つて、それから化け物探險に出かけた。こんな特別な場合に、見世物屋に賃貸するためにできた大きな永久建築物の中に納まつてゐた。

入口の看板に書いてあつた『生人形』と云ふ大きな文字は幾分この見世物の性質をほのめかしてゐた。生人形は私共西洋の『蠟細工』にやや相當する、しかしそれと同じやうに寫實的であるこの日本の創作はずつと安價な材料でできて居る。銘々一錢で木の札を買うてから、私共は入場した、それから幕のうしろへ行くと長い廊下へ出た、それには小さい部屋程の疊敷の仕切のある假屋がいくつかならんでゐた。それぞれこの題目に相應な背景で裝飾されたその場所には等身大の人物のいくたりかがゐた。入口に最も近いものは三味線を彈いて居る二人の男と踊つて居る二人の藝者を表はしたものであつたが、私には云ふまでもなく人形と思はれた、しかし金十郎がその前の小さい掲示を飜譯してくれたのによれば一人だけは本物の人間であると云ふ事であつた。私共はまたたきか身震ひがあるだら

うと待つて見たが駄目であつた。不意に三味線弾きの一人が大きな聲で笑ひ出して、頭を振つて三味線を弾いて歌ひ出した。私共は完全にだまされた。

あとのものは全部で二十四あつたが、大概は名高い人氣のある傳說とか又は聖い神話などを表はした物で、それぞれ强い印象を與へた。それを想ひ出すと日本人の胸がとどろかずにはゐないと云ふ封建時代の英雄的行動、親孝行の傳說、佛教の奇蹟、天皇の物語などが題目のうちにあつた。しかし時々その寫實が殘忍な事もあつた、たとへは或場面では頭を刀でたち割られて、血の溜りに倒れて居る女の死體がある。つぎの部屋へ行くとその女が奇蹟的に蘇生して日蓮宗の寺へ御禮參りをして、何か不思議な事件で偶然そこへ行つた自分の殺害者に出遇つて、その男を改宗させては居るが、そのためにこの不快な事が全然ぬぐひ去られる事はない。

廊下の終りに黑い幕がかかつてゐて、そのうしろから叫び聲が聞える。それから黑幕の上の方に揭示があつて、平氣で向うまでこの祕密の場所を通りぬける事のできる人には褒美を出すと云ふ約束が書いてあつた。

『旦那、化け物はこの中に居ります』と金十郞は云つた。

私共は幕を上げて中へ入ると、そこは生垣の間の小徑のやうになつてゐた、それから生

垣のうしろに墓があつた、私共は墓地へ來て居るのであつた。本當の草や樹木があつた、それから卒塔婆もあり墓もあつたがその印象は全く自然であつた。その上屋根が甚だ高いのと、光線を巧みに鹽梅してそれを見えなくしてあるので、一切うす暗くなつてゐた、それてこれが人に夜、外に出て居る感じを與へた、その上空氣がつめたいので一層その感を深くした。それから處々に大概超人間的の高さの、氣味の惡い物が見えた、或物は暗い處て待つて居るやうで、又或物は墓の上に浮かんで居るやうであつた。すぐ私共の近くに右の方の生垣の上の方に、私共に背中を向けてずつと聳えて居る坊さんがゐた。

私は金十郎に尋ねた、『山法師かね』

『いや』金十郎は答へた、『背の高い事を御覽なさい。狸坊主にちがひないと思ひます』

狸坊主は日暮れてから未だ旅をして居る人を誘ひ込んで殺すために、狸が僧侶の姿に化けた物である。私共は進んでその顏を見上げた。見ると魘されるやうな顏であつた。

『全く狸坊主です』金十郎は云つた。『旦那樣はそれをどう御考ですか』

返事をしないで、私はとび退いた、その巨大な物は突然生垣の上へのり出して、呻き聲を上げて私につかみかかつたからであつた。それから搖ぎながら、軋る音をたててもとへ戻つた。見えない糸で操られるのであつた。

『金十郎さん、これはいやな恐ろしい物だと思ふね。……しかし褒美を要求する事は止めた』

私共は笑つた、それから進んで三目入道を見る事にした。三目入道も夜油断して居る人をさがして居る。顔は佛の顔のやうに柔和で微笑して居るが、剃髮した頭の頂上に恐ろしい眼がある、その眼を見たらためにならないと云ふ時に始めて分る眼である。この三目入道は金十郎につかみかかつてびつくりさせた、丁度狸坊主が私をびつくりさせたやうに。

それから山姥を見た。山姥は子供を取つて來て暫らく養つてから喰つてしまふ。顔には口がないが、頭の頂上の髮の下に口がある。この山姥は可愛い小さい男の子を今手にもつて喰べかけやうとしてゐたので、私共につかみかかる暇がなかつた。この子供の方は見物人の印象を強くするために特別に綺麗にしてあつた。

それから墓の上を大分離れて空中に浮かんで居るので、やや安心して見た女の幽靈があつた。眼はなかつた、長い髮は亂れて、白い着物は煙のやうに輕く浮いてゐた。私は私の生徒の一人が幽靈の事を作文に書いた一節を思ひだした、『一番大きな特色は足のない事である』それから私は又飛び退いた、その物は、全く音を立てずに、しかし甚だ急に空を横ぎつて私の方へ來たから。

それからあと葉の間の道中は同じやうな經驗の連續に過ぎなかつた、しかしそれが婦人の叫び聲や、自分等を驚かした物が外の人々にどんな効果を與へるか、見たいばかりにためらつて居る人々のふき出し笑のために面白くされた。

三

化け物に見切りをつけて、私共は二人の少女の踊りを見に小さい野外劇場へ行つた。しばらく踊つたあとで、一人の少女が劍を出して今一人の少女の首を切り落して、テイブルの上に置く、そこでその首が口を開けて、歌ひ出した。これは皆鮮やかにできたが、私の心は化け物で未だ一杯になつてゐた。それで私は金十郎に尋ねた、――

『金十郎さん、あの化け物の人形を私共が見たが、――人はあれが本當にあるものと信じて居るのでせうか』

『もう信じませんね』――金十郎は答へた、――『とにかくこの町の人の間では信ずる者はありません。田舍の方ではさうでないかも知れません。私共は佛樣を信じます、昔の神樣を信じます、それから死んだ人が殘酷な事を復讐に、或は正しい行を是非させるため

に、歸つて來る事を信ずる人も澤山ありさうです。しかし昔の人が信じたやうな事は悉く信ずると云ふ事はありません。……旦那」私共は別の妙な見世物の處へ來た時、附け加へて云つた、『旦那がおいやでなければ、地獄へ只一錢で行つて見られます……』

『宜しい』私は答へた。『二錢出して、二人で地獄へ行かう』

四

そこで幕のうしろへ行つて妙にカチカチキイキイ音のする大きな部屋へ入つた。この音はこの部屋の三方を取卷いて居る胸程の高さの、幅の廣い臺の上で澤山の人形を動かす車輪や滑車の音であつた。この人形は生人形でない、甚だ小さい人形――操人形であつた。それが地獄の一切の物を表はしてゐた。

私が見た第一の物は亡者の着物を取ると云ふ三途の川の婆であつた。着物はうしろの木にかけてあつた。婆は背が高く、碧い眼を廻して長い齒を嚙み鳴らしてゐたが、小さい白い亡者の震へるのは蝶の身震ひのやうであつた。向うに物凄くうなづいて居る閻魔大王が見えた。大王の右手には三脚架の上に『かぐ鼻』、『見る目』の證人達の首が車輪の上にて

も居るやうに廻つてゐた。左手には一人の鬼が一人の亡者を鋸でひき割つてゐたが、その鋸は日本の大工のやり方——卽ち押さないで引くやうに使つてゐた。それから亡者の苛責の色々の見世物があつた。うそつきは柱に縛られて——徐々に技巧的なぬき方で——鬼に舌をぬかれてゐたが、もうすでにその舌は亡者の體よりも長かつた。又一人の鬼は別の亡者を臼に入れて、如何にも强さうな力で搗いて居るので、その物音はこのからくりの響き以上に聞えた。少しさきの方で、一人の男が女の顏をした二匹の蛇に生きながら呑まれかかつてゐたが、一匹の蛇は白く、一匹は青かつた。白いのは妻で、青いのは妾であつた。中世の日本に知られてゐたあらゆる苛責拷問は別の處で大勢の鬼によつて巧みに實行されてゐた。それを見てから私共は賽の河原へ行つて子供を一人抱いて居る地藏を見た、それからその廻りには、一群の子供が、棍棒をふり上げ齒を鳴らして居る鬼共から逃げやうとして早く走つてゐた。

　しかし地獄は極端に寒い處であつた、それて私が地獄の雰圍氣のうちに處々不釣合な點のある事を考へて居る間に、地獄に關する普通の佛敎の繪本のうちには寒さの苛責の繪を一つも見ない事を思ひついた。實際印度の佛敎は氷の地獄の存在を敎へて居る。たとへば人の唇が氷るので『あゝたた』としか云へない——それであたたと呼ばれる地獄がある。

それから舌が來るので『あゝばば』としか云へないからあばばと呼ばれる地獄がある。それから大白蓮地獄がある、そこでは寒氣にさらされた骨は『白蓮の花の咲くやう』である。金十郎は日本の佛敎に氷の地獄がある筈だと思ふが、たしかには覺えないと云ふ。私は寒氣の考は日本人に非常に恐ろしい物になれるとは思はない。日本人は一般に、寒い事が好きである事を告白して居る、それから氷や雪の愛すべき事を漢詩などに作る。

五

地獄から出て、もつと大きい、それからずつともつと寒い建物にある幻燈の方へ行つた。日本の幻燈は殆んどいつでも、色々な點で興味があるが、西洋の發明を東洋趣味に適合させた日本人の天才を實際に見せて居る點で或は特別に興味があらう。日本の幻燈は全く劇的である。臺詞は見えない人物が述べる、役者と背景はただ明るい影になつて見えると云ふ芝居である。それて凡ての種類の妖怪變化の物に特に適して居るから幽靈の出る芝居は好題目になる。この小屋はひどく寒いので、私は一つ見るだけしか待てなかつた、――つぎはその梗概である、――

第一場。――甚だ綺麗な田舍娘とその老母がうちで一緒に坐つて居る。母は身を悶えて烈しく泣く。その盛んなすすり泣きの間からとぎれて聞える狂亂の言葉で察すると、娘はどこか山中の淋しい社の神樣に人身御供となる事にきまつて居る。その神樣は惡神である。一年に一回、その神樣が喰べるための少女が欲しいと云ふ合圖にどこか農家の藁屋根に矢を射る。少女をすぐに送らないと、神樣は收穫物や牛をなくしてしまふ。母は泣き叫んで、白髮をかきむしりながら退場。娘は頭を垂れて、やさしくあきらめたやうすで退場。

第二場。――道ばたの茶屋の前、櫻花滿開。人足が鳥籠のやうにしてその中に娘が居る筈の大きな箱をかついで來る。箱をおろして、飲食するために入る、おしやべりの主人に話をする。兩刀をさした立派な武士が入場。箱について尋ねる。おしやべりの主人は人足から聞いた話をくりかへす。武士は烈しい憤怒を表はして神樣は善良で、――少女を喰べる筈はないと斷言する。その所謂神樣は鬼であると宣言する。鬼は退治すべき物と云ふ。箱を開けと命ずる。娘をうちへ歸してやる。自分が代つて箱に入る、それから人足に、命が惜しければ、その社へ直ちに運べと命ずる。

第三場。——森を通つて夜、社へ人足が近づいて來る。人足は恐れる。箱を落して逃げる。人足退場。暗がりに箱だけ殘る。覆面した眞白の物入場。その物は氣味の惡いうなり聲を出し、恐ろしい叫び聲を發する。箱はやはりそのまま。その物覆面を取つてその顏を見せる、——光つた眼をした骸骨であつた。「見物は一時に『アアアアア』の音を立てる」その物はその手を出す、——大きな猿のやうな手で、鷲のやうな爪がある。「見物は又『アアアアア』と叫ぶ」その物は箱に近づく、それにさはる、箱を開く。勇ましい武士がとび出す。格鬪になる、太鼓が戰爭らしくどろどろと鳴る。勇ましい武士は柔術を巧みに使ふ。鬼を投げ倒し、蹈みつけて、首をはねる。首は不意に大きくなつて、家の大きさになる、武士の頭をかみ取らうとする。武士は刀でそれに斬りつける。首はうしろへころがつて、火を吹いて、消える。終り。一同退場。

六

武士と鬼のこのまぼろしは金十郎に一つ妙な話を思ひ出させた、それを幻燈がすむと同

時に語り出した。こんな見世物のあとでは、どんなに物凄い話でも平凡になり易い、しかし金十郎の話は、殆んどどんな場合にても、それを語るだけの價値がある程いつも奇拔な物である。それで私は寒さも忘れて熱心にそれを聞いた、——

『昔、昔、妖怪や女に化けた狐がこの國に出た頃、兩親と共に都へ來た武士の娘があつた、大層綺麗で見る程の男は皆心を奪はれた。それで數百人の若い侍が彼女と結婚する事を望んで、その兩親にこの事を申込んだ。日本では結婚は兩親によつて取りきめられるのが習慣であつたから。しかし凡ての習慣に例外がある、この少女の場合もそんな例外であつた。彼女の兩親は、娘に自分の夫を選ぶ事を許すつもりである事、それから彼女を得ようと思ふ者は彼女に直接申込む事勝手たるべき事を宣言した。

高位高官の人や大金持の人が澤山求婚者として、その家に入る事を許された、銘々その得意な方法で彼女の愛を得ようとした、——贈物をもつてする者、甘言をもつてする者、彼女を讚美する歌をもつてする者、永久に變らない誓約をもつてする者、色々であつた。銘々に彼女は程よく又見込みのありさうな返事をした、しかし彼女は妙な條件をもち出した。どの求婚者にも武士としての名譽の言葉に誓つて、彼女は固く約束させた、それは求

婚者が彼女に對する愛情の試驗をうけて、さてその試驗の如何なる物であるかは何人にも決して洩らさない事であつた。そこでこれには誰も異存はなかつた。

ところが最も自信のある求婚者でも試驗を受けてからは、突然その懇願を止めた、さうして皆、何か非常に恐怖した事があるらしかつた。實際その町から逃げ出して友人からどれ程歸る事を勸められても承知しない者も、僅かではなかつた。しかし何人もその理由を暗示するだけの事をした者もなかつた。それでその祕密を何にも知らない人々はその綺麗な少女は妖狐か鬼女かに違ひないとささやいてゐた。

さて、高位高官の求婚者達が皆その申込みを捨てた頃に、刀の外に何一つ財產のない武士が現れた。善良にして義に篤い、それから愛想のよい男であつた、女の方でも好きであつたらしい。それでも彼女はやはり外の人と同じやうに誓はせた、そのあとで或晩再び來て貰ふ事を約束した。

その晩になると、彼はその家でその少女だけに迎へられた。人手を借らないで自分ひとりで彼の前へ饗應の食膳を運んで接待した、それからおそくなつて一緒に出かけようと云つた。彼は喜んで承諾して、何處へ行きたいかと尋ねた。この問に對して彼女は何の答もしないで、突然默り込んで、やうすが變になつた。暫らくして彼女は彼をひとり置いてそ

の部屋から退いた。

眞夜中すぎて餘程たつてから漸く女は戻つた、幽靈のやうに眞白の裝束をして、一言も物を云はないで、彼女のあとから來るやうに合圖した。全市が眠つて居る間に家を出て二人は急いだ。所謂『朧月夜』であつた。いつもこんな夜に幽靈が出ると云はれる。女は足早に案内した、女が足早に通る時、犬が吠えた。町を離れて大きな樹の影になつて居る小さい丘のある場所に達した、そこには古い墓地があつた。そこへ女は――白い影が暗黑の中へ――すつと入つた。不思議に思ひながら彼は續いた、刀に手をかけながら。それから彼の眼はその暗黑に慣れて、そして見えて來た。

新しい墓の側で女は止まつて、彼に待つやうに合圖した。墓掘りの道具は未だそこに置いてあつた。それを一つ取つて女は不思議な早さと力で必死になつて掘り始めた。たうとう女の鍬が棺の蓋に當つてブーンと音がした、すぐ新しい白木の棺が露出した。蓋を破つて、その中の死骸――子供の死骸――を出した。お化けのやうな身振で死體の腕を一本もぎ取つて、二つに折つた。そこで坐つて、上の方の半分を喰べ出した。それからあと半分を彼女の愛人の前に投げて『私を愛するとおつしやるのなら、これをめし上れ、これが私の喰べ物です』と叫んだ。

ただ少しのためらひもなく、彼は墓の向側に坐つて、腕の半分を喰べた、それから『結構、どうかもう少し下さい』と云つた。その腕は京都製の最上等の菓子でできたものであつたから。

その時少女はふき出して跳び上つて叫んだ、『私の勇敢な求婚者のうち、逃げ出さない者はあなただけでした。私は恐れない夫がほしかつた。私あなたとなら結婚します、あなたなら愛します、あなたこそ男です』

七

あゝ、金十郎さん』私は歸るみちすがら云つた、『私はこれまで死人が歸つて來る日本の話を澤山讀んだり聞いたりして居る。それから君自身からも、死人が歸ると云ふ事が今でも信じられて居る事實とその理由を聞いて居るが、讀んだ事と、君から聞いたところから考へると、死人の歸つて來るのは望ましい事ではない。つまり憎いから、妬ましいから、或は悲しくて落ちつけないから歸つて來る。しかし惡意でなく歸つて來る話は――どこかに書いてないかね。實際そんな話は普通恐ろしい事や無道な事ばかりで綺麗な事や眞

面目な事は何にもない』

さてこんな事を云つたのは、彼を誘ひ出すためであつた。そこて私がこれから書く話をしてくれたから丁度私の注文通りの返事をしてくれた事になる、――

『昔、何とか名前は忘れたが或大名の時分にこの昔からの町に大層仲の好い男と女がありました。名前は殘つてゐませんが話は殘つてゐます。小さい時から許嫁になつてゐました、そして双方の兩親は隣り同志でしたから、子供の時に一緒に遊びました。そして大きくなるに隨つてお互にいつも益〻好きになるばかりでした。

『男の方が一人前にならないうちに、兩親がなくなりました。しかし彼は、高い身分の役人てこの青年のうちの友人である富有な武士に仕へる事ができました。そしてこの保護者はすぐに彼を引立てて、禮儀正しく、賢く、そして武術にすぐれるやうに世話をしました。それてこの青年は自分の許嫁と結婚のできるやうな地位にぢきに達せられさうに思はれました。ところが北と東に戰爭が起つたので、彼は突然主人に隨つて戰場に赴くやうに召集されました。しかし出發の前に女に逢ふ事ができました、そして女の兩親の前で誓約を取交（かは）しました、そして生きてゐたら、その日から一年以内に結婚するために許嫁の處へ

歸つて來る事を約束しました。

行つてから餘程になりましたが、戰地から便りがありません、今日のやうな郵便がその當時なかつたからでした、女の方で戰爭の運と云ふ事ばかり大層心配しましたので、そのあげくすつかりやせて血色がなくなつて弱りました。それからやうやく軍隊の方から大名の方へ來た使から男の噂を聞きました、それからもう一度別の使から手紙が屆きました。それからさき何の沙汰もありません。待つ身になると一年は長いものです。その一年は過ぎましたが、彼は歸つて參りませんでした。

『いくつかの季節が過ぎましたが、歸つて參りません、それで女は男を死んだものと思ひ込みました、それで病氣になつて、床について、死んで、葬られました。外に子供のない年老いた兩親は大層悲しんで、うちが淋しくなつたので嫌ひになりました。暫らくして二人は持つてゐる物を皆賣拂つて千箇寺に出ようと決心しました。日蓮宗の千箇寺をするには長年かかります。それで小さい家と、家の中の物を一切賣拂ひました。先祖の位牌と、賣つてはならない聖い物と、葬られた娘の位牌だけは別にして旦那寺に預けて行きました、さうするのが、鄕里を去る人々の習慣です。このうちは日蓮宗でお寺は妙高寺でした。

兩親が旅に出てから四日しかたたない日に、娘の許嫁が歸つて參りました。主人の許し

を得て、約束を果す事を工夫してゐたのです。しかし途中の國々は到る處戰爭で通りや峠は軍勢で固められてゐました、それで色々の難儀で歸りが長引いたのです。それから自分の不幸を聞いて悲しみの餘り病氣になりました、そして死にかけて居る人のやうに、長い間人事不省になつてゐました。

「しかし力が出て來ると、色々の苦しい記憶が又歸つて來て、自分も死ななかつた事を殘念に思ひました。それから許嫁の墓の前で自害しようと決心しました、それから人に見られないやうになるとすぐに、刀を取つて少女の葬られた墓地へ參りました。そこの妙高寺の墓地は淋しい場所です。そこで女の墓を見つけて、その前に跪いて、祈りかつ泣いて、これから自害する事を彼女にささやきました。すると不意に彼は女の聲が「あなた」と叫んで、女の手が彼の手に觸れるのを感じました、そこでふり向いて見ると彼のわきに彼女がニコニコして跪いて居るのを見ましたが、昔通り綺麗で、只少し色が青ざめて居るだけでした。その時彼の心臟は躍つて、今の不思議と疑ひと嬉しさで言葉が出ませんでした。ところが、女は云ひました『疑がつちやいけません、本當に私です。私死んだのではありません。皆間違です。私死んだと思はれて葬られましたの――早まつて葬られましたの。それで兩親も私を死んだものと早合點して巡禮に出ちまつたのです。でも御覽の通り私死

んぢやゐません、――幽靈ぢやありません。私です、疑がつちやいやですよ。そして私、あなたの心、よく分りました、それて苦しんて待つてゐたかひがありました。……とにかく、さあ、すぐに外の町へ行きませう、さうしないと人がこの事を聞きつけてうるさいから、皆私を未だ死んだ者と思つてゐますからね』

『それで二人は誰にも見られないで、出かけました。そして甲斐國身延村までも出かけました。そこに日蓮宗の名高いお寺があるからです。女はかねて申しました、「私の兩親がきつと巡禮の間に身延に參詣なさると思ひますから、そこに居ると見つかつて皆又一緒になれます」そこで身延に來てから女は「小さい店を開きませう」と申しました。そこで聖い場所へ行く廣い道て、小さい喰べ物店を開いて、子供等のために菓子やおもちやを賣り、巡禮のために食物を賣りました。二年の間そんなにして暮らしましたが店は繁昌しました、それから男の子が一人生れました。

『ところて子供が一年と二ヶ月になつた時、妻の兩親が巡禮の道すがら身延に參りました、そして食物を買ひに小さい店に立寄つて、そこで娘の許嫁を見て、驚き叫んて、泣いて、色々の事を尋ねました。それから男は兩親に入つて貰つて、二人の前てお辭儀をして、から云つて二人を驚かせました「實はお孃さんは死んぢやゐません、今私の妻になつてゐ

ます、そして私共の間にむすこがあります。どうか行つて喜ばせてやつて下さい、もうかねがねお遇ひする時を待つてゐましたから」

「子供はゐましたが、母の方は見えません。ほんの一寸出かけたやうで、枕が未だ暖かでした。長い間待つてゐました、それからさがし始めましたが、どうしても分りません。

『それから、母と子供を蔽うてあつた蒲團の下に、以前妙高寺に預けて置いた覺えのある物——死んだ娘の位牌——を發見した時に始めて、彼等はさとりました』

話がすんでから、私は考込んだやうに見えたに相違ない、それは老人は、かう云つたから、——

『多分、旦那はこの話をばかばかしいとお考へなさるでせう』

『いや、金十郎さん、この話は私の胸にこたへました』

第二十六章　日本人の微笑

一

世界及びその珍奇な事に關する考を重に小說や傳奇で定める人々は、今でも、東洋は西洋よりも眞面目であると云ふ信仰を何となしに抱いて居る。もう少し高い立脚地から物事を判斷する人々はそれに反して、現在の狀況では、西洋は東洋よりも眞面目である筈だと云ふ、それから眞面目くさつて居る事でも、又その反對らしい事でも、ただ流行として存し得る物だと云ふ。しかし事實は、この事に關して、凡て外の問題に於けると同じく、人類のどちらの半分にも應用のできるやうな正確な規則は作られない。科學的には、今の處どうしてそんな物が出て來るか、その非常に複雜な原因を滿足に說明しようと思はないでただ一般にその對照をなせる結果だけを研究するより外はない。特別に興味のあるこんな對照を示せる一事は英人と日本人とによつて提供された物である。

英國人は眞面目な人種、表面ばかり眞面目でなく、人種性格の根柢まで眞面目であると云ふのが普通である。それと同じく、英國人程眞面目でない人種と比べても、日本人は表面からも根柢からも甚だ眞面目とは云へないと云ふ事も殆んど間違ひはない。それから少くとも眞面目でないと同じ程度に、日本人はもつと氣樂である、日本人は恐らくやはり文明世界に於て、最も氣樂な人種である。私共西洋の眞面目な者は自分で氣樂だとは云へない。實際私共はどれ程眞面目だか充分知らない、そして産業生活のたえず増大する壓迫のために、どれ程益々眞面目になりさうだか分つて見れば、恐らく驚かずには居られないだらう。私共の氣分を最もよく知る事のできるのは私共程しかつめらしくない人種の間に長く生活するに限るやうだ。私は日本内地に三年近く住んだあとで開港場の神戸で數日間英國流の生活に歸つた時、この確信が甚だ強く私に起つた。もう一度英國人の話す英語を聞いてとてもありさうにない程の感動を受けた、しかしこの感情はほんの暫らく續いただけてあつた。私の目的は或必要な買物をする事であつた。私のつれの日本の友人があつた、その人に取つては凡て外國風の生活は、全く新しい不思議な物であつた、そしてその人は私にこんな奇妙な質問をした、『どうしてあの外國人は笑はないのでせう、あなたはあの人達に物を云ふ時、にこにこしてお辭儀をなさるが、あの人達はにこつともしない。何故

てせう』

實際私は全く日本人の風俗習慣になつてしまつて、西洋風と離れてゐたのであつた、そして私の友人の質問によつて始めて私はよほど妙な事をやつて居る事に氣がついた。それが又二つの人種の間の相互の了解の困難な事のよい例だと思はれた、銘々が他の人種の習慣や動機を自分の習慣や動機で判斷するのは如何にも自然だが又如何にも誤り易いから。日本人は英國人のしかつべらしい事で困れば、英國人も又とにかく日本人の輕薄な事で困るのである。日本人は外國人の『顔が怒つて』居る事を云ふ。外國人は日本人のにこにこ顔をひどく輕蔑して云ふ、彼等はそれが不眞面目を表はして居ると疑ふ、實際不眞面目以外の意味はないと公言する者もある。只少數のもつと注意深い人は研究の價値ある謎であると認めて居る。私の横濱の友人の一人は、極めて愛すべき人で、東洋の各開港場で半生以上をすごした人だが、私の內地に出發する丁度前に私に云つた、『君は日本人の生活を研究するのだから、多分僕のために一つ發見する事ができよう。僕は日本人のにこにこ顔が分らない。澤山經驗はあるが一つ云つて見よう。僕が或日山の手から馬に乘つて下りて來た時、僕はその曲り道の間違つた側から登つて來る空車を見た。馬を引き止めようとしても丁度間に合はなかつたらう、しかし大した危險もないと思つて止めて見もしなかつた。

僕はただあちら側へ行くやうにと日本語でその車夫にどなつた、ところがその車夫はさうはしないで只曲り道の低い方にある塀に車をよせて梶棒を外側へむけた。僕の乘つて居る速さでは横道によける間がなかつた、それて直ぐそのつぎに車の梶棒が一つ馬の肩にあつた。車夫は少しも怪我はしなかつた。僕は馬が出血して居る樣子を見てムラムラとして、僕の鞭の太い方の端でその男の頭の上からなぐりつけた。その男は僕の顏を眞面目に見てにつこり笑つて、それからお辭儀をした。そのにつこりが今でも見える。僕はたたきつけられたやうな氣がした。そのにこにこて僕はすつかり參つてしまつて、怒りがすぐに飛んて行つてしまつた。全く、それは丁寧なにこにこであつた。しかし何の意味だつたらう。一體全體あの男はどんなわけて笑つたのだらう。それが分らない』

私もその當時分らなかつた、しかしその後もつと遙かに分らない微笑の意味が私に分つて來た。日本人は死に面して微笑する事ができる。そして事實いつも微笑する。しかしその時微笑するのも、その外の場合に微笑するのも同じ理由てある。その微笑には輕侮や僞善はない、又弱い性格と聯想されがちの病的あきらめの微笑と混雜してはならない。それは念入りの、長い間に養成された禮法てある。それは沈默の言語てある。しかし人相上の表情に關する西洋風の考からそれを解釋しようと試みるのは、漢字を普通の事物の形に實

際似て居る、又は似て居ると想像する事で解釋しようとするのと殆んど同じく成功しさうにない。

第一印象は重に本能的であるから學術的に幾分信ずべき物と認められて居る、そして日本人の微笑によつて起される第一印象それ自身は事實大してまちがつてゐない。外國人は日本人の顔の大概嬉しさうな、にこにこした特色に氣がつかない事はない。そしてこの第一印象は大概非常に愉快である。日本人の微笑は初めのうちは人を喜ばせる。人が始めて疑ふやうになるのはもつとあとの事で、格段な場合、卽ち苦痛、恥辱、失望の場合に、それと同じ微笑を見るに到つた時である。その微笑の一見不適當な事が時として烈しい怒りを起させる事になる。實際外國の居留民と日本人の從者との間の悶着の多數は、この微笑の故である。よい從者は眞面目くさつて居るべきだと云ふ英國の傳說を信じて居る人は、皆彼の「ボーイ」のこの微笑を辛抱して居られさうにはない。しかし現今西洋の風變りなこの特別の點は追々日本人にもよく認められるやうになつて來た、そして普通の英語を話す外國人は微笑を好まないで、とかくそれを侮辱的だと考へ勝ちである事を知るやうになつて來た、それだから開港場に於ける日本の使用人は大概微笑しなくなつた、そして無愛相な風を裝うて居る。

今ここで横濱の或婦人がその日本の女中の一人について物語つた妙な話を思ひ出した。『私の日本人の乳母が先日何か大變面白い事でもあつたやうににこにこしながら私の處へ來て、夫が死んで葬式に行きたいから許してくれと云つて來ました。私は行つてお出でと云ひました。火葬にしたやうです。ところで晩になつて歸つて來て、遺骨の入つた瓶を見せました、（そのうちに齒が一本見えました）、そして「これが私の夫ですよ」と云ひました。そしてさう云つた時實際聲を上げて笑ひました。こんな厭な人間をあなた聞いた事ありますか』

彼女の召使の態度は不人情であるどころでなく、烈女的であつたのかも知れない、そして甚だ感動すべき說明ができたのかも知れない事を、この話をした婦人に納得させる事は全く不可能であつたらう。淺薄皮相でない人でもこんな場合には表面だけで誤られ易い。しかし開港場の外國居留者の多數は全く淺薄皮相の徒である、そして敵となつて批評する以外には彼等の周圍の人生の表面を離れて見ようとは少しもしない。私に車夫の話をした橫濱の友人の考はそれと違つて居る、この人は表面で物を判斷する事の誤りを認めた。

二

日本人の微笑を誤解した事が度々甚だしく不快な結果を來して居る、たとへば以前横濱の商人であつたT――の場合に起つたやうな。T――は何かの資格で（幾分日本語の教師としてと私は思ふ）立派な老さむらひを雇入れた、その人はその時代の習慣としてまげを結うて大小をさしてゐた。今日でも英人と日本人とは、相互に甚だよく理解して居るとは云へない、しかし今話した時代には一層理解が少かつた。初めのうち日本の召使は丁度えらい日本人に使へるやうなやり方をした、[註一] そしてこの無邪氣な誤りは澤山の侮辱と殘忍を招くに至つた。最後に日本人を西印度の黒奴のやうに待遇する事は甚だ危險である事が發見された。幾人かの外國人は殺されて、よい道德上の效果があつた。

註一。讀者はミス・ベーコンの『日本の少女と婦人』のうち、『奉公』と題する一章を參考されるとよい、それには男女の召使に關するこの問題の面白い、又正しい説明がある。しかし詩的方面は取扱つてない、――クリスト教的見地から書いて居る人は同情しては書けないやうな宗教的信仰と非常に關係して居るからであらう。昔の奉公は宗教てよつて形を變へると共に調節された、それに關する宗教的情操の力は、今

しかしこれは脇道である。T――はこの老さむらひが中々氣に入つた、もつともその東洋風の禮儀、その平身低頭、それから全くT――にはちんぷんかんである微妙な丁寧さで時々もつて來てくれる小さい贈物の意味は全く分らなかつた。或日老人はお願があると云つて來た。（私はその日は大晦日の晩であつたと思ふ、その日にはここに書いて居られない理由で誰でも金が要る時だから）その願は老人の大小のうち大の方を抵當にして金を少し貸して貰ひたいと云ふのであつた。それは甚だ綺麗な武器であつた、そしてその商人にもやはり甚だ貴重である事が分つたので直ちにそれだけの金を貸した。數週後に老人はその刀を取り戻す事ができた。

それから起つた不快の初まりは何であつたか今誰も覺えてゐない。多分T――の神經は狂つたのであらう。とにかく或日彼は老人に對して非常に怒り出した、老人は彼の憤怒の表情に對してお辭儀と微笑を以て服してゐた。これが彼をして一層怒らせた、そして彼は極端な罵倒を浴せた、しかし老人はやはりお辭儀をして、微笑してゐた、それで老人はその家を去る事を命ぜられた。しかし老人は引續いて微笑してゐた、そこでT――はすつか

り自省の力を失つて老人をなぐつた。そしてその時T――は突然恐ろしくなつた、と云ふのは長い刀は不意に鞘を離れて、自分の頭上を渦卷いて、そして老人は老人とは思はれなくなつたからであつた。ところで、その使用法を知つて居る人の手にかかつたら、兩手で扱はれる剃刀のやうな日本刀の刄は、極めて無造作に人の頭をはねる事ができる。しかしT――の驚いた事には、その老さむらひは殆んど同時に熟練なる劍士の素早さでその刀身を鞘に納めて、踵をかへして、退いた。

それからT――は不思議に思つて、坐り込んで考へた。彼は老人に關する色々の良い事、賴みもしないのにしてくれたが返禮もしてやらなかつた澤山の親切な行爲、珍らしい小さい贈物、非難の餘地なき正直さ、を思ひ出して來た。T――は恥づかしくなつて來た。彼はかう考へて自分で慰めようとした、『まあいゝ、あれが惡いんだ、おれが怒つて居る事を知つてゐておれを笑ふやつがあるものか』實際T――は機會のあり次第埋合せをしようとさへ決心してゐた。

しかしその機會は決して來なかつた、何故なれば丁度その晩老人はさむらひ風に切腹を

したから。老人はその理由を説明した甚だ見事に書いた手紙を遺した。さむらひとしては無法な打擲を受けて復讐しない事は忍ぶべからざる屈辱である。彼はそんな打擲を受けた。外の場合ならそれに對して復讐する事もできたらう。しかし今度の場合では事情は餘程奇態な物であつた。老人の名譽に關する道徳法は、一度必要に迫られて金錢のためにその刀を抵當にしたその人に對して、それを使用する事を許さない。そこでその理由から刀を使用する事ができないとすれば、老人にとつては二つのうち、ただ名譽ある自殺の一法が殘つて居るだけであつた。

　この話を餘り不快な物としないために、讀者は、T――は甚だ遺憾に思つて、老人の遺族に對し金錢上の助力を充分にした事を想像してもよい。しかし何故老人は侮辱と悲劇の原因となつたあの微笑をしたか、その理由をT――が考へる事ができたと讀者は想像してはならない。

三

日本人の微笑を會得するためには、少し日本の古い、自然の、民衆生活に入る事ができなければならない。近代化した上流社會からは學ぶべき物は何にもない。高等教育の結果によつて人種的相違の深い意義は毎日一層深く説明されるのである。高等教育は感情の融和にはならないで、かへつて東西洋の間の疎隔を一層深くするだけのやうに思はれる。外人の中には、高等教育は或潜伏した特色——殊に一般人民の間には殆んど認められない隱れた唯物主義——を非常に擴大する事になるので、さうなると云ふ人もある。この説明には私は充分同意できないが、とにかくこの事だけは否定できない。卽ち西洋風に高い教育を受ければ受ける程、その日本人は心理的に私共と遠ざかつて行くと云ふ事である。新しい教育を受けると、その性格は妙に冷酷な物に、そして西洋事物の觀察はとにかく妙に不透明な物に、結晶するらしい。情緒的には、日本の子供の方が日本の數學者よりも、農夫の方が政治家よりも、はるかに私共に近いやうである。全く近代化した日本人の最も高い階級と西洋の思想家との間には智力的同情らしい物は成立しない、日本人側ではただ冷たた

いそして完全な禮儀となつて居る。外の國々では高尙な情緒を發達させるために最も有力な物と思はれる物は、ここではそれを抑壓するのに非常な效果のある物らしい。外國では私共は情緒的敏感と智力的博大とを聯想する事に慣れて居るが、この規則を日本に應用する事は悲しむべき誤であらう。普通の學校に於ける外國教師でも、年々、その生徒が、級から級へと進む毎に、自分から離れて行く事を感ずる、色々の高い程度の學校では、この離れ方は一層早くなつて、卒業に近い學生は教授に取つてはただ偶然の知り合ひ同樣になる。この謎は、或は幾分は、科學的說明を要する心理上の問題である。しかしその解決は第一に人生及び想像に關する祖先以來の習慣に求められねばならない。その自然の原因が理解される時に始めて、この問題が充分に論ぜられるが、これは、簡單ではないと思はれる。或人は論じて、日本の高等教育は、高尙なる情緒を西洋の程度に刺激する力が未だないから、その開發力は一樣に又賢明に發揮されてゐないで、ただ、特別の方向にのみ向けられるから、性格の方面で損失を免れないと云ふ。しかしこの論には性格は教育によつて造り出されると云ふ許容し難い假說が入つて居る、そして如何なる制度の教育によるよりも、以前から存する性癖嗜好を利用する機會を與へた方が最良の結果を得られると云ふ事實を無視して居る。

この現象の原因は、人種性格に求められねばならない、そして高等教育が遠き將來に於て如何なる結果を生ずるにしても、元來の性質を改造する物とは期待されない。しかし現在に於て或よい方の傾向を萎縮させる事になつてゐないだらうか。私は必ずさうなつて居ると思ふ、その單なる理由は、現在の狀況では高等教育の要求によつて道德的精神的の力が過重の負擔を課されるからである。古への社會的道德的、或は宗教的精神主義の方へ向けられた義務、忍耐、犧牲の驚くべき國民性は悉く、高等教育の訓練のために、その全部の活動を要求するのみならず、さらに疲勞させる或目的の方へ集中されねばならない。その目的通りを苟くも果すためには、西洋の學生が滅多に出遇はないそして容易に理解のできないやうな困難に面してから、漸くその目的は果されるのである。古い日本人の性格を感嘆すべき物としたそれ等の德性は、今日の日本學生をして、世界に於て最も堅忍不拔な、最も從順な、最も大望のある者とならしめた物とたしかに同一の德性である。しかしその德性は、同時に日本學生をして本來の力以上の努力をさせて、その結果往々精神的道德的衰弱を來たさせる。この國民は過度の智力的緊張の時期に蹈み込んで居る。意識してか或は無意識にか、不意の必要に迫られて、日本は精神的膨脹を現在の最高標準まで無理に押上げると云ふ恐ろしい仕事を正にやり出した、そしてこれは神經系統を無理に發達させよ

うとする事になる。僅か數代のうちに、望み通りの智力的變化を仕遂げようとする事は、恐るべき損害なしには決して行はれない生理的變化を必ず起させる。換言すれば、日本の計畫は多大に過ぎる、しかし現在の事情では、それよりも小さい計畫をする事はできなかつたらう。幸にして日本の貧困者中の最も貧困者の間にても、政府の教育方針は驚くべき熱心を以て助けられて居る、國民全體は學問に熱中して居る、その熱心の程度はこの小さい論文でこの適當な概念を傳へる事はできない程である。それでも私は一つ感動すべき例を書かう。一八九一（明治二十四年）の恐ろしい地震のすぐあとで、岐阜愛知の破壞された都市の兒童は、名狀のできない恐怖と災禍に取卷かれて、寒い、飢ゑた、家もない時でも、石板の代りに彼自身の燃えた家の瓦を使ひ、石筆の代りに針金のちぎれを使つて、大地が未だ足の下で動いて居る間でも[註二]、やはり彼等の小さい勉學を續けた。こんな事實が表はす意志の驚くべき力から將來どんな奇蹟が正しく期待される事であらう。

註二。次第に回數と强さを減じたのではあるが、この地震は、その大災害ののち六ケ月續いた。

しかし高等教育の結果は今の處全然好結果を來してゐない事は事實である。古風の日本人の間には、如何に感嘆しても及ばない程の禮讓と、無私と、純粹なる善良から來る品位

とを見る。新時代の現代化した人々のうちにはこれ等のものは殆んど見られない。淺薄な懷疑の平凡と模倣の野卑以上に脫する事もできないで、古い時代と古い習慣を罵倒する青年の一階級を人はよく見る。彼等が祖先から遺傳した筈の高尙な、そして愛すべき性質はどうなつたのであらう。その性質の最上の物は形を變へてただの努力、――性格を消耗しつくして、重さもなく釣合も取れない物にしてしまつた程、そんなに法外な努力だけになつた事はあり得べき事であらうか。

西洋と東洋の人種的感情及び情緒的表情に於ける或外面的相違の意味をさがさねばならぬところは、未だ流れ動く自然の平民社會の狀態に存するのである。生、愛、及び死に對して同じく微笑するそれ等の溫和な、親切な、心のやさしい人々と、單純な自然物に對して感情の交りを樂しむ事ができるのである、そして親しみと同情とによつて彼等の微笑の理由を知る事ができる。

日本の子供は生れながらにしてこの傾向をもつて居る、そしてこの傾向は家庭敎育の凡ての時期を通じて養成される。しかしそれは庭樹の自然の傾向を養成して行く時に示されると同じ程度の綿密さで養成される。微笑はお辭儀と同じく、平身低頭と同じく、長上に

對する挨拶のつぎに喜悅のしるしとして息を少しすつと吸ひ込む事と同じく、凡て古への禮儀の細密なそして美はしい作法と同じく、敎へられる。明かな道理て高笑は奬勵されない。しかし微笑は長上に或は同輩に話しかける時、凡て愉快な場合に用ひられる、そして愉快でない場合にも用ひられる、それは行儀の一部分である。最も愉快な顏はにこにこした顏である、そしてできるだけ最も愉快な顏を兩親、親戚、敎師、友人、好意を有せる人々に示すのは生活の法則である。そしてその上たえず外界に幸福の態度を表はし、他人にできる限りの愉快な印象を與へるのは、生活の法則である。たとへ胸の張り裂ける場合でも、勇敢に微笑するのは社會的義務である。それに反してしかつべらしく不機嫌な顏をするのは無禮である、これは私共を愛する人々に心配や苦痛を與へる事になるから、同時に又愚な事である、私共を愛しない人々の方て不親切な好奇心を起させる事になるから。幼年時代から義務として養成されて居るから微笑はやがて本能的になる。最も貧しい農夫の心にも、自分だけの悲しみ苦しみ或は怒りを表はす事は餘り役に立たない。そしていつても不親切であると云ふ自信が生きて居る。それ故他の國に於けると同じく日本に於ても自然の悲歎に自然の出口がなければならないが、長上や客の面前に於て抑制なしに涙を流す事は無禮である、そして如何に無學な田舍女でも、そんな場合に神經が負けてしまつたあ

とていつもきまつて始めに云ふ言葉は『實に我儘勝手で失禮致しました、お赦し下さい』である。その微笑の理由はただ道德的であるだけではない事も又注意すべきである、それは或程度まで美的である、ギリシャ美術に於て苦痛の表情を調整したと同じ思想を幾分表はして居る。しかし美的であるよりも道德的である方が遙かに多い、それについてやがて述べる。

この微笑の第一の作法から第二の作法が發達して來て居る、それを守る事が外國人をして屢々日本人の感受性に關して最も殘酷な誤解を抱かしむるやうになつたのである。痛ましき又は恐るべき事を云ふべき場合に、その話はその苦しみ恐ろしさを受けた人によつて微笑[註三]しながら話されるのが日本の習慣である。その問題が重大であればある程その微笑は重大になる、そしてその事がそれを話す人に甚だ不快な時にはその微笑はよく低い穩やかな笑ひ聲に變る。初生兒を失つた母が葬式の時どれ程烈しく泣いたとしても、奉公に出て居る場合ならその不幸を話す時には多分微笑をもつてするであらう、傳道者[譯者註一]のやうに泣く時あり笑ふ時ありと彼女は思うて居る。人々が愛してゐたと信ぜられる者のこの頃歿くなつた事を、その人々が私に笑つて話す事のできる事が私自身にも中々了解できなかつた。しかしその笑は克己の極端まで進んだ禮儀であつた。かう云ふ意味である、『これはあな

たは不幸な事件とお考になるでせうが、どうかそんなつまらない事に御心を惱まさないで下さい、そして一體止むを得ずこんな事を云つて、禮儀を破る事になつた事をお赦し下さい』

註三。勿論同情する方からは、その反對になるのがきまりである。即ちこちらは悲しい表情で對せねばならない。

最も理解のできない微笑の祕密の鍵は日本人の禮儀正しさである。過失のために解雇を宣告された從者は平伏してそして微笑して容赦を願ふ。その微笑は無感覺や無禮の正反對である、『はい、たしかに御宣告の正しい事に私滿足して居ります、そして私の過失の大きい事が今よく分りました。しかし私の悲しみと必要から無理な我儘な御願を申し上げて實に失禮とは存じますが御勘辨を御願する事を御赦し頂きたい』子供らしい涙を流す年齡以上に達した少年少女は何かの過失のために罰せられた時には微笑してその罰を受ける、その微笑はこんな意味である『私の心に何の惡感情も起りません、私の過失はもつとひどい罰を受ける價値があります』そして私の横濱の友人の鞭で打たれた車夫は同じ道理で微笑したのであつた、それを私の友人が直覺したに相違ない、その微笑は直ちに彼を和らげたから。『私は大層惡かつた、それであなたの怒りは當然です、私は打たれる價値があり

ます、それだから惡感情は抱きません』
しかし如何に貧しい身分の卑しい日本人でも無理の前には從順でない事も理解して置くべきである。彼の表面の柔順性は重に彼の道德觀念から起つて居る。戲れに日本人をなくつて見る外國人は當然重大なる過失をした事に氣がつくだらう。日本人は愚弄さるべきでない、そして日本人を愚弄しようと亂暴にも試みた人て、そのつまらない生命をなくした者は幾人もある。
以上の說明をしたあとでも、日本の乳母の事件は未だ不可解に見えるやうだ、しかしこれは話した人がこの場合或事實を削除したか、或は見逃したからだと私は信ずる。その話の前半は完全によく分る。夫の死を報告する時その若い召使はすでに云つた日本の形式に隨つて微笑した。全く信じ難い事は、彼女が自ら進んでその瓶卽ち骨壺にある物を彼女の女主人に見せようとしたなどと云ふ事である。彼女の夫の死を報告するのに微笑を以てする程日本の禮儀を心得て居るのなら、こんな過ちを犯すに到らないだけの心得がたしかにあつた筈である。實際の命令であつたか、命ぜられたと想像したか、それに隨つて始めてその骨壺とその中にある物とを示したのであらう、そしてさうする時彼女は苦しい義務を止むを得ず行ふ時か、或は苦しい陳述をせん方なく發言する時、それに伴ふ低い柔かな笑

を發した事は如何にもありさうである。私自身の意見では彼女は徒らな好奇心を滿足させねばならなくなつたのであらう。彼女の微笑或は笑はこんな意味であつたらう『つまらぬ私のために御心を痛めないで下さい、たとへ御求めであつても、私の悲しみのやうなそんなつまらぬ事を申し上げるのは本當に甚だ失禮でございます』

譯者註一。舊約聖書（傳道の書）（ダビデの子、エルサレムの王、傳道者の言）第三章第四章の文句。

四

しかし日本人の微笑を、永久に魂の假面としてついて居る『冷笑』の一種と想像してはならない。行狀に關するその他の事と同じく、社會の種々の階級と共に變化する作法によつてこの微笑も加減されて居る。一般に、昔の武士は凡ての場合に微笑して居ると云ふわけには行かなかつた、長上及び近親に對するために愛嬌を保留して置いた、そして目下に對しては、嚴しき無口を守つてゐたやうに思はれる。神官のいかめしい事は誰も知つて居る、それから數百年間孔子の敎の嚴肅なる事は種々の役人の儀容禮節によく見えてゐた。昔から貴族は更に一層の無口を裝うてゐた。そして位に伴ふいかめしさは次第に階級の上

位に達する程濃厚になつて、遂に、何人も見てはならない天子樣の畏れ多い周圍の處まで達してゐた。しかし私的生活に於ては如何に高位の人の行狀にもそれぞれ愛想のよいくつろぎがあつた、そして今日でも、お話しにならぬ程近代化して居る人の多少の例外はあるが、貴族、判事、高僧、尊い大臣、將校、何れも勤めの合間に、家では古への丁寧な愛すべき風習に歸るのである。

會話を明るくする微笑は、それ自身ではその丁寧な禮儀の一箇條に過ぎない、しかしその微笑が表はして居る精神はたしかにその大部分をなして居る。讀者がもし凡ての點に於て眞に日本人であり、又その性格は新しい利己主義と外國の影響とに感化されないで居る教養ある日本人の友人をもつてゐたら、讀者は多分その友人から全日本の社會的特性、その友人の場合に於て美妙に強くなり又磨かれた特性、を學ぶ事を得よう。讀者はその友人は、きまつて、自分の事は決して云はない事、そして細かい個人的質問に對して、感謝の丁寧なお辭儀と共にできるだけ曖昧に、できるだけ簡單に答へる事を認めよう。しかし、それに反して、君については澤山の質問をするであらう、君の意見、君の考、君の日常生活の些細なる話までも、その友人に取つては深い興味があるやうに見える、そして君はその友人が君に關して聞いた事は何事も忘れない事に氣のつく場合が多分あらう。しかし彼

の親切な好奇心にも又彼の注意にさへも、或嚴重な境がある、彼は不快な、或は痛ましい事に決して云ひ及ぶ事はない、そしてもし君に風變りな處や或は一寸した弱點などあれば、そんな事は見ないふりをするてあらう。君の前て君を賞める事は決してしない、しかし嘲つたり批評がましい事は決してしない。實際君は彼が決して人を批評する事はしない、只結果に表はれた行爲だけを批評する事が分る。個人的助言者として、彼は自分の賛成しない計畫を直接に批評する事さへしない、ただ何かこんなやうな用心深い言葉て新しい計畫を云つて見る方である、『こんな風にする方が或は君の直接の利益にかへつてなりはしないだらうか』他人の事を餘儀なく云ふ時は、彼はその人の事を一枚の繪をつくる程に充分に特色のある事件を引出して結び合せて、不思議にもつて廻つた風に云ひ及ぶ。しかしその場合に、話された事件は殆んど必ず人の興味をひいて好もしい印象を起す性質の物てある。話を傳へるこの間接の方法は眞に孔子の方法てある。『たとへ信じて疑はなくとも、自分の云ふ事を自分の意見らしく見えないやうにせよ』と禮記（譯者註二）に出て居る。それから君はその友人に、それを理解するには支那の古代文學の多少の知識を要するやうなその外澤山社會的特性のあるのに氣がつく事は充分ありさうである。しかし彼の他人に對する丁寧なる思慮と念入りに自我を征服して居る事を君が知るためには別にそんな知識も必要てない。

他の如何なる文明人種の間にも、日本人の間に於ける程、人生の幸福の祕訣がそれ程充分に會得されて居る處はない、人生に於ける私共の幸福は私共の周圍の人々の幸福如何によらねばならない、隨つて私共の心に無我と忍耐の修養如何によらねばならないと云ふ眞理が如何なる人種に於てもそれ程博く理解されて居る處はない。その理由によつて、日本の社會には、諷刺、反語、殘酷な機智を弄すると云ふ事はない。上品な社會にはそれ等は存在しないと云ふ事も大方てきよう。個人的失敗は嘲りや非難の目的とはされない、風變りは惡口のたねとされない、無意識のまちがひは笑を招かない。

古風の支那の保守主義によつて幾分固くなつたために、この倫理系統は人の思想を固定させると云ふ極端まで行つて、しかも個性を犧牲にして支へられて居る事は事實である。それでも、もし社會的必要の一層博大なる理解によつて調節されたら、もし智力的進化に必要なる自由を學術的に了解する事によつて擴げられたら、正しくこの道德方針はそれによつて最も高き又最も幸福な効果の得らるべき方針である。しかし實際行はれた處ではそれは獨創力のためにはならなかつた、むしろ今も行はれて居るが意見や想像の溫良なる平凡と云ふ事を強くする傾向があつた。それ故內地に住んで居る外國人は時々西洋生活のもつと大きな樂しみと苦しみ、それからもつと博大な同情のある鋭い、常規を逸した不平等（フビヤウドウ）

を望まざるを得ない。しかしこれは只時々てある、それは智力上の損失は社會的美點によつて全く十二分に償はれるからてある。そして日本人を幾分しか了解しない人の心にも日本人はその間に入つて生活するにはやはり世界最良の人種てあるとの考が疑もなく殘るのてある。

譯者註二。『直而勿有』を James Legge がかく譯した。

五

私がこんな事を書いて居ると、或京都の一夜の事が幻のやうに浮んて來る。名は思出せないか、どこか不思議に人ごみのする、明るい通りを通つて居る間に、私は大層小さいお寺の入口の前の地藏を見にわきへ曲つた。その像は美はしいお寺の雛僧の形てあつた、そしてその微笑は神々しい寫實の物てあつた。私は眺めながら立つて居ると、多分十歳程の幼い少年が私のわきへ走りよつて、その像の前に小さい手を合せ、頭を下げてしばらく默禱した。幾人かの朋友から離れて來たばかりて遊びの樂しさ面白さが未だ顏に殘つてゐた、

その無意識の微笑は石の雛僧の微笑と不思議に似て居るので、その小兒は地藏と双生兒のやうに見えた。そこで私は考へた、『唐金や石の微笑はただの寫生ではない、それによつて佛師の象徴して居るものはこの種族の微笑の意味であるに相違ない』

それは昔の事であつた、しかしその當時浮んだ考は今もやはり私には本當と思はれる。佛教美術の源は如何に日本の土地に親しみがなくとも、それでも日本人の微笑は菩薩の微笑と同じ思想、卽ち、自己抑制と自己征服から生ずる幸福を表はして居る。『戰場に於て千々の敵に克つよりは獨り己に克つもの、彼こそ最上の戰勝者なれ』『天も魔王も梵天もこの常に己を御し自ら制する人の勝利を轉じて敗亡となすこと能はず』[註四] こんな佛教の文句は澤山ある、そしてこんな文句は日本人の性格の最高の美點である道德的傾向を創造したと假定する事はできぬが、たしかに表はして居る。そして日本人種の道德的理想主義は凡て鎌倉のあの驚くべき大佛の像になつて居るやうに思はれる、あの容貌は『深い靜かな水のやうに落ちついて』[註五] 人間の手でできたどんな外の作品も表はす事のできぬやうに『寂滅に勝れる樂あるなし』[註六] と云ふ永久の眞理を表はして居る。東洋の向上心はその無限の平靜の方へ向つて居るのである、そして無上の自己征服の理想を自分の理想として居る。今日でも表面は、早晩根柢までも動かすに相違ない新影響のために動搖して居るが、日本人の

心は西洋の思想と比べては驚くべき平靜を保つて居る。日本人は私共が最も氣にして居る究極の抽象的問題をたとへ念頭に置いて居るにしてもそれは極めて少い。なほ又私共が會得される事を望むやうに、日本人は私共のそれ等の問題に關する興味を會得しない。或日本の學者は一度私に云つた、『君が宗教的研究に無頓着で居られないのは、全く自然であるが、私共がそれに對して餘り心を勞しないのも同じく自然である。佛教の哲學は君達の西洋の神學よりも遙かにすぐれた深さをもつてゐて、私共はそれを研究して居る。私共は思想の深さを測つて、その深い底の下に測り知られない深さのある事を見出すばかりてある。私共は思想の力で達し得べき最も遠い境まで航海したが、地平線が永久に退却する事を見出すばかりてある。しかし、君達は、何千年以來、海を知らないで、いつも川の中で遊んで居る子供等のやうてある。只君達は今私共の途と違つた途でその岸に達した、そしてその渺茫たる物は、君達にとつては新しい驚異てある。そして君達は、人生の砂の上の無窮を見たから、無何有之鄕へ航海するてあらう』

註四。Dhammapada. 法句經、この譯文は國譯大藏經による。

註五。Pannikkasutta. 法行經。

註六。Dhammapada. 法句經、國譯大藏經による。

千年以上の昔、日本は支那の文明を消化して、しかも、特有の思想感情の法式を保存したやうに、西洋の文明を消化する事はできるであらうか。一つ著しく有望な事實がある。それは日本人の西洋の物質的優勝に對する讃嘆は西洋の道徳までは決して及んでゐない事である。東洋の思想家は機械的の進歩と倫理上の進歩とを混同したり、私共の自慢の文明の道徳的弱點を認めなかつたりするやうな重大な誤りはしない。或日本の記者は西洋の事物に關する判斷を、もとの讀者よりも、もつと廣い範圍の讀者に讀まれる價値があるやうな風に書いて居る、――

『一國民の秩序と不秩序とは空から下る物や地から出る物によるのではない。それはその人民の氣質によつて定まるのである。公衆の氣質が秩序と不秩序の方へ向ふその要は、他利的及び自利的動機の分れる點である。もし公衆が重に他利的の考慮によつて動かされる場合には、秩序は保たれるが、自利的であれば、亂雜は免れない。他利的考慮とは正しく義務を守る念を起させるやうな考慮を云ふ、それが行はれると家庭にあつても、社會にあつても、國家にあつても、平和と繁榮を來す。自利的考慮とは利己的な動機から出て來る考慮である。それが力を得ると、爭亂と紛擾は避け難い。家庭の一員としては、私共の

義務はその家庭の善福を求むる事であり、國家の一員としては、國家のために働く事である。私共の家族に對してそのためになるやうにとの考を以て家族の事を考へる事、國家に對して、そのためになるやうにとの考を以て國家の事を考へる事、——これは適當に私共の義務を果し、公共的の念慮によつて導かれる事になる。それに反して、國家の事を自分の家庭の事のやうに考へる事、——これは自己的な動機に動かされて、義務の途から離れる事になる。……

「利己主義は生れつき誰にでもある、それに自由に耽る事は動物になる事である。それ故聖人は義務と中庸と正義と道德の道を說いて、利己の目的を抑へる事と公共の念を勵ます事を敎へたのである。……私共は西洋文明について知つて居る所では、その文明は數百年の間亂雜な狀態で悶えながら進んで、最後に多少の秩序ある狀態に達したのであるが、この秩序と雖も君主と臣下、親と子の間の自然の不變の區別とそれに伴ふ權利義務の原理に基礎を置いてゐないから、人間的野心と目的の發達と共にたえざる變化に影響され易い。利己的野心によつてその人の行爲が支配されるやうな人には至極適當して居るので、日本に於て或種類の政治家が、この制度を採用しようと努めたのは當然である。淺薄な見方から云へば、西洋の社會の形は非常に好もしい、卽ち昔から人間の欲望の自由なる發達の結

果であるから、その社會の形は奢侈と贅澤の丁度極端を表はして居る。略言すれば、西洋て到達する事物の狀態は人類の利己主義を充分に發揮する事を基として居る、それでその性質を充分に發揚して始めて達せられる。社會の不穩は西洋では念頭に置かれない、しかも、それが直ちに現在の惡い社會狀態の證據であり、又要素でもある。……西洋事物を好む日本人は、同一の條件で日本の歴史を書きたいと主張するのであらうか。彼等は本氣でその國を西洋文明の實驗の新天地としようと考へて居るのであらうか。……

『東洋では昔から、その國の政府は仁を基として、人民の安寧幸福をはかる事に心を使つた。如何なる政治上の信條を有する者も、野卑無學を利用するために智力を磨くべきだと考へた者はなかつた。……この帝國の住民の大多數は手の勞働で生計を營んで居る。如何に勤勉でも日々の缺乏を充たすだけの儲けは容易には得られない。彼等は平均一日に二十錢ばかりを儲ける。立派な着物を着よう、宏壯な家に住まう、と望む事は問題にならない。名譽評判の地位に達する事は望めない。これ等の貧しい人々は、さらに西洋文明の利益を享けられない事は如何なる罪を犯したためであらうか。……彼等に欲望があつて彼等を向上させる事にならないからだと云ふ臆說で彼等の境遇を說明する者がある。こんな想像は不道理である。彼等も欲望はある、しかしそれを滿足させる力に限りがある、人間と

しての彼等の義務はそれを制限する、そして肉體的に人間に可能な勞働の分量はそれを限つて居る。機會の許す限り彼等は澤山の物を仕上げる。彼等の勞働の最上最優の物は富める人々のために保留して、最劣最下の物は自らの使用として殘す。しかも、人類社會に於て、勞働のおかげで存在しない者はない。一人の贅澤な人の欲望を滿足させるためには千人の勞働を必要とする。勞働のおかげで、彼等の文明から思ひついた快樂を享けて居る人人はそのおかげを忘れて、勞働者を同胞人類でないやうな取扱をする事は全く奇怪千萬である。しかし西洋の解釋によれば、文明はただ大きな欲望の人々を滿足させる事になるだけである。それは大多數の人々のためにならない、ただ野心家がその目的を果すために競爭する制度に過ぎない。……西洋の制度は國の平和や秩序をひどく亂す物である事は眼ある人に見え、耳ある人に聞える事である。こんな制度の下に日本を置く事は私共をして心配にたへざらしめる。倫理と宗教が人間の野心に副ふやうに作られる主義を基とした制度は當然利己的な人間の欲望と一致して居る。そして自由平等と云ふ近代の信條に含まれたやうな說は社會のきまつた關係を破壞し禮儀禮節を滅却する。……絕對の自由絕對の平等は得られないから、權利と義務で定めた制限を置くやうに考へられて居る。しかし銘々ができるだけ多くの權利を求めて、できるだけ少い義務を負擔しようとするから、その結果

はたえざる爭論と法律上の爭になる。自由平等の主義は、社會階級の區別を覆へして見ての人々を一つの名ばかりの水平線にもつて行く事で、國家の組織を變へる事に成功するかも知れない、しかし、その主義は決して富と財產の平分をする事はできない。アメリカを見れば分る。……人及びその身分の權利が、富の程度によるやうに作られて居る時には、多數の人々は貧しいから、その權利を確立する事はできない、しかるに富んだ少數の人々はその權利を主張して、社會の認可の下に、仁義道德の命を顧みないで、貧しい人々に對して壓制的な義務を要求するであらう。日本に於てこの自由平等の主義を採用する事は善良平和な風俗を害し、人民一般の氣質を苛酷不人情ならしめ、結局大多數の人には不幸の源となるものであらう。……

「利己的欲望を滿足させる事に實際適して居るから一見して西洋文明は好もしく見えるが、しかしその根本は、人間の願望は自然の法則であると云ふ臆說に基して居るから、結局失望と道德頹廢に終るに相違ない。……西洋の諸國民は、最も深刻な種類の爭亂と興敗を經て、今日の狀態となつて居る、そしてその爭鬪を續けるのがその運命である。丁度今彼等の動機となる要素は幾分平均を保つて居るので、社會狀態は多少秩序を保つて居る。しかし一旦この危い平均の亂れる事があれば、新しい爭鬪と苦惱の時期を經たのち、一時

の平静がもう一度得られるまで、もう一度混亂と變動に陷るであらう。現在の貧しい人々や無力な人々は將來の富んだ人々强い人々となつて、その反對の人々はその逆になるであらう。永久の動亂は彼等の運命である。平和な平等は滅亡した西洋諸國の廢墟と絶滅した西洋の人々の屍の間に建てられるまでは決して到達される事はない」註七

註七。これは鳥尾（小彌太、得庵）子爵の名高い保守的論文を、一八九〇（明治二十三年）十一月十九日、二十日、『ジャパン・メイル』が飜譯してのせし物の抄であるが、全體の力と論理が充分に表はれてゐない。その論文は全部引用するには長すぎる、そして、『メイル』の立派な飜譯をどう云ふ風に抜いても、その抜いたために、その文章の色々な部分を結合して居る論理的宗教的及び哲學的推理の續が弱くなる。さらにこの論文は西洋思想に全然影響されない、日本の學者の發表した物として注目に値する。彼は新しい議會の開會以來日本に起つた社會上政治上の動亂を正しく豫言した。鳥尾子爵は久しく佛教哲學者として名高い。日本陸軍では高い位地の人である。

たしかに、このやうな知覺を以て、日本は自分を嚇かす社會的危險を幾分避けられるであらう。しかし日本に將に來らんとする變化は、道德的衰亡を來す事は避けられないやうに思はれる。その文明が愛他主義に基づいてゐない諸國民と、大きな產業上の競爭をせね

ばならなくなつたので、日本は、これまでそれが比較的少い事が全く日本生活の不思議な美點となつてゐた凡ての惡徳を、結局養成して行かねばならない。國民性はもう惡化しかけて來たが、引續き惡化せねばならない。しかし古い日本は、物質的には十九世紀の日本よりも劣つてゐたが、道徳的には餘程進んでゐた事を忘れてはならない。日本は道徳を合理的にしたあとで、それを本能的にしてゐた。日本は私共の思想家が最も幸福な最も高尚な社會狀態と考へる物を色々、狭い範圍に於てであるが、實現してゐた。複雜な社會の凡ての階級を通じて、日本は公の及び私の義務を會得して實行する事を養成して來たが、その風は西洋ではその比を見出す事はできない。日本の道徳的弱點でも、凡ての進んだ宗教が一致して美徳と賞讃して居る物——即ち家族、團體、及び國家のために一身を犧牲にする事——が極端に進んだ結果であつた。それはパーシヴアル・ロウヱルが、その『極東の魂』——極東の多少の[注八]實際的知識がなければ、その完全な天才が充分に評價ができないその書物——に示してある弱點であつた。日本が社會道徳の方面でなした進歩は、私共自身の進歩より大きいけれども、重に相互にたより合ふと云ふ方面であつた。それで日本の將來の義務は、その人の哲學を日本が賢くも採用したその偉大なる思想家[注九]の教を忘れない事である——その教は、『最も高い獨居は最も大きな相互依存と伴はれねばならない』と云

ふ事、それから一見如何にも相反するやうに見える文句ではあるが、『進歩の法則は完全なる別居と同時に完全なる協同の方へ向ふ』と云ふ事である。

註八。　この名著に對しては私は熱心なる賞讃を表はすけれども、その結論の多くの物殊に最後の物には、その問題に對する私自身の信ずる事と極端に反して居る事を私は公言せねばならない。私は日本人が個性をもたないとは思はない。ただ日本人の個性は西洋人の個性程表面的に現はれない、又現はれ方も遙かに遲い。私は又私共が西洋で『人格』及び『品性の力』と云つて居る物の多くは、多少修養で變裝された原始的な攻撃的傾向の殘存と承認を表はすに過ぎないと信じて居る。スペンサー氏の所謂最高の獨居は單に攻撃的目的に應用された力の異常な發達を含んでゐない、しかし西洋の個性が最も普通に容易に現はれるのは、他の方法よりはむしろこの方法によるのである。見たところ、日本の智力界の弱點と人に思はせる物は、自發、創造的思想、最高種類の認識力の比較的に缺乏して居る事である。恐らくさう見える缺點は人種的である、極東の人々は、歷史を通じて、創造的でなくて、感受的であつたらしい。とにかく私は佛教――元來アリヤン種族の信仰――はそれに對して責任があるとは證明されないと思ふ。普通教育から佛教の勢力を全然除外する事は奨勵すべきではなかつたらう、古い佛教哲學者の方がやはり、帝國大學の普通の卒業者の才能よりも廣く考へる方の遙かに優れた才能を示して居る。實際私は佛教の智力的信仰――近代科學の最良最廣の教とその高い方の信仰とを調和した物――は日本に取つて最も重大な結果を及ぼすであらうと信ずる。井上圓了氏と云ふ日本の學者は東京に、全くこの目的で哲學の專門學校（哲學館、現

在の東洋大學の前身）を創立した、その學校は今のところ有力な學校となるらしい。

註九。　ハーバート・スペンサー。

日本の青年は今輕蔑の風を示して居るその過去に對して、日本はいつかは必ず回顧する事、丁度私共自身が古いギリシヤの文明を回顧するやうであらう。簡易な樂しみに對する才能の忘れられた事、人生の純な喜びに對する感性のなくなつた事、自然との古い愛すべき聖い親密な交際、それを反映して居る今はない驚くべき藝術、を惜むやうになるであらう。その當時世界が如何に遙かにもつと輝いて美しく見えたかを想ひ出すであらう。古風な忍耐と、犠牲、古い禮讓、古い信仰の深い人間の詩、――日本は悔むべき物が澤山あらう。日本は多くの物を見て驚くてあらうが、又殘念に思ふであらう。恐らく最も驚く物は昔の神々の顏であらう、何故なればその微笑は一度は自分の微笑であつたのだから。

第二十七章　サヤウナラ

一

自分は去らうとして居る、——遙か遠くへ。教師としての地位は既に辭して、今はただ旅券を待つて居るのである。

親しい顔が隨分多く此世から消えて行つたから、此地を去るのを遺憾に思ふ念は、六ケ月前に感じたであらうよりも今は少い。とは言ふものゝ、この古い雅致のある町は慣習と聯想とで自分に如何にも懷しいものになつて居るから、二度とまた此町を見ぬのだとの考は自分はそれを頭に浮べることをようし得ない程である。自分は蔭多い北堀町にあるこの美しい古い家へいつか歸ることがあるかも知れぬと努めて信じようとして居る。過去の經驗に依ると、さういふ想像は永遠の別離の前にいつも出て來たものだといふことを始終痛ましくも承知してゐながら。

事實は、一切の事物がこの神の國では永久のものでは無いといふ事、冬の寒さが酷烈であるといふ事、遙か南の、降雪の稀な、九州の大きな官立學校から招聘を受けて居るといふ事である。その上に自分は餘程身體を傷めて居た。それでもつと溫暖な氣候の處といふ前途の望が自分の決心を形つくるのに大なる力があつたのである。

ところが名殘の昨今四五日は極めて嬉しい不意の出來事に充ちて居る。己が義務の履行に對しての單純な滿足以上のことを期待する權利が無い處に感謝の意外の示現を見る事、ただ厚意の存するあるのみと想つて居る處に愛情を見出す事、——これは確に非常に氣持の好い經驗である。

師校の教師が自分に餞別を呉れた。淡紅色の妙な蟹が這うて居る磯邊へ垂れ下つて居る花盛の樹と、鳥と描いた模樣が一面にある、高さ三呎許りの、素ばらしく見事な花瓶一對——昔の封建時代に樂山で造つた花瓶——出雲の絕好の記念品である。この驚嘆すべき花瓶に添へて贈呈者三十二人の氏名を漢字で書いた卷物があつた。その三十二人のうち三人は婦人の——師範學校の三人の女教師の——名である。

ジンジヤウチユウガクカウの生徒も亦自分に贈物を——松江に於ける自分の最も幸福な

多くの記憶への二百五十一名の生徒の最後の貢獻を——して呉れた。それはダイミョウ時代の日本刀である。出雲の黄金の眼を有つた銀のカラシシ——神道の獅子——がその深紅の朱漆塗の鞘の上に乗れて居り、またその巧妙な　のあたりに腹這うて居る。そしてその美しい品物を自分の家へ持つて來た委員が、昔の慣習に從つて、生徒が自分に別を告げる爲め皆んな待つて居る學校の講堂へ直ぐに一緒に來て呉れと自分に乞うた。

そこで自分はそれへ行つた。互に述べた事は次に書き記す。

二

親愛なる先生。——

先生は私共がこれまで戴きました最も善いまた最も情深い教員の一人でありました。先生の最も懇切な授業に依つて獲ました知識に對して私共は衷心御禮を申上げます。我が校の生徒はいづれもせめて三年は御とゞまり下さることを希望致して居りました。で、先生が九州へ御出のことに御決心になつたと知りました時、私共は皆な悲しさに氣落致したのであります。先生をお止め申す方法が、何か無いかと校長に願ひましたが、それは出來な

いことを知りました。今この告別の際私共は私共の感情を言ひ現はす言葉を有ちません。私共は私共の記念の品として日本刀を差上げました。まことにつまらない見つともない物てあります。ただ私共の感謝の印として御氣に留めていたゞけるかと考へただけてあります。私共は先生の最も懇切な授業を決して忘れません。そして私共一同先生が永久に健康て幸福てあられんことを願ひます。

島根縣尋常中學校生徒一同を代表しまして

大谷正信

我が親愛なる生徒諸君。――

自分は諸君の贈物を――銀のカラシシがその鞘の上に跳ね躍り、或はその驚くべき欄の絹の紐を通して腹這うて居るあの美しい刀を――どんな感情を以て受取つたか諸君に語ることは出來ぬ。少くとも總てを諸君に語ることは出來ぬ。が、自分は諸君の進物を見た時、不圖諸君の昔の諺を想ひ浮べた。刀はサムラヒの魂であるといふ諺である。それから、此高雅な記念品のその選擇に諸君は諸君自らの魂の或る物を表象したのであるといふ氣がした。といふのは、我々英國人も亦、刀劍に關した有名な格言や諺を有つてゐる。我々の詩

人は立派な刀身を『確かな（トラスティ）』とか『忠實な（トルウ）』とか呼ぶ。そして我々の最善の友をば『あれは鋼（スチイル）の如くに忠實だ』と言ふ。鋼（スチイル）といふのは古い意義での、申分無しの力の鋼——といふ意味である。武士たるものがその鍛へに自己の名譽と自己の生命とを託し得る鋼——といふ意味である。そして丁度そのやうに諸君の贈物、それは自分は一生大切に保存するが、諸君のこの絶好な贈物に自分は諸君の眞心と愛情との表象を見出すのである。自分は諸君が諸君の心の裡に、自分がそれを能く〳〵知るやうになつた、そしてまた諸君の贈物たこの美はしい徽號として永久に存するであらうところの、彼（か）の寛大と深切と忠實との衝動をば、常に新しく蓄へ居らるゝやうにと希ふのである。

そしてこれは教師に對する生徒としての諸君の愛情と忠實との徽號であるばかりで無く、諸君の多くが、最も慕はしい願として、自分に作文に書かれた時表明された、あの他の美はしい義務感念、即ち陛下の爲めに、諸君の天皇の爲めに、身命を捧げたいとの願望の徽號でもあるのである。その願望は神聖である。それは諸君に分つて居るよりも恐らくはもつと深い意味を、諸君がもつと年とつてもつと賢くならるゝまでは或は分らぬ深い意味を有つて居る。今の時代は大なるまた迅速なる變化の時代である。諸君の多くは、大きくならるゝと、諸君の祖先が諸君より前に信じて居た事悉くを信ずることは出來なくなること

もあらう。尤も自分は、恰も諸君が今猶、諸君の祖先の靈を尊むが如くに、諸君の祖先の信仰を少くとも相變らず常に尊まるゝことを眞實信ずるものである。が、新日本の生活が諸君の身邊に如何に多く變らうとも、諸君自らの思想が時世と共に如何に多く變らうとも、諸君が自分に表明したあの尊い願望を諸君の精神から失くならせてはならぬのである。その願望は、諸君の家庭のお宮の前に輝く小さな燈明の炎の如くに、明らかにまた淨らかに、常に燃やして置かなければならぬのである

　恐らく諸君の或る者はその願望を果たさるゝかも知れぬ。諸君の多くは軍人にならねばならぬのである。士官とならるゝ人もあらう。帝國を海で護るといふ大任の準備に海軍兵學校へ入らるゝ人もあらう。そして諸君の天皇と諸君の國家は諸君の血を要求することすらあるであらう。が然し諸君のうちの大多數は他の途を執る運命を有つて居られて、——或る國家的な大危險、そんな事を日本が知ることは無いと自分は信ずるが、或る國家的な大危險の時を恐らくは除いて——肉體的自己犧牲をさるゝそんな機會は有たれぬかも知れぬ。ところが、それに劣らぬ高尚な、そして軍人でない、官吏でない生活を營んで居て諸君がそれを果し得る今一つの願望がある。それは、國家の爲めに死ぬことは出來んでも、國家の爲めに生きるといふことである。諸君の祖先の最も親切な最も賢明なものの如くに、

諸君の政府は、この科學的世紀が與へ得る最善の教育をば、他の如何なる文明國も亦同一の利益を與へ得るより遙かに少い費用で受け得られるやう、あらゆる便宜を與へて居る立派な學校を諸君に供給して居る。そしてこれは、諸君の各〻をして、諸君の國家をそれが過去に於てあつたよりも一層賢明に一層富裕に一層强大にするのに手傳はしめんが爲めである。そして如何なる實務的家業或は學問的職業にあつても、その家業或は職業の品位を高めまた發達せしむるに最善の力を注ぐ人は如何なる人も、義務で死ぬる陸海軍人に劣らず眞に陛下の爲めにまた國家の爲めにその生命を捧ぐるものである。

思ふに自分は、諸君が自分の去るを見て悲しむに劣らず、諸君を後にして去るを悲しむものである。自分は日本の學生の心情を知れば知るほど、層一層その國を愛するやうになつた。が然し、自分は松江へ歸ることは無いけれども、諸君の多くに再び會ふことと思ふ。或る方々には今後の夏に何處かで出會ふであらうと殆んど確信して居る。或る方々には自分が行かうとして居る官立學校で今一度教へる希望を抱けさへするかも知れぬ。が、再び會はうが會ふまいが、自分の生涯が諸君を知ることによつて一層幸福になつたこと、自分は常に諸君を愛する事、これを信じて貰ひたい。では、諸君の美しい贈物に對して重ねて感謝の意を述べて、左樣なら!

三

師範學校の生徒はその大廣間で送別の宴會を開いて呉れた。自分は彼等とは一年の間ほん僅か――約定の一週六時間より少いぐらゐ――しか一緒に居なかつたことであるから、その外國人教師に對して大した愛着を感じようとは想像もし得なかつた。ところが自分は自分の日本生徒に就いて知らねばならぬことがまだ多くあるのである。その宴會は甚だ愉快であつた。各級の級長が用意して來た短い送別の辭を英語で順番に讀んだ。支那や日本の昔の詩人から得た比喩や感情の文句で美しくされてゐたその面白い文章のうち常に自分の記憶に殘ると思ふものの一にして止まらなかつた。それから生徒は自分の爲めに校歌をうたひ、また宴會の終に『オォルド・ラング・サイン』の日本語譯を吟誦した。そしてそれから皆んなが、軍隊行列で、自分を家まで護衛して、門の處で『マンザイ！』『グッドバイ！』『御出かけの時は汽船まで先生と一緒に行軍します』と叫んで、訣別の喝采をした。

四

が、自分は彼等を再び見るの愉快を有たぬてあらう。彼等は總て遙か遠くへ行つて居る——或る者は彼の世へ。ても自分が師範學校でのその送別宴會に出席してからたつた四日經つ！或る殘酷な天降がその門を鎖ぢその生徒を國内に四散させたのである。

二た晩前に、支那船が日本へ齎らしたと想はるゝ虎列拉がこの市の方々に、しかも、あるが中にも師範學校内にも發生した。それに襲はれてから間も無く絶命した生徒と教師が數人もあり、今も生死の境を彷徨して居るものが少からぬ。他の者共はその溫泉で有名な玉造といふ健康地の小村へ行軍して行つた。が、其處でも虎列拉がまた彼等の間に發生したので、生存者をそれぞれその家庭へ解散することに決定された。何の周章も無かつた。その大軍隊風の規律は依然として破られずに居た。教師も生徒もその位置に居て斃れた。その大きな校舍は醫務當局者が管理を引受けて、今なほ消毒衞生の事業を行うて居る。總ての人の生命安全と見るまである者と大膽なサムラヒ校長齋藤熊太郎とだけ殘つて居る。恢復期にて沈み行く己が船を去るを潔しとせざる船長の如くに、校長は危險の中心に踏止つて、病

める生徒を看護し、衞生事業を監督し、部下の者は危難の初の一刻に迅速に立ち去らせたので常はその數多い部下に委せる事務一切を躬ら處理して居る。彼は生徒が二人助かつたのを見て喜んで居る。

今一人の生徒で昨夜葬られたのに就いて自分は斯んな話を聞く。死ぬるほん少し前、それも最も親切なる反對を推して、その生徒は校長が己が病床に近寄るのを見ると、臂を突いて起きて軍隊式の敬禮を行ふ體力を見出した。そして雄々しい人に對してのその雄々しい挨拶と共に彼は大なる沈默へ入つて行つたと。

五

到頭旅劵が來た。自分は出立しなければならぬ。

中學校とその隣の小學校とは虎列拉が來たので閉鎖されて居る。で自分は病毒が染みて居る川の岸近く寒い朝風に曝される危險を彼等の爲めに恐れて、自分を見送りに生徒が集まることをしないやうにと斷つた。が、自分の謝絶はただ愉快な笑を以て迎へられるだけであつた。昨夜校長は總ての級長へ使を送つた。だから、日出後一時間にして、二百人許

りの生徒が教師と共に、小さな汽船が共處で待つて居るあの長い白い橋の近くの埠頭まで、自分を護衛しに門前に集つて居る。で自分共は出かける。

他の生徒共は既に埠頭に集つて居る。そして彼等と共に自分が知つて居る人達の大群集が待つて居る。友人や親しい顏見知り、生徒の父母や親戚、いつか極僅かな恵を與へたことを自分が思ひ出せるもの悉く、それに報ずる機會を終に自分が有たずにしまつた恩を自分が受けたことのある尚多くの人々――自分の爲めに働いた人達、自分がその家で一寸した物を買ひ求めた商人共、にこ〳〵御辭儀をする親切な無數の顏がそれである。知事は丁寧な口上を述べさせにその秘書をよこす。師範學校の校長は握手しに一寸の間急いでやつて來る。師範の生徒はその家庭へ歸つて居るが、その教師は少からず來て居る。自分は一番西田が居らぬのを心殘りに思ふ。肺の出血で長の二た月臥せつて居るのである。が、その病床で認めた極めて鄭重な送別の手紙と美くしい記念の品いくつかをその父が持つて來る。

ところで自分は身のまはりのその愉快な顏總てを見ると斯う自問せざるを得ぬ。『他のどんな邦でてもこれと同じ長さの月日の間これと同じ職業を勤めて暮らして、そしてこれに似た絶間なしの人間の深切の經驗を味はひ得たであらうか』と。此等の人達の悉くから

自分はただ懇切と慇懃とだけ受け來たつて居る。一人として、不注意の故を以てしても、これまで自分に寬大ならぬ言葉を唯の一つも言ひかけたものは無い。五百に餘る子供と大人との教師として、自分は嘗て自分の忍耐力を試されたことが無い。斯んな經驗はただ日本に於てのみ可能であるのかと自分はあやしむ。

が小蒸氣は乘客をせきたてて叫ぶ。自分は多くの手を――恐らくはかの雄々しい深切な師範學校々長の手を最も堅く――握つてから乘船する。ジンジヤウチユウガクカウの校長、兩校の教員二三、それから自分の氣に入りの生徒の一人が隨行する。次の港まで、其處から自分は廣島へ山越しして行くのだから、其處まで自分に伴なはうといふのである。

冬の初寒(はつさむ)が身に沁みる淡靄のかかつた麗はしい朝であつた。小さな甲板の上から自分は最後の眺の眼を向ける、長い白い橋が架つて居る大橋川(おほはしがは)の古風な見通しに――その脚を鏡の如き水に浸して込み合うて居る、屋根の尖つた懷しい古い奇妙な家屋の群集(むれ)に――朝日に金色(こんじき)染めた和船の帆に――昔ながらの山々の美しい奇妙な恰好に。

この土地の魅力は、本當に神が住んで居る土地の如くに、實に魔術的である。その土地の色彩の妖異な美妙さが實に美はしい――その土地の雲の形と交じり合うて居るその土地

の山の形が實に美はしい――就中、その土地の高い物をば空に懸つて居るやうに思はせるあの長い霞の搖曳が實に美はしい。現實と幻との區別が出來かねるほどに、――一切の物が將に消えなんとする蜃氣樓かと思へるほどに――天と地とが不思議に混じり合うて居る土地。噫、自分にはそれが永久に消えんとして居るのである。

小蒸汽船は再び叫び、プッフと蒸汽を噴き、中流に後戻りし、あの長い白い舳に艫を向ける。すると、其灰色の波止場が後すさりするにつれて、長い『アアアアアアアアア』といふ聲が制服をつけた隊列から起こつて、總ての帽子がその眞鍮の漢字を閃めかせて浪と搖れる。自分はその小さな甲板船室の屋根へ登つて、帽子を振つて英語で『グッドバイ、グッドバイ!』と叫ぶ。と、『マンザイ、マンザイ』（君に萬歳を、萬歳を）といふ叫聲が漂ひ歸る。が早それは遙か遠くから微かに來る。その小郵船は河口を辷り出て、青い湖水へ突き進み、松影の或る岬を曲る。と人顔も、人聲も、波止場も、長い白い橋も、懐出となつてしまつた。

ても、その廣い湖水の無言の中へと進み行く時、暫くの間振り返つて眺めると、松が群れ茂つて居る、壯大な高地を抽んづる古城の巓、――美くしい庭がある自分の家の在り場、――學校の長い青い屋根、それが左手にあと退りして行くのが見える。が、それも亦迅速

に視界を去る。すると見えるものはただ青い仄かな水面、青い仄かな霞、遠さを異にして朦乎と浮いて居る青い或は緑の或は鼠色の仄かな峰々、そして何よりも、東の方に靈と白く聳えて、あの見事な大山（だいせん）の妖姿、それだけである。

すると、別れの次の刹那に人の心にいつも群がり來るあの生き〳〵した懐出——處や物に附隨する總てについての懐出——の突進に遭うて自分の心は一寸の間沈む。記憶に殘つて居る笑顔。出て行く教師にその日の幸を祈つて朝々古いヤシキの敷居際に集つて呉れた人達。その歸宅を喜び迎へて呉れた夕べ〳〵の人達。いつもの時刻に門邊に待つて居た犬。蓮の花が咲き鳩の聲が聞こえた庭。杉の杜から響き來る寺の鐘の調子の好い音。遊んで居る子供等の唄。種々な色どりの街路の夕影。御祭の夜の長く續いて居る提燈の灯。湖水に踊る月の影。出雲の太陽に敬禮しての川岸での拍手。風つよい橋の上の何時までも絶えぬ愉快氣な下駄の音。——總て此等のまた他の幾百もの樂しい記憶が殆んど心が苦しいほどに生き〳〵と自分に蘇つて來る——と同時に一方では、尊い名を有つて居る遠くの山々は徐ろにその青い肩をそむけ、我が小蒸汽は、この神の國から絶えず遠く遠くへと、次第に迅く迅く、自分を運んで行く。

あとがき

明治二十三年四月の或る晴れた朝、ヴァンクーバーから十餘日の波路を蹴つて、今しも横濱へ着せんとする汽船の甲板上に立てる一人の外客は、遠く春の空にまだ雪を戴いた富士を仰いで頻りにその麗容雄姿を歎賞し、近く船客が投ずるパン屑に群がる人馴れた海鷗に興じ、親子の水夫が腕も股も露はに櫓を漕いで過ぎ行く艀舟(サンパン)の中に、七輪に炭火を起して簡易な朝食の鍋がかけてあるのを眺めて珍しがつた。しかしこの外客は單なる觀光の客となつて、日光鎌倉京都の皮相的見物に終始して去り行くものとはならなかつた。

彼は世界に知られぬ方面の日本を見た。彼は日本の心を見た。彼は歸化して小泉八雲となつた。

この國に見る一切のものが、奇異で、また美はしく、呼吸する空氣も一種清涼快爽の味を含み、蒼空の色さへ西洋のそれと異つて柔かな光を帶びて感ぜられ、下駄の音までも心地よく聞かれた。世界を放浪し來つたヘルン先生は、ここに始めて東海の一隅に蓬萊の樂

境を見出したのであつた。して、かかる氣分の横溢せる日本渡來當時の先生の日本印象記が、本書である。

本書の原名を Glimpses of Unfamiliar Japan といふ。上下二卷、收むる處、上卷十五章下卷十二章。一八九四年（明治二十七年）米國ボストン市にて出版された。横濱を振出しに、鎌倉、江ノ島に遊び、中國山脈を越えて鳥取街道に出で、伯耆國下市に盆踊を見、松江を中心として、出雲の名所、杵築、美保の關、潜戸、日ノ御碕、八重垣神社を訪ねたる紀行の間に、日本の風景、歷史、美術、宗教、迷信、風俗、殆ど日本についてのあらゆる方面に觸れざる處はない。

松江は遂にこの流浪の客に安住の心境を與へ、四十歳にして始めてホームを作らしめた。高天原を去り、韓土にさすらひ、孤劍飄然出雲に來りし素尊が、稻田姫を娶つて詠まれた歌の『八雲』なる文字が、半生數奇の運を經て、遂に出雲で良緣を結ばれた先生の、日本人としての名であることは、いかにも適はしい。この神國出雲の土地に於て、いよ〳〵先生の日本內地の眞研究は始まつた。横濱時代は眞鍋晃といふ靑年佛教學生が通辯であつたが、松江時代の輔助者としては小泉夫人、これに加ふるに、中學教頭西田千太郎先生と學生大谷續石君があつた。これから遂に最後の『神國日本』なる日本に關する卒業論文と稱

すべき名著が書かれ、遺著『天河の縁起そのほか』の出版さるるまで、十四巻の勞作に對して、本書は序說、または總論と見做さるべきものである。先生の日本に關する著書を讀むには、日本禮讚の大殿堂の參道に立てるこの堂々たる鳥居を潛らねばならない。

落合貞三郎

『英語教師の日記から』

松江に赴任してからヘルンの眼に映じた日本學生生活を叙した物である。『小泉八雲の著作について』と題する坪內逍遙博士の論文のうちに『出雲中學の教師としての日記の如きを讀んでは誰しも愛敬の心を生ぜざるを得ない。如何にも深切な優しい人柄が浮上つて見える、如何に心性を直覺することに秀でた人で、如何に觀察が纖細であるかが見える』とあるのは卽ちこの篇の事である。內容は殆んど全部ヘルンの直接の見聞に基づいて居るが、最後に學生の葬式追悼會等に關する記事はヘルンが熊本へ轉任の後に起つた事であるから全部聞きがきを基として多少の想像を加へて居る。ヘルンがこれ等學生中の二秀才、志田、橫木の死を悲しんだところ、殊に橫木が最後の思ひ出に學校を見に行く一章(二一)の如きは讀む度每に新しい淚を誘はれる。

『日本海に沿うて』

ヘルンは明治二十三年八月の末、松江に赴任のため眞鍋晃を通譯兼從者として、山陰道を通過した時の事と、翌二十四年夫人と共に島根鳥取を旅行した時の事とを合せてこの記事を作つた。そのうちにある鳥取の蒲團の話、出雲の捨子の話は何れも夫人が始めてヘル

ンに話した怪談であつた。

『魂について』

金十郎と云ふ名は熊本にゐた植木屋の名であつたが、この魂の話は夫人の養母（稲垣とみ子）がヘルンに話した物であつた。その始めに一つの挿話のやうに『世界の向う側に無数の魂を宥せる』婦人を書いて居るが、これはヘルンがその女エリザベス、ビスランド女史の事を考へながら書いたのであらう。エリザベス女王は三千着の衣裳をもつてゐたと傳へられるが、ヘルンはこのエリザベス、ビスランド女史の事を戯れのやうに『一萬の魂の淑女』即ち『無数の魂の婦人』と呼んでゐたのであつた。

『幽霊と化け物について』

祭りの夜、見せ物を見て廻つたのは熊本の町で、同行者は金十郎でなく夫人であつた。ただ最後にある二つの話は共に夫人の話した松江の物であつた。

『日本人の微笑』

少し以前『大西洋評論』に出た時から喧傳された名高い論文であつた。ヘルンが純粹に日本人の心理研究の論文を發表したのはこれが始めてであつた。ヘルンの日本人の微笑の解釋は當時の一般外人を非常に啓發した物であつたが、その後幾星霜を經て日本人の微笑も多少の變化を受けて居る、しかしヘルンがこの論文で啓發してくれた點は今なほ變らないと思はれる。

大正十五年七月

田部隆次

『日本の庭』（この篇は以前『大西洋評論』に出た）の冒頭に記してある『大橋川のほとりの自分の小さな二階家』は今は無い。末次本町の東西に通じて居る街路の中ほどに、南側に小さな路次がある。その路次を行詰まで行つて左へ折れると、四五歩にしてまた右へ折れる。十歩ばかりて狭い石段を下りると湖水に達せられる。其處は右側には家が無く、左側にたゞ一軒あつた。それがこの家であつた。今、難波館といふ旅館のある處である。轉居された『今度の家は』北堀町字鹽見繩手の、祿高百石の根岸といふ『サムラヒ』の屋敷で、持主根岸干夫氏は當時郡長として郡部にゐたので、その家を借りて住まつてゐたのであつた。

原文の末尾にある

Verily, even plants and trees, rocks and stones,all shall enter into Nirvana.

の後半は、普通の『悉皆成佛』とせずに、原文どほり『皆入涅槃』と譯して置いた、かゝる庭園も亦無くなる、といふことを原著者は言はうとして居るのだから。

『家の內の宮』の第二節の終に書かれて居る畠山勇子に就いては『東の國から』別に一

文が掲げられて居るから參照されたい。

『女の髮について』の起筆に『家の妹娘の髮は』とあるが、これは『自分の妻の髮は』とあつても差支無いもの、といふことは讀者も想像さるゝであらう。第五節の一老武士たる縣知事』は撃劍の好きなそして槍術の達人であつた籠手田安定といふ人であつた。

『伯耆から隱岐』へは明治二十五年の七月の末に行つたのであつた。八月の十六日に美保ノ關へ歸つて來た。同行者は夫人だけであつた。

第三節に『境は島根縣の』とあるは『鳥取縣の』とあるべきであるが、原文の儘に譯して置いた。なほ一二譯者として述べて置いた方がよからうと思ふことは、譯文の途中に譯者註として書いて置いた。

『サヤウナラ』　松江出立は明治二十四年十一月十五日であつた。原著者が所謂『たゞ旅劵を待つて居る』頃、譯者は氏を訪問したことがある。その時『先生はこれまでどういふことをして來られた方なのですか』と尋ねたものだ。『書いてあげよう、待つておいて』

と言つて、次の室へ行つて、書簡用紙一枚に、表裏に、例の初は細かく後ほど太い字で、書いたのを呉れられた。序にこゝへ紹介してもよからう。斯う書いてある。

I was born in the town of Leucadia in Santa Maura, which is one of the Ionian Islands, in 1850. My mother was a Greek woman of the neighbouring island of Cerigo. My father was an army-doctor, attached to the 76th English Regiment of the Line. The Ionian Islands were at that time under British protection,——because the Turks had been killing all the Greeks there.

My parents took me to England when I was only five or six years old. I spoke Romaic —— which is modern Greek and Italian; but no English. My father went to Russia some years after, and then to India. Myself and brother were brought up by rich relations and educated at home. My father and his wife died in India of fever.

When I was about 15 years of age, I was sent to France to learn French, and spent several years there. I was eighteen years of age, when my friends lost all their property; and I was obliged to earn my own living. I went to America in '69, and learned the printing business. After some three years more, I gave up printing to become a newspaper reporter. I reported for several large papers in Ohio for eight years. Then I went South to become literary editor of the chief paper of New Orleans: and remained there ten years. In the meantime I had begun to publish some books,——

novels, translations, and literary sketches. In 1887, I became tired of writing for newspapers, and I went to the French West Indies, and to South America, to write a book about the tropics. I returned to America two years later, and after publishing my books, resolved to go to Japan.

And then I became a teacher.

〔自分は一八五〇年に、アイオニア群島の一つの、サンタ・モーラのリュウカディアの町で生れた。母はその近くのセリゴといふ島の希臘女であつた。父は英國步兵第七十六聯隊附の軍醫であつた。アイオニア諸島は——土耳古人が其處の希臘人を殺しつつあつたから——當時英國の保護の下に在つたのである。

兩親は自分がやつと五つ六つの頃英國へ連れて行つた。自分は——近代の希臘語であり伊太利語である——ロマイック語を話してゐて英語は話さなかつた。父は數年後に露西亞へ行き、それから印度へ行つた。自分と弟とは富裕な親類に養育され本國で敎育を受けた。父とその妻とは熱病に罹つて印度で死んだ。

自分は十五ばかりの時に、佛蘭西語を覺えに、佛蘭西へ送られ、其地に幾年かを送つた。十八歲の時、自分の友達はその財產全部を失くした。そこで自分は自分で食つて行かなければならぬことになつた。六九年に亞米利加へ行つて、印刷業を敎はつた。それから三年ばかりして印刷を止めて新聞通信員になつた。八年間オハイオの夥多の大新聞に通信した。それからニユウ・オルリアンズ

の一番大きな新聞の文學記者になることになつて南部へ行つて、其地に十年居た。その間幾つか書物を――小說、飜譯並びに文學的スケッチを――出版しはじめたのであつた。一八八七年に新聞の爲めに文を書くことに飽いて、熱帶について書物一册書かうと、佛領西印度と南亞米利加とへ行つた。二年經つて亞米利加へ歸つて、書物を出版してから、日本へ行かうと決心した。

そして教師になつた。」

第五節の『西田』は『東の國から』の獻呈を受けて居るあの西田千太郎で、當時中學校の主席教師として英語を擔任してゐた人である。現九州大學教授工學博士西田精氏の令兄である。

同船して宍道（しんぢ）まで見送つたものは中學校長木村牧、中學校教員中村鐵太郎、師範學校教員中山彌一郎、及び譯者であつた。

大正十五年七月

大谷正信

第三卷要目索引

Glimpses of Unfamiliar Japan. 知られぬ日本の面影

Volume One 第一卷

1) Dedication 獻詞

To my Friends	私の東洋に於ける滯留を、
whose kindness alone rendered possible	全くその厚意によりて
my sojourn in the Orient,—	成さしめたる友人—
to	米國海軍主計監
Paymaster Mitchell McDonald, U. S. N.	ミチエル・マクドナルド君
and	竝に
Basil Hall Chamberlain, Esq.	東京帝國大學名譽教授
Emeritus Professor of Philology and Japanese	ベズル・ホール・チエム
in the Imperial University of Tokyo	バリン君に愛情及び感謝の
I dedicate these volumes	記念として
in token of	この二卷を捧ぐ。
Affection and Gratitude.	

2) **Contents　本文**

N. B. 英文「知られぬ日本の面影」は上下二卷に分たれる。ここに摘記せるはそのテキストとの對照である。

小泉八雲全集第四巻飜譯分擔

落合貞三郎

大谷正信

田部隆次

第八回配本

小泉八雲全集第四巻

第一回豫約菊判背革装　大正十五年八月配本開始　昭和三年一月配本完了

第二回豫約菊判總布装　昭和四年六月配本開始　昭和五年十一月配本完了

第三回豫約學生版　昭和五年十月配本開始　昭和七年三月配本完了



最初申込金五十錢（これは最後の會費に充當）

豫約者に限り毎月一圓五十錢

家庭版【第四回豫約】

昭和十二年七月十五日印刷

昭和十二年七月二十日發行

小泉八雲全集刊行會代表

著作者　田部隆次

東京市麹町區三番町一

刊行者　長谷川巳之吉

東京市麹町區三番町一

刊行所　第一書房

振替東京六四二二三

電話九段三三四番

牛込區山吹町一九八

印刷者　萩原芳雄

（家庭版）小泉八雲全集 全十二卷 內容

第一卷
異文學遺聞。
支那怪談。
チタ。ユーマ。

第二卷
佛領西印度の二年間

第三卷（上）
知られぬ日本の面影

第四卷（下）
知られぬ日本の面影

第五卷
東の國から。
心。

第六卷
佛の畠の落穗。
異國情趣と回顧。
日本お伽噺。

第七卷
靈の日本。
影。
日本雜錄。

第八卷
骨董。
怪談。
天の河緣起。

第九卷
神國日本。

第十卷
文學論。

第十一卷
きまぐれ。
クリーオール小品。
神戸クロニクル社說
隨筆八種。

別册
小泉八雲。